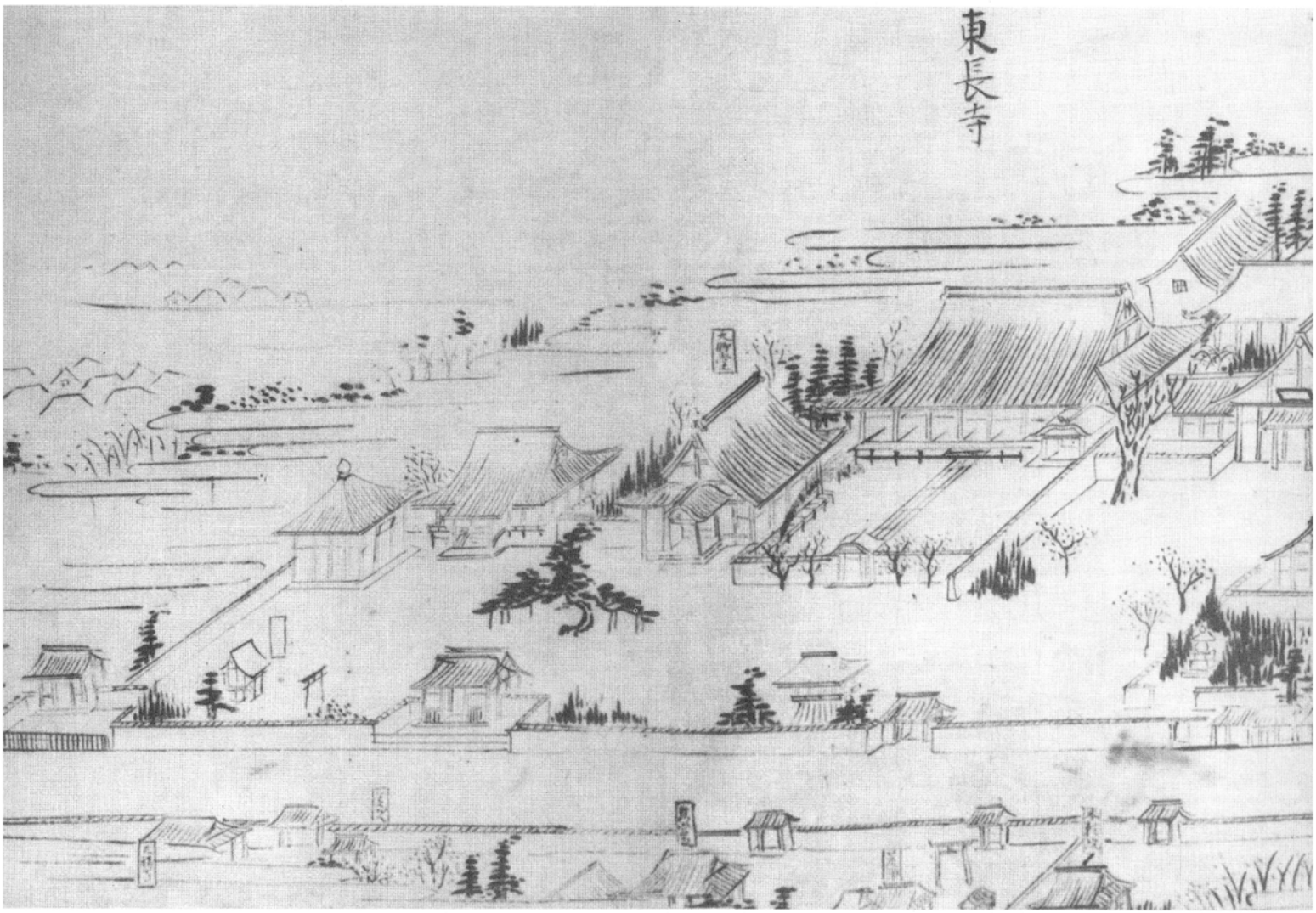
博　多　60

－第１次、４次、８次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第543集



１９９７

東長密寺建設地内遺跡調査会

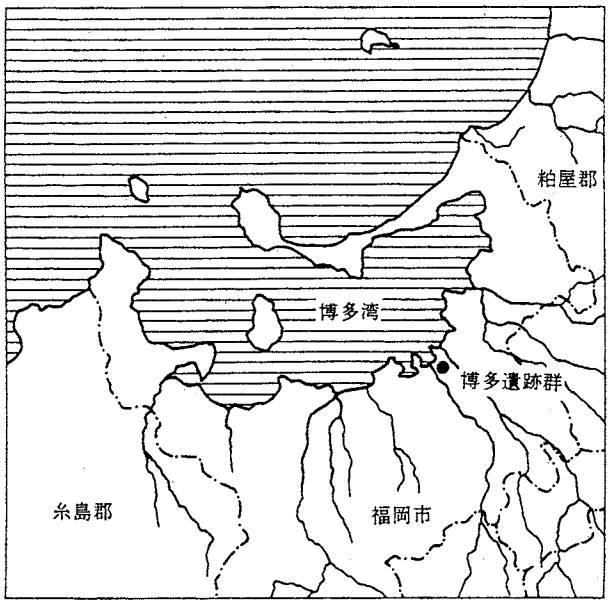
冷泉町遺跡調査会

福岡市教育委員会

博　多　60

――第１次、４次、８次調査報告――

福岡市埋蔵文化財調査報告書第543集



遺跡略号	調査番号
ＨＫＴ－１	7810
ＨＫＴ－４	7930
ＨＫＴ－８	8024

１９９７

東長密寺建設地内遺跡調査会

冷泉町遺跡調査会

福岡市教育委員会

序

現在、福岡市はアジアの拠点都市として、国際都市作りを進めています。

福岡市博多区にある旧博多部は、江戸時代には城下町福岡に対し、商業都市でしたが、そのルーツは中国大陸、朝鮮半島を中心とした東アジア各地との貿易で栄えた中世都市「博多」に求められます。

昭和51年に始まった地下鉄工事にともなう発掘調査で、中世都市「博多」に考古学のメスが入れられて以来、福岡市ではこの地域を博多遺跡群と呼び、様々な開発に際して発掘調査を進めて参りました。

今回報告する3地点は、博多遺跡群の民間開発事業における最初の段階の発掘調査です。諸般の事情で報告書の発行が遅れましたが、本書が様々な場で活用されるよう念願しております。

また、調査から整理報告までご協力をいただきました宗教法人東長密寺、日本弘進産業株式会社をはじめとする多くの方々に心から謝意を表します。

平成9年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　町田英俊

例　言

1．本書は、宗教法人東長密寺の納骨堂建設にともなう調査（博多遺跡群第１次調査）、同じく本堂建設にともなう調査（博多遺跡群第８次調査）、弘進産業株式会社のマンション建設および地下鉄祇園駅換気塔建設にともなう調査（博多遺跡群第４次調査）の報告書である。

なお、博多遺跡群第４次調査については、「博多Ⅰ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第66集 1981に一部概要を掲載し、「博多Ⅱ－図版編－」福岡市埋蔵文化財調査報告書第86集 1982で出土遺物等は既に報告しているが、本文編については未刊のままであった。本書は第４次調査の本文編も兼るものである。

2．本書の執筆は、Ⅱ-３．-６）出土遺物の分類 の項を森本朝子が、以外は池崎譲二がおこなった。

3．本書に使用した写真は、白石公高、宮島成昭が撮影したものである。

4．遺構実測図は、折尾學、赤司善彦、大橋隆司、信行千尋、田中克子、日野孝司、日野光嗣、池崎がおこなった。

5．遺物については、第４次調査分の実測を森本、田中、三好尚子、撫養久美子が、トレースを田中池崎がおこなった。第１次、第８次調査分については、実測を撫養、濱石正子、松浦一之介、池崎が、トレースを藤村佳公恵がおこなった。

6．これらの発掘調査、報告書作成に係る遺物、写真、図面等の記録類は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵管理される。

7．本文中で使用した貿易陶磁の分類は、すべて「博多出土貿易陶磁分類表」（福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ 博多(1) 福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集 別冊 1984）に拠っている。

なお、本文の Ⅱ-３．-６）出土遺物の分類 の項で、森本が詳細に行なった分析が、前記分類表の基礎となっている。分類表の内容を更に深める意味をもつものと考える。分析の際の参考になれば幸いである。

8．本書の編集は、折尾、森本と協議のうえ、池崎がおこなった。

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに ……1
Ⅱ　調査の記録 ……3
1．博多遺跡群第１次調査（東長寺第１次調査） ……3
1）　調査にいたる経緯 ……3
2）　調査概要 ……4
3）　遺構と遺物 ……6
4）　遺構外出土の遺物……16
2．博多遺跡群第８次調査（東長寺第２次調査）……19
1）　調査にいたる経緯……19
2）　調査概要……19
3）　遺構と遺物……20
4）　遺構外出土の遺物……34
5）　弥生時代の遺構と遺物……36
3．博多遺跡群第４次調査……37
1）　調査にいたる経緯……37
2）　調査概要……37
3）　遺構と遺物……40
4）　中国陶磁に見られる墨書について……65
5）　出土遺物の分類……75
Ⅲ　まとめにかえて ……147

表紙　「東長寺」　奥村玉蘭「筑前名所図絵」より

図 版 目 次

Fig. 1　調査地点位置図
Fig. 2　1次調査、8次調査地点位置図
Fig. 3　1次調査　調査区遺構平面図
Fig. 4　1次調査　有機物堆積出土木製遺物（1）
Fig. 5　1次調査　有機物堆積出土木製遺物（2）
Fig. 6　1次調査　有機物堆積出土木製遺物（3）
Fig. 7　1次調査　有機物堆積、2、3、4、7、8、10、15号土壙出土遺物
Fig. 8　1次調査　19号土壙（木棺墓）と出土遺物
Fig. 9　1次調査　17、18、21、22、28、29号土壙出土遺物
Fig. 10　1次調査　6号溝
Fig. 11　1次調査　6号溝出土遺物
Fig. 12　1次調査　遺構外出土遺物（1）
Fig. 13　1次調査　遺構外出土遺物（2）
Fig. 14　8次調査　調査区遺構平面図
Fig. 15　8次調査　1、2、3号土壙（墓）
Fig. 16　8次調査　2、3、9、10、24、25、29号土壙出土遺物
Fig. 17　8次調査　18、24号土壙
Fig. 18　8次調査　29、40、49、50、50’号土壙
Fig. 19　8次調査　40、49、50、50’、51号土壙出土遺物
Fig. 20　8次調査　68、80、96号土壙
Fig. 21　8次調査　113、118、125号土壙
Fig. 22　8次調査　68、71、74、80、113、118号土壙出土遺物
Fig. 23　8次調査　125号土壙出土遺物
Fig. 24　8次調査　1、2、3号溝出土遺物
Fig. 25　8次調査　7号溝出土遺物
Fig. 26　8次調査　土間状遺構
Fig. 27　8次調査　遺構外出土遺物
Fig. 28　8次調査　弥生時代の遺物
Fig. 29　4次調査　調査区位置図
Fig. 30　4次調査　1、2号土壙（井戸）
Fig. 31　4次調査　1号土壙（井戸）出土遺物
Fig. 32　4次調査　2号土壙（井戸）出土遺物
Fig. 33　4次調査　5号土壙（井戸A，B）、151号土壙（井戸）、5号土壙出土遺物
Fig. 34　4次調査　123、124、125号土壙
Fig. 35　4次調査　150、194号土壙
Fig. 36　4次調査　123、124、125、150、151号土壙出土遺物
Fig. 37　4次調査　194号土壙出土遺物

Fig. 38　4次調査　162、180、206、207号土壙（井戸）
Fig. 39　4次調査　202号土壙出土遺物
Fig. 40　4次調査　204号土壙出土遺物
Fig. 41　4次調査　202、204号土壙
Fig. 42　4次調査　206号土壙出土遺物
Fig. 43　4次調査　207号土壙出土遺物
Fig. 44　4次調査　1号溝出土遺物
Fig. 45　4次調査　2号溝出土遺物
Fig. 46　4次調査　4号溝出土遺物（1）
Fig. 47　4次調査　4号溝出土遺物（2）
Fig. 48　4次調査　4号溝出土遺物（3）
Fig. 49　4次調査　調査区遺構平面図
Fig. 50　4次調査（換気塔部）　8、10、11、16、17号土壙（井戸）
Fig. 51　4次調査（換気塔部）　10号土壙出土遺物（1）
Fig. 52　4次調査（換気塔部）　10号土壙出土遺物（2）
Fig. 53　4次調査（換気塔部）　16号土壙出土遺物（1）
Fig. 54　4次調査（換気塔部）　16号土壙出土遺物（2）
Fig. 55　4次調査　墨書陶磁器（1）
Fig. 56　4次調査　墨書陶磁器（2）
Fig. 57　4次調査　墨書陶磁器（3）
Fig. 58　4次調査　墨書陶磁器（4）
Fig. 59　4次調査　墨書陶磁器（5）
Fig. 60　4次調査　墨書陶磁器（6）
Fig. 61　4次調査　墨書陶磁器（7）
Fig. 62　4次調査　墨書陶磁器（8）
Fig. 63　4次調査　墨書陶磁器（9）
Fig. 64　4次調査　緑釉 唐草文梅瓶
Fig. 65　4次調査　青白磁（1）
Fig. 66　4次調査　青白磁（2）
Fig. 67　4次調査　青白磁（3）
Fig. 68　4次調査　青白磁（4）
Fig. 69　4次調査　白磁 碗（1）
Fig. 70　4次調査　白磁 碗（2）
Fig. 71　4次調査　白磁 碗（3）
Fig. 72　4次調査　白磁 碗（4）
Fig. 73　4次調査　白磁 皿（1）
Fig. 74　4次調査　白磁 皿（2）
Fig. 75　4次調査　白磁 皿（3）
Fig. 76　4次調査　白磁 皿（4）
Fig. 77　4次調査　白磁 皿（5）

Fig. 78　4次調査　白磁 水注、四耳壷
Fig. 79　4次調査　白磁 水注、その他
Fig. 80　4次調査　青磁　越州窯系、耀州窯系
Fig. 81　4次調査　青磁 碗　龍泉窯系（1）
Fig. 82　4次調査　青磁 碗　龍泉窯系（2）
Fig. 83　4次調査　青磁 皿　龍泉窯系
Fig. 84　4次調査　青磁 皿、碗　龍泉窯系
Fig. 85　4次調査　青磁 その他の器種　龍泉窯系
Fig. 86　4次調査　青磁 碗　同安窯系（1）
Fig. 87　4次調査　青磁 碗　同安窯系（2）
Fig. 88　4次調査　青磁 皿　同安窯系
Fig. 89　4次調査　黒釉磁（天目）、褐釉磁
Fig. 90　4次調査　陶器 碗
Fig. 91　4次調査　陶器 皿
Fig. 92　4次調査　その他　14世紀半ば以降に属する磁器
Fig. 93　4次調査　陶器（磁灶窯系）（1）
Fig. 94　4次調査　陶器（磁灶窯系）（2）
Fig. 95　4次調査　陶器（磁灶窯系）（3）
Fig. 96　4次調査　陶器（磁灶窯系）（4）
Fig. 97　4次調査　陶器（磁灶窯系）（5）
Fig. 98　4次調査　陶器（磁灶窯系）（6）
Fig. 99　4次調査　陶器（磁灶窯系）（7）
Fig. 100　4次調査　陶器（磁灶窯系）（8）　その他の陶器（1）
Fig. 101　4次調査　その他の陶器（2）
Fig. 102　4次調査　その他の陶器（3）
Fig. 103　4次調査　その他の陶器（4）
Fig. 104　4次調査　その他の陶器（5）
Fig. 105　4次調査　その他の陶器（6）
Fig. 106　4次調査　その他の陶器（7）
Fig. 107　4次調査　その他の陶器（8）
Fig. 108　4次調査　その他の陶器（9）
Fig. 109　4次調査　その他の陶器（10）
Fig. 110　4次調査　その他の陶器（11）
Fig. 111　4次調査　その他の陶器（12）
Fig. 112　4次調査　その他の陶器（13）
Fig. 113　4次調査　朝鮮陶磁（1）
Fig. 114　4次調査　朝鮮陶磁（2）

写真図版目次

Pl. 1　（1）1次調査　調査風景（東から）
（2）1次調査　調査風景（北から）
（3）有機物堆積　調査風景（南西から）
（4）有機物堆積　調査風景（南東から）
（5）有機物堆積　遺物出土状況
（6）有機物堆積　下駄出土状況
Pl. 2　（1）有機物堆積　下駄出土状況
（2）有機物堆積　下駄出土状況
（3）有機物堆積　櫛出土状況
（4）有機物堆積　下駄出土状況
（5）有機物堆積　下面土師器皿出土状況（西から）
（6）有機物堆積　下面土垂出土状況
Pl. 3　（1）3号土壙（井戸）　鉄滓堆積状況（南東から）
（2）3号土壙（井戸）　鉄滓除去後状況（南東から）
（3）3号土壙（井戸）　掘り方検出状況（南東から）
（4）3号土壙（井戸）と舗道状遺構（北東から）
（5）3号土壙（井戸）と舗道状遺構（南東から）
（6）3号土壙（井戸）と舗道状遺構（北西から）
Pl. 4　（1）19号土壙（木棺墓）人骨出土状況（北東から）
（2）19号土壙（木棺墓）人骨出土状況　頭部付近近景（北東から）
（3）19号土壙（木棺墓）副葬品出土状況（北東から）
（4）19号土壙（木棺墓）副葬品出土状況　近景（北東から）
（5）10号土壙　銅鏡出土状況（北西から）
（6）10号土壙　銅鏡出土状況　近景
Pl. 5　（1）6号溝　馬骨出土状況（南東から）
（2）6号溝　馬骨出土状況（北西から）
（3）6号溝下層　馬骨出土状況（南東から）
（4）6号溝下層　馬骨出土状況　近景
（5）6号溝下層　馬骨出土状況　近景
（6）6号溝下層　馬骨出土状況　近景
Pl. 6　（1）最下面遺構検出状況　部分（北西から）
（2）最下面遺構検出状況　部分（北東から）
（3）最下面遺構検出状況　全景（東から）
（4）最下面遺構検出状況　全景（北から）
（5）最下面遺構検出状況　全景（南西から）
（6）最下面遺構検出状況　全景（北東から）
Pl. 7　（1）8次調査　調査区全景（南西から）

（２）８次調査　調査区全景（西から）
（３）８次調査　調査風景（南西から）
（４）Ⅰ区遺構検出状況（南東から）
（５）Ⅰ区遺構検出状況（南西から）
（６）Ⅱ区中央部遺構検出状況（南西から）

Pl. 8　（１）Ⅱ区遺構検出状況（南東から）
（２）Ⅱ区遺構検出状況（北西から）
（３）Ⅱ区最下面遺構検出状況（南東から）
（４）Ⅱ区北西側遺構検出状況（北西から）
（５）１号溝（北西から）
（６）Ⅰ区北西側遺構検出状況（北西から）

Pl. 9　（１）１号土壙（南東から）
（２）２号土壙（北から）
（３）２号土壙　人骨出土状況　近景（北から）
（４）３号土壙（東から）
（５）３号土壙　銅鏡出土状況（東から）

Pl. 10　（１）18号土壙（南東から）
（２）24号土壙（北西から）
（３）29号土壙（北から）
（４）40号土壙（南西から）
（５）50号、50´号土壙（北西から）
（６）49号土壙（西から）

Pl. 11　（１）68号土壙（南から）
（２）80号土壙（西から）
（３）96号土壙（東から）
（４）113号土壙（南西から）
（５）125号土壙（南東から）
（６）銅鏡出土状況

Pl. 12　（１）土間状遺構全景（北東から）
（２）土間状遺構内炉全景（北西から）
（３）土間状遺構内炉下面全景（北西から）
（４）土間状遺構内炉壁　近景（北西から）
（５）弥生時代小児甕棺出土状況
（６）弥生時代壷型土器出土状況

表　目　次

Tab. 1　4次調査主要遺構出土遺物数量表……75
Tab. 2　分類表 青白磁碗 ……77
Tab. 3　分類表 青白磁皿 ……78
Tab. 4－1　分類表 白磁碗（1）……82
4－2　分類表 白磁碗（2）……84
Tab. 5－1　分類表 白磁皿（1）……88
5－2　分類表 白磁皿（2）……89
Tab. 6　分類表 青磁（龍泉窯系）Ⅰ類碗 ……98
Tab. 7　分類表 青磁（龍泉窯系）Ⅰ類小碗 ……101
Tab. 8　分類表 青磁（龍泉窯系）Ⅰ類皿 ……101
Tab. 9　分類表 青磁（龍泉窯系）Ⅲ類 ……101
Tab. 10　分類表 青磁（同安窯系）碗 ……105
Tab. 11　分類表 青磁（同安窯系）皿 ……108
Tab. 12　分類表 黒釉磁（天目）碗 ……109
Tab. 13　分類表 陶器碗 ……111
Tab. 14　分類表 陶器皿 ……112
Tab. 15－1　分類表 陶器（1）……114
Tab. 15－2　分類表 陶器（2）……115
Tab. 15－3　分類表 陶器（3）……116
Tab. 15－4　分類表 陶器（4）……117
Tab. 15－5　分類表 陶器（5）……118
Tab. 15－6　分類表 陶器（6）……119
Tab. 15－7　分類表 陶器（7）……120
Tab. 15－8　分類表 陶器（8）……121
Tab. 16　分類表掲載遺物の出土遺構一覧 ……143

Ⅰ　はじめに

「博多」の古代、中世における歴史的重要性については、広く知られているところであり言を待たない。しかし、鎌倉時代から戦国時代末にかけて、博多は度重なる戦乱によって何度も焼けており、貴重な在地の史料もことごとく灰燼に帰し、その実態には不明なところも多かった。考古学的にも、中国製の陶磁器などの遺物が一帯で出土することが、「筑前国続風土記」「石城志」 などの地誌に記されており、また工事によって遺物が出土することも知られていた。しかし、これらの発見はいずれも偶然のものであり、遺構、遺物の遺存状況、遺跡の範囲等、博多の遺跡としての内容については、ほとんど把握されていなかったのが久しい間の実情であった。

このような中で、昭和52（1977）年11月、博多地区において福岡市の高速鉄道（地下鉄）にともなう発掘調査がおこなわれた。調査が進行するにつれ、市街化されつくした博多の町の地下に予想以上に良好な形で、中世を中心とした弥生時代から現代にいたる連綿としたひとびとの生活の痕跡が刻み込まれていることが明らかになっていった。

この地域は商業地として市街化されつくしているとはいえ、木造家屋も多く、地下鉄の開通等によってビル化の波の押し寄せることが予想され、福岡市教育委員会としても文化財保護の立場から、市街地の再開発に対して何らかの対策をたてる必要が生じてきた。そこで、福岡市教育委員会ではこの「博多」の地域を「博多遺跡群」と称して、その範囲を想定し、昭和53（1978）年度から市内遺跡のうちの重要地域の一つとして発掘調査に取り組んできた。以来20年を経て、平成９（1997）年現在、調査次数は、101次を数え、次数を重ねるごとに、中世の国際都市博多をはじめ、博多遺跡群の具体像も徐々に明らかになってきている。またそれぞれの段階で博多遺跡群のまとめがなされている。

「古代の博多」岡崎敬編　1984　九州大学出版会では、付編として地下鉄関係調査や周辺調査からの中間報告「中世の博多－発掘調査から－」をまとめており、「よみがえる中世〈1〉　東アジアの国際都市　博多」川添昭二編　1988　平凡社では、中世史研究者、発掘調査にあたった職員が博多をめぐるさまざまなテーマをビジュアルにまとめた。遺跡立地研究会では、考古学、文献史、地理学、古生物学等の学際的研究によって「博多遺跡群における遺跡形成環境の変遷」を「日本における初期弥生文化の成立」横山浩一先生退官記念事業会　1991　文献出版に発表した。また、1990年以来、博多遺跡群の調査を担当した職員を中心に博多研究会が結成され、研究会を重ね、機関誌もすでに４号まで刊行されている。さらに、博多研究会では「博多遺跡群出土墨書資料集成」1996を刊行し、墨書陶磁器の研究も進めている。福岡市博物館の展覧会としても、文献史的、考古学的調査の成果を踏まえ、1992年に特別展「堺と博多」を、1996年に部門別展示「博多綱首展」を開催するなど、研究成果も具体的に示せるようになってきた。

今回報告する博多遺跡群の第１、４、８次調査は、最も早い段階の調査で、考古学的データも少なく、また開発のチェックから発掘調査、さらに報告書の作成に至る行政的なシステムも試行錯誤の段階であり、必ずしも満足のいく調査とはいえなかった。また、報告書の内容についても同様であることを率直に認めなければならない。ただ、博多遺跡群の調査を、現在のような形で一定の軌道に乗せる過程での止むを得ない状況であったかもしれない。

ともあれ、諸般の事情によって報告書の刊行が遅れたことを詫びつつ、以下、各地点の調査について報告したい。

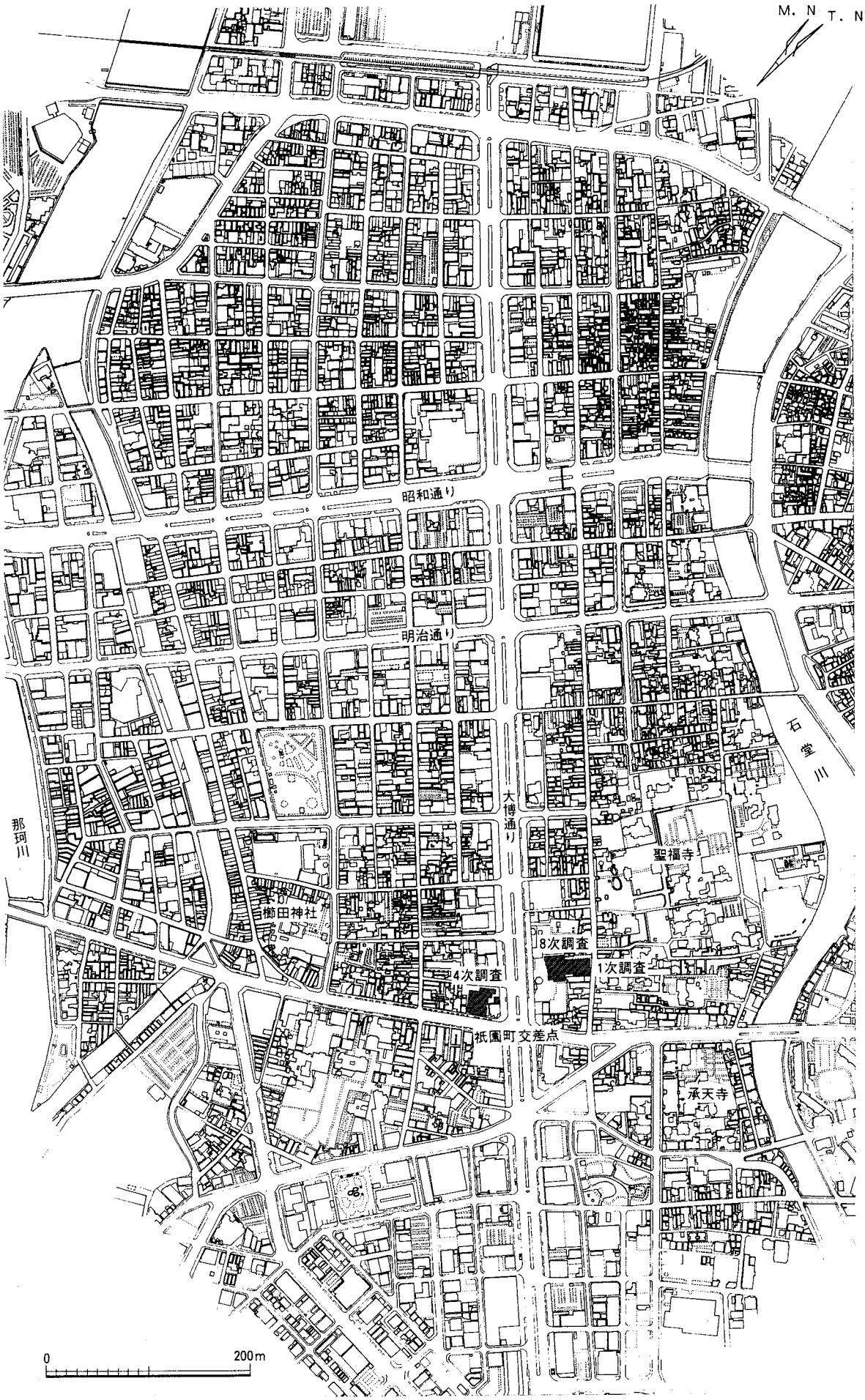


Fig. 1　調査地点位置図

Ⅱ　調査の記録

1. 博多遺跡群第１次調査（東長寺第１次調査）

１）調査にいたる経緯

昭和53年、地下鉄工事にともない、店屋町工区（現地下鉄祇園駅付近）の調査を進めていたとき隣接する東長寺境内で、納骨堂建設工事の予定のあることが知らされた。当時、地下鉄関係の調査で多量の中国陶磁器が出土したり、菊池一族の首級かと思われる110体分にもおよぶ火葬頭骨が出土するなど市民の注目を浴び、その遺跡としての重要性についても認識が深まりつつあった。遺跡は当然隣接する東長寺境内にも広がっていると思われたので、福岡市教育委員会では、宗教法人東長密寺に協議を申し入れ、試掘調査の許可を得た。同年10月25日、納骨堂建設予定地の試掘調査を行なった。その結果、現地表面から2.5～3m下までは現代、近世の撹乱層で、その下層に包含層である暗黒褐色砂層がみられ、地下鉄路線内と同様の土壙、溝が多く、遺物も鎌倉期の土師皿、青磁、白磁がみられ、その他獣骨などが出土した。

この結果を受け、遺跡の重要性に鑑み、福岡市教育委員会と宗教法人東長密寺は本調査に向けて協議を行った。東長寺側の文化財保護に対するご理解とご協力を得て、下記のとおり、東長密寺建設地内遺跡調査会を組織して、発掘調査を行なうこととなった。発掘調査は、当時隣接地を調査していた地下鉄調査担当班が担当した。

調査の組織

調査委託　宗教法人東長密寺

調査主体　東長密寺建設地内遺跡調査会

代表　井上剛紀（福岡市教育委員会文化課長）

庶務担当　三宅安吉（福岡市教育委員会文化課埋蔵文化財係長）

国武勝利（福岡市教育委員会文化課埋蔵文化財係）

試掘担当　井沢洋一（福岡市教育委員会文化課埋蔵文化財係）

調査担当　折尾學　（福岡市教育委員会文化課埋蔵文化財係）

池崎譲二（福岡市教育委員会文化課埋蔵文化財係）

浜石哲也（福岡市教育委員会文化課埋蔵文化財係）

山崎龍雄（福岡市教育委員会文化課埋蔵文化財係）

博多遺跡群第１次調査

遺跡調査番号	７８１０		遺跡略号	ＨＫＴ－１
地番	博多区御供所町150－1		分布地図番号	天神　49
開発面積	476㎡	調査対象面積　476㎡	調査面積	360㎡
調査期間	昭和53年11月20日～昭和54年１月18日			

2）調査概要

東長寺は大同元（806）年、弘法大師によって開かれたと伝えられる真言宗の名刹で、寺宝の木造千手観音立像は重要文化財に指定されている。当初博多行ノ町（現古門戸町）にあったとされ、現位置には江戸時代初頭、福岡藩２代藩主黒田忠之によって再建された。よってここで検出された中世の遺構、遺物は直接東長寺と結びつくものではない。なお、境内には２代藩主忠之、３代藩主光之の巨大な五輪塔の墓所が営まれている。

調査地点は境内の東北部、聖福寺前町の細い道路に面したところで、東北から南西にかけて22.9m、北西から南西にかけて20.8mの長方形が対象地である。試掘調査の結果に基づき、地表下2.5～3mが近現代の撹乱であり、この部分はバックホーで除去し、以下を調査した。隣地に建物が接しており、

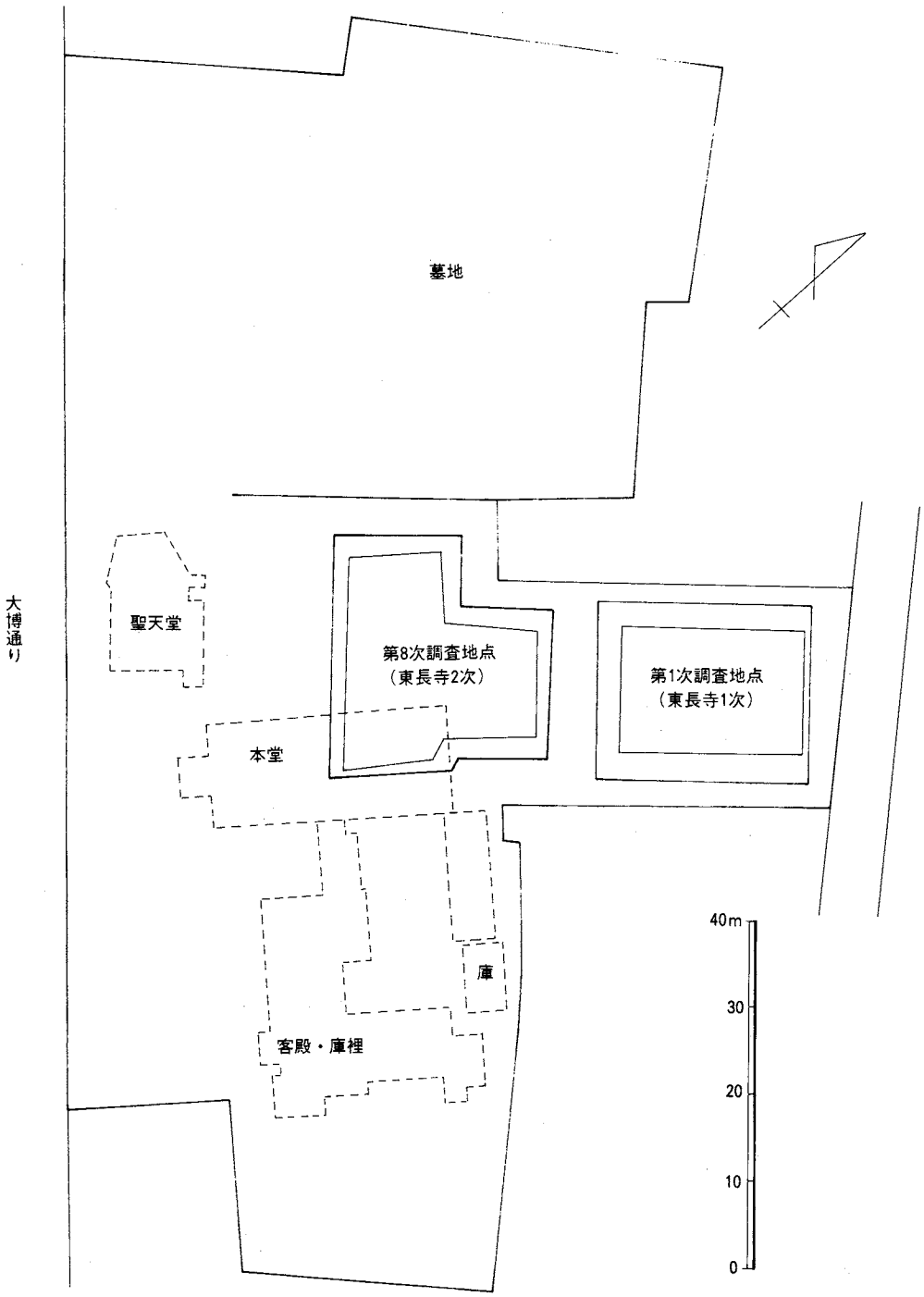
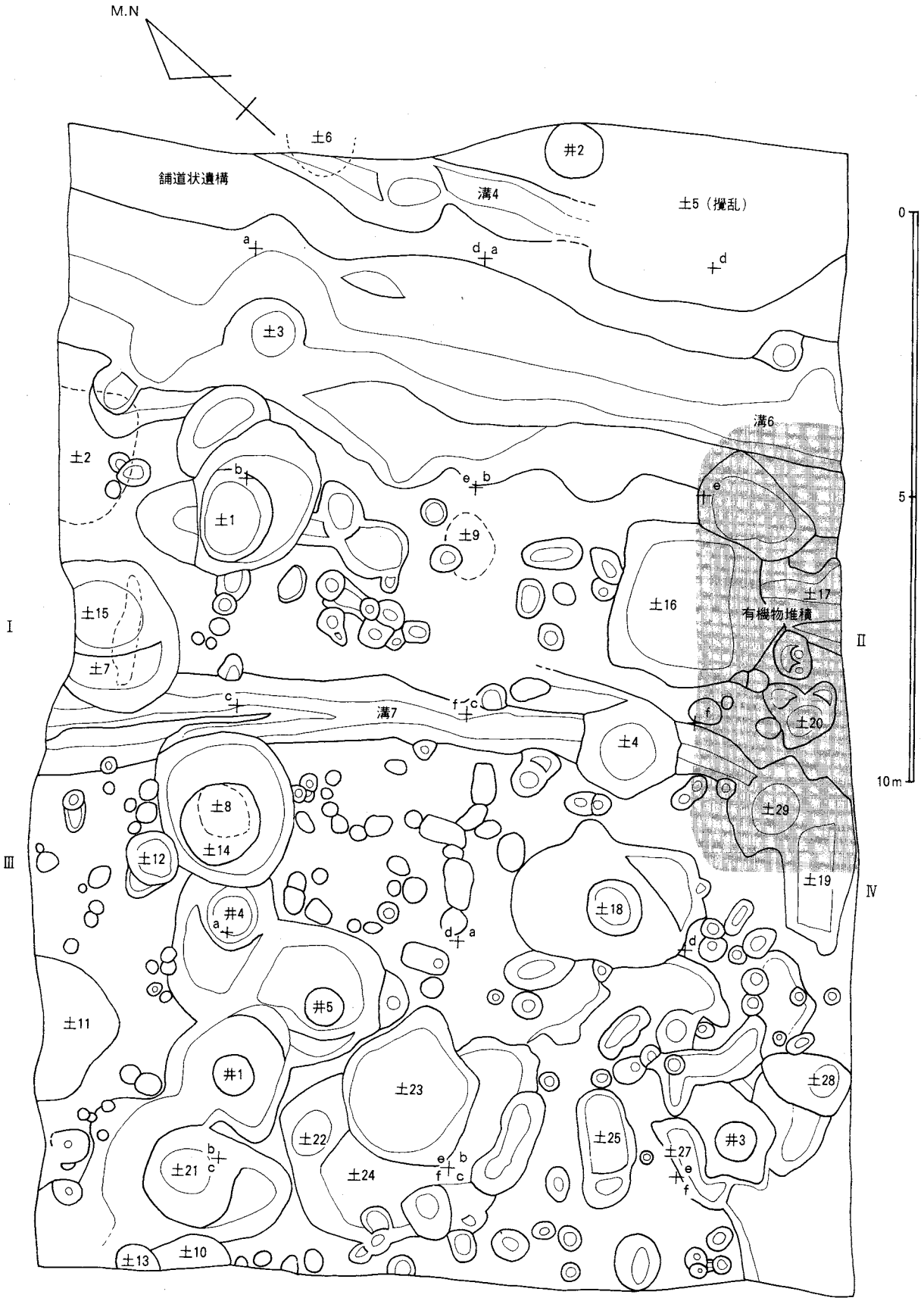


Fig. 2　１次調査、８次調査地点位置図



井 は近世瓦組井戸、土 は土壙を表す。

Fig. 3　1次調査　調査区遺構平面図

壁面崩壊を避けるため法面をもうけた。そのため実際の調査面積は360㎡、最下面で約280㎡に留まった。便宜上調査区をⅠ～Ⅳに区分し、それぞれをさらに４ｍメッシュでａ～ｈに細分した。

表土、撹乱層除去後直下に有機物を多量に含む淀み状の泥炭の堆積がみられた。この層を境に、上面から掘り込まれた遺構と、下面の遺構と区別できる。遺構は井戸、溝、舗道状遺構、廃棄物処理土坑、柱穴などがあるが、建物柱穴については組織的に把握できない。以下、主要な遺構の概要と出土遺物について述べる。

３）遺構と遺物

有機物堆積（Fig.3～7、Pl.１－(3)～(6)、２－(1)～(6)）

Ⅱ－ｅ，ｆ、Ⅲ－ｄ区で検出した木製品等多量に含む有機物の堆積である。表土、撹乱層除去時に一部を削除しているものと思われ、元来の面積、厚さは明確でないが、現状で7.5ｍ×2.5ｍほど広がりをもち、厚さは10㎝程度である。ごく浅い窪みにヘドロ質の土とともに堆積しているもので、底面は鉄分、マンガン分が付着し堅くしまっている。ある時期には水が溜まっていたものと思われ、木製品等が上に浮き、土師器、土垂等の遺物は堆積物の下側から出土している（Pl.2-5.6）。出土遺物のうち図示した遺物について若干の説明をする。1～5は下駄の身およびその一部で、6～11は下駄の歯およびその一部であり、いずれも差し歯式である。12は板草履の半折品である。13～16は曲物の蓋である。17は蓋で、角材を上面に木釘で打ち付け撮みとしている。18～20、23は加工の明瞭な部材で21は折敷の底板であるが、表裏に無数の刃物傷が残り、俎として再利用されている。24、25、27は板材、26は杭である。28、32、36は折敷の底板の一部と思われ、端部近くに釘穴が残る。29、30はそれぞれ面取りして角柱状、棒状に加工した木製品、31、34は柱状に加工した建築部材と思われる。33、35、37～41は板材であるが、35の両側には抉り状の加工がみられる。この他図示していないが、多量の箸状木製品（Pl.1-5）、漆器（木質の残りが悪く大半は漆膜のみ）、梳櫛（Pl.2-3）などが出土している。土師器皿は堆積下面からまとまって出土している（Pl.2-5）。いずれも糸切底で、口径8～9㎝の小型品（42～4）、12㎝前後の中型品（45～51）、17㎝前後の大型品（53）に分かれ、胎・器形ともに似るが、52は径14.4㎝で比較的胎が薄く、焼成良好で前例とは異なる。堆積層から自然遺物も検出されており、ウリ、モモ、ヤマモモ、クリ等の種子、ナラの虫瘻、シジミ、タニシ等のキチン質などがある。14世紀代である。なお、図示した木製品の網かけ部分は、焼け焦げの部分である。

２号土壙（Fig.7）

Ⅰ－ｂ，ｃ区上面で検出した。一辺2.2ｍ程で深さ30㎝の深皿状の掘り方で、調査区外にのびる。土師器皿の小片が多量まとまって出土しているが、図示し得ない。54は褐釉磁の小壷で、型づくり、耳が付き、口縁端部を除き内外面褐釉が施される。廃棄物処理土壙である。

３号土壙（Fig.7　Pl.3-1～4）

Ⅰ－ｂ，ｅ区検出の15世紀代の井戸である。６号溝を切る。2.7×3.6ｍ程の掘り方をもち、確認面から1.7ｍ程の深さをもつ。径90㎝の桶組の井側をもつが、内部には大量の鉄滓が充填されていた。井戸を鉄滓処理用に利用したものである。鉄滓とともに小量の遺物が出土している。55は龍泉窯系青磁で畳付をのぞいて厚く水色の釉がかかる。56は見込みに「吉」銘の印花文をもつ龍泉窯系青磁碗、57は高台をアーチ状に抉る白磁六角杯である。58は褐釉陶器四耳壷で、口縁上面に胎土目が残る。

４号土壙（Fig.7）

Ⅲ－ａ区検出の土壙で、26号土壙の上部確認遺構で同一である。中世遺物とともに近世陶磁器がまとまっており、近世廃棄物処理土壙である。7号溝を切る。60は時期不明だが、粘板岩製の硯で陸の

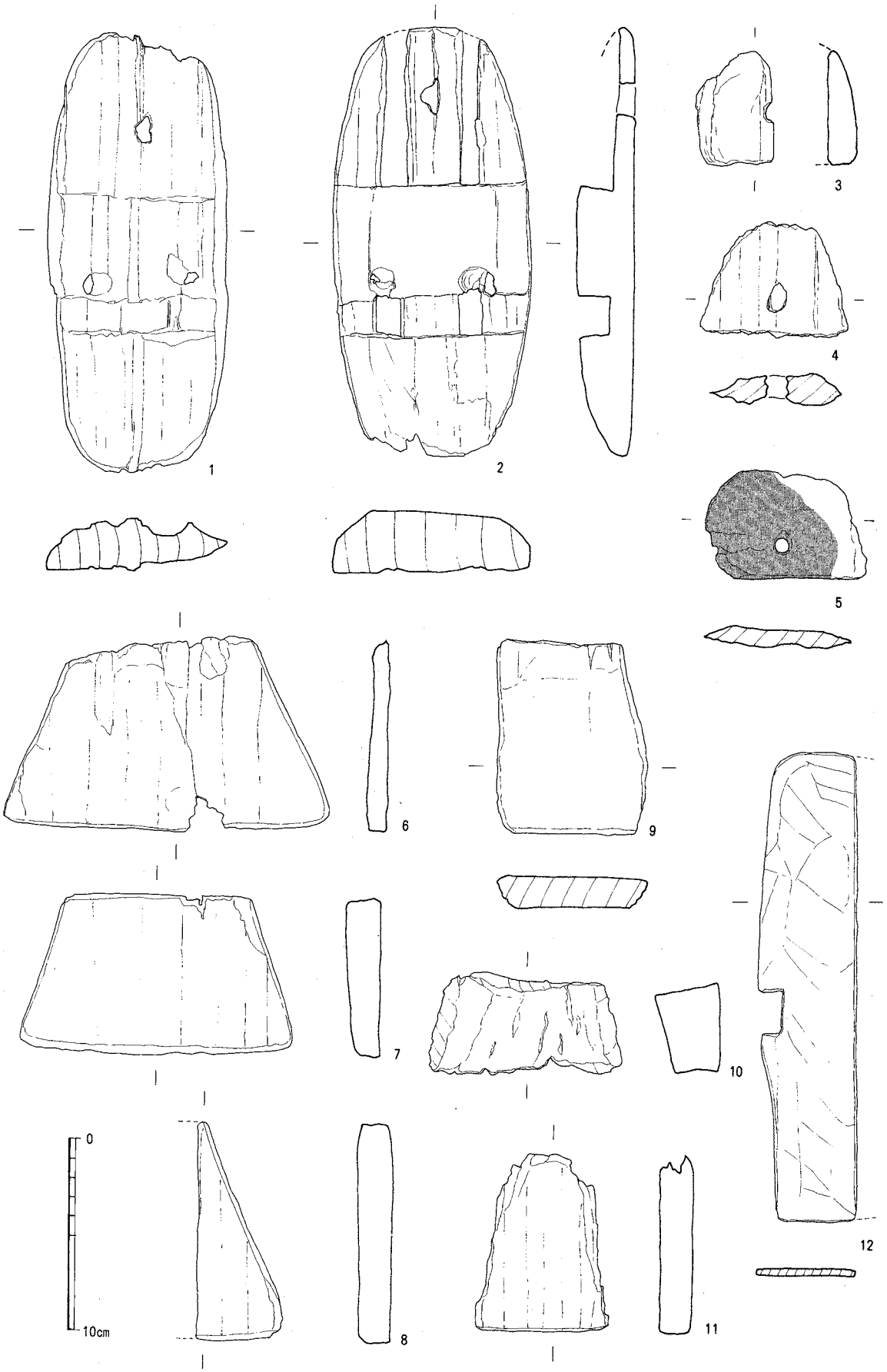


Fig. 4　1次調査　有機物堆積出土木製遺物（1）

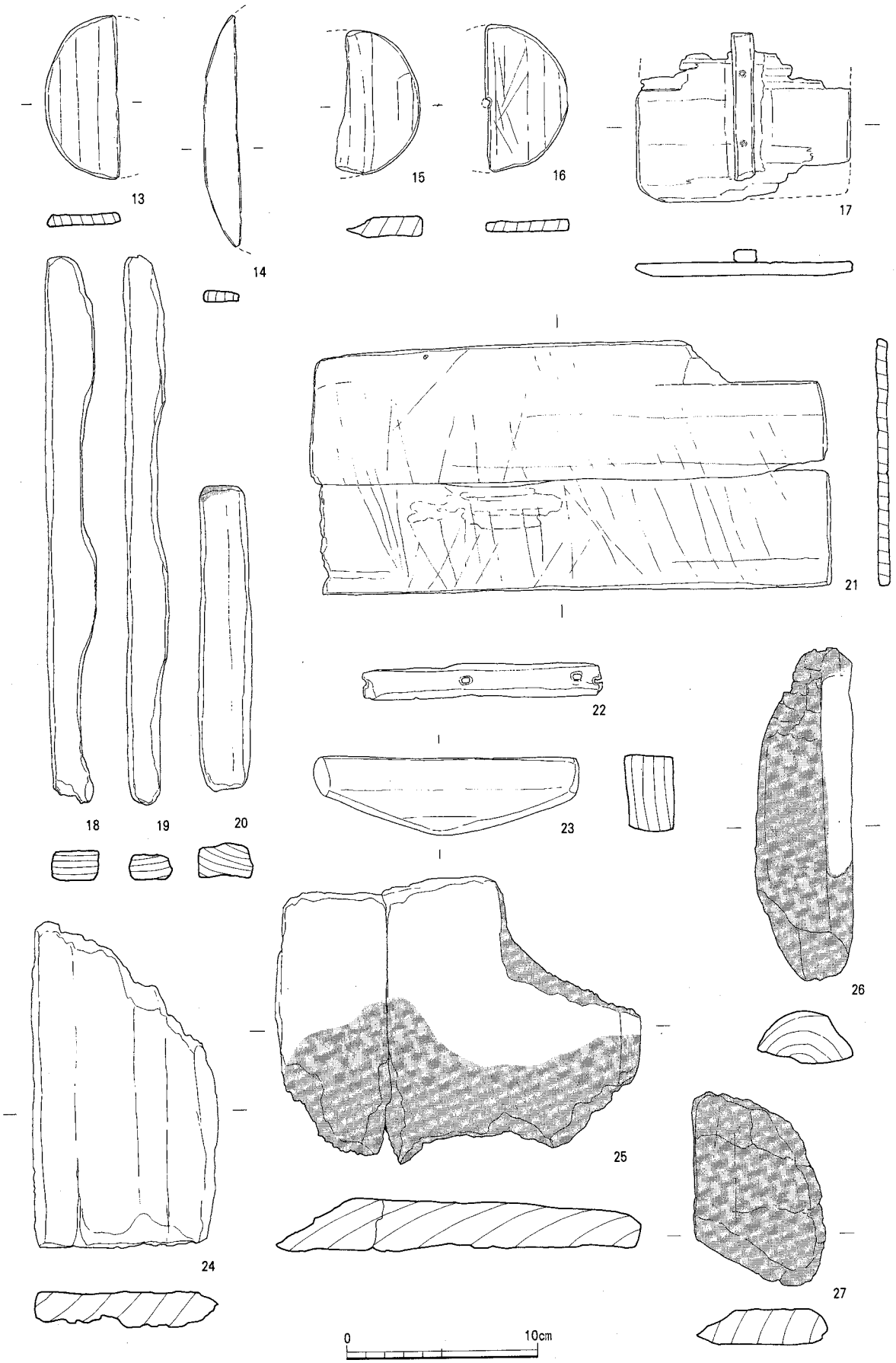


Fig. 5　1次調査　有機物堆積出土木製遺物（2）

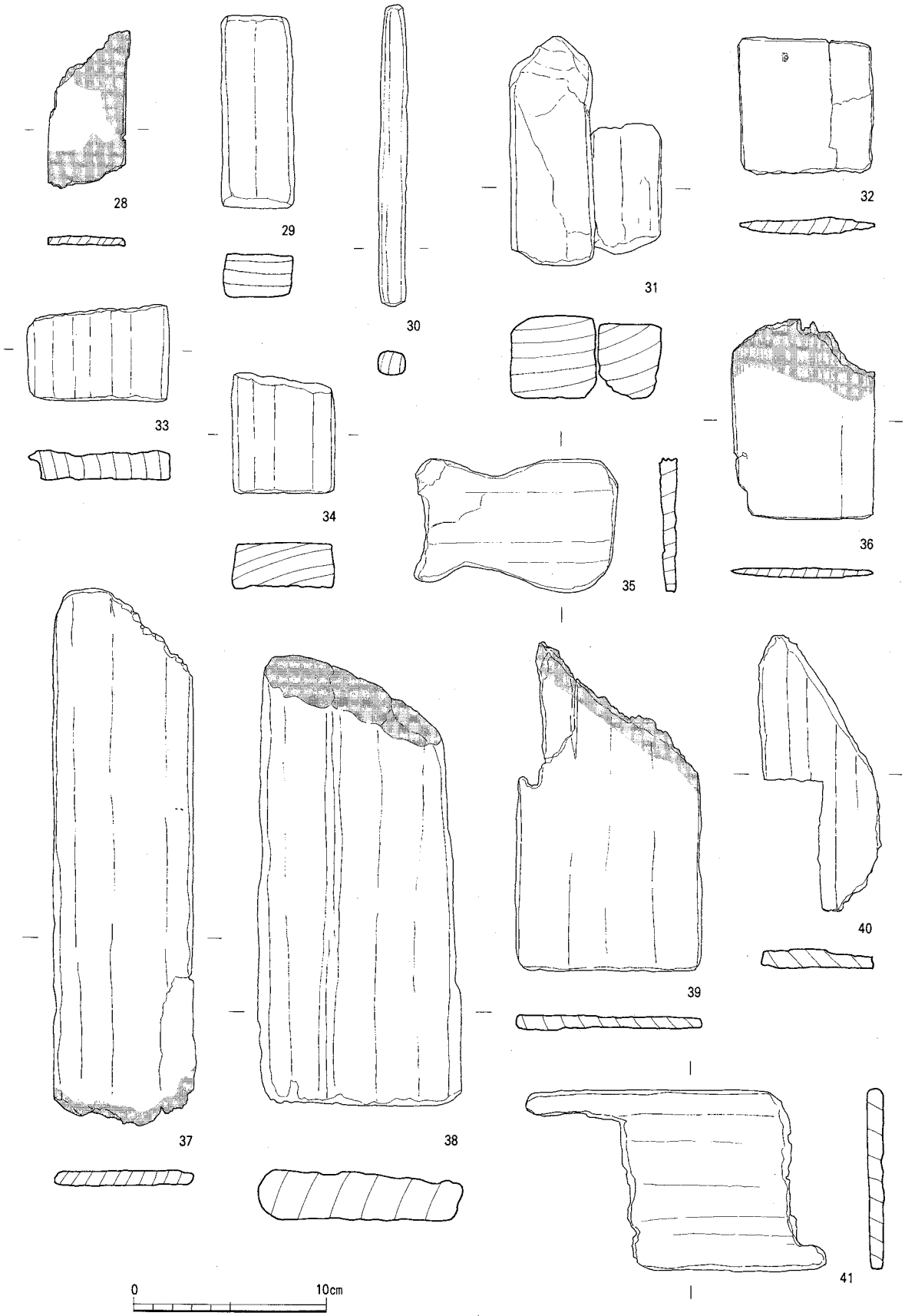


Fig. 6　1次調査　有機物堆積出土木製遺物（3）

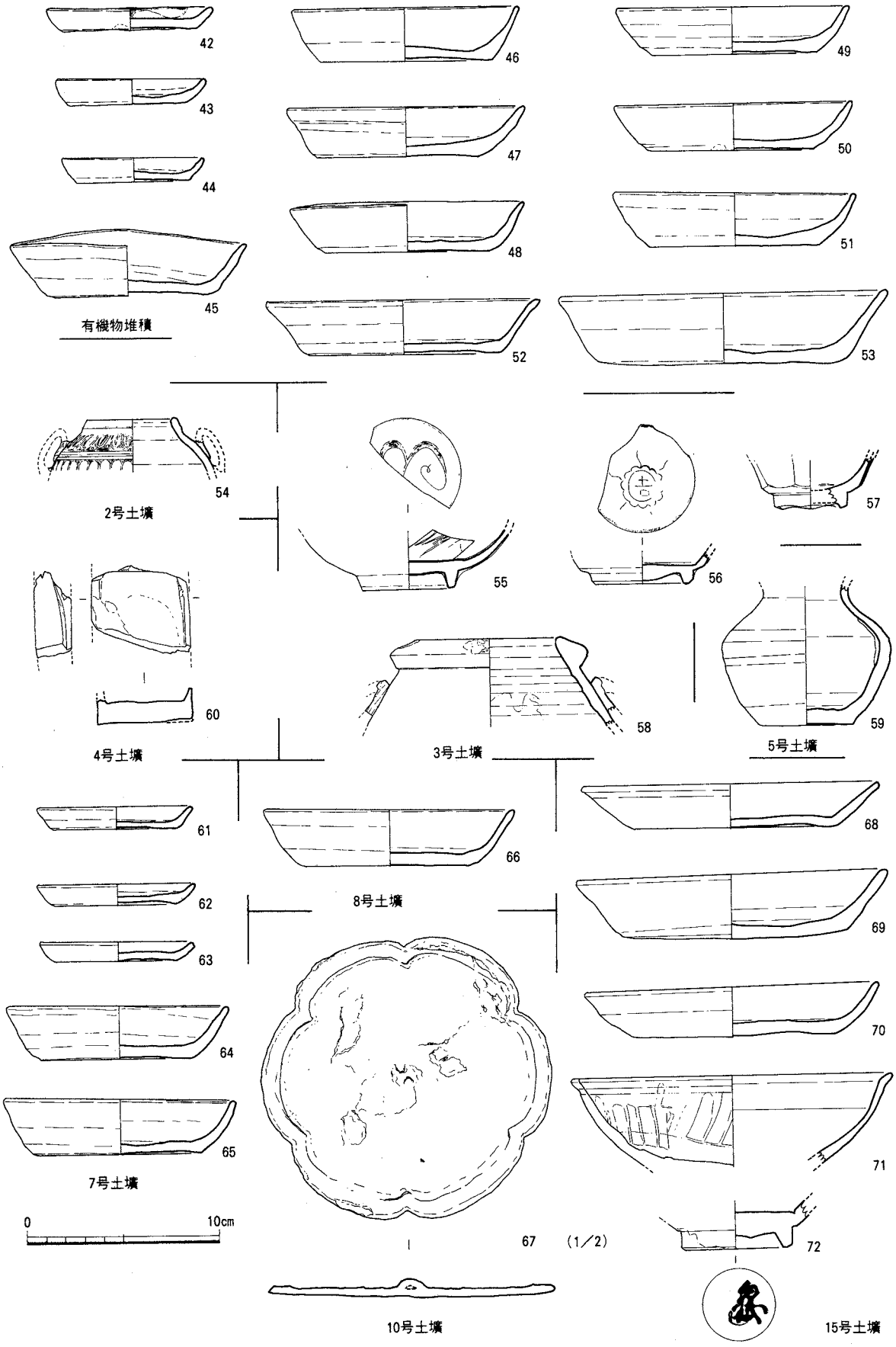


Fig. 7　1次調査　有機物堆積、2、3、4、7、8、10、15号土壌出土遺物

部分の大半と海部の壁を欠失する。

5号土壙（Fig.7）

Ⅱ－a、d区検出の大きな近世撹乱で、中世各期の遺物が近世遺物と混在する。59は口縁部を欠失するが、備前焼の糸切り底小壷で、内面に鉄錆が厚く付着しており、お歯黒壷と思われる。

7号土壙（Fig.7）

Ⅰ－c区検出の浅い土壙である。遺物量は少ないが土師器皿10点がまとまって出土している。図示した土師器皿はいずれも糸切り底で、口径8㎝前後（61～63）と口径12㎝前後の2タイプがある。14世紀代の遺物である。

8号土壙（Fig.7）

Ⅲ－a区検出の13世紀代の井戸の井戸枠部分である。掘り方は14号土壙とした。掘り方からは12,3世紀代の遺物が混在して出土しているが、図示した土師器皿66は井戸枠部分から出土したもので、糸切り底、口径13.1㎝、体部内外面の一部に煤が付着している。

10号土壙（Fig.7、Pl.4-5,6）

Ⅲ－e区検出の廃棄物処理土壙である。内部に焼灰が充填していた。遺物は小量であるが、高麗青磁、白色堆線のある白磁等がある。12世紀前半代か。67は銅製六花鏡で湖州鏡である。被熱し、表面の錆がひどく、銘文等は観察できない。

15号土壙（Fig.7）

Ⅰ－e区検出の12世紀代の土壙で、井戸枠は確認できないが井戸掘り方であろう。遺物量は少ない。68～70は糸切り底の土師器大皿である。71は同安窯系青磁碗で体部外面に粗い櫛描き文を施す。72も同安窯系青磁碗の底部破片である。高台内に墨書がみられるが判読できない。花押であろう。

17号土壙（Fig.9）

Ⅱ－f区で検出されているが調査区外にのびており全体形、性格も不明。遺物量は少ない。78は龍泉窯系青磁の双層碗である。上面の皿の部分は欠落している。外底中央に大きな孔が開けられ、幅広の畳付きは無釉である。外面体部はヘラ描きの蓮弁の上に細かい櫛目文が施される。内面は中空で部分的に薄く釉がかかる。

18号土壙（Fig.9）

Ⅳ－a区で検出された井戸掘り方である。図示した遺物は、79は縦耳をもつ滑石製石鍋の小型品である。80は粗質の龍泉窯系青磁で、内底の釉を環状に掻き取り、外面体部に櫛描き文を施す。赤褐色に発色する。81は李朝三島手の碗で、暗緑色の釉が施されるが、内底に三条の白色圏線がみられる。瓦組の井戸枠はみられないが、近世染付け片が検出されており江戸時代の遺構であろう。

19号土壙（Fig.8、Pl.4-1～4）

Ⅳ－d区の最下面白色砂層中に掘り込まれた木棺墓である。掘り方埋土も同じ白色砂で、検出は困難であったが、掘り方の長軸は約2.80m、幅約1.40m、鉄製棺釘の位置から、木棺の大きさは縦1.86m、幅0.57m程と推定される。木棺の下面には中央部、頭部に横木を渡した痕跡が認められるが、本来は足許の部分にも渡されていたものと思われる。人骨は頭骨、上腕骨、下肢骨が比較的良好に残っていた。詳細な分析は行なわれておらず、性別年令は不詳だが、身長約150㎝である。頭位はN－49°－Eを向き、顔面は西方向を向いていた。副葬品はいずれも棺内で、77の白磁碗は頭骨の直下に、あたかも枕にしたような状況で検出され、他の皿4枚は頭部上方に重ねられた状態で検出された。73は糸切り底の土師器皿で口径9.1㎝を計る。74、75は白磁皿Ⅲ類に属するものでほぼ同形同大である。76は白磁高台付きの皿で、碗のⅣ－1類と同系列に属する。77は白磁碗Ⅳ－1類で、高台脇から外底に

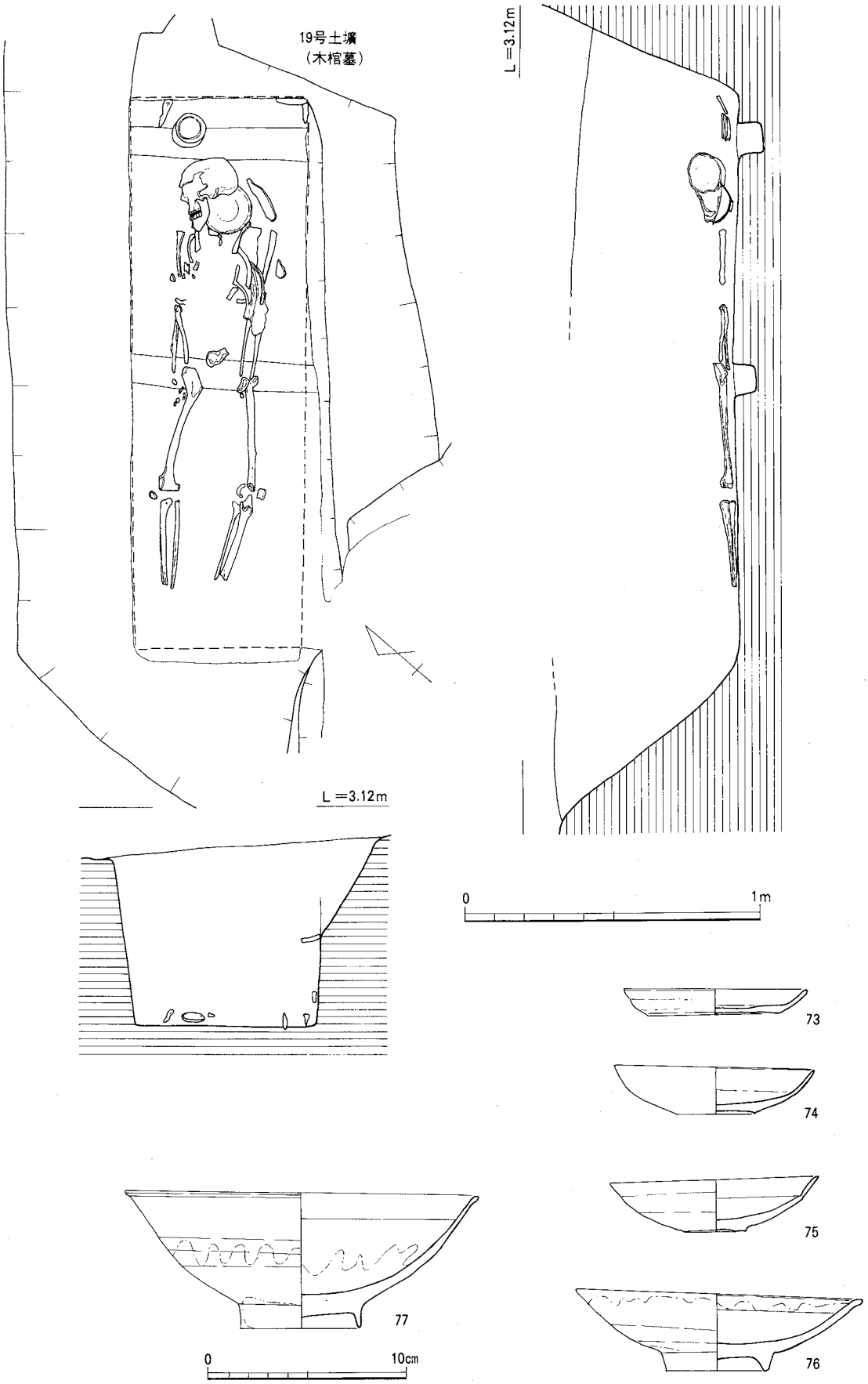


Fig. 8　1次調査　19号土壙（木棺墓）と出土遺物

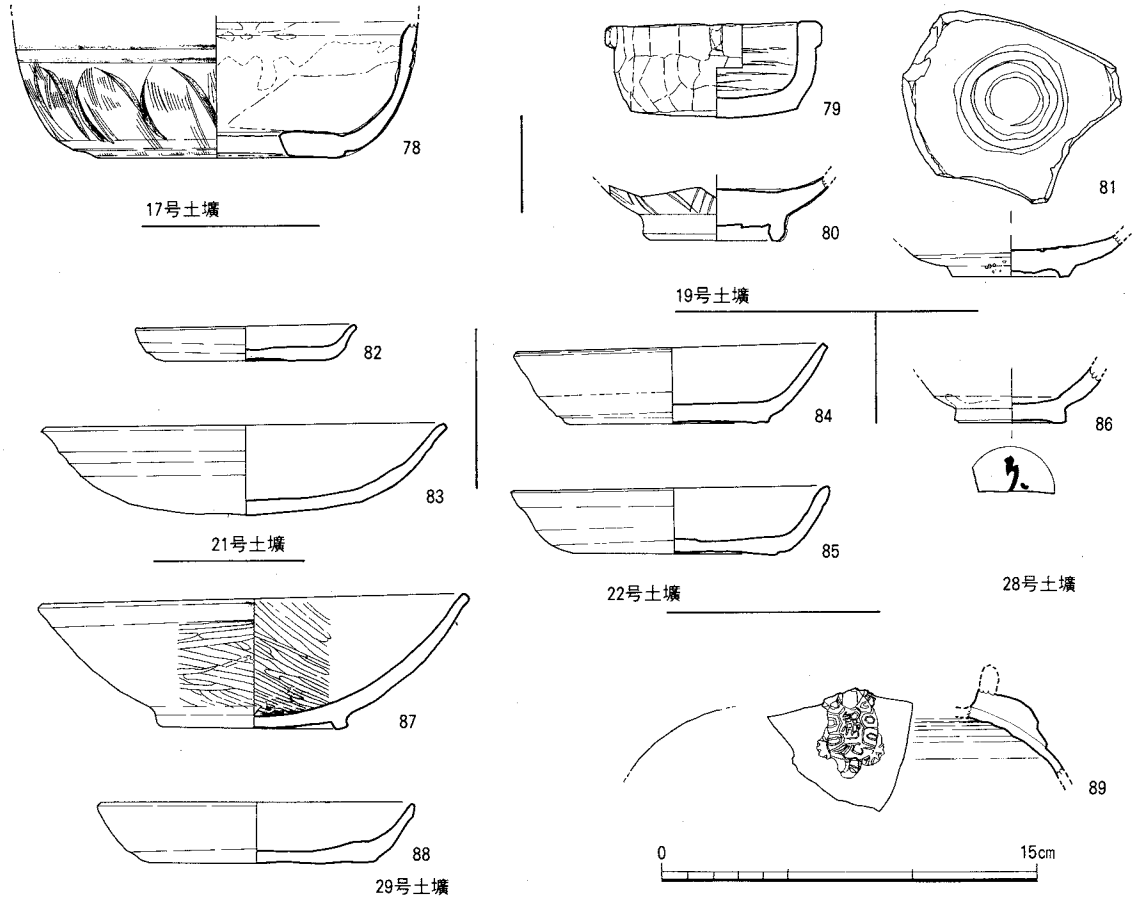


Fig. 9　1次調査　17、18、21、22、28、29号土壙出土遺物

かけて露胎、内外面体部に釉垂れが顕著である。埋葬時期は12世紀初頭前後が考えられる。

21号土壙（Fig.9）

Ⅲ－c，e区検出の井戸掘り方である。井戸枠の痕跡は検出できなかったが、二段掘りになっている。82は糸切り底の土師器皿、83は丸底の土師器杯である。遺物は小量で混じりもみられるが、龍泉、同安窯系青磁碗の破片もみられ、ほぼ12世紀後半代の遺構であろう。

22号土壙（Fig.9）

Ⅱ－f区検出の柱穴状の小さな土壙である。布目瓦小片がやや多く出土しているが、全体に遺物は少ない。84、85は糸切り底の土師器皿である。13世紀代の遺構であろう。

28号土壙（Fig.9）

Ⅳ－e区検出の小さな土壙である。時期的に多彩な遺物がみられるが小量である。86は天目碗の底部破片で、高台内に仮名かと思われる墨書がみられる。14世紀前半代の遺構である。

29号土壙（Fig.9）

Ⅳ－b区検出の土壙で、19号土壙（木棺墓）を一部切る。各時期の遺物が混じるが、遺構の時期は14世紀代と思われる。図示した遺物は、87が瓦器碗、88が糸切り底土師器皿。89は中国製陶器壷の肩部破片で、肉厚の亀文の型作り装飾を貼りつけている。頭部を欠くが、形状は明瞭で、甲羅の部分に「□元」の印文がみえる。胎は茶色で肌理が細かく、茶褐色、茶緑色の海鼠風の釉が掛けられている。

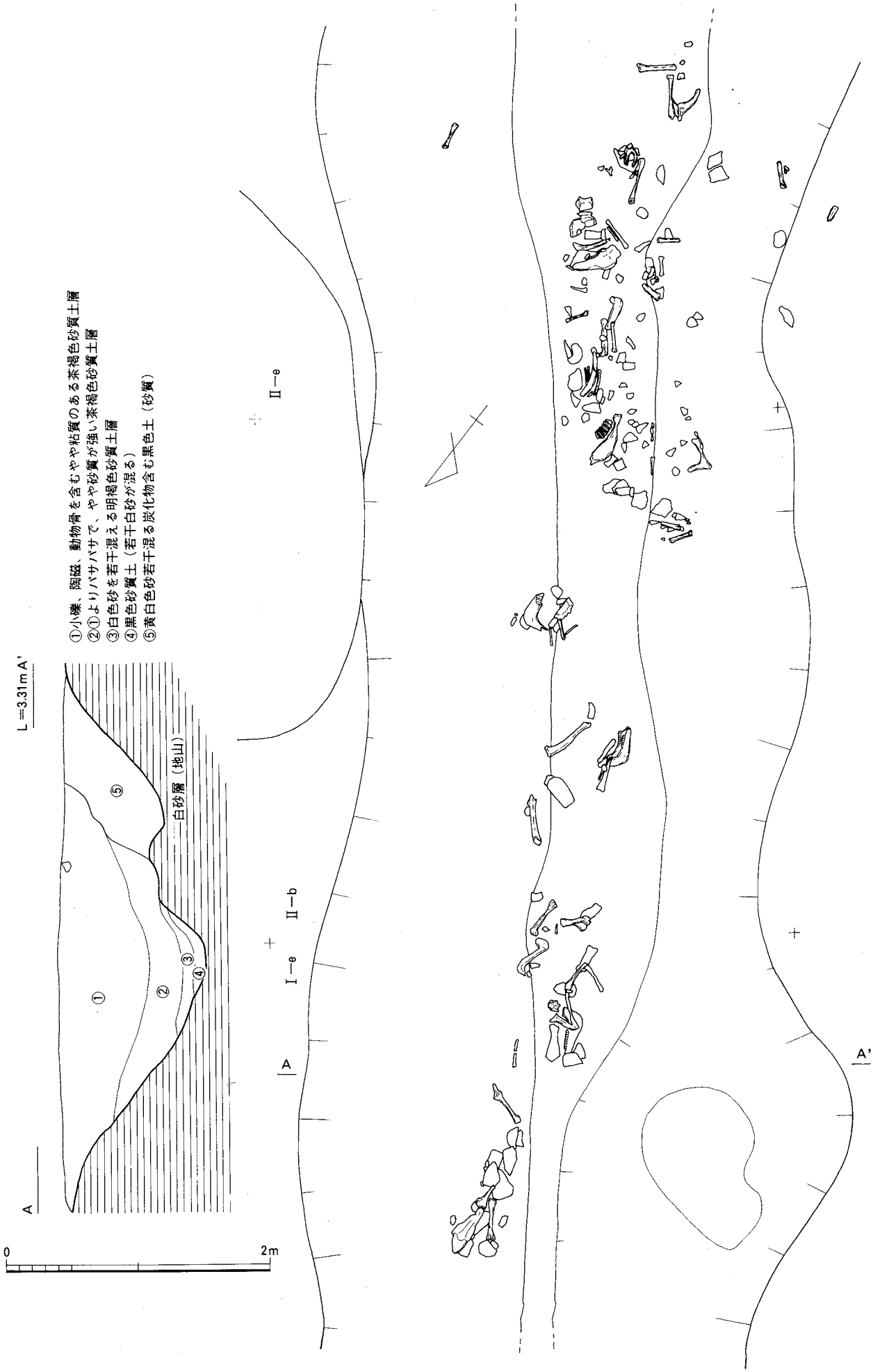


Fig. 10　1次調査　6号溝

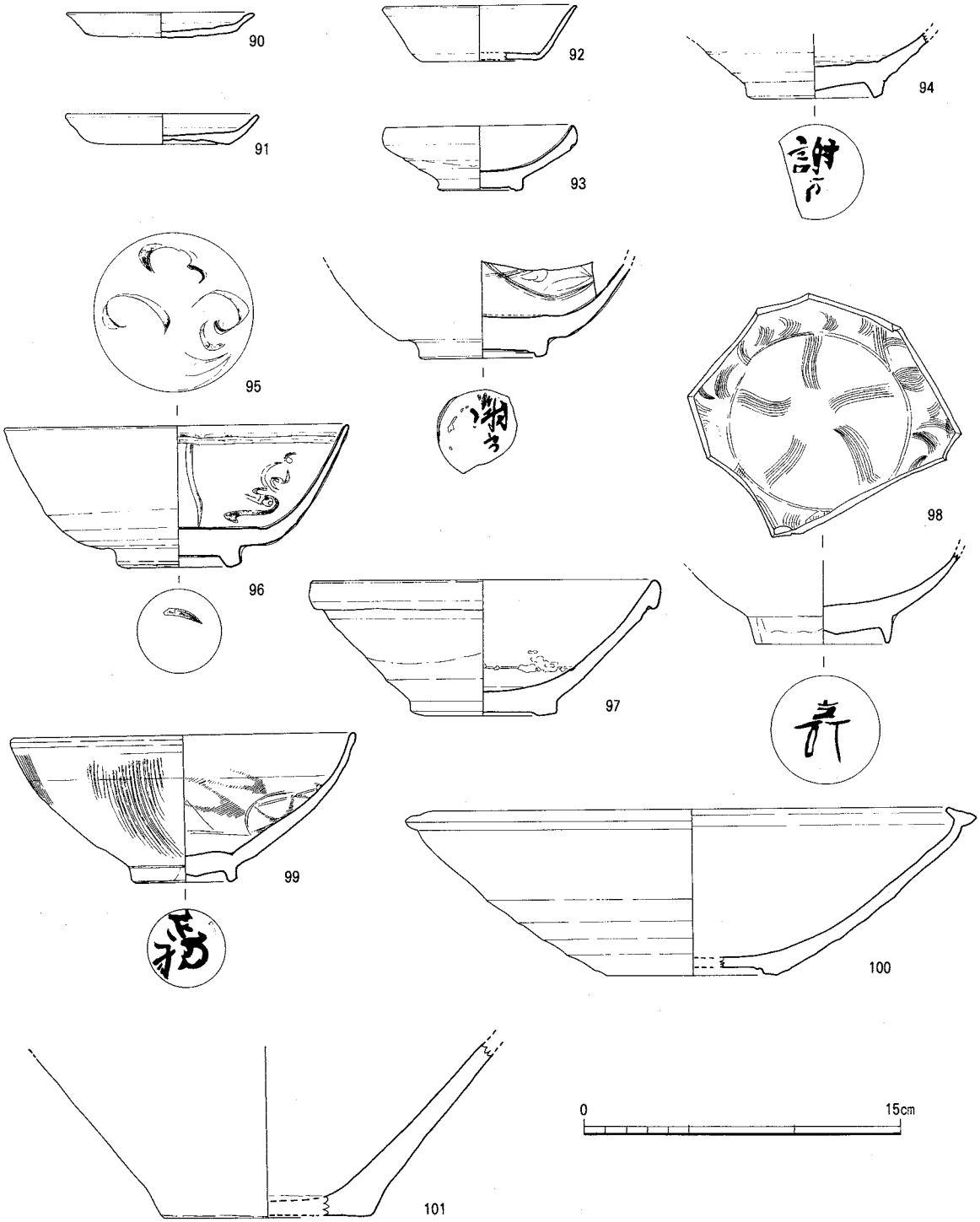


Fig. 11　1次調査　6号溝出土遺物

4号溝（Pl.3-5,6）

調査区北東端部を横断する形で検出した溝で、調査区外に広がるため、全体幅は不明である。また、南端部を5号土壙（近世撹乱）に切られている。方位は6号溝とほぼ同様で、N－34°－Wをとる。出土遺物は多量で瓦をはじめさまざまな時期の遺物が混在する。14世紀半ば頃の遺構である。6号溝と挟む形で舗道状の遺構も検出されている。

6号溝（Fig.10,11、Pl.3-4,5,6、5-1～6）

調査区北東側を横断する溝で、1号溝、2号溝、3号溝、5号溝はいずれも6号溝の堆積過程の溝で、基本的には同一の溝である。上面からは4号溝同様14世紀代までの遺物が混在して出土している。下面からはかなりの数の馬の頭骨、下顎骨、四肢骨が散在している。出土状態はかなりのレベル差があり、短期に堆積したものでなく、日常的に長期にわたって堆積していったものであろう。遺物が混在しているため、溝の初現の時期は明確でないが、廃棄年代は14世紀半ば頃と思われる。図示した遺物は、90がヘラ切りの土師器皿、91が糸切りの土師器皿、92が口禿の白磁皿、93が白磁高台付き皿Ⅰ－2類である。94は見込みの釉を環状に掻き取るⅨ類の白磁碗で、高台内露胎部に「謝□」の墨書がみられる。95はⅠ－5類の龍泉窯系青磁碗で、高台内露胎部に「謝□」の墨書がみられる。96はⅠ－6類の龍泉窯系青磁碗で、高台内露胎部に墨書がみられるが、判読できない。97はⅣ類の白磁碗である。98はⅣ－2類の白磁碗で、内面に櫛描き文を施し、高台内露胎部に墨書がみられるが、判読できない。99は同安窯系青磁碗で、内外面に櫛描き文を施し、高台内露胎部に墨書がみられるが、判読できない。100は褐釉陶器鉢で、内底に重ね焼きの目跡がある。101は弥生中期の甕形土器で、小児甕棺として使用されたものであろう。祇園町交差点周辺には同期の甕棺墓地が広がっており、それらの一部に含まれるものである。

7号溝

調査区の中央部を横断する幅の狭い小規模な溝である。方位はほぼN－40°－Wを取る。北西端部が分岐しており、造り替えが行なわれたものである。遺物は小量で、時期的に混在するが、およそ14世紀頃まで使用されている。

舗道状遺構（Pl.3-3～5）

3号溝、6号溝に挟まれた幅1m強の狭い道路と思われる。南端を5号土壙（近世撹乱）にきられているが、9m程が検出できた。瓦、陶磁器の小片、小礫を敷き詰めており、酸化鉄、マンガン分で路面は硬化している。出土遺物は小片で図化できないが、龍泉窯系青磁Ⅲ類、口禿白磁などがみられ、この遺構の時期はおおよそ14世紀半ば以降作られたものであろう。

4）遺構外出土の遺物

多くの遺構の継続的な掘り込みによって、遺物の多くは遺構から遊離した状態で出土する。ここでは特徴的なものについてのみ記述する。

102、103は東播系の片口鉢で、内面体部下半と底部は磨耗し、捏ね鉢として使用されたものである。104は土師質の土鍋で内外面ハケ目調整をする。外面は全体に煤が付着し、内底には焦げ付きがみられる。105は瓦質の三脚付きの香炉で、体部に鍔が付けられ、その上部に二条の沈圏線が巡る。106は瀬戸系の小杯で、糸切り底、内面に黄緑色透明釉がわずかに掛けられている。107、108は龍泉窯系青磁の双層碗で、同一個体であろう。107は上層の皿部分で内底に櫛描き文を施し、全面に施釉、108は底部で、中央部に孔が穿たれ、幅広の畳付き部分だけが露胎である。78と同様の器形である。109、110は龍泉窯系青磁Ⅲ類の杯、111は龍泉窯系青磁Ⅲ類の碗で、いずれも釉が厚く掛けられた優品である。112は青白磁人物像の右肩から腕にかけての破片で、衣服の部分にのみ青白釉がかけられている。肘の部分で腕は折損しているが、肘から先は水平に伸ばしていたことがうかがえる。113は白磁Ⅸ類の碗で、外底に「住ヵ」の墨書がみられる。114、115は同一の器形で、内面と外体部上半に濃い飴色の釉が施されるが、胎土、器形とも白磁平底皿Ⅱ類に酷似する。114は外底に「寺」の墨書があり、115は外面体部下半の露胎部に墨書があるが判読できない。116～119は白磁Ⅵ類の碗で、それぞれ外底

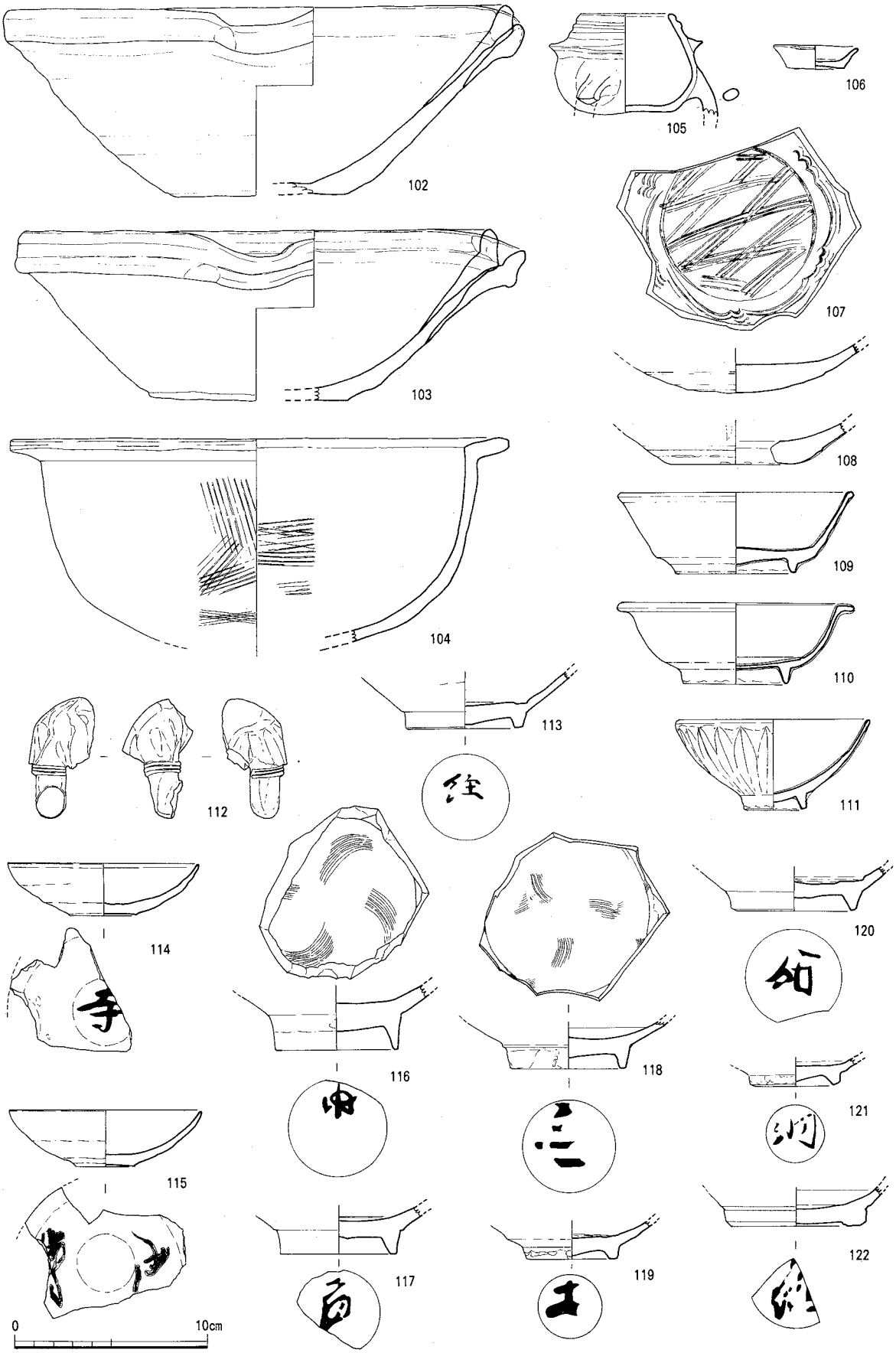


Fig. 12　1次調査　遺構外出土遺物（1）

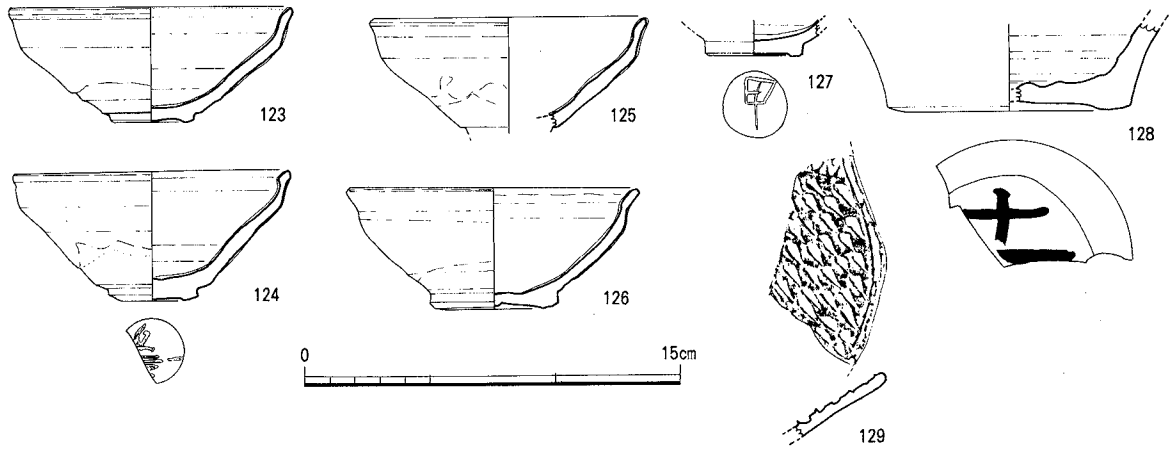


Fig. 13　1次調査　遺構外出土遺物（2）

に墨書がみられるが判読できない。120はⅣ類の白磁碗で、外底に「綱」と思われる墨書がある。121はⅡ類の高台付き皿で、外底に「綱」の墨書がある。122は白磁Ⅳ類の碗で、外底に「□綱」と思われる墨書がある。123～127はいずれも中国製の天目碗である。124の外底には墨書がみられるが判読できない。127の外底には焼成前にヘラ書きされた「甲」の文字が残されている。128は中国製陶器壷の底部破片で、外底露胎部に墨書がみられる。「十一」もしくは「吉」の一部であろうか。129は中国製陶器のおろし目皿である。肌理の細かい胎土で釉は掛けられず、焼き締め風の焼成である。内面を串状の工具で連続的に刺突し、おろし目を作っている。

2．博多遺跡群第８次調査（東長寺第２次調査）

１）調査にいたる経緯

昭和55年当時、博多遺跡群における地下鉄関係の発掘調査が一段落し、博多遺跡群の遺跡としての評価もある程度定着して、民間の再開発事業のチェックも次第に軌道に乗りつつあった。宗教法人東長密寺では、昭和53年度の納骨堂建築を皮切りに、寺内伽藍の整備計画がすすめられていた。昭和55年、納骨堂につづき本堂の新築工事が計画された。福岡市教育委員会と宗教法人東長密寺は協議を行い、隣接する博多遺跡群第1次調査地点（納骨堂、東長寺第1次調査）の調査結果に基づき遺跡の広がりが予想されたので、建設に先立ち発掘調査を行なうこととなった。

調査の組織

調査委託　宗教法人東長密寺

調査主体　福岡市教育委員会

総括　井上剛紀（文化課長）

庶務担当　三宅安吉（文化課埋蔵文化財係長）

古藤国生（文化課埋蔵文化財係）

調査担当　折尾學　（文化課埋蔵文化財係）

池崎譲二（文化課埋蔵文化財係）

博多遺跡群第８次調査

遺跡調査番号	８０２４		遺　跡　略　号	ＨＫＴ－８	
地　　番	博多区御供所町150－1		分布地図番号	天神　49	
開発面積	600㎡	調査対象面積	600㎡	調査面積	373．5㎡
調査期間	昭和55年8月1日～10月28日				

２）調査概要

調査地点は、博多遺跡群第1次調査地点（納骨堂、東長寺第1次調査）の西に近接する。東側に突出した凸形を呈す。計画前は、この地点一帯は墓地であり、改葬後墓石は土中に捨てられており、地表下2.5～3mはバックホーで除去し、以下を精査した。遺構最下面までの深さが相当になると思われたため、壁面には法をつけた。このため遺構最下面での調査面積は373.5㎡にとどまった。便宜上調査区をⅠ・Ⅱに区分し、それぞれをさらに5mメッシュでａ～ｒに細分した。また、排土置場の関係から、① Ⅱ－ｃ～ｆ・ｉ～ｌ・ｏ～ｒ区、② Ⅰ区、③ ①以外のⅡ区の順で調査を進めた。調査期間中、長期にわたって記録的な豪雨に見舞われ、調査区が冠水するなど、排水作業に難航し調査予定期間の延長を余儀なくされた。この間東長寺、建築施工業者はじめ多方面の方にご迷惑をかけたことをお詫びしたい。

以下、主要な遺構の概要と出土遺物について述べる。

3）遺構と遺物

1号土壙（Fig.15・16、Pl.9-1）

Ⅱ－k区の表土除去後直下で検出された。拳大の礫が1.5m×0.8m程の範囲で散在し、その中に頭蓋骨と上肢骨の一部が検出された。礫の分布範囲の西端に35cm×30cmの比較的大きな平石が置かれていた。明確な墓壙は検出できず、骨のまとまりもないないが、土壙墓であろう。この礫に混じって土師器皿1点が出土しているが、遺構にともなうものかどうか明確でない。14世紀代の遺構であろう。

2号土壙（Fig.15、Pl.9-2.3）

Ⅱ－k区の表土除去後直下で検出された。1.25m×0.8mのほぼ長方形の範囲に人骨が検出されている。墓壙は明確でないが、土壙墓であろう。頭部は南向きで、顔面西向きの横臥屈葬である。下肢骨、上肢骨が遺存しているが、頭蓋骨は後世の掘り方で欠失している。遺物は混在し、確実に遺構にともなうものとはいえない。図示した遺物（1、2）は、いずれも糸切り底の土師器皿である。

3号土壙（Fig.15・16、Pl.9-4・5）

Ⅱ－k区の表土除去後直下で検出された。下面に1.45m×1.1mの楕円形の掘り方をもつ。頭蓋骨、下肢骨の一部が、床面より浮いた状態で、礫、陶磁器、挽き臼破片等と混在して出土している。墓として作られた土壙というよりも廃棄物処理土壙に人骨が混在したものであろう。図示した遺物は、3が中国製陶器皿である。4は銅鏡で、小さな蒲鉾状の縁をもつが、一部磨耗し、中央に小さな鈕をもつ。14世紀代の遺構であろう。

9号土壙（Fig.16）

Ⅱ－k区で検出された13世紀代の廃棄物処理土壙である。調査区外に伸び全容は不明である。遺物は各時期のものが混在する。図示した遺物は、5がⅥ類の白磁平底皿の完形品である。胎は精良で、外底を除き青味のある乳濁色不透明釉がかかる。6は白磁Ⅳ類碗の底部破片で、高台内露胎部に「下」の墨書が残されている。

10号土壙（Fig.16、Pl.8-3）

Ⅱ－e．k区で検出された13世紀代の土壙である。径約2.4mのほぼ円形の掘り方で、基盤の白色砂層に掘り込まれている。井側は検出されていないが井戸掘り方であろう。遺物は各時期混在するが、ここでは土師器皿がまとまって出土している。いずれも糸切り底で、口径8～9cmの小型品（7、8）とと口径13cm前後の大型品（9～12）に分けられる。

18号土壙（Fig.16・17、Pl.10-1）

Ⅱ－k．r区で検出した。上面に多量の焼け割れた玄武岩の平石の集積があり、その下位に不定形の掘り方がある。あるいは集積とは別の土壙の切り合いかもしれない。調査区外に伸びており全容は明確でない。石の集積からは土器等の遺物量も少なく、明確な時期は不明。建物基礎の可能性も考えられるが、明確でない。

24号土壙（Fig.16・17、Pl.10-2）

Ⅱ－k区で検出した。1.5m×1.2mの不整円形の廃棄物処理土壙である。土壙が埋められていくある段階で、多量の土師器皿が廃棄され、浅い皿状に堆積している。土師器皿はいずれも糸切り底で、口径8～8.5cmの小型品（13、14）と12cm前後のサイズとに分けられる。16は径10cmの中型の土師皿に脚を付けた高杯である。17は高い高台をもつ白磁碗Ⅴ類、18は中国製の天目碗である。13世紀後半から14世紀前半代の遺構である。

25号土壙（Fig.16）

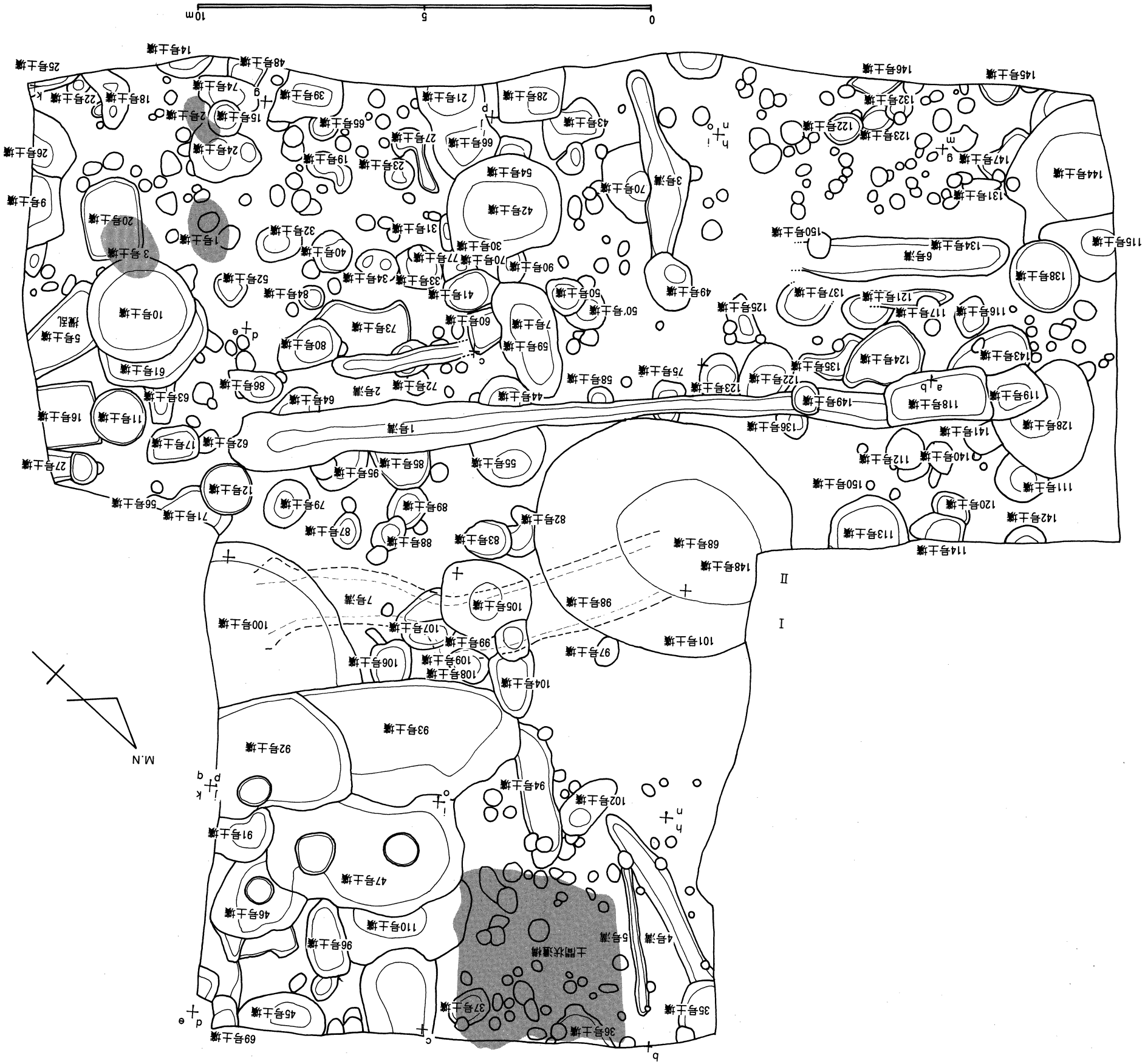


Fig. 14　8次調査　調査区遺構平面図

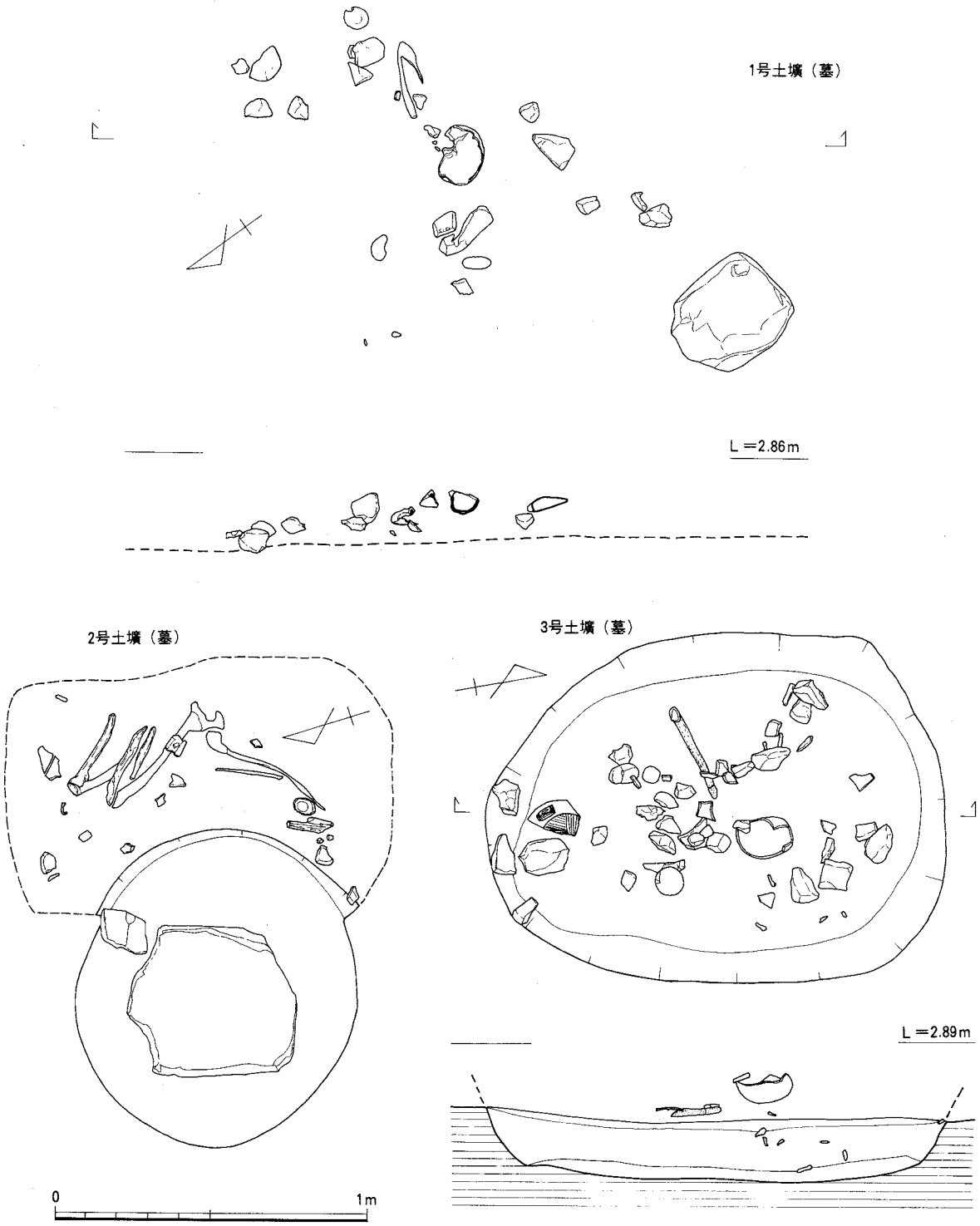


Fig. 15　8次調査　1、2、3号土壙（墓）

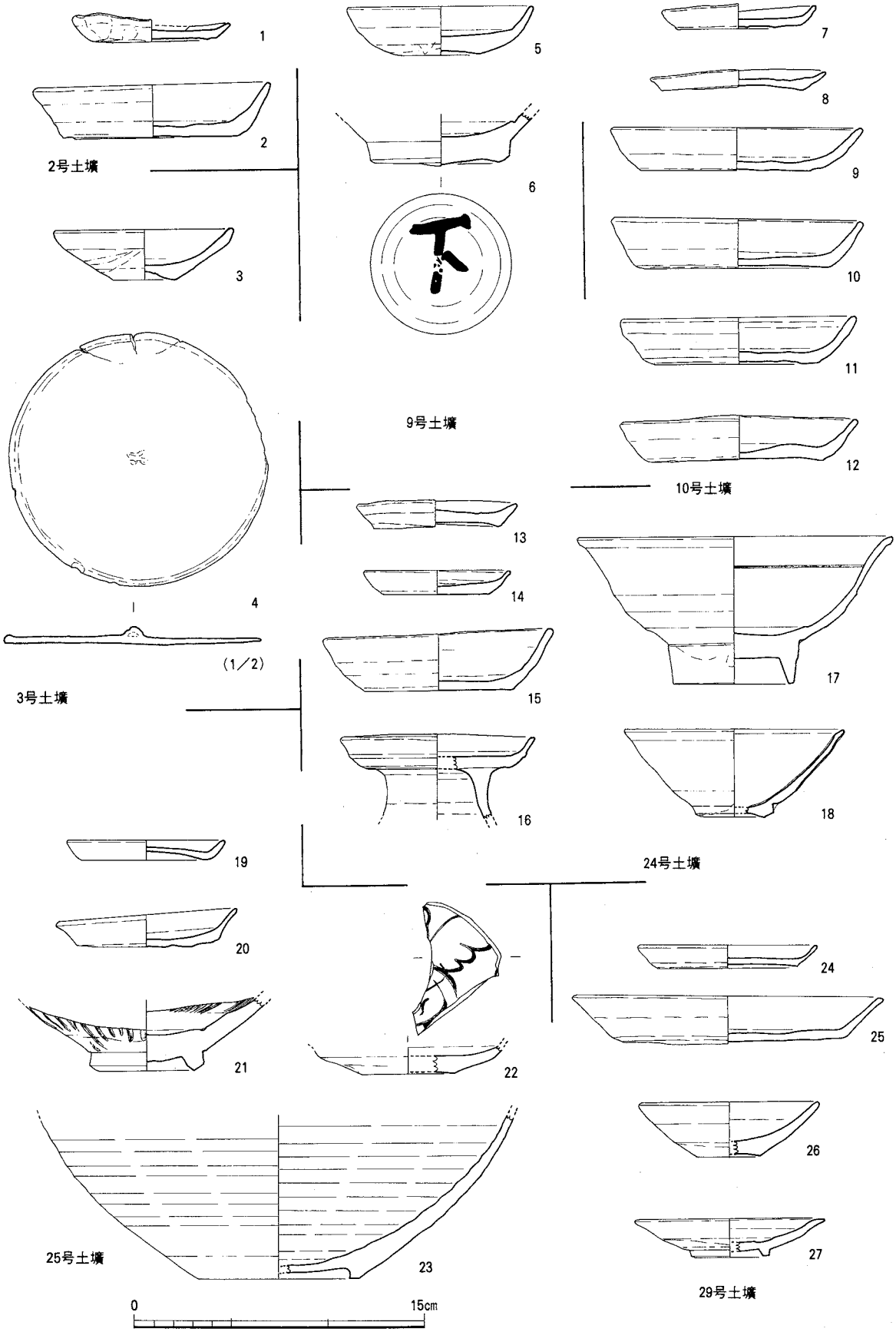


Fig. 16　8次調査　2、3、9、10、24、25、29号土壙出土遺物

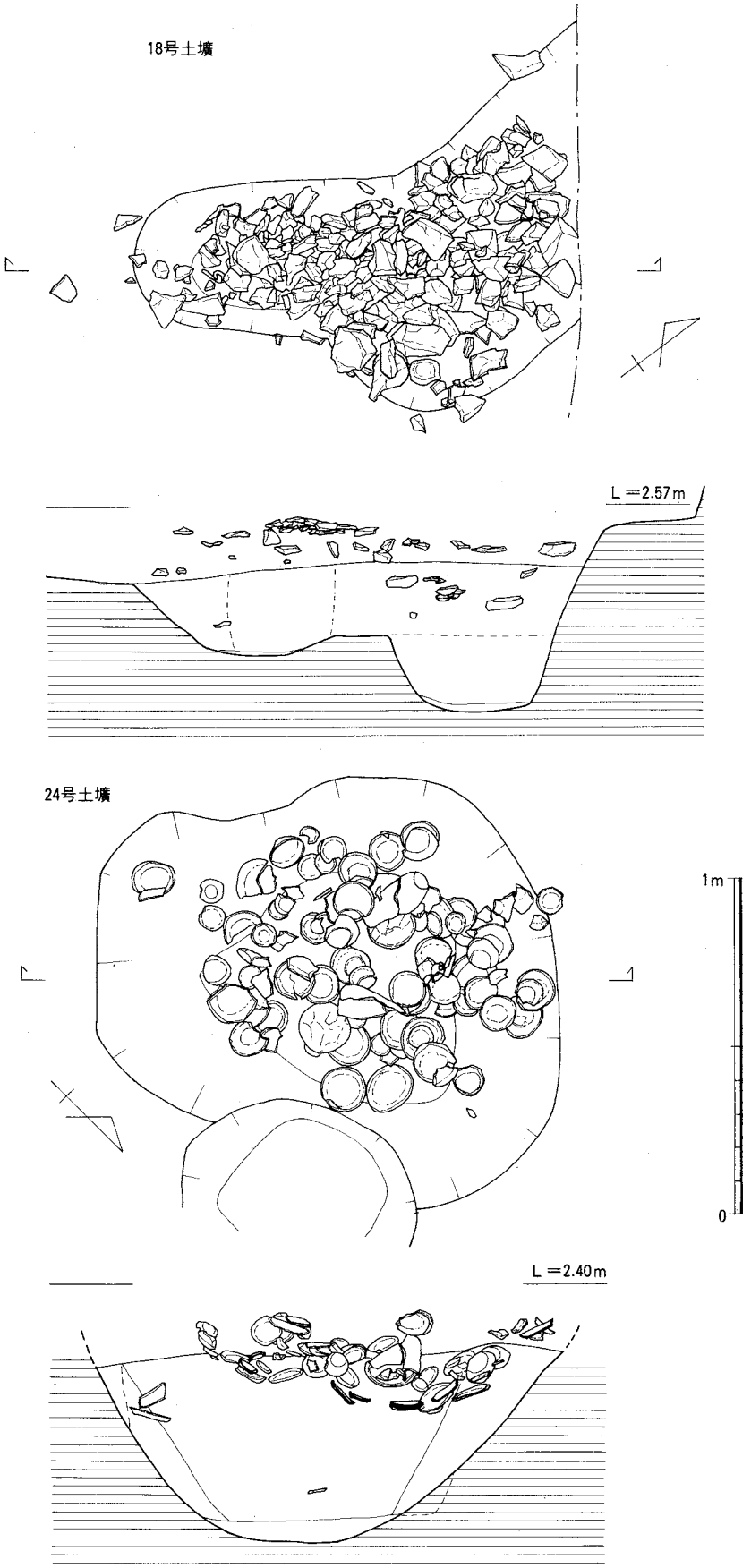


Fig. 17　8次調査　18、24号土壙

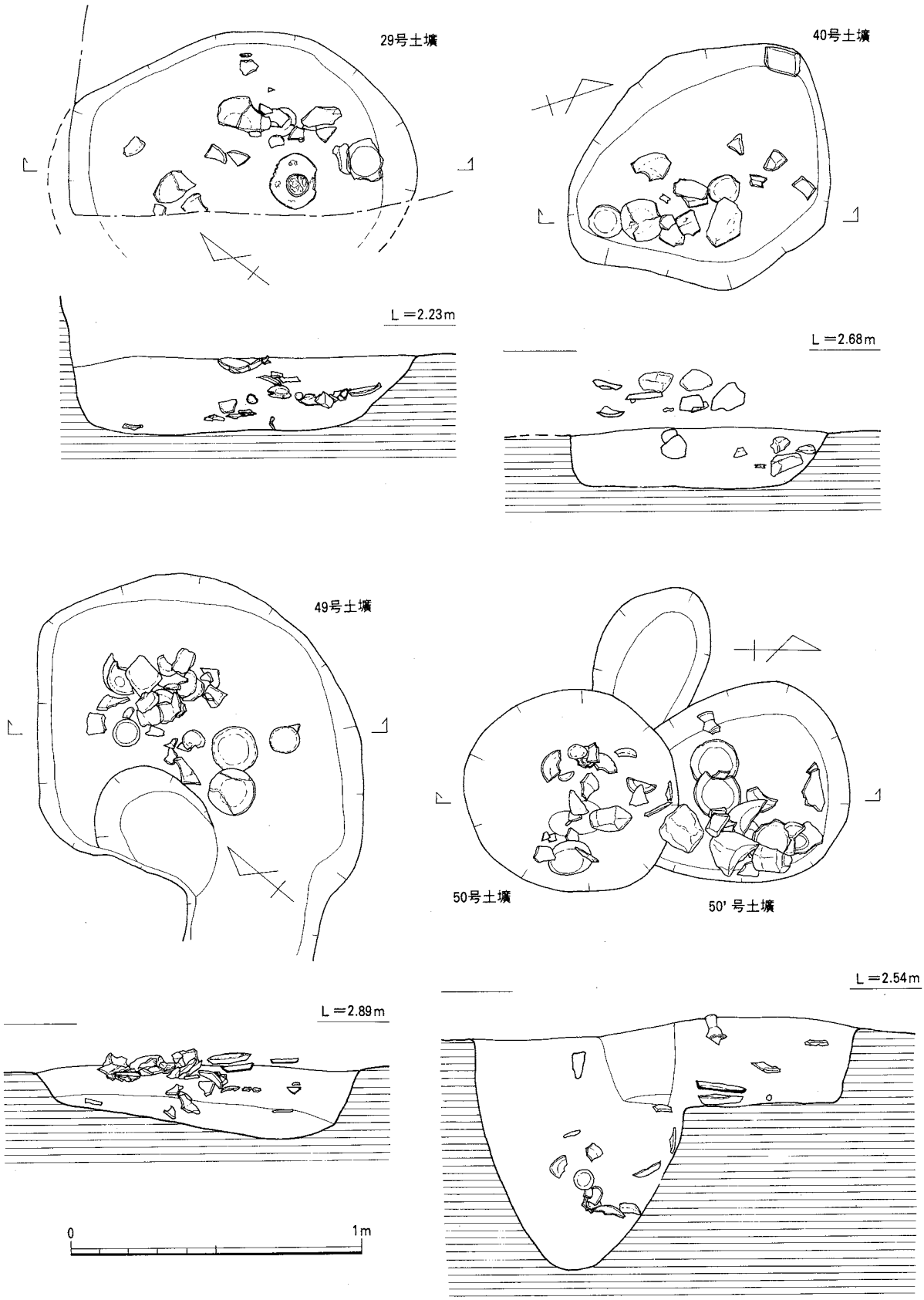


Fig. 18　8次調査　29、40、49、50、50' 号土壙

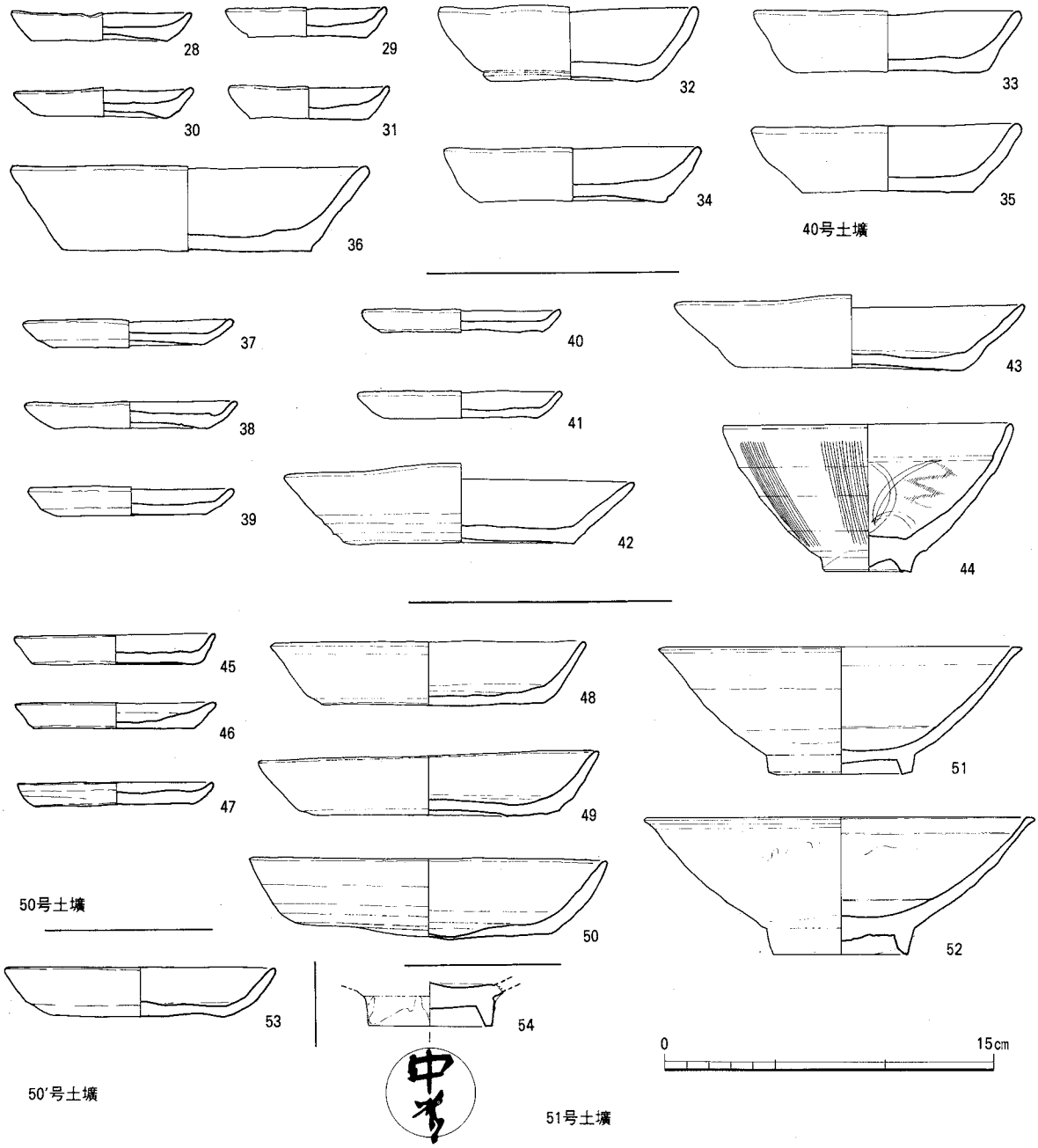


Fig. 19　8次調査　40、49、50、50′、51号土壙出土遺物

Ⅱ－q．r区の調査区南隅で検出した不整形の廃棄物処理土壙である。調査区外にのび全容は不明である。各時期の遺物が混在する。図示した遺物は19、20が糸切り底土師器皿でそれぞれ径8.2cm、9.6cmを計る。21は同安窯系青磁碗で、外面に粗い櫛目、内面に細かい櫛目を施す。22は龍泉窯系青磁皿で内底にヘラ描き文を施す。23は中国製褐釉陶器壷の底部破片で、内外施釉、外底は碁笥底をなす。13世紀代の遺構である。

29号土壙（Fig.17・18、Pl.10-3）

Ⅱ－o区で検出した長径約1.3mほどの長円形の廃棄物処理土壙である。調査区外にのび全容は不明である。土師器皿はいずれも糸切り底で、径9cm強の小型品（24）、16cm強の大型品（25）の2種類がある。26は白磁皿Ⅴ類、27が白磁高台付き皿Ⅱ類である。この他図示していないが白磁碗Ⅶ類も

出土している。12世紀代の遺構であろう。

40号土壙（Fig.18・19、Pl.10-4）

Ⅱ－ｊ区で検出した長軸約1.1ｍ、短軸0.8ｍほどの不整長円形の廃棄物処理土壙である。焼け割れた礫とともに土師器皿がまとまって出土している。すべて糸切り底で、径7.3～8.2cmの小型品（28～31）、径12cm前後の中型品、径16cm強の大型品の３種類のサイズがみられる。14世紀代の遺構である。

49号土壙（Fig.18・19、Pl.10-6）

Ⅱ－ｉ区検出の一辺1ｍ程の不整形の廃棄物処理土壙である。３号溝に切られている。南に偏って浅い皿状の落ち込みがみられる。焼けた礫とともに土師器皿等がまとまって出土している。土師器皿はいずれも糸切り底で、径9.0～9.5cmの小型品（37～41）と径16cmの大型品がある。44は同安窯系青磁碗で、外面に細かい縦方向の櫛描きがあり、内面はヘラ描きと細かい櫛描きの雷光文が施される。12世紀後半代の遺構であろう。

50号土壙、50'号土壙（Fig.18・19、Pl.10-5）

Ⅱ－ｉ区検出で、それぞれ径0.6ｍで深さ0.3ｍ、径0.75ｍ程の円形で深さ0.8ｍの廃棄物処理土壙である。当初一つの遺構と考えていたが、最終的にふたつの遺構の切り合いであることがわかった。50号土壙の出土遺物は多く、土師器皿はいずれも糸切り底で、径９cmの小型品（45～47）、径14～16cmの大型品（48～50）がある。51、52は白磁Ⅵ－１類の碗である。50'号土壙の土師器皿（53）は糸切り底で、径12.5cmの中型である。それぞれ13世紀代の遺構である。

51号土壙（Fig.19）

Ⅱ－ｉ区検出の小さな廃棄物処理土壙で、井戸掘り方である42号土壙に切られる。遺物量は小量で混じりがあり、遺構の時期は明確でない。12世紀代か。図示した遺物（54）は、白磁Ⅵ類の碗で高台内に「中□」の墨書がみられる。

68号土壙（Fig.20・22、Pl.11-1）

Ⅰ、Ⅱ区にまたがって検出された径５ｍにもなる大きな掘り方である。井側は検出できなかったが井戸掘り方と思われる。遺構図、写真は遺物の出土状況である。遺物量は多く、各時期の遺物が混在するが最も新しい遺物から、13世紀代の遺構であると思われる。出土した土師器皿はいずれも糸切り底で、径９cm前後の小型品（55～59）と径14cm前後の大型品（60～65）がある。また、土師器には高台付きの皿もあり、66は底部に焼成前に開けられた孔がある。67は径20cm以上の特大品である。68は龍泉窯系青磁平皿で、内底にヘラと櫛による花文が描かれる。69は磁灶窯系の褐釉陶器の蓋で、胎土は肌理が細かく精良で、上面の一部に施釉される。70は陶器皿で全面に黒褐色の釉が掛けられている。71は陶質の碗で灰色の釉がかけられるが、外面体部下半と高台内は露胎、内底は環状に釉を掻き取っている。また、内底と高台脇に目跡が残っている。72は交趾二彩かと思われる壷もしくは香炉の肩部の破片で、獅子と思われる中空の獣面が貼り付けられ、黄釉、緑釉が掛け分けられている。73は砂岩製の砥石で上下面が使用されている。

71号土壙（Fig.22）

Ⅱ－ｅ区検出である。近世瓦組井戸12号土壙に切られ、調査区外にのびる。全体形不明だが、１？世紀代の廃棄物処理土壙であろう。74は無釉の焼締め風の陶器で、双耳壷、または香炉と考えられる。口径10cmで、口縁内面と外面体部下半に重ね焼きの胎土目が残っている。

74号土壙（Fig.22）

Ⅱ－ｋ．ｑ区で検出した土壙であるが、遺物は少なく、性格不明。図示した遺物、75は白磁Ⅳ類の碗で、外底に「李」と思われる墨書が残されている。

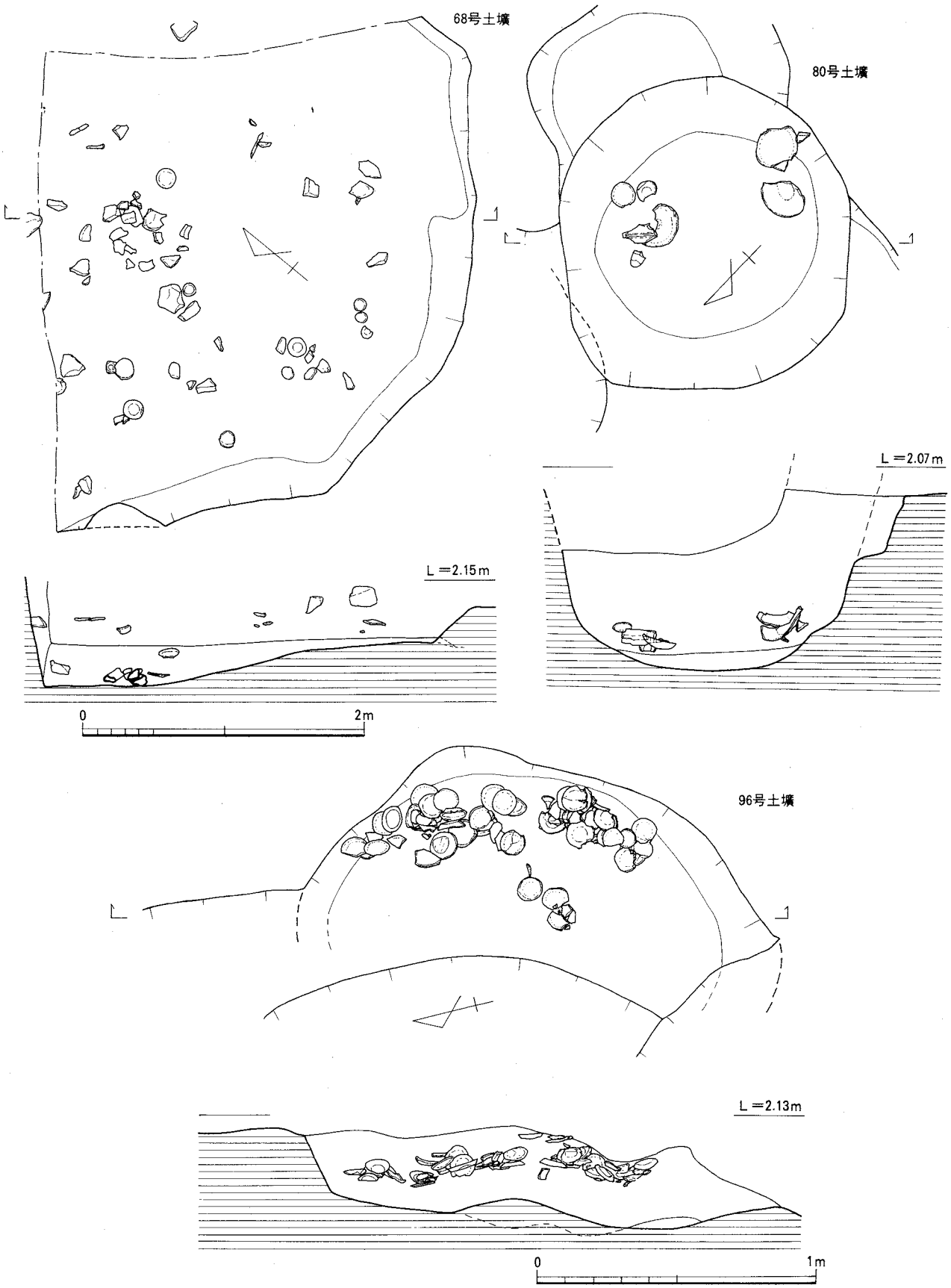


Fig. 20　8次調査　68、80、96号土壙

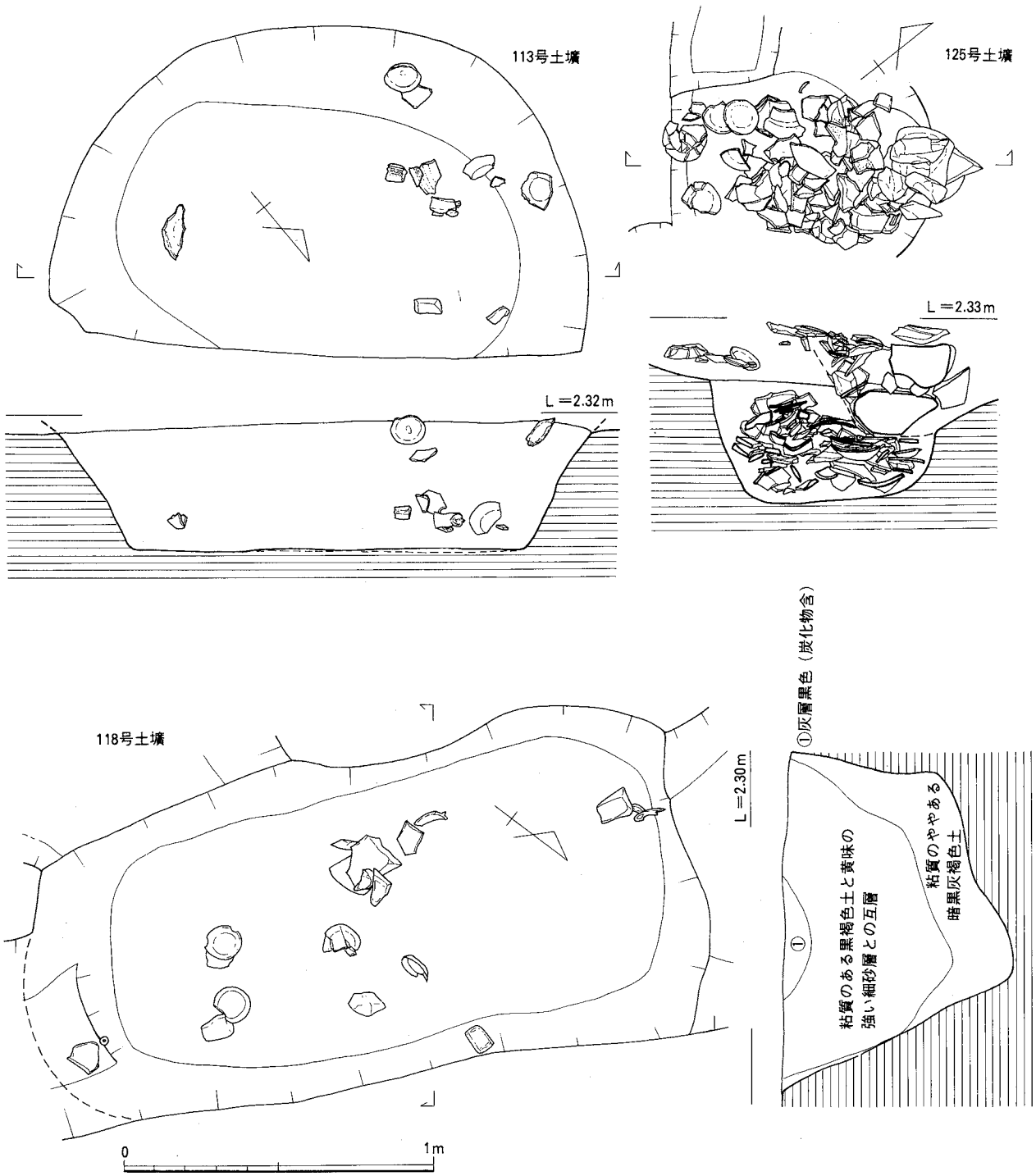


Fig. 21　8次調査　113、118、125号土壙

80号土壙（Fig.20・22、Pl.11-2）

Ⅱ－d．j区で検出した廃棄物処理土壙で、径1m程の円形プランをし、現存深さ0.65mと深い。量的には少ないが、床面に貼りつくような状態で遺物が検出された。土師器皿はいずれも糸切り底で、76、77はそれぞれ径9.6cm、9.3cmの小型品で、78は径15.6cmの大型品である。79は褐釉陶器皿であるが、二次的に被熱し、釉がカセている。図示していないがこの他中国製陶器大甕のT字形口縁破片も出土している。12世紀後半代の遺構であろう。

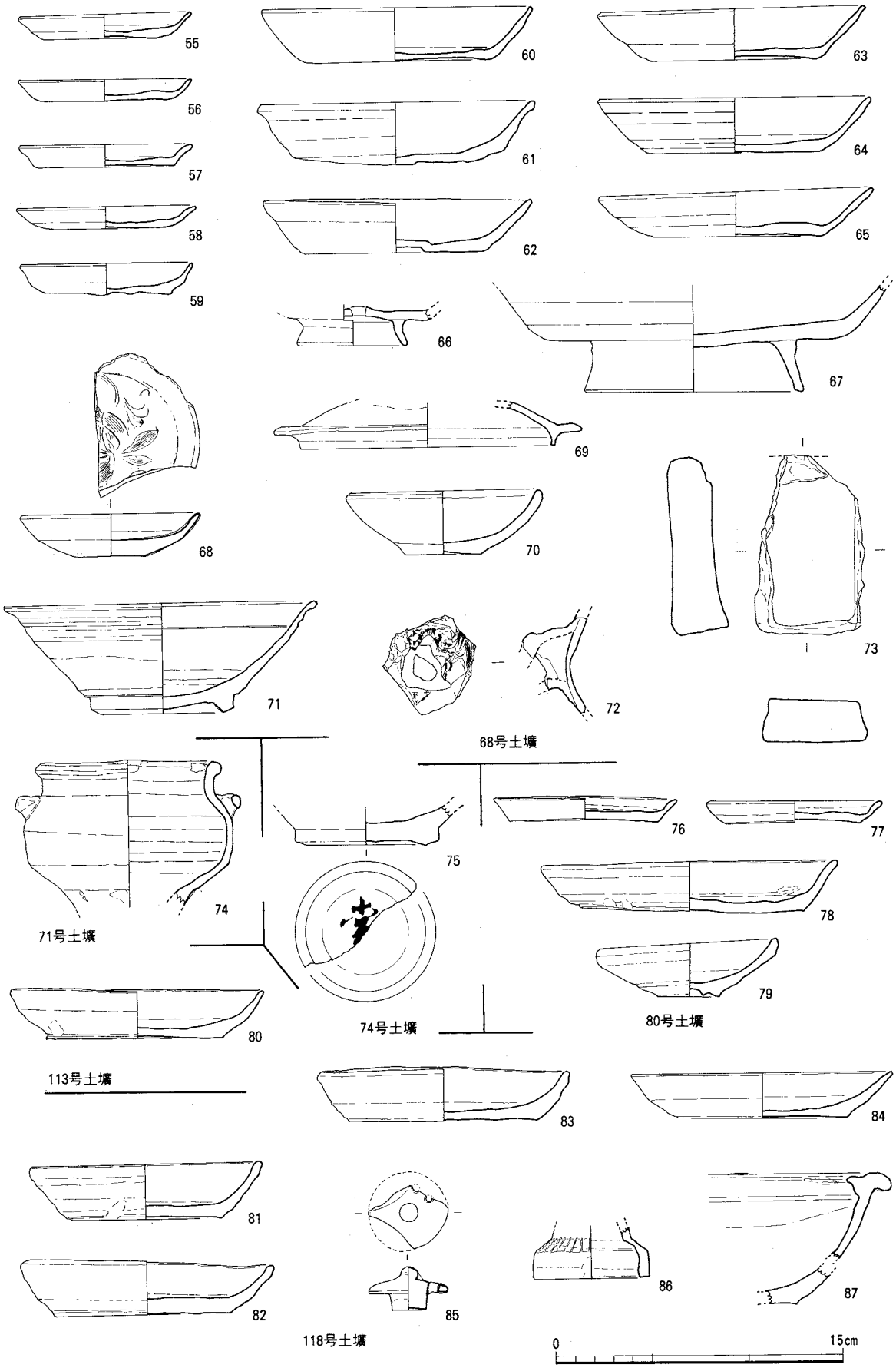


Fig. 22　8次調査　68、71、74、80、113、118号土壙出土遺物

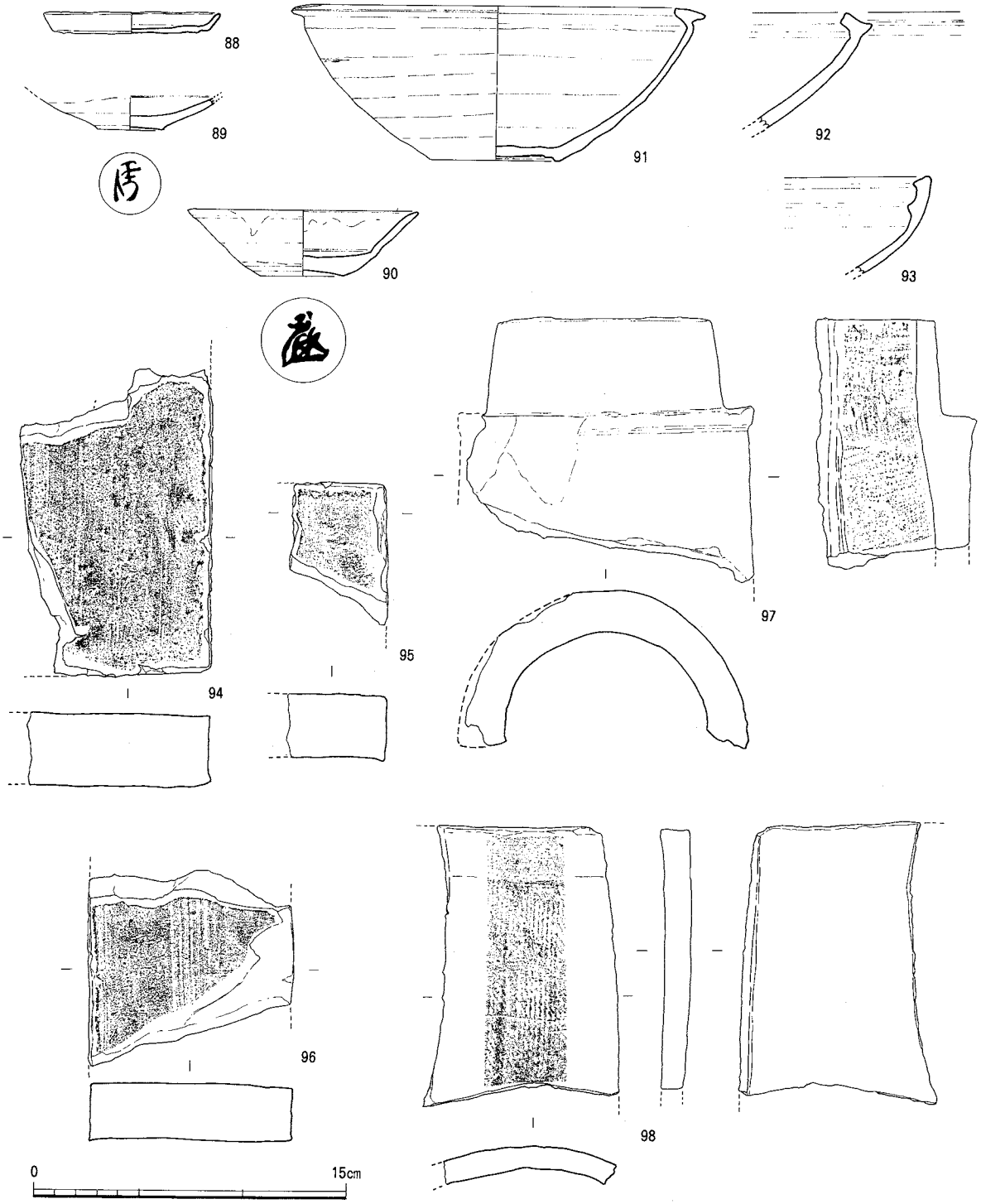


Fig. 23　8次調査　125号土壙出土遺物

96号土壙（Fig.20、Pl.11-3）

Ⅰ－j区検出の廃棄物処理土壙である。井戸掘り方である110号土壙に切られ全体形は不明。地山白色砂層に浅く掘り込まれている。径9㎝前後の同形同大の糸切り底土師器皿がまとまって出土している。遺構の年代は12世紀代であろう。

113号土壙（Fig.21・22、Pl.11-4）

Ⅱ－b区検出の廃棄物処理土壙である。北側が調査区外に伸び全容は不明であるが、長軸1.7mほ

どの長円形の平面プランをもち、深さ40cmほどの掘り方である。遺物は混じりがあるが、口径13cm程の糸切り底の土師器皿（80）が3点ほど出土している。この他、中国製の大型褐釉陶器甕で、口縁部が内側に「ㄱ」状に屈折するものがあった。13世紀代の遺構であろう。

118号土壙（Fig.21・22）

Ⅱ－a，b，g区検出の長軸2.2m、短軸1.2mほどの長方形の平面形をもつ掘り方で、廃棄物処理土壙である。1号溝に切られる。人頭大の礫とともにまとまった遺物が出土している。図示した遺物のうち土師器皿（81～84）はいずれも糸切り底で、径12～14cmをはかる。84は口縁が外に開き胎が薄手で焼成が良好なもので、他の3点とは異質である。85は青白磁の小壷蓋で天井部に2箇所の穿孔がある。86は青白磁の蓋かと思われる。型押しで、肩部に放射状の浮文があり、上半にのみ淡オリーブ色半透明釉が薄くかかる。露胎部は赤褐色に発色している。87は磁灶窯系の黄釉鉄絵の盤の口縁と底部の破片で同一個体と思われる。内面体部下半にのみ施釉される。露胎部は焼き締め風に赤化している。重ね焼きの目跡がみられる。この他図示していないが、滑石製の硯形石製品、鋏状の鉄製品がみられた。

125号土壙（Fig.21・23、Pl.11-5）

Ⅱ－h区検出土壙である。長軸0.8m、深さ0.5mほどの掘り方をもつが、焼け割れた礫と瓦の破片がぎっしりと詰まっている。大型の礫を含む部分と、瓦のみを含む部分があり、あるい2つの遺構の切り合いかもしれない。遺物はこれらのなかに混在する。瓦は水平に堆積しており、単なる廃棄物処理土壙でなく、建物基礎であったかもしれない。88は糸切り底の口径8.4cmの小型土師器皿で、この他径14cm前後のものもある。89はⅢ類の白磁平底皿で外底露胎部に花押様の墨書がある。90もⅡ－2類の白磁平底皿で外底露胎部に花押様の墨書がある。91、92は中国製褐釉陶器鉢で、いずれも内外面に緑味のある褐色不透明釉がかかる。93は無釉の陶器捏鉢で胎は粗く内面は磨耗している。94～96は磚もしくは熨斗瓦の破片である。97、98はそれぞれ丸瓦、平瓦であるが、布目圧痕が残る。13世紀代の遺構であろう。

1号溝（Fig.24、Pl.8-5）

Ⅱ区で15m程が検出されている。方位はN－47°－Wをとる。幅は1.2～0.5mほどで、途中で途切れている。道路は検出できていないが、2号溝、6号溝と平行しており、道路側溝または屋敷の区画等の意味をもつものであろう。出土した土師器皿はいずれも糸切り底で、径7.6～8.7cmの小型品（99、100）と12～13cmの中型品（101～103）がある。104は青白磁合子の蓋で、天井部に型押しの花卉文の浮文をもち、淡いオリーブ色の透明釉がかけられている。105は青白磁梅瓶の蓋で、天井部に型押しの放射状の浮文をもつ。鼠色にくすんだ不透明の青白釉がかけられている。106は青白磁椀で、内面に型押しの花卉文の浮文をもち、外面に縦方向の細い沈線を施す。胎は薄く、澄んだ青白釉をかけた優品である。107は褐釉陶器四耳壷の肩部以上の破片である。14世紀代の遺構であろう。

2号溝（Fig.24、Pl.8-5）

Ⅱ区で1号溝に平行して3m程が検出された。幅40cm程の小規模の溝である。遺物量は少ないが、土師器皿はいずれも糸切り底で、径9.2cmの小型品（108）と径12.5cm前後の中型品（108、109）がある。111は平瓦で、裏面には格子目の叩きがあり、表面は布目をナデ消している。1号溝と同様14世紀代の遺構であろう。

3号溝（Fig.24）

Ⅱ－i，o区で1号溝にほぼ直交する角度で、4m程が検出されている。土師器皿は113のみヘラ切り底で、他は糸切り底である。9～10cmの小型品（112～114）と15cmを越す大型の115がある。116は

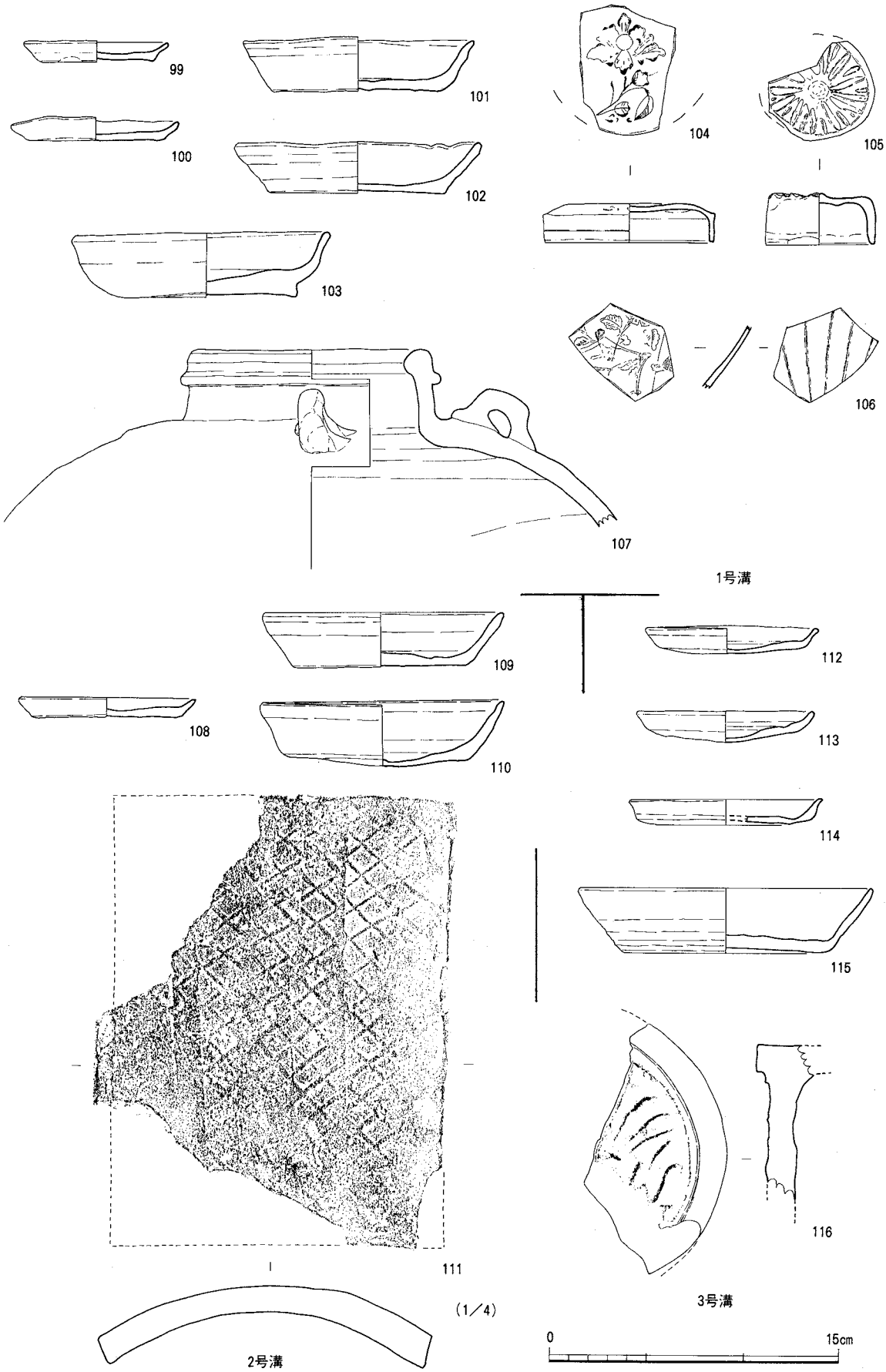


Fig. 24　8次調査　1、2、3号溝出土遺物

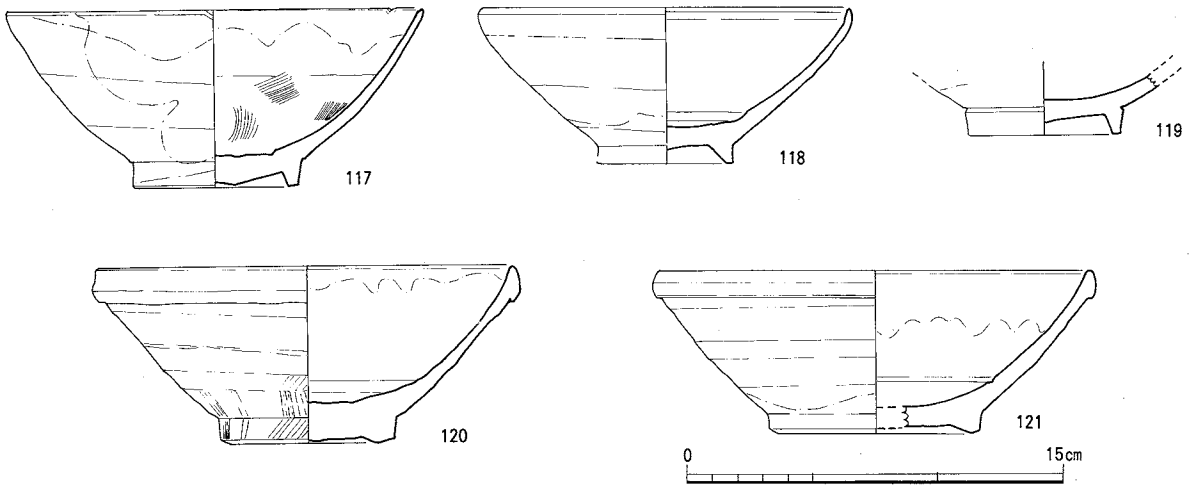


Fig. 25　8次調査　7号溝出土遺物

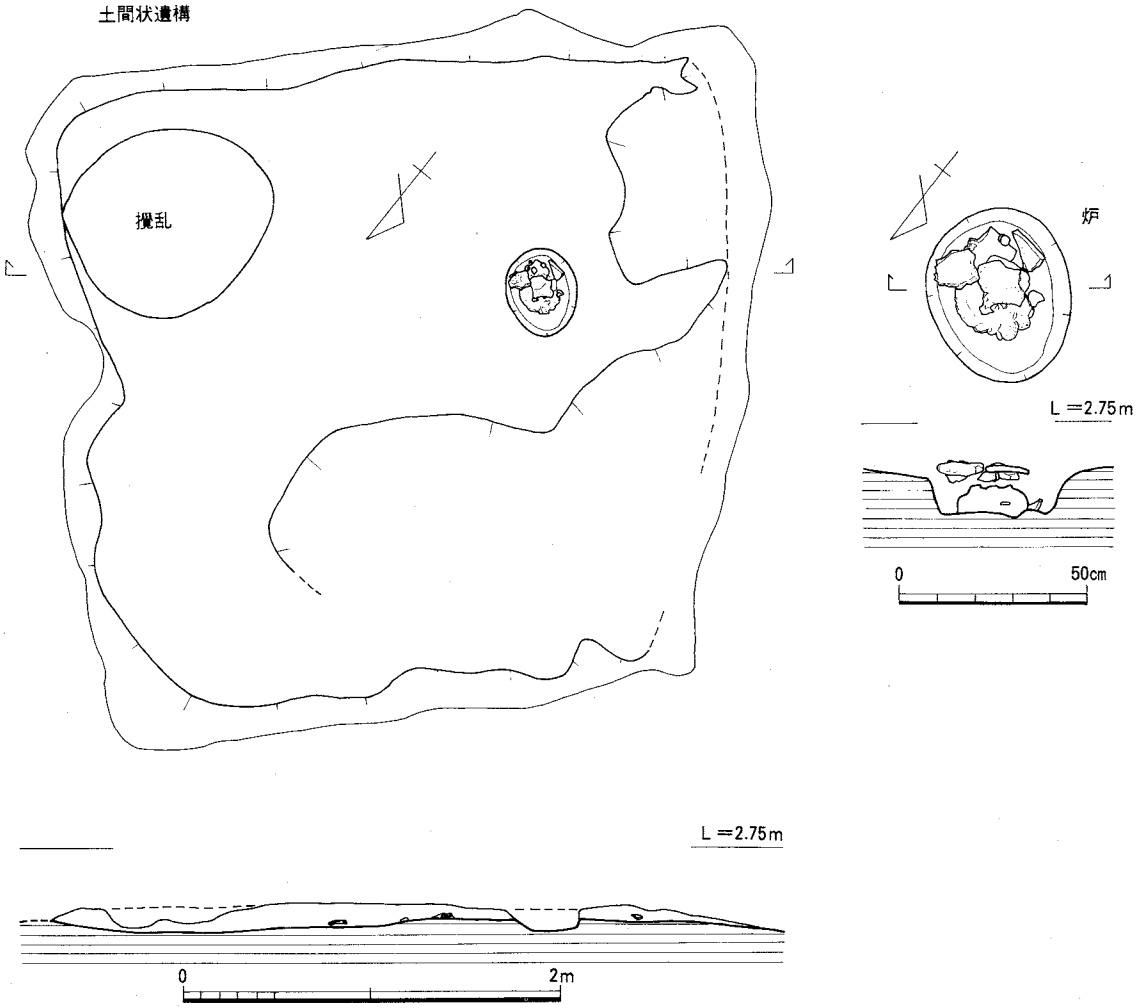


Fig. 26　8次調査　土間状遺構

軒丸瓦で、瓦当面に花卉文をもつものである。遺物は混じりがあるものの、13世紀代の遺構であろう。

4号溝

Ⅰ区北隅で調査区外まで伸びているが、4m程が検出されている。N－17°－Eの方向をとる。幅50cmの浅い溝である。5号溝より新しい。出土遺物は微量である。

5号溝

Ⅰ区北隅で3mほどが検出された。N－40°－Eの方向をとる幅20cm程度の小さな溝である。1号溝とほぼ直交する方向で、また3号溝とほぼ平行する。建物の雨落ち溝であろうか。遺物はほとんどみられない。

6号溝

Ⅱ区の西側で4mほどが検出された。東側は途中で切れる。N－39°－Eの方向をとり、1号溝と平行する。幅0.8mでやや広いが、遺物は少ない。道路側溝もしくは屋敷地の区画であろうか。

7号溝（Fig.26）

Ⅰ区最下面で検出されたもので、地山白色砂層中にわずかに濁った砂が堆積していたものである。人為的な溝でなく、雨水の流路などの自然の溝であろう。海抜・m程度で湧水が激しい。ここでは白磁碗のみが出土している。117は0－Ⅱ類に属する碗でクリーム色の不透明釉がかけられている。口縁部は輪花で、内面に櫛描き文がある。118、119はⅡ類かと思われる碗で、120、121はⅣ類の碗である。11世紀後半から12世紀前半の時期である。

土間状遺構（Fig.26、Pl.12-1～4）

Ⅰ区北隅で、表土除去後直下で検出された。4.0m×3.6mの方形に近い平面形で、厚さ15cmほどに焼けた瓦破片と粘土を敷き詰めたものである。遺構中心よりやや南に偏して46cm×38cmの楕円形の炉状遺構が掘り込まれている。中には焼土、炭のほかスサ入り粘土の塗り壁が出土しており、これには稲の籾殻の圧痕が多く残されている。また銅銭1点もみられたが、火熱を受け錆がひどく銭種は不明である。この遺構は炉壇と考えられ、柱穴等は確認できなかったものの土間状遺構全体が茶室の建物と推定される。遺構に直接ともなう遺物はほとんどみられないが、粘土内に含まれた遺物からすると16世紀代と推定できる。

4）遺構外出土の遺物（Fig.27）

博多遺跡群の他地点の例に漏れず、本地点も継続的な遺構の掘り込みによって、多数の遺物が遺構から遊離した状態で出土している。それらのうち特徴的なものについて記述する。

122は瓦質片口で、内面は斜めのハケ目調整をしており、下半は磨耗している。123は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－1類に属する。外面体部にヘラの線描きで蓮弁を表し、その上から櫛目を施す。124は龍泉窯系青磁碗Ⅱ－1類に属する蓮弁文碗である。125は緑褐色の透明釉を施す青磁碗で外面に粗い櫛描きをし、口縁は外反する。126は龍泉窯系青磁碗Ⅲ類に属する砧手の蓮弁文碗である。水色の釉が厚くかかる。126は褐釉が施された合子蓋で、天井部に鳳凰の尾の部分が見える。128と129は青白磁で同一個体と思われるが特殊な器形である。香炉であろうか。130は青白磁碗で内面に細かいヘラ描きの花卉文を施す。131は龍泉窯系青磁平底皿で、外底に「荘（花押）」の墨書がある。132は白磁平底皿で、外底に「一」の墨書がある。133は白磁碗で、外底に墨書がみられる。花押であろうか。134は白磁碗底部で周囲を円形に打ち欠く。外底に平仮名とおもわれる墨書がある。135は見込みの釉を環状に掻き取る白磁碗の底部破片で、外底に「中品」の墨書がある。136は龍泉窯系の青磁碗で、外底に花押と思われる墨書がある。137は見込みの釉を環状に掻き取る白磁碗で、外底に墨書がみられるが

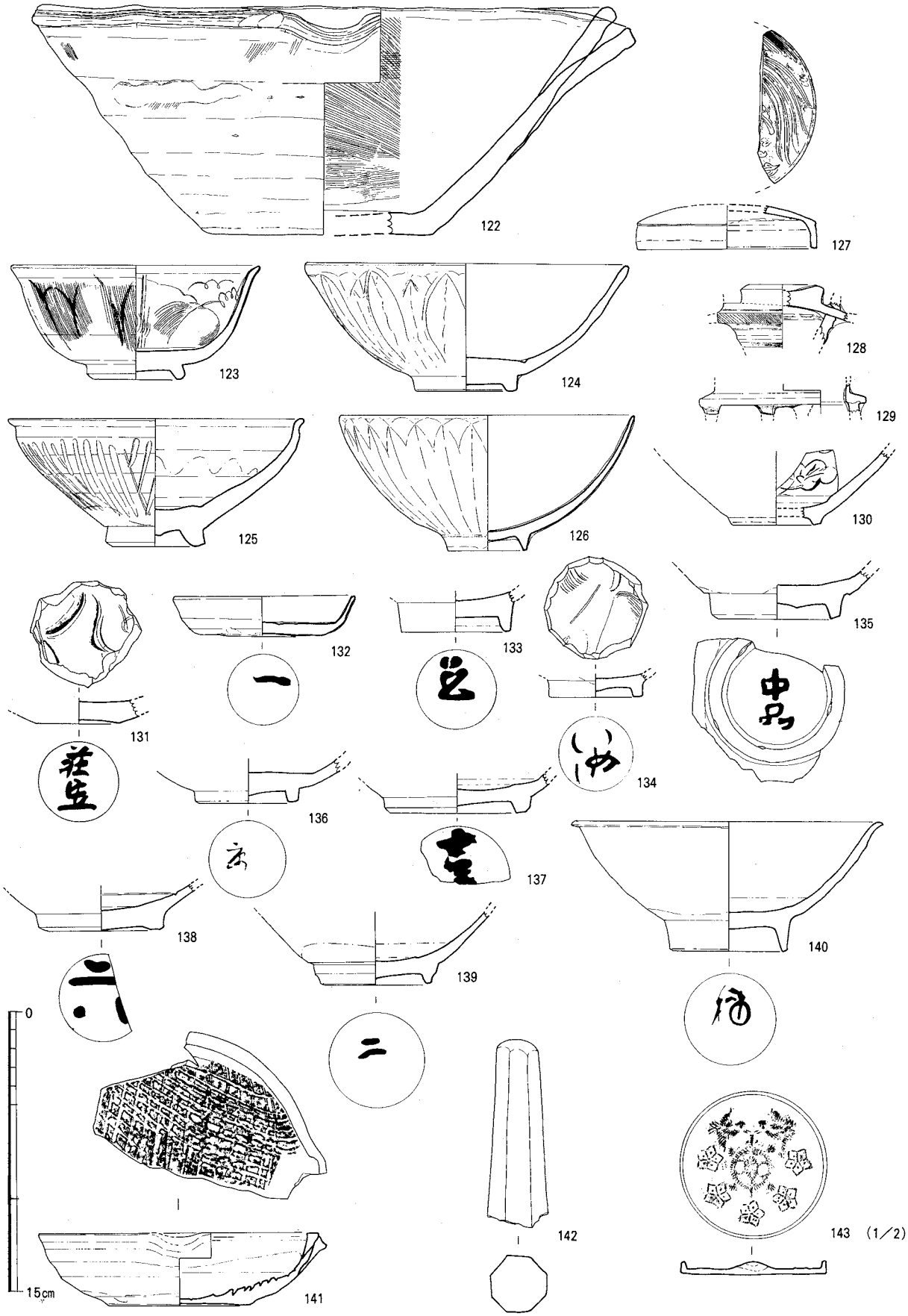


Fig. 27　8次調査　遺構外出土遺物

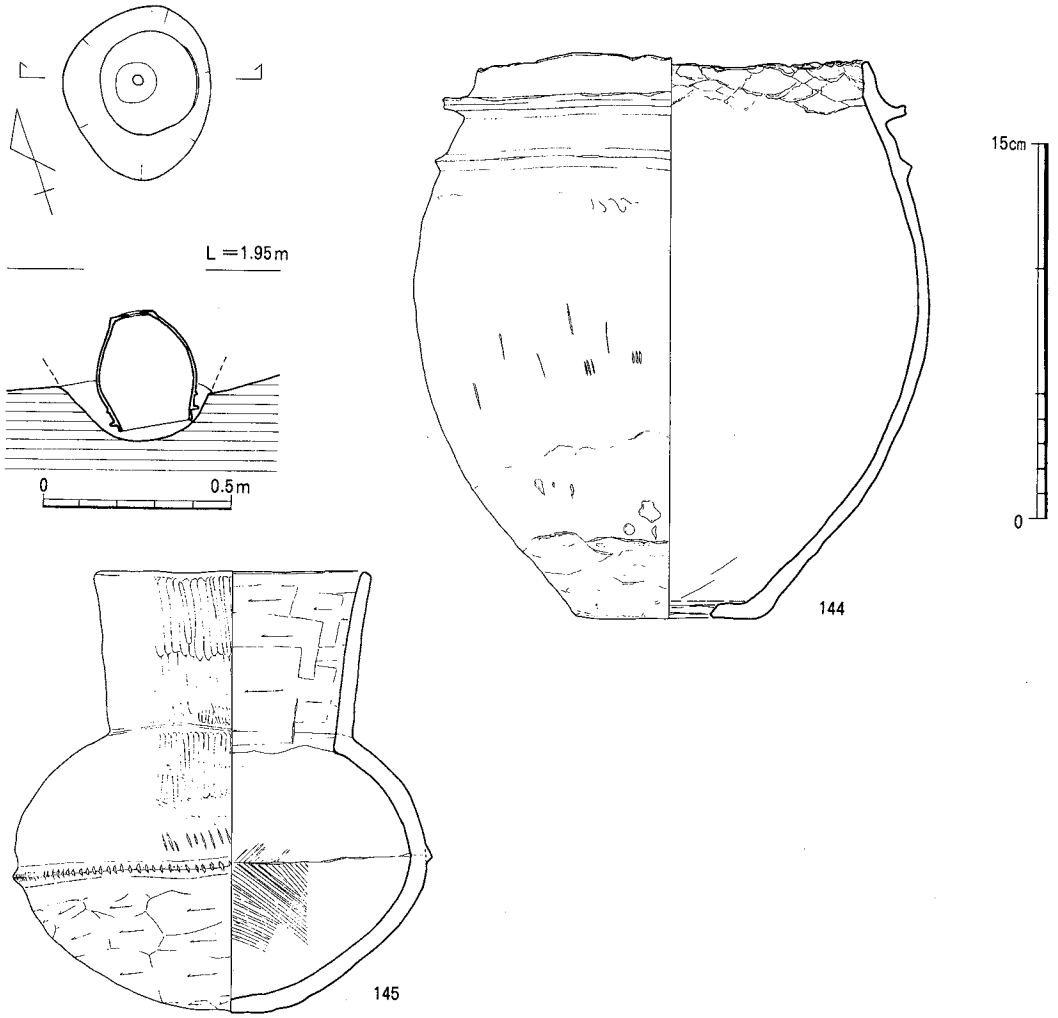


Fig. 28　8次調査　弥生時代の遺物

判読できない。138はⅣ類の白磁碗で、外底に「六」の墨書がある。139は見込みの釉を環状に掻き取る白磁碗で、外底に「二」の墨書がある。140はⅥ－1類に属する白磁碗で、外底に「綱」の略字かと思われる墨書がみられる。141は中国製の褐釉陶器の下ろし目皿で、片口をなす。内面にヘラによる格子目を描き、下ろし目とする。内面上半から、外面下半まで褐釉がかかる。142は砂岩製の八角形に面取りした棒状の乳棒で、上端は使用により磨耗している。143（PL.11-6）は径5.2cmの小型の銅鏡で、遺存状態は良好である。亀鈕で上面に2羽の雀が対になり、亀と雀の口吻が接する。下半に桜かと思われる5弁の花が5個配される。

5）弥生時代の遺構と遺物（Fig.28、Pl.12-5,6）

祇園町交差点を中心に、周辺では弥生時代中期の甕棺墓から古墳時代前期の集落の存在が知られている。本地点もその範囲に含まれており甕棺破片が中世遺物に混じって出土することも多い。

144は弥生中期の瓢形の土器であるが、二条の突帯より上を打ち欠いている。底部には外側からの打ち欠きによる穿孔がある。最下層の砂層に倒置して置かれていた。小児棺として使用されたものであろう。145は後期の壷形土器である。胴部に刻み目突帯をめぐらす。後期の土器は、散発的に検出されることが多く、この土器も同様で他にこの時期の遺物はみられない。

3．博多遺跡群第４次調査

１）調査にいたる経緯

本項で報告する地点は、福岡市博多区冷泉７番地１号に所在する。博多駅から築港へ伸びる「大博通り」と、博多部を東西に抜ける「国体道路」との祇園町交差点の西角にあたる。昭和54年当時、大博通り添いに地下鉄工事にともなう調査が終了し、道路を挟んだ東側で東長寺の納骨堂建設にともなう発掘調査（博多遺跡群第１次調査）がおこなわれ、博多遺跡群の重要性が広く知られるようになっていた。周辺の再開発に際して試掘調査も行なわれるようになっていたが、開発面積が狭く、本調査にはいたらなかった。

この地点で大規模な開発のあることを福岡市教育委員会が知ったのは、敷地全体のマンション建設計画と同時に地下鉄換気塔の工事が敷地内で計画されたためである。すでに開発申請に対する許可が出された後で、工事施工の時期が迫っていたが、日本弘進産業株式会社の理解をいただき、調査要請に快諾をいただいた。心より感謝の意を表したい。

諸般の事情により、報告書の刊行が遅れることになり、関係各位にお詫びを申し上げたい。

博多遺跡群第４次調査

遺跡調査番号	７９３０		遺　跡　略　号	ＨＫＴ－４
地　　番	博多区冷泉町７－１		分布地図番号	天神４９
開発面積	1982.9m²	調査対象面積	1982.9m²	調査面積 1100m²
調査期間	昭和54年12月５日～昭和55年３月31日			

調査組織は以下のとおりである。

調査委託
　日本弘進産業株式会社
調査主体
　冷泉町遺跡調査会
　代表　　井上剛紀（福岡市教育委員会文化課長）
　庶務担当　三宅安吉（　　同　　埋蔵文化財係長）
　　古籐国生（　　同　　埋蔵文化財係）
　調査担当　折尾　學（　　同　　埋蔵文化財係）
　　山崎龍雄（　　同　　埋蔵文化財係）
　　浜石哲也（　　同　　埋蔵文化財係）
　　池崎譲二（　　同　　埋蔵文化財係）

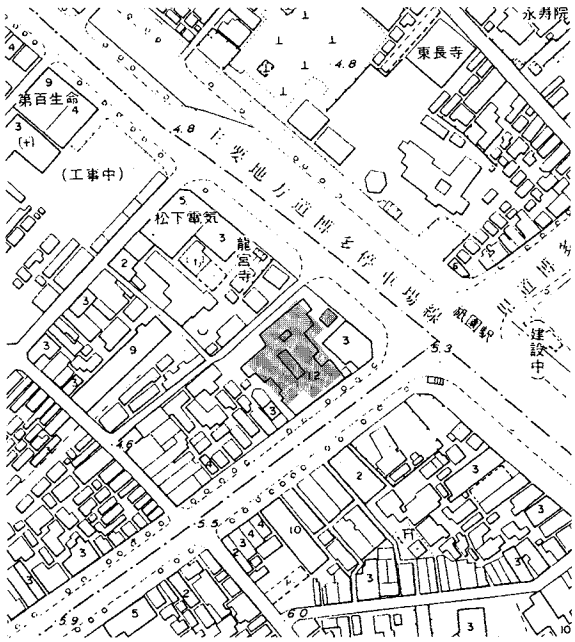


Fig. 29　４次調査　調査区位置図

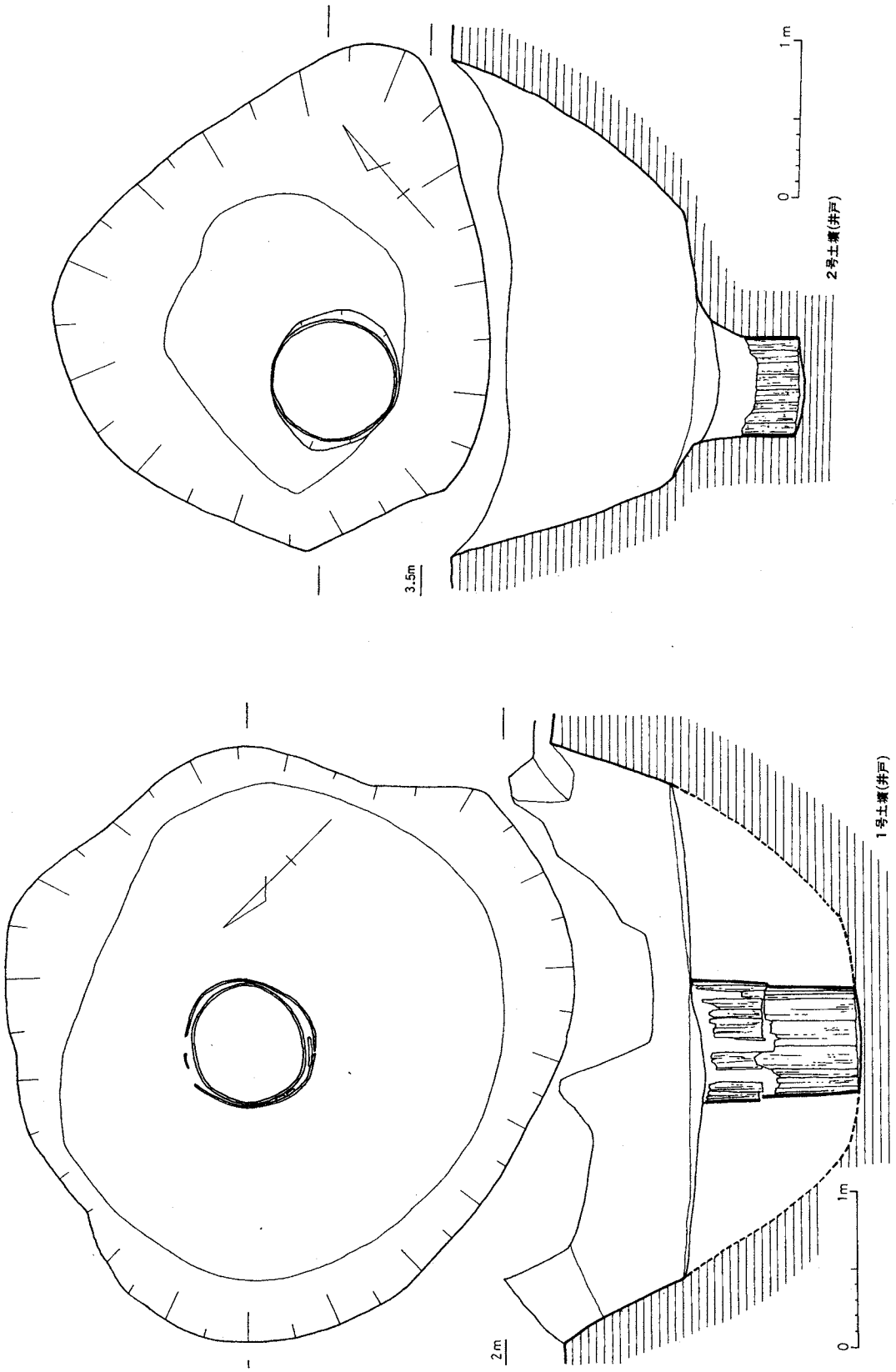


Fig. 30　4次調査　1、2号土壙（井戸）

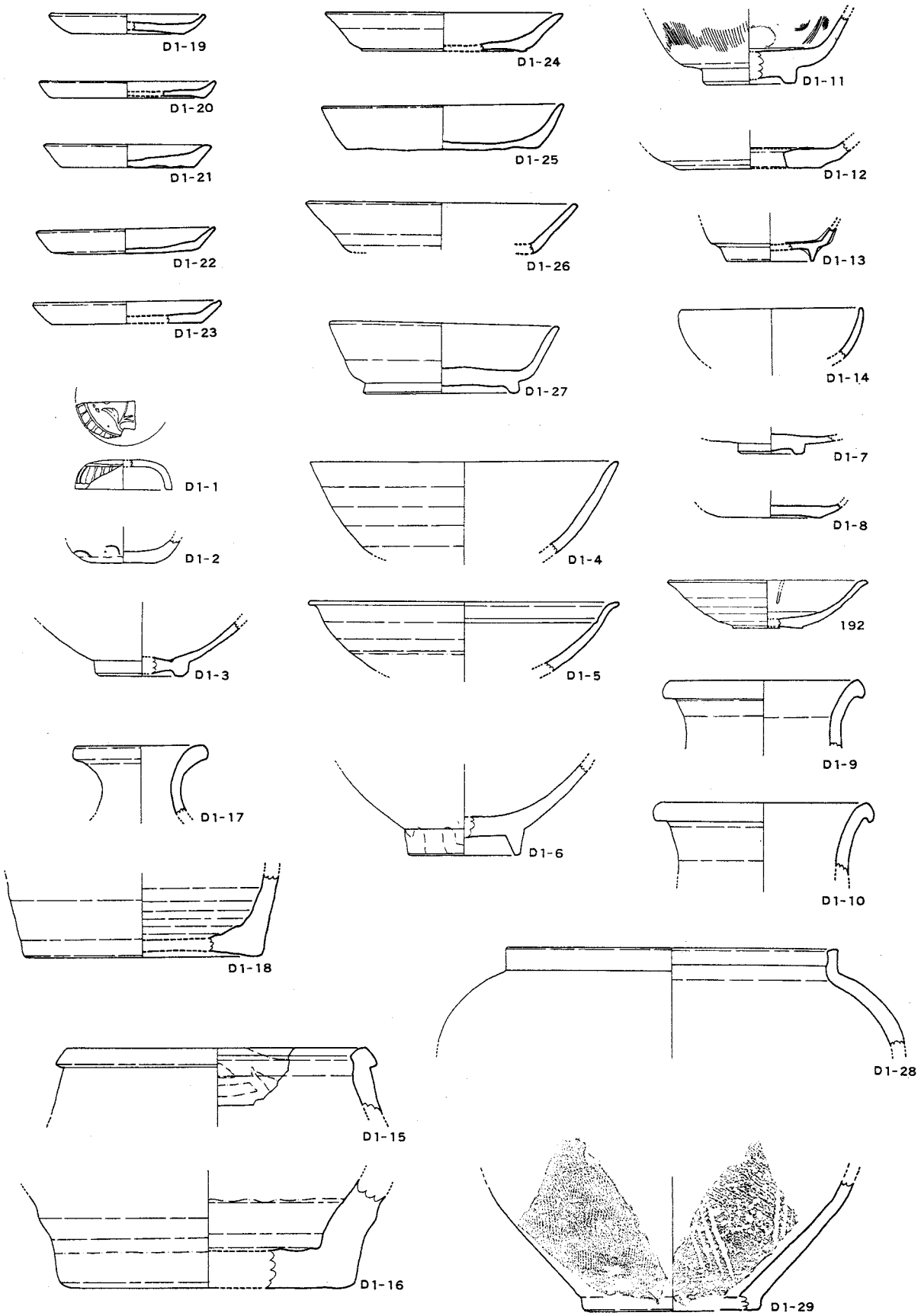


Fig. 31　4次調査　1号土壙（井戸）出土遺物

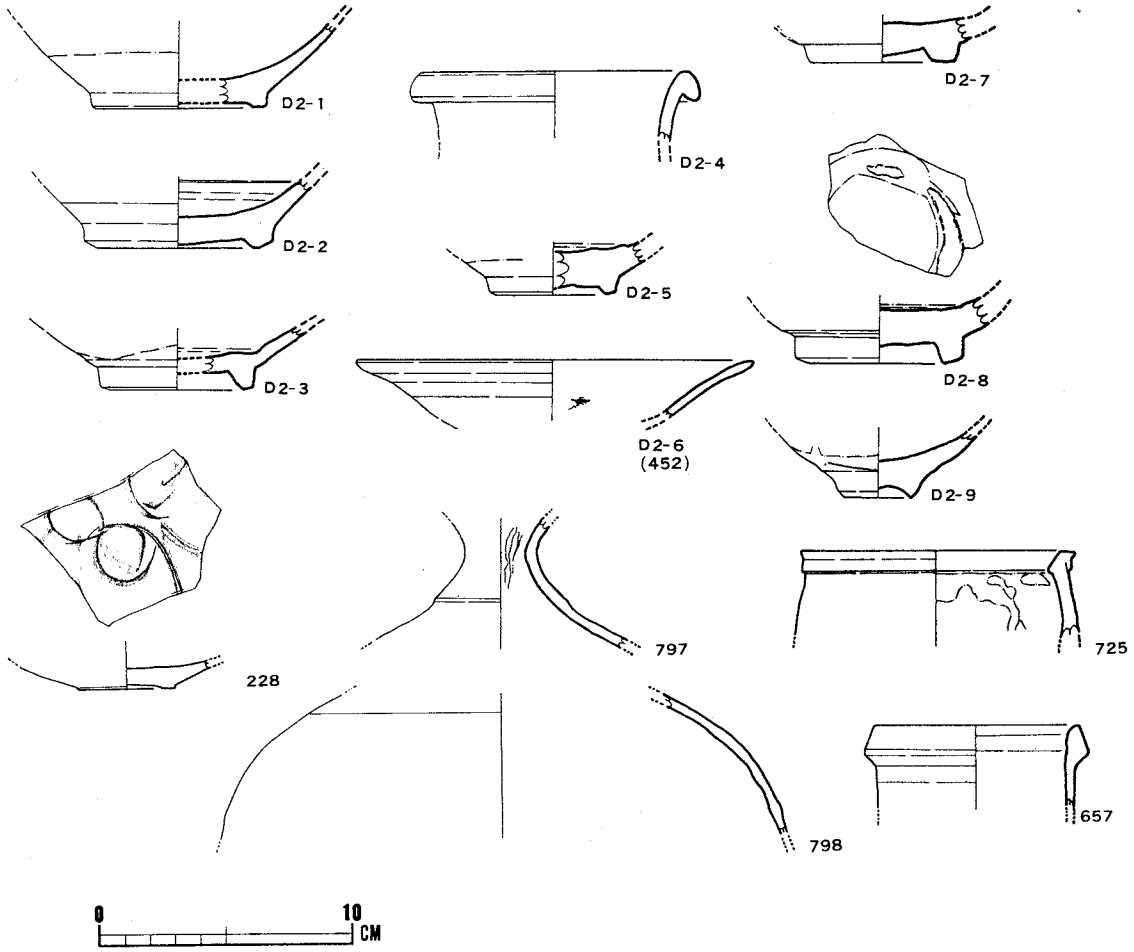


Fig. 32　4次調査　2号土壙（井戸）出土遺物

2）調査概要

調査対象面積は1,982.9m²であり、博多部での開発面積としては格段の広さであるが、実際の調査面積は、周辺木造住宅の安全を考慮したため約1,100m²となった。便宜上調査区は、大博通りにほぼ平行して、公共座標Ⅱ系のX軸より西に45°偏して10mメッシュのグリッドを組み、東西方向にA～F、南北方向を変則的ではあるがⅣ、Ⅰ～Ⅲと順に呼称した。なお、建物部と地下鉄換気塔部はそれぞれ別個に遺構番号を付している。

検出した遺構は、土壙が207基、溝3条、ピット多数である。土壙には井戸15基が含まれ、大きな掘り方の中央に、2段組の桶を井側とするものがほとんどで、井戸瓦を円形に組み、十数段重ねた近世井戸もある。土壙は大半が廃棄物処理土壙で、形状、規模は様々である。溝は真北に直交する東西方向のものが2条で、現在の町筋とほぼ平行しているものが1条である。ピットの大半は柱穴と思われるが、組織的には把握できない。

また、この第4次調査の調査結果の報告は、福岡市埋蔵文化財調査報告書第66集「博多Ⅰ」1981で概要を、福岡市埋蔵文化財調査報告書第86集「博多Ⅱ－図版編－」1982　で出土遺物の報告を行なっている。本報告については、「博多Ⅱ－本文編－」として、1983年刊行予定で作業を進めていたが、諸般の理由で未刊のままとなっていた。今回報告するにあたっては、文章の追加、訂正、レイアウトの変更を一部行なっているが、基本的な部分についてはあえて当初の通り掲載している。また、「博

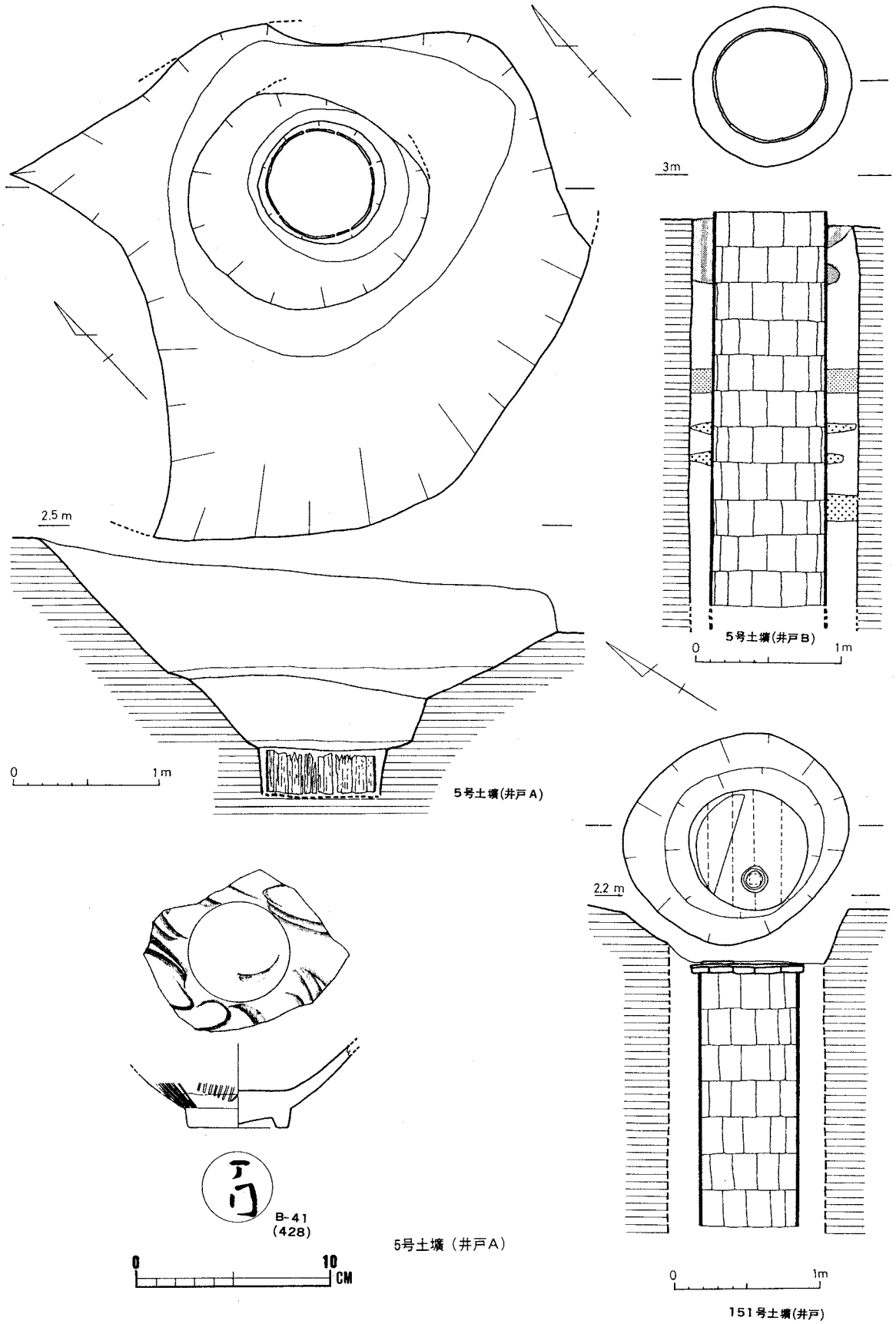


Fig. 33　4次調査　5号土壙（井戸A，B）、151号土壙（井戸）、5号土壙出土遺物

Fig. 34　4次調査　123、124、125号土壙

多Ⅱ－図版編－」は刊行後相当の年月が経過しており、本文との対照が容易なように、図版の大半を再録している。そのため遺物番号に前後があり、見にくくなっているがご寛恕願いたい。なお遺構出土遺物のうち、遺構番号を付してないものは、図版編の出土遺物の分類の項で掲載したものである。

3）遺構と遺物

1号土壙（Fig.30、31）

B、C－Ⅲ区で検出された井戸である。径3.6×3.8mのほぼ円形の大きな掘り方を持ち、検出面から深さ1.8mを計る。井側は径0.7mの木組み桶を下段に、径0.8mの桶を上段に重ねた形で検出されている。井戸底は、ほぼ標高0mの高さとなっている。出土遺物は各時期のものが混在しているが、井戸の作られた時期はおおむね鎌倉時代後半であろう。1～3は青白磁、4～10、192は白磁、11～14は龍泉窯系の青磁で、12は底面に有孔の双層碗の底部である。15～18は中国製陶器、19～26は土師器皿、27は須恵器高台付き杯、28、29は国産の瓦質陶器である。

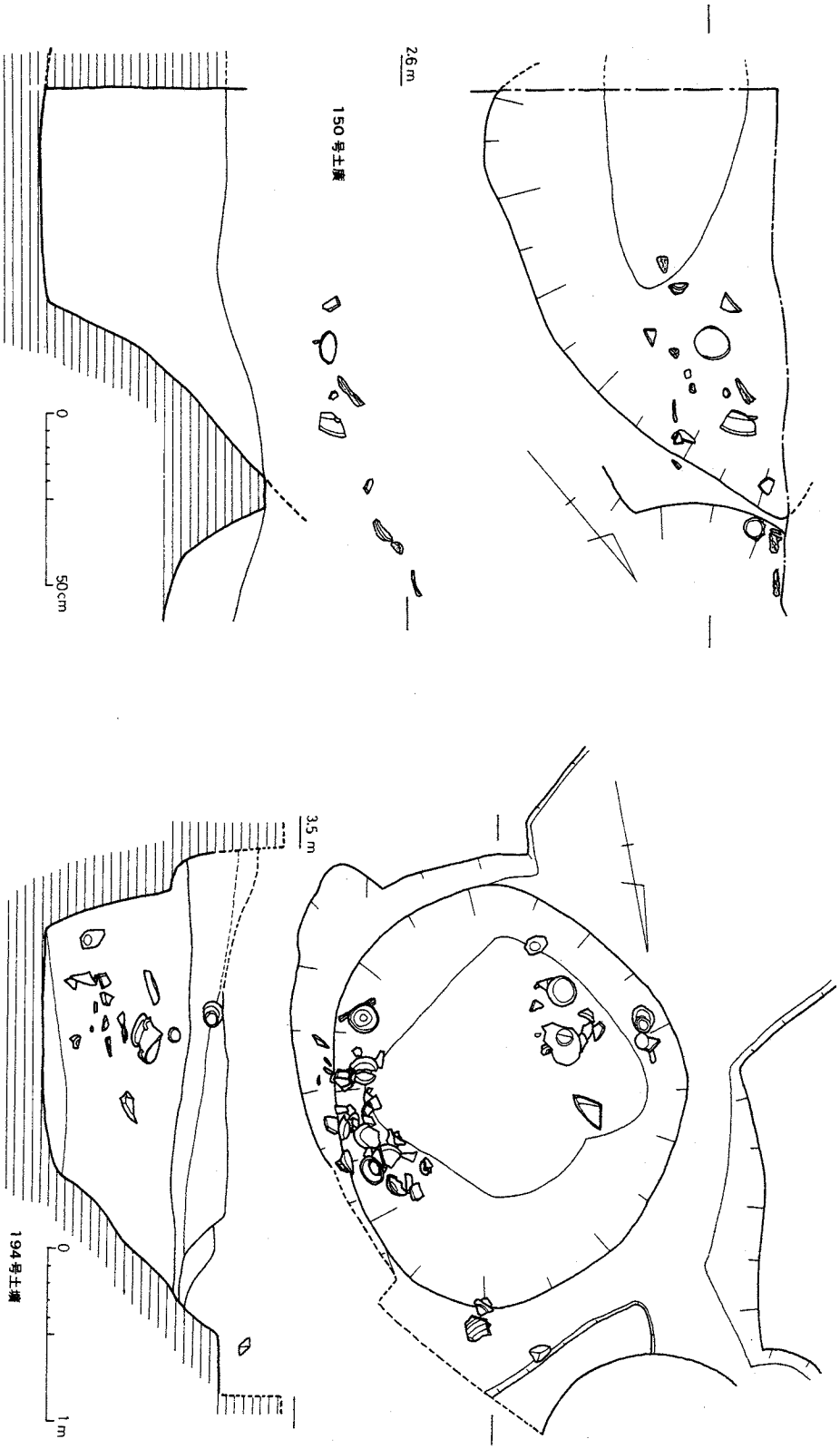


Fig. 35　4 次調査　150、194号土壙

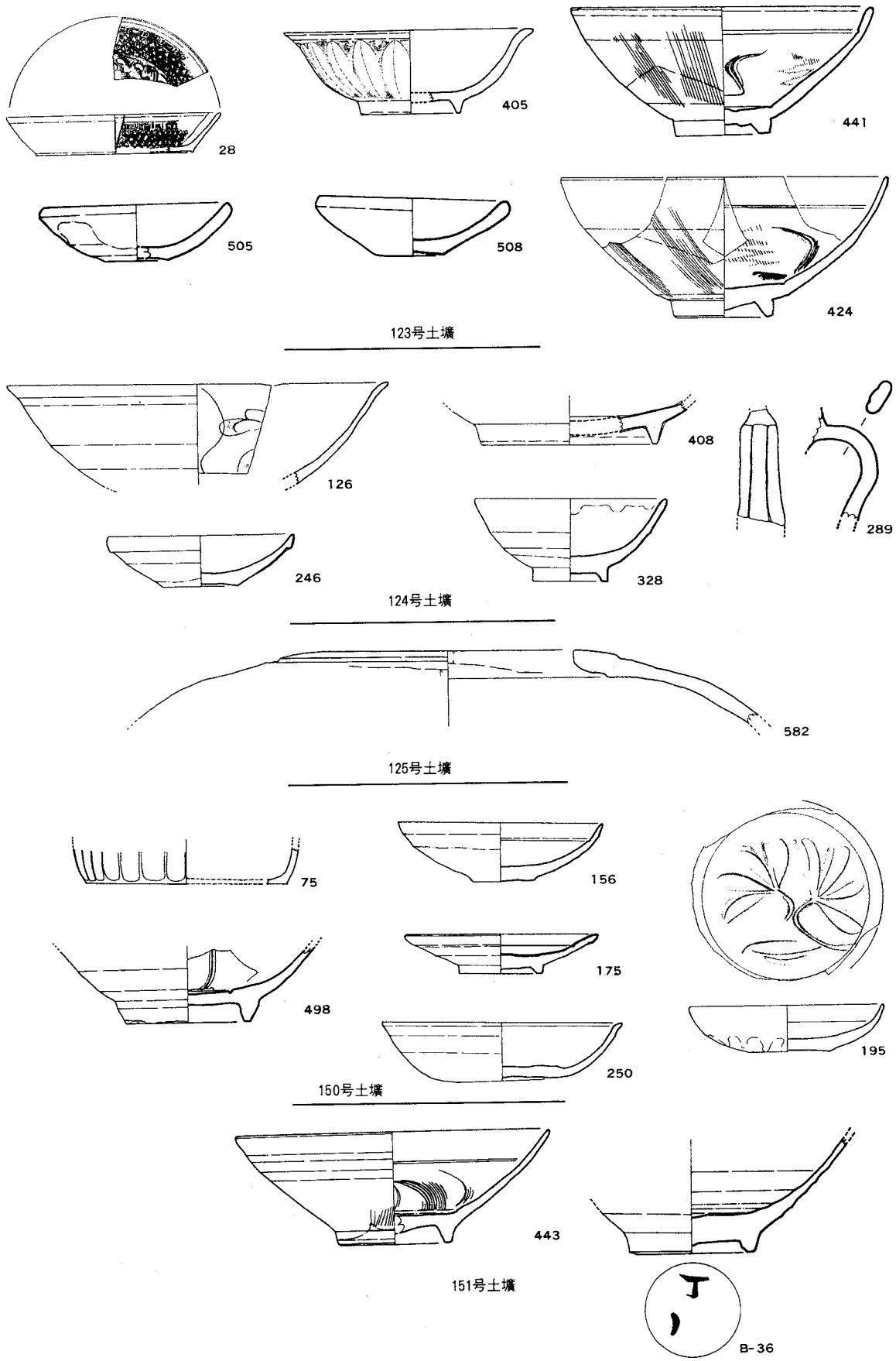


Fig. 36　4次調査　123、124、125、150、151号土壙出土遺物

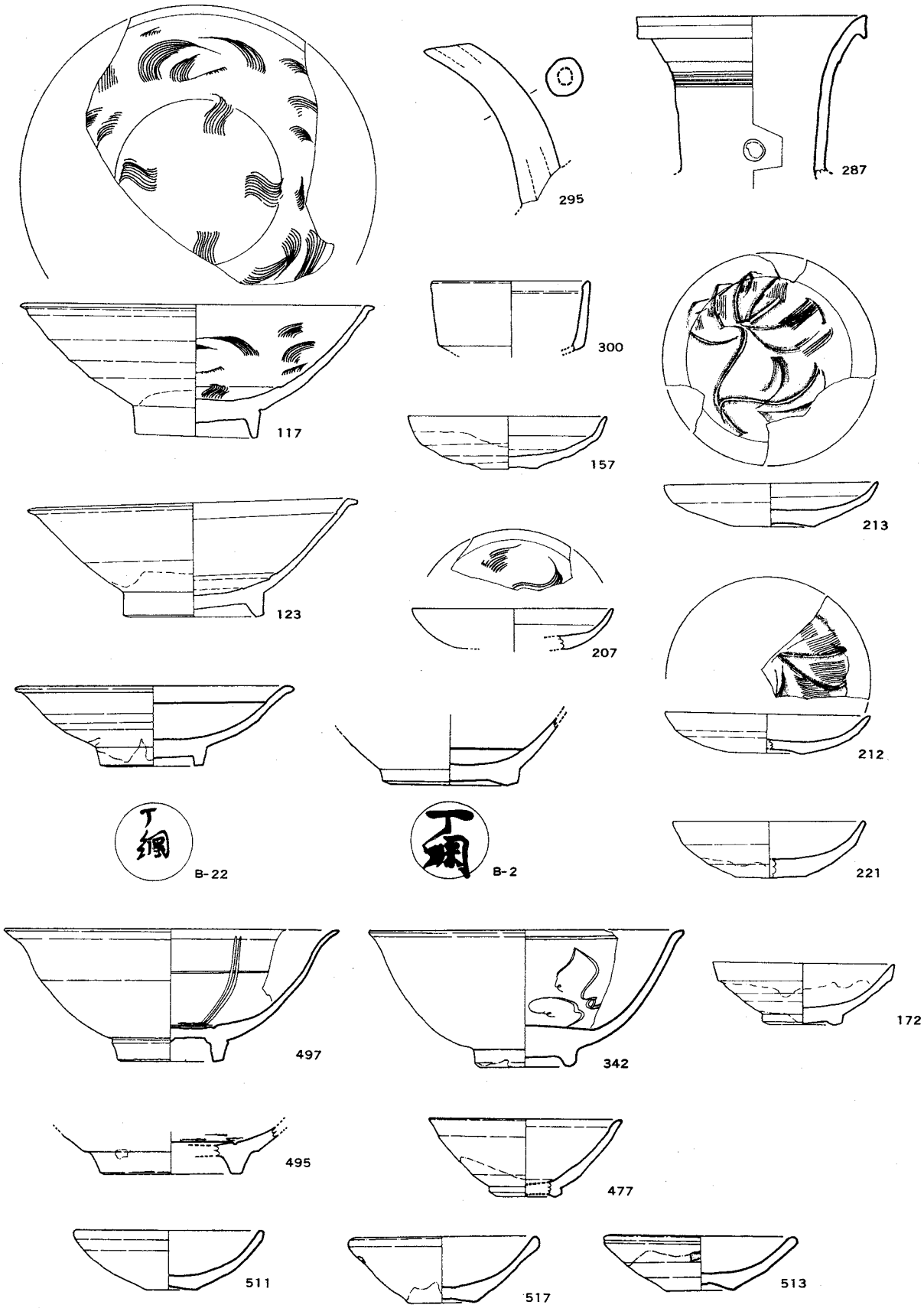


Fig. 37　4次調査　194号土壙出土遺物

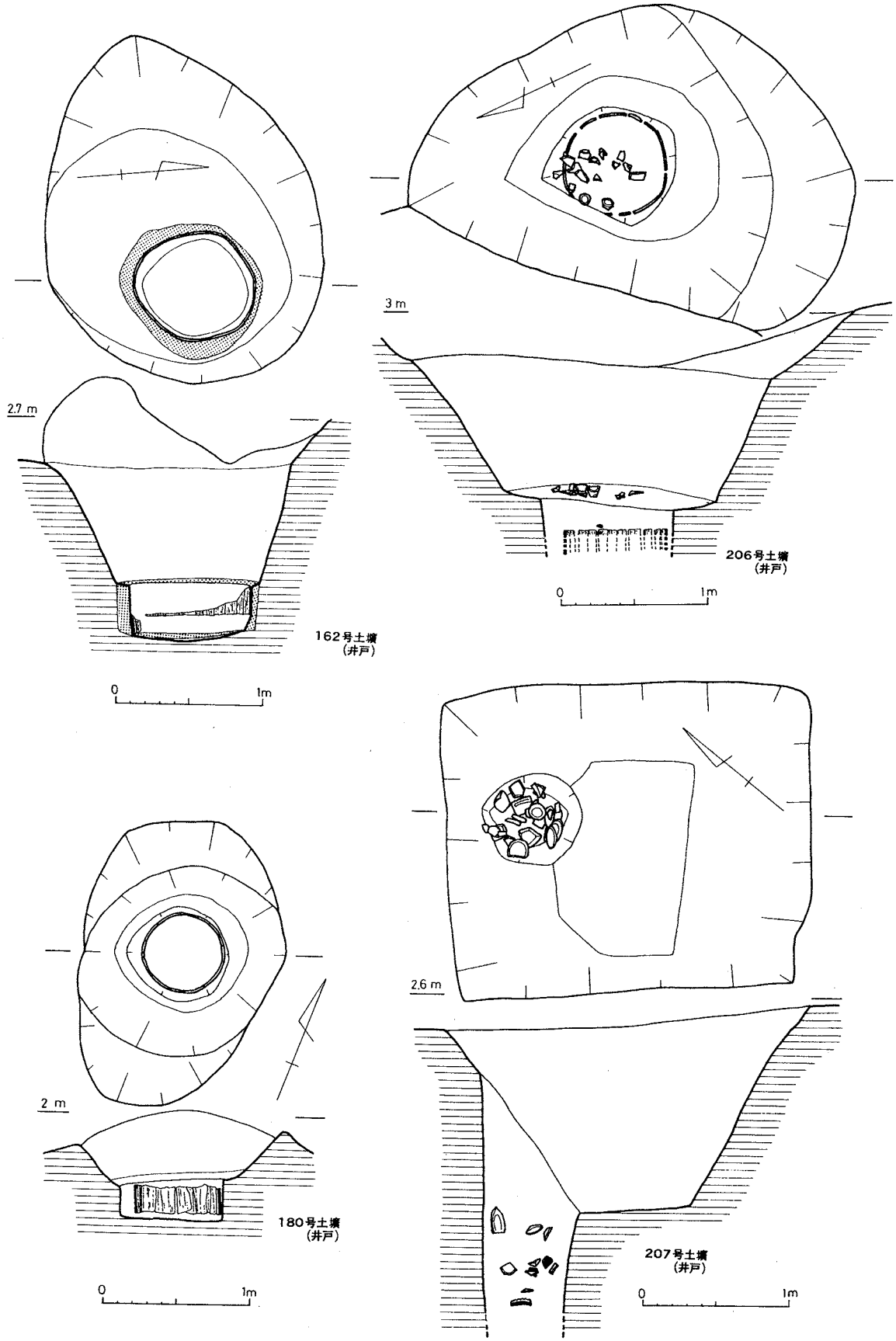


Fig. 38　4次調査　162、180、206、207号土壙（井戸）

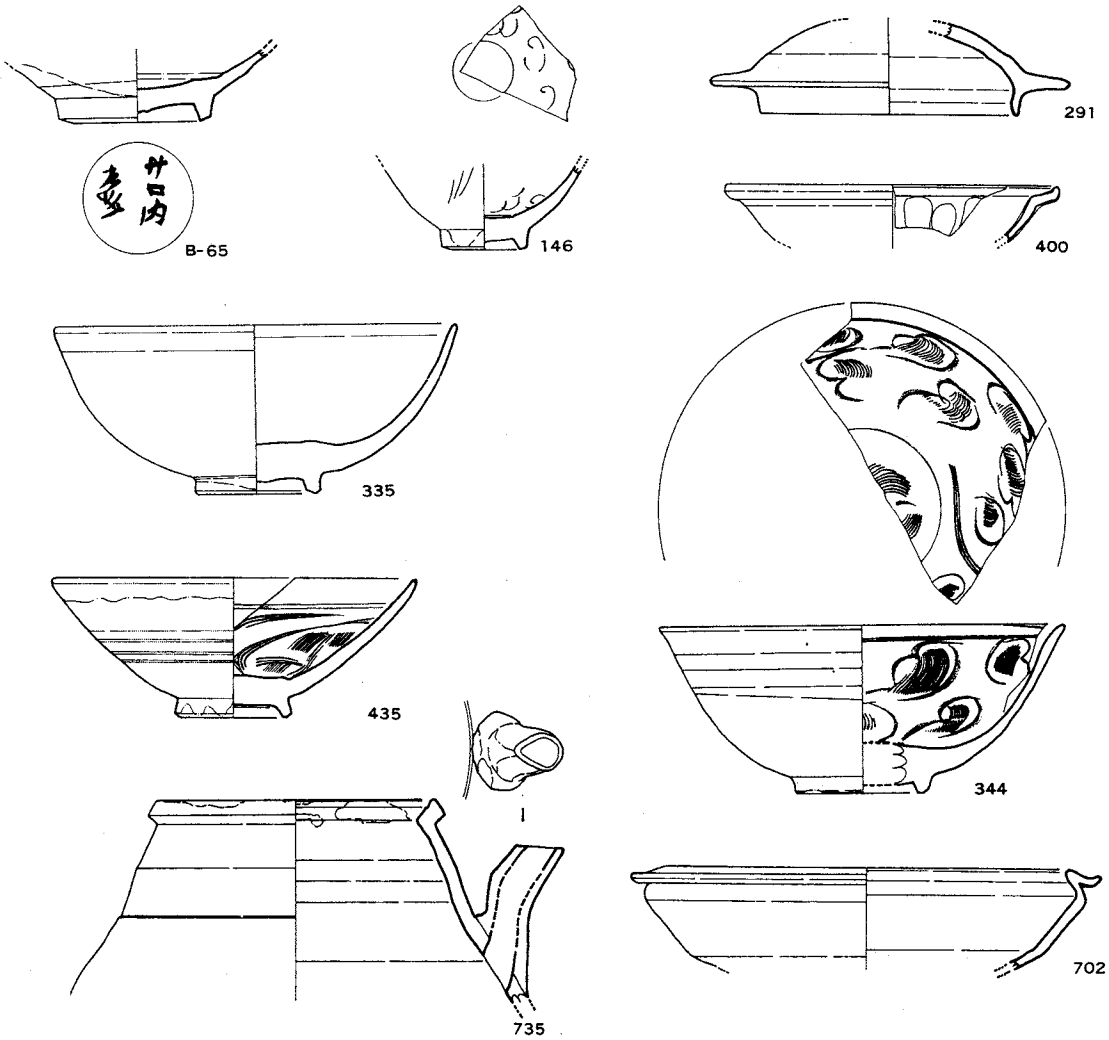


Fig. 39　4次調査　202号土壙出土遺物

2号土壙（Fig.30、32）

C－Ⅲ区で検出された井戸である。3.2×2.8mの不整円形の掘り方で、底面に径60cmの木組桶の井側が据えられている。井戸底は標高1.1mと高く、木質部は20cmが残っているにすぎない。出土遺物は各時期のものが混在しているが、井戸の作られた時期はおおむね16世紀代であろう。1～4は白磁、6は同安窯系青磁の浅い碗、7、8は粗質の青磁碗、5、9は李朝の陶器碗である。228はヘラ描き文のある白磁皿、797、798は朝鮮半島製と考えられる須恵器に似た徳利型の瓶である。725、657は中国製陶器である。

5号土壙（A）（Fig.33）

C－Ⅲ区で検出された井戸である。3.5×3.0＋αmの不整円形二段掘りの掘り方で、底面に径75cmの木組桶の井側が据えられている。井戸底は標高0.5mほどで、木質部は30cmが残っている。出土遺物 は各時期のものが混在しているが、井戸の作られた時期はおおむね14世紀代であろう。ここでは同安窯系青磁碗で外底に「丁綱」の墨書のあるもの（B－41＝428）がみられた。

5号土壙（B）（Fig.33）

C－Ⅲ区で検出された近世の瓦組井戸である。5号土壙（A）に接している。地山砂層にほぼ垂直

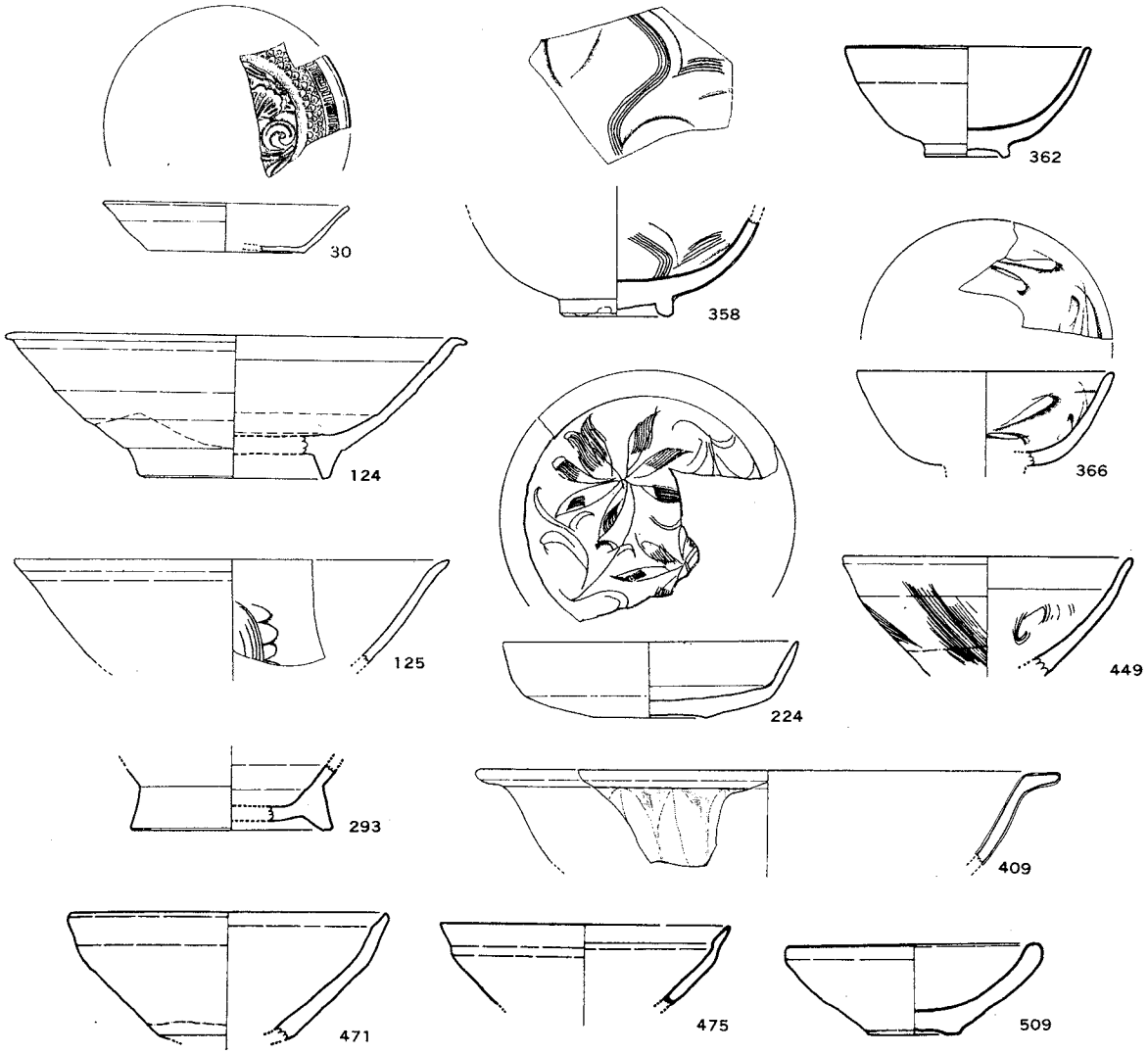


Fig. 40　4次調査　204号土壙出土遺物

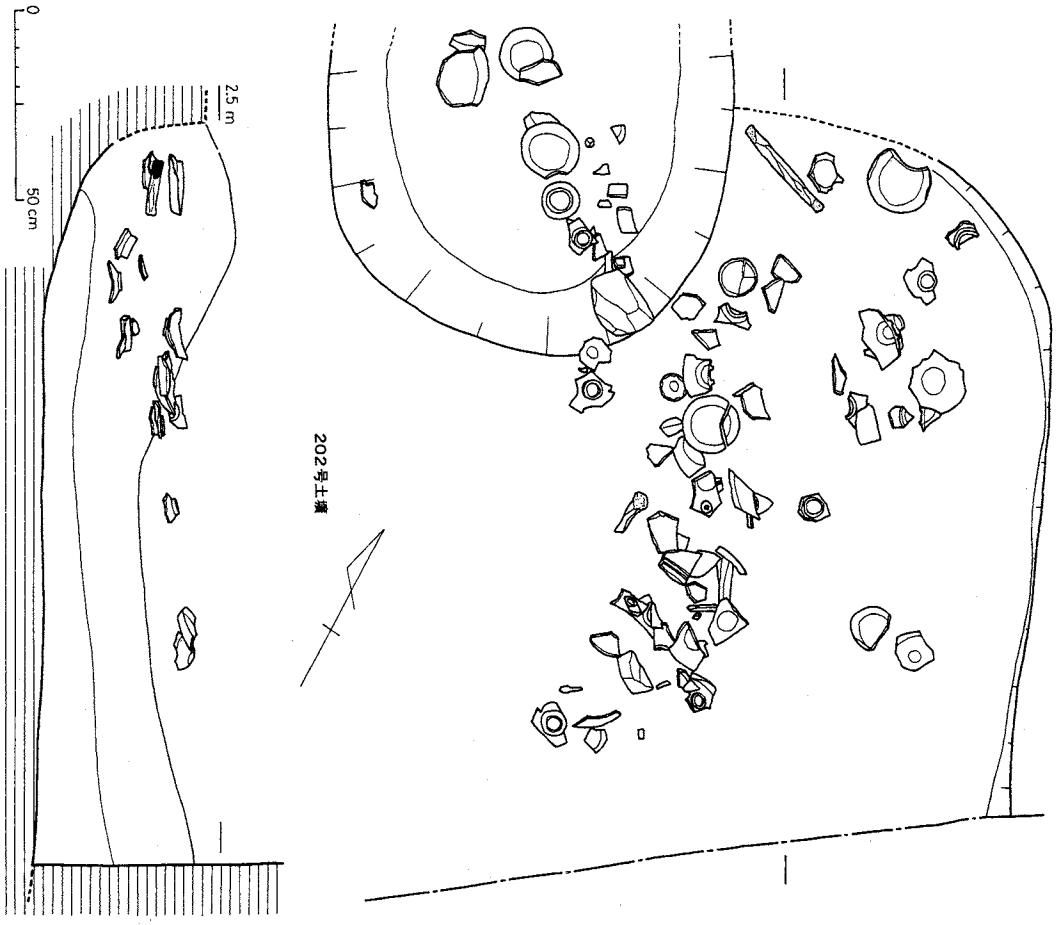
に径1.2mで深さ3mの縦穴を掘り、内部に井戸瓦14枚一組で径80cmの井側を形成する。11段が確認された。各段の継目には粘土が目張りされ、下段から順に瓦を円形に組み、周囲を埋め立てながら、順次上部を組み立てていく工法がうかがえる。井戸底の標高はほぼ0mで、砂利が敷かれている。

123号土壙（Fig.34、36）

B－Ⅱ区検出の廃棄物処理土壙で、124号土壙と切り合っているが、前後関係は明確でない。多量の陶磁器が廃棄されているが、各時期のものが混在する。出土遺物のうち図示したものは、28は内面に細かな印文をもつ型造りの青白磁皿、405は龍泉窯系青磁で外面に鎬蓮弁をもつ。441、424は同安窯系青磁碗、505、508は陶器皿である。13世紀後半から14世紀前半の遺構であろう。

124号土壙（Fig.34、36）

B－Ⅱ区検出の廃棄物処理土壙で、123号土壙、125号土壙と切り合っているが、前後関係は明確でない。多量の陶磁器が廃棄されているが、各時期のものが混在する。出土遺物のうち図示したものは、126は白磁碗で口縁に刻みをいれ輪花をなし、内面にヘラ描きの花文をもつ。408は龍泉窯青磁の盤である。328は龍泉窯青磁の小碗である。268は白磁皿で、289は白磁水注の把手である。13世紀後半から14世紀前半の遺構であろう。



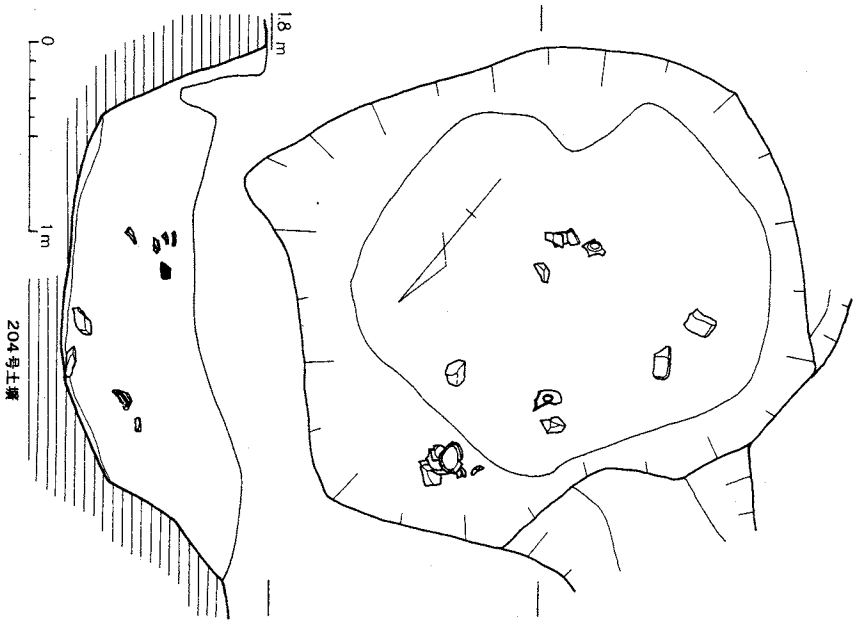


Fig. 41　4次調査　202、204号土壙

125号土壙（Fig.34、36）

Ｂ－Ⅱ区検出の廃棄物処理土壙で、125号土壙と切り合っているが、前後関係は明確でない。多量の陶磁器が廃棄されているが、各時期のものが混在する。出土遺物のうち図示したもの（582）は、中国製の褐釉陶器四耳壷で無頚、上半は半球形をなす。13世紀後半から14世紀前半の遺構であろう。

150号土壙（Fig.35、36）

Ｂ－Ⅳ区で検出された廃棄物処理土壙であるが、調査区外に延び全容は不明である。遺物は遺構上面に浮いた状態で出土しており、各時期のものが混在する。出土遺物のうち図示したものは、75が青白磁壷、156、175、195、250が白磁皿、498が陶質の碗である。

151号土壙（Fig.33、36）

Ｂ－Ⅳ区で検出された瓦組の井戸である。地山砂層にほぼ垂直に径1.05mで深さ2.2mの縦穴を掘り、内部に井戸瓦10枚一組で径70cmの井側を形成する。７段が確認された。井戸底の標高はほぼ０ｍである。近年までポンプ井戸として使用されていたもので、上面はコンクリート板で覆われ、陶管が据えられていた。掘り方から、内底に環状の釉の掻き取りのある同安窯系青磁碗（443）と、外底に「丁綱ヵ」の墨書のある白磁碗（Ｂ－36）が出土している。

162号土壙（Fig.38）

Ｄ－Ⅳ区検出の井戸である。2.5×1.9mの不整円形の掘り方下面に、径0.8mの木桶組の井側を据えるが、井戸底の標高は1.2mで木質はわずかに残るのみである。桶の外側に粒の大きな粗砂が充填されている。遺物は小片が小量で図示しえない。13世紀代の遺構か。

180号土壙（Fig.38）

Ｃ－Ⅳ区検出の井戸である。浅い掘り方下面に、径0.55mの木桶組の井側を据えるが、井戸底の標高は1.3mで木質はわずかに20cmほどが残るのみである。遺物は小片が小量で図示しえない。13世紀代の遺構か。

194号土壙（Fig.35、37）

Ｄ－Ⅰ区検出の廃棄物処理土壙である。2.5×2.05mの楕円形で、深さ0.9mの掘り方である。出土遺物は各時期混在するが量は多い。117、123は白磁碗である。Ｂ－22、Ｂ－２も白磁碗であるがいずれも外底に「丁綱」の墨書が見られる。195、287は白磁水注で、157、172、207、212、213、221は白磁皿、300は白磁香炉と思われる。342は龍泉窯系青磁碗、477は天目碗、495、497は陶質の碗で、511、513、517は陶器皿である。12世紀後半代の遺構であろう。

202号土壙（Fig.39、41）

Ｄ－Ⅰ、Ⅱ区検出の廃棄物処理土壙である。調査区外に広がり全容は不明。遺物は各時期混在するが量は多い。13世紀後半代の遺構であろうか。Ｂ－65が白磁碗で、外底に「（花押カ）廿口内」の墨書が見られる。146は白磁小碗、291が白磁壷の蓋である。335、344は龍泉窯系青磁碗、400も龍泉窯系青磁小盤である。435は同安窯系の青磁碗である。702、735は中国製褐釉陶器で、それぞれ鉢、水注である。

204号土壙（Fig.40、41）

Ｄ－Ⅰ区検出の廃棄物処理土壙である。平面形は径2.8m前後の不整円形で、深さ1mほどの深皿状の掘り方である。遺物は各時期のものが混在するが量はやや多い。13世紀後半代～14世紀前半代の遺構であろうか。30は口禿の青白磁皿、124は内底の釉を環状に掻き取る白磁碗、125も白磁碗である。224は内底に櫛とヘラによる花文を描く白磁皿、293は白磁の水注または四耳壷の底部である。358は龍泉窯系青磁碗、362、366も龍泉窯系青磁小碗で、409は龍泉窯系青磁盤である。449は同安窯系の青

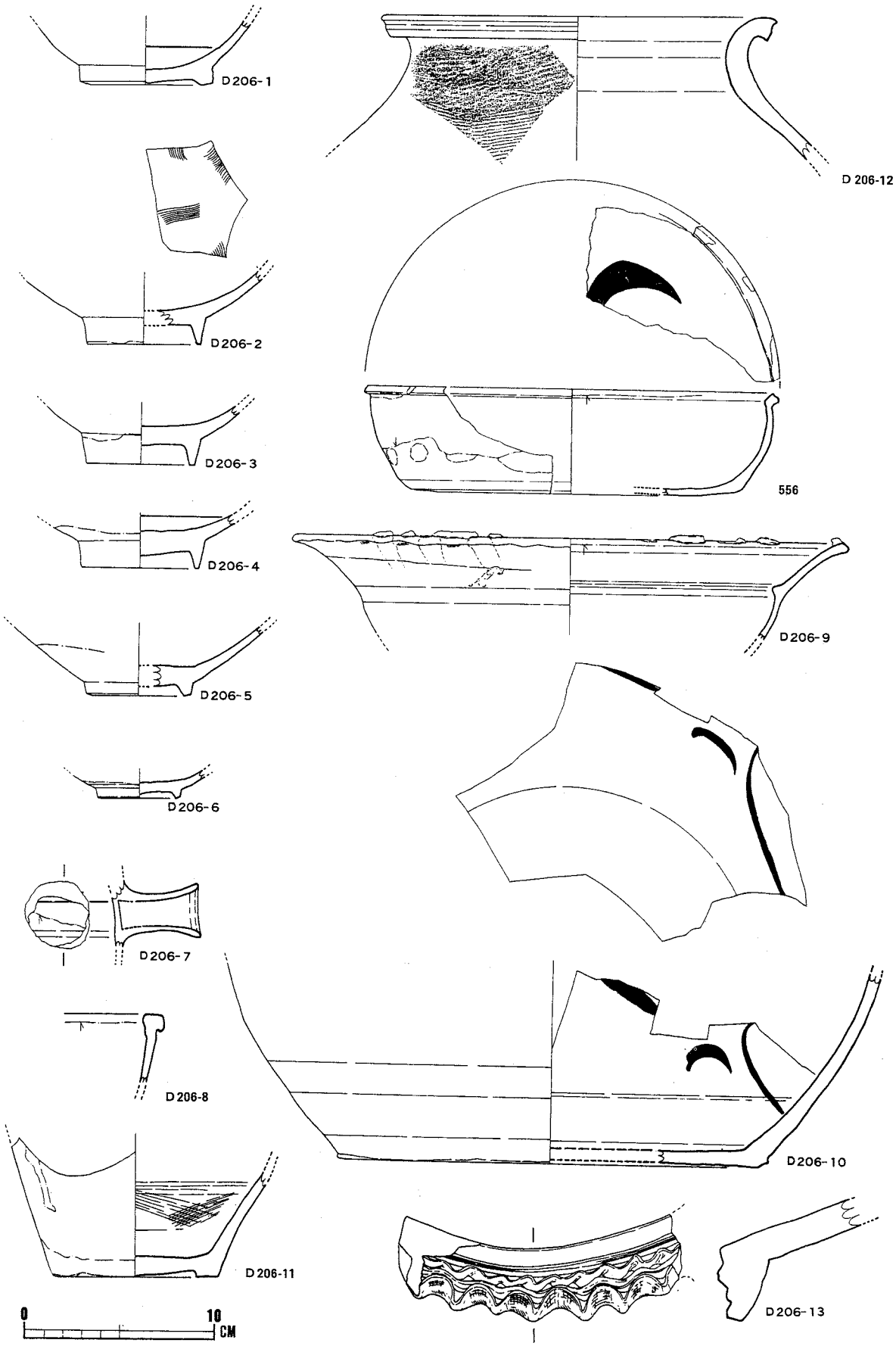


Fig. 42　4次調査　206号土壙出土遺物

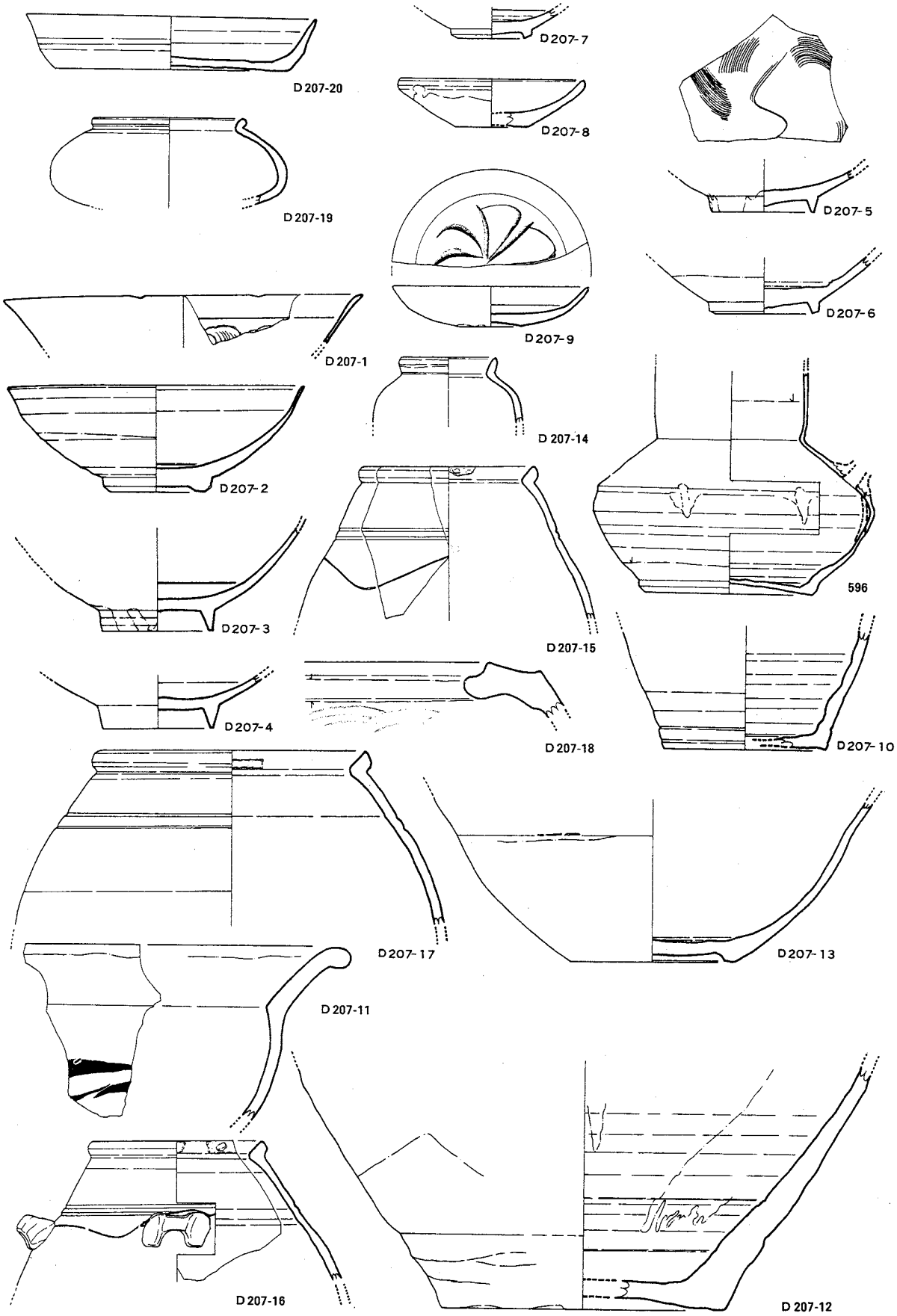


Fig. 43　4次調査　207号土壙出土遺物

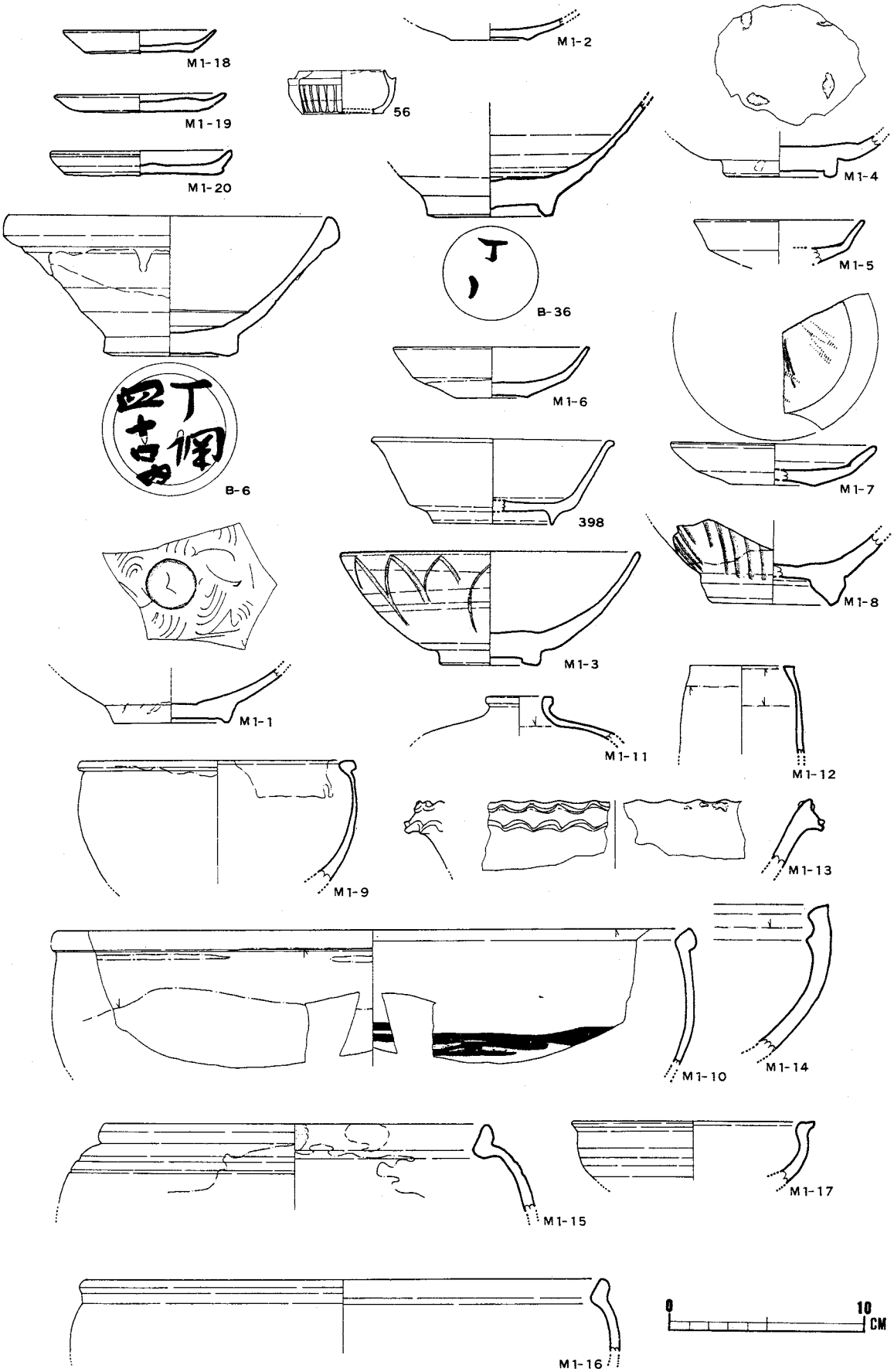


Fig. 44　4次調査　1号溝出土遺物

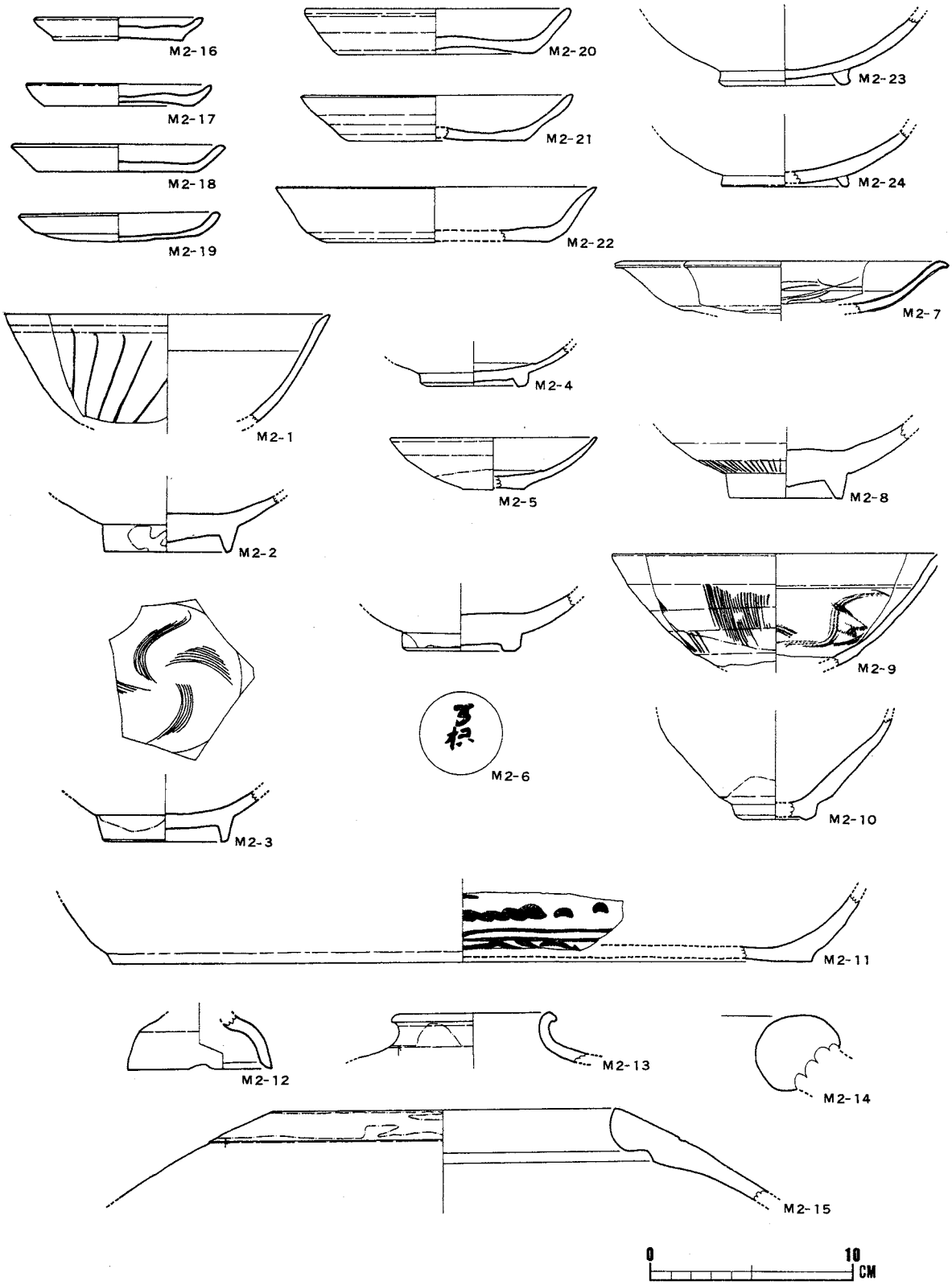


Fig. 45　4次調査　2号溝出土遺物

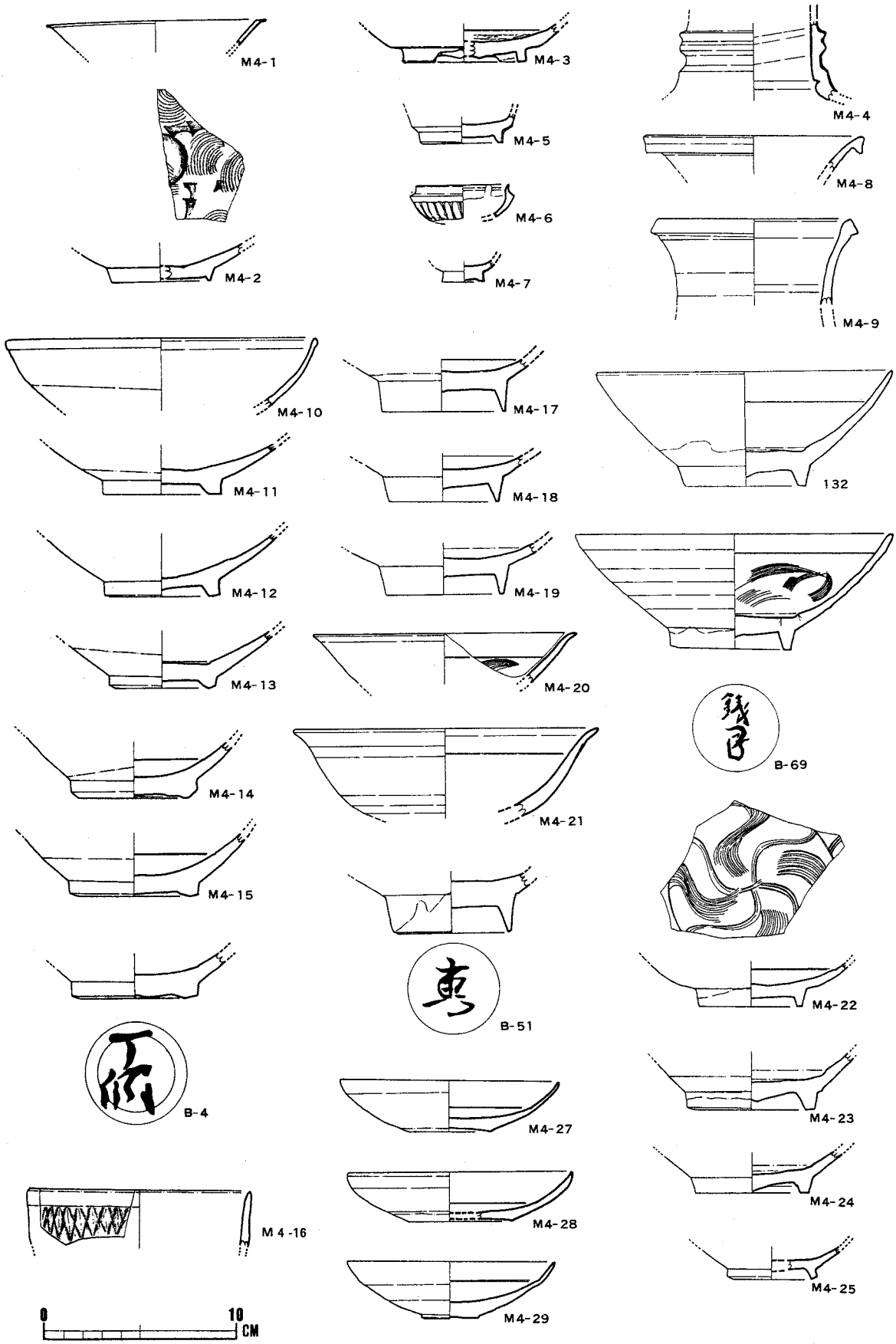


Fig. 46　4次調査　4号溝出土遺物（1）

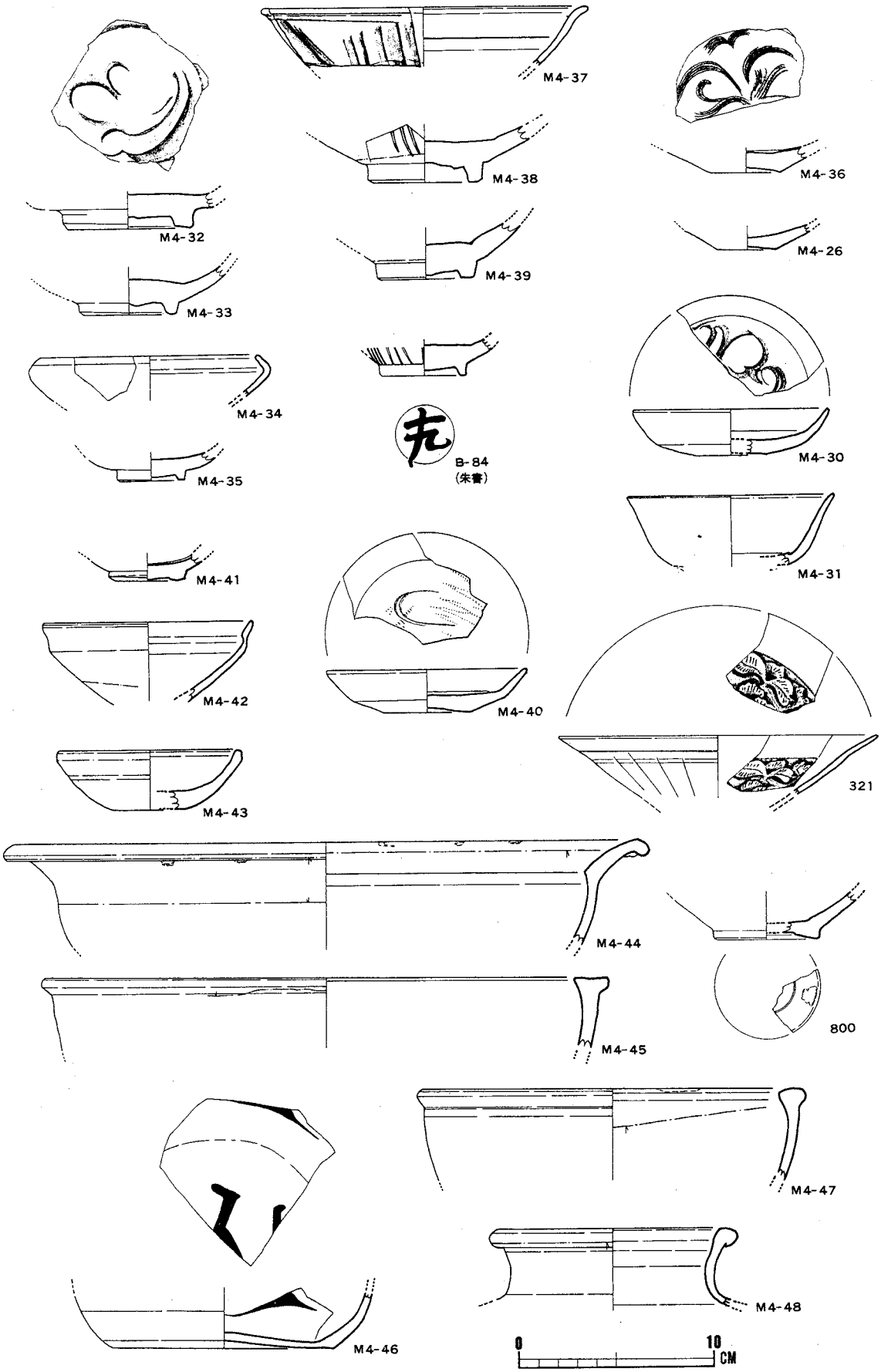


Fig. 47　4次調査　4号溝出土遺物（2）

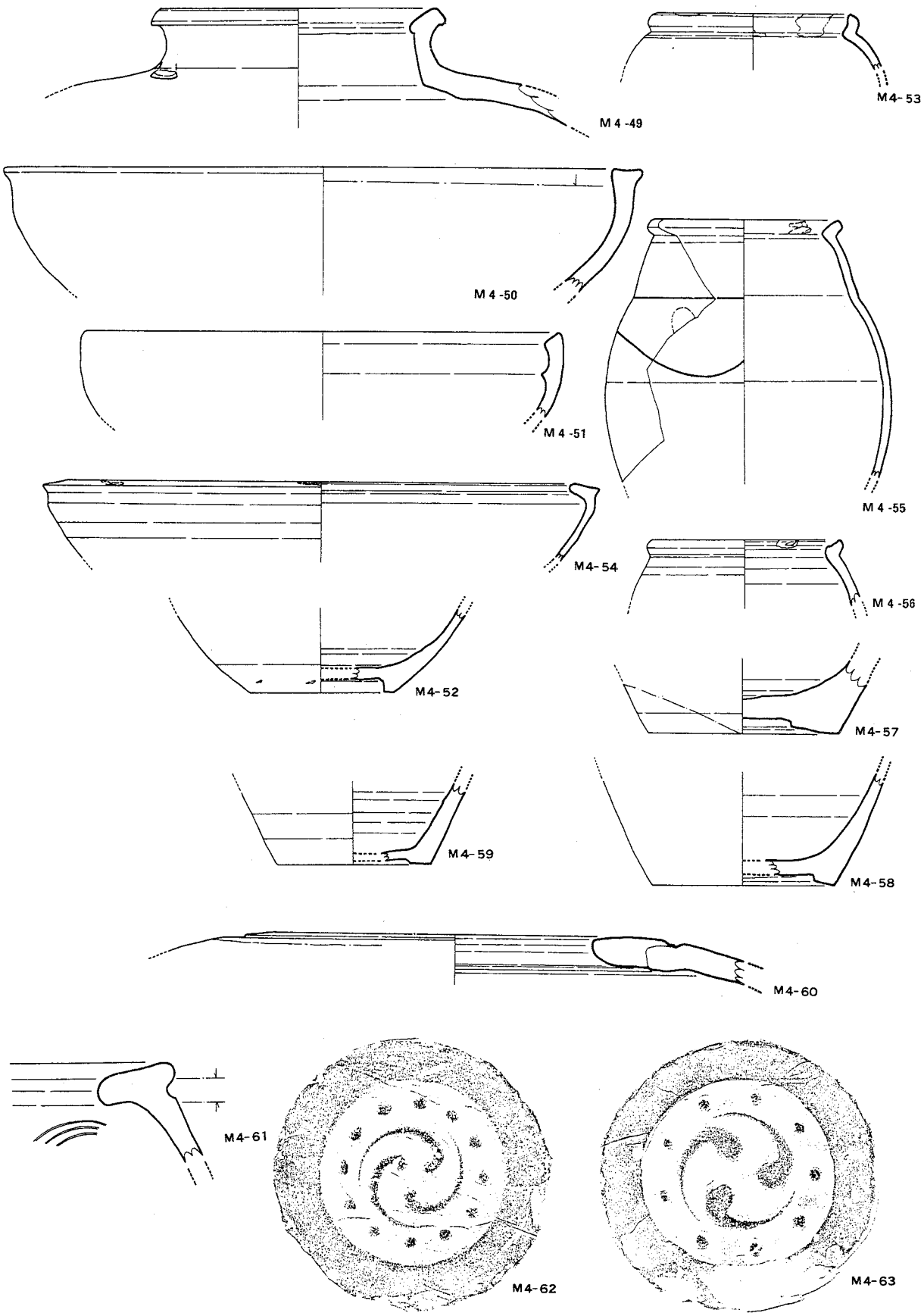


Fig. 48　4次調査　4号溝出土遺物（3）

磁碗、471、475は天目碗、509は陶器皿である。

206号土壙（Fig.38、42）

D．E－I．Ⅳ区検出の井戸である。長径3m程の不整円形の掘り方をもち、内底に径70cmの木桶組の井側を据える。井戸底の標高は1.2mで、木質の遺存状態はよくない。井側上部から遺物がまとまって出土しているが各時期のものが混在する。遺構自体は16世紀代である。1～5は白磁碗で、6は李朝の粉青沙器、7は内部のみに黒褐釉を施す「行平」型の器形の陶器で把手の破片である。8～10、556は黄釉鉄絵盤で器形のバリエィションが多い。11は褐釉陶器壷、12は国産の陶器、13は下縁部に連続する押圧文を施し波状にする軒平瓦である。

207号土壙（Fig.38、43）

D－4区検出遺構である。建物基礎にはさまれた部分であり、全容は明確でない。掘り方の北側に偏して、径60cmほどの円形の縦穴があり、ここから各時期の遺物が混在して出土している。井戸の可能性が強いが井側は検出されていない。1～7は白磁碗、8、9は白磁皿、10～18、596は中国製陶器で様々なバリエィションがある。596は泉州磁灶窯とされる黒褐釉の陶器で、「軍持」の器形である。19、20は須恵質の陶器である。

1号溝（Fig.44）

A－Ⅱ区からB－Ⅲ区にかけて検出された溝である。周辺遺構に切られて溝幅は明確でないが、15mほどの長さで残っている。方位は真北に対しほぼ直角で、地下鉄関係調査で検出された東西南北を向く溝と一連のものであろう。出土遺物は各時期の遺物が混在しているが、遺構自体は14世紀初めまでは継続していたものと考えられる。1、2、56は青白磁で、それぞれ碗、皿、合子身である。B－6は白磁碗で外底に「丁綱 四十口内」の墨書がある。B－36も内底の釉を環状に掻き取る白磁碗で、外底に「丁綱ヵ」の墨書がみられる。3、4、398は龍泉窯系青磁碗、杯である。5は龍 泉窯系青磁皿、6は白磁皿、7は同安窯系青磁皿、8は同安窯系青磁碗である。9～17は中国製陶器で様々なバリエィションがある。18～20は糸切り底の土師器皿である。

2号溝（Fig.45）

A－Ⅱ区からB－Ⅲ区にかけて検出された溝と思われる遺構である。調査区南隅にあたり、1号溝とほぼ平行するものと思われるが、溝幅等は明確でない。出土遺物は各時期の遺物が混在しているが、遺構自体は1号溝同様14世紀初めまでは継続していたものと考えられる。1～4は白磁碗、5は白磁皿である。6は龍泉窯系青磁碗で、外底に「万枳」の墨書がある。7は龍泉窯系青磁皿、8、9は同安窯系青磁碗、10は天目碗である。11～15は中国製陶器で、12は褐釉陶器の蓋、14は胎の粗い大甕で、口縁が内湾し太く肥厚するものである。16～22は土師器皿、23、24は瓦器碗である。

4号溝（Fig.46～48）

B．C－Ⅳ区にかけて検出された溝遺構である。調査区北側に面した、戦国時代末の「太閤町割り」の遺制を残していると考えられる道路とほぼ平行する。現代建物基礎等で東側では確認できないが検出できた長さは11.5m、幅は2.5mほどである。出土遺物は多量で、各時期の遺物が混在しているが、遺構自体は16世紀末に作られ、江戸時代のある時期までは継続していたものと考えられる。1～9は青白磁で、4、8はそれぞれ壷の頚部、口縁部である。10～25、132は白磁碗である。B－4、51、69も白磁碗であるが、それぞれ外底に「丁綱」「恵ヵ」「錢□」の墨書が見られる。26～31は白磁皿、32～35は龍泉窯系青磁碗、B－84も外面に櫛描き文のある龍泉窯系青磁碗であるが、外底に赤色顔料で「十九」の文字を書く特殊な例である。36は龍泉窯系青磁皿である。37～39は同安窯系青磁碗、40は同安窯系青磁皿である。321は出土例の少ない耀州窯系青磁碗で、体は直線的に外に開き、内面に

Fig. 49　4次調査　調査区遺構平面図

印花文、外面に放射状のヘラ描き沈線を施している。41、42は天目碗、800は蛇の目高台の越州窯系青磁碗である。43～61は中国製陶器で多様なバリエイションをもつ。63、64は軒丸瓦で、瓦当文様はいずれも三つ巴の周囲に珠文を配するものである。

地下鉄換気塔部分の調査

開発地内の建物予定地の東に接している部分で、開発面積は95.2㎡とせまい。再開発と並行して計画されたもので同一の開発とみなし、グリッド区分のE．F－I．Ⅱ区にあたる。遺構番号については単独に付した。17の土壙が検出されているが、7基の井戸が含まれる。他は廃棄物処理土壙である。以下主要な遺構について述べる。

8号土壙（Fig.50）

11号土壙（近世瓦組み井戸）によって切られる。井側等の施設は検出できなかったが、底面に径95㎝の円形の掘り方があり、井戸と考えられる。基底面の標高は1mほどである。遺物は細片が微量で図示しえない。14、5世紀代のものであろうか。

10号土壙（Fig.50～52）

16、17号土壙（木桶組井戸）に隣接し、長軸4.5mの大きな掘り方に3基が並んでいるが、切り合い関係は明確でない。10号土壙は基底面に径1mの円形の掘り込みをもつもので、井側等の施設は検出されなかったが、井戸と思われる。円形掘り込みの中に多くの遺物が廃棄されていた。1～11、140は白磁碗である。B－14も白磁碗であるが、外底に「丁綱」の墨書がある。12～16、197、201は白磁皿である。19、20は同安窯系青磁碗、21は同安窯系青磁皿、346は龍銭窯系青磁碗である。11、19は青白磁、22～29、746は中国製陶器で多様なバリエイションをもつ。この他、杯状の滑石製品（30）、「元祐通宝」「政和通宝」の2点の北宋銭が出土している。12世紀後半～13世紀前半の遺構であろう。

11号土壙（Fig.50）

8号土壙を切り込んで作られている。最下段は径1mの円形掘り方に、径70㎝の木桶が据えられており、その上面に1段しか残っていないが、10枚1組の瓦組の井側が作られている。井戸基底面の標高は0.3mである。近世以降の井戸である。

16号土壙（Fig.50、53、54）

掘り方基底面に径70㎝の縦穴を掘り、径50㎝弱の小振りの木桶を据え、井側となしたものである。基底面の標高は1mほどで、木質は20㎝程度しか遺存していない。この井戸底からはまとまって中国銭が出土しており注目される。縒銭の状態ではない。銭種は、唐もしくは五代十国時代の「開元通宝」「唐国通宝」から南宋の「乾道元宝」まで26種、それぞれのバリエイションを含めると75種、171点の数量である。大半は「宋元通宝」から「宣和通宝」までの北宋銭である。他に小量の遺物が含まれるが、小片で図示しえない。13世紀代の遺構であろうか。

17号土壙（Fig.50）

掘り方基底面に径80㎝の円形の掘り方に、径70㎝の木桶が据えられている。遺存状態はよく、90㎝の高さが残る。基底面に井戸瓦数枚があり、本来その上面に瓦組の井側が作られていたものである。井戸基底面の標高は0.5mである。近世以降の井戸である。

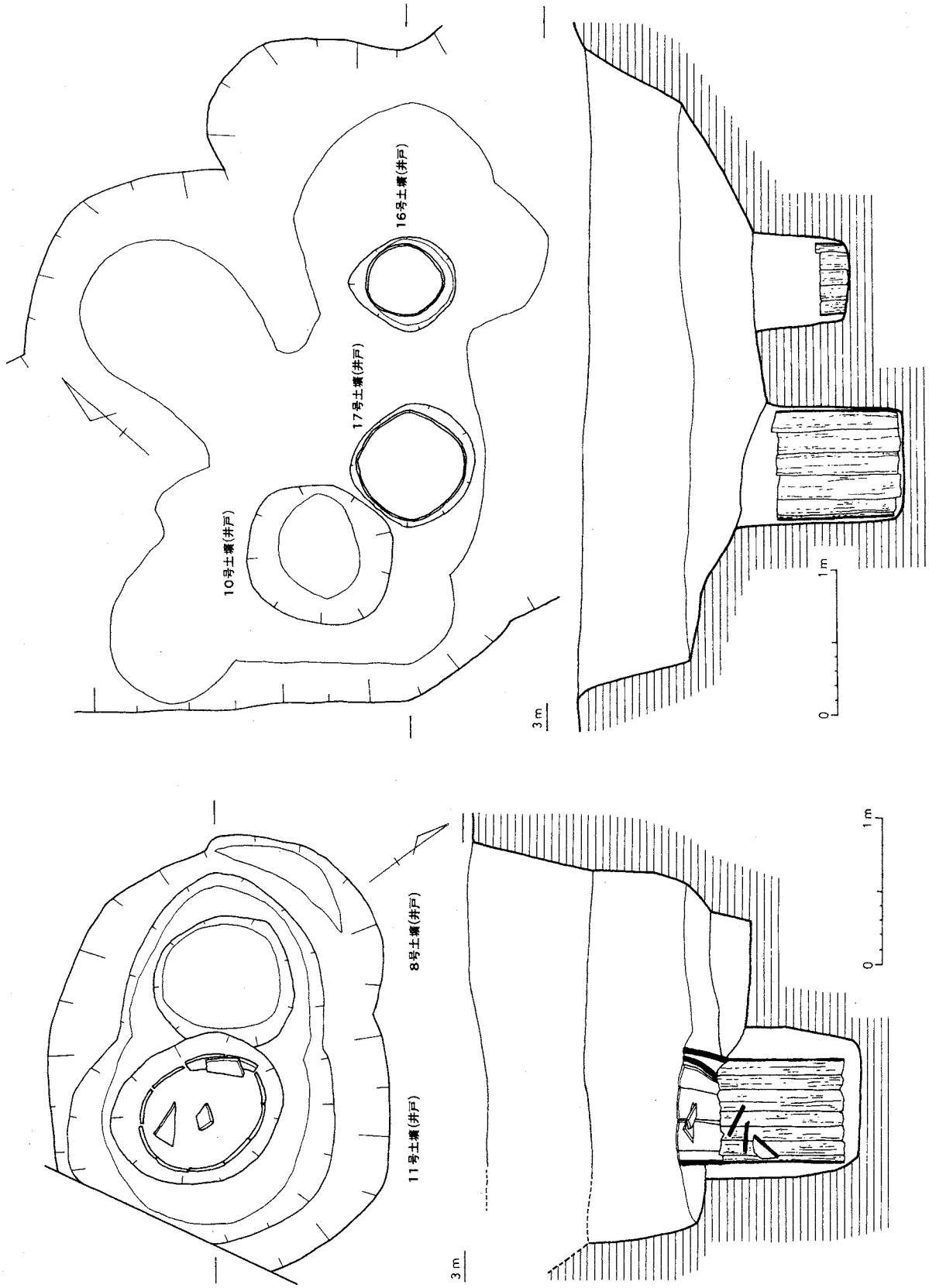


Fig. 50　4次調査（換気塔部）　8、10、11、16、17号土壙（井戸）

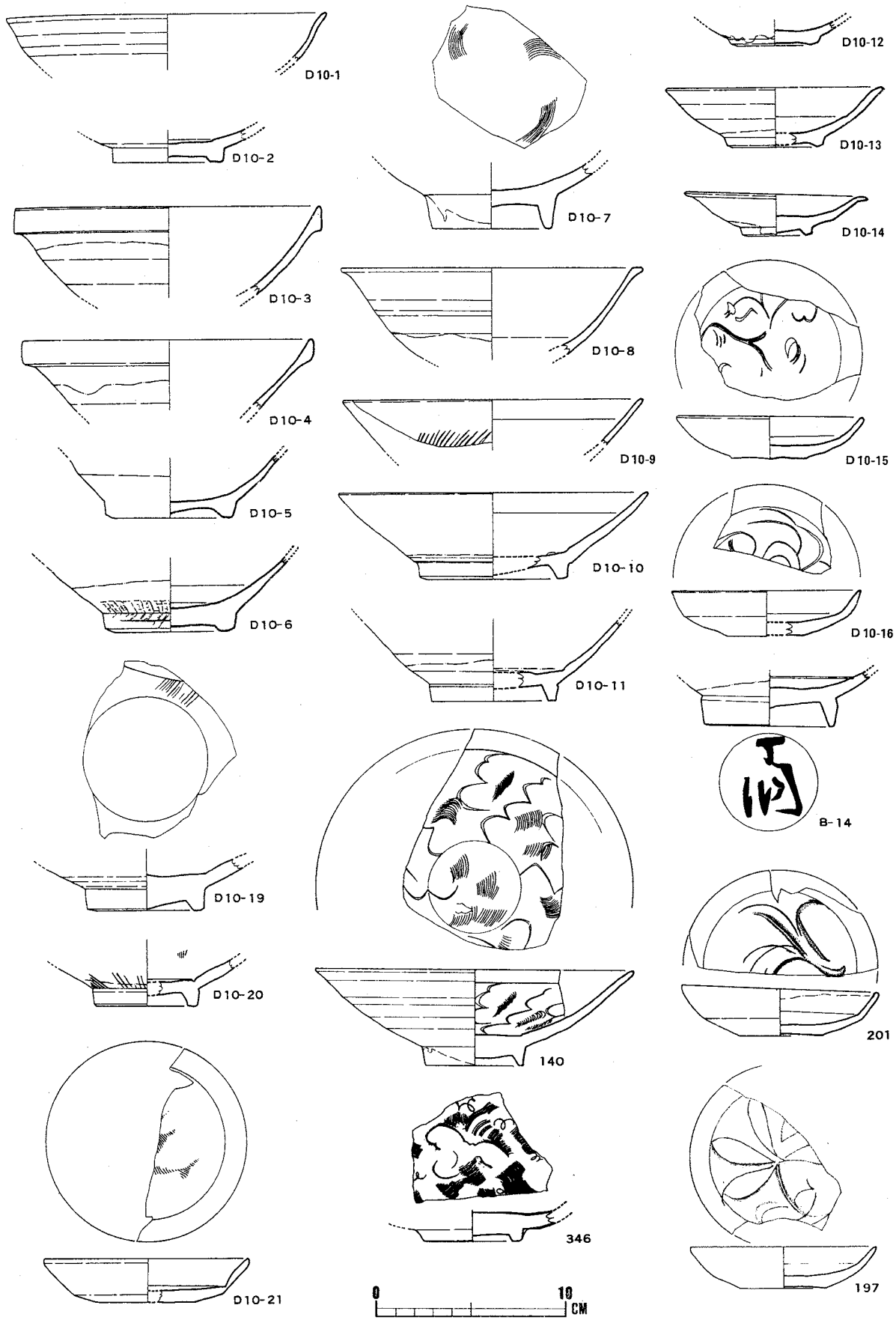


Fig. 51　4次調査（換気塔部）　10号土壙出土遺物（1）

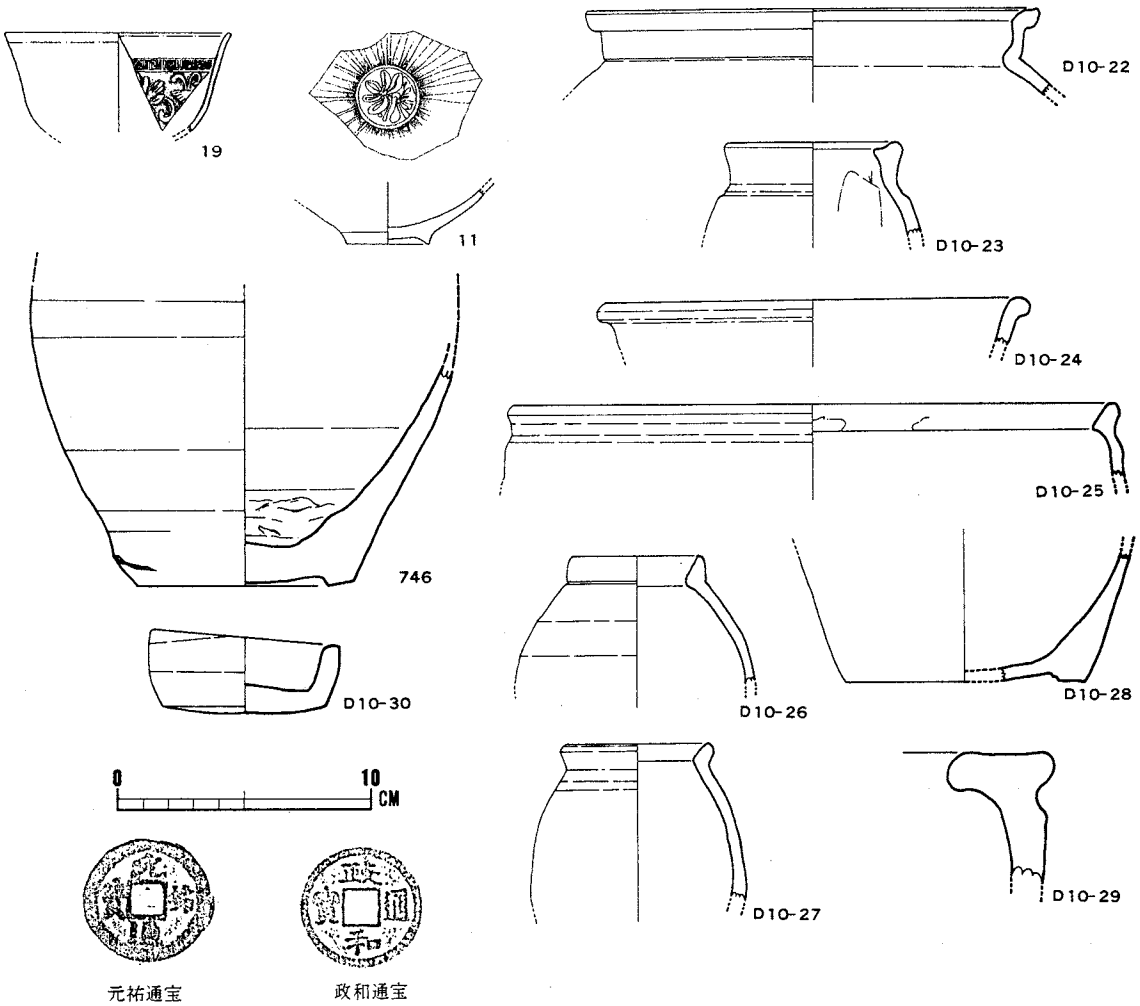


Fig. 52　4次調査（換気塔部）　10号土壙出土遺物（2）

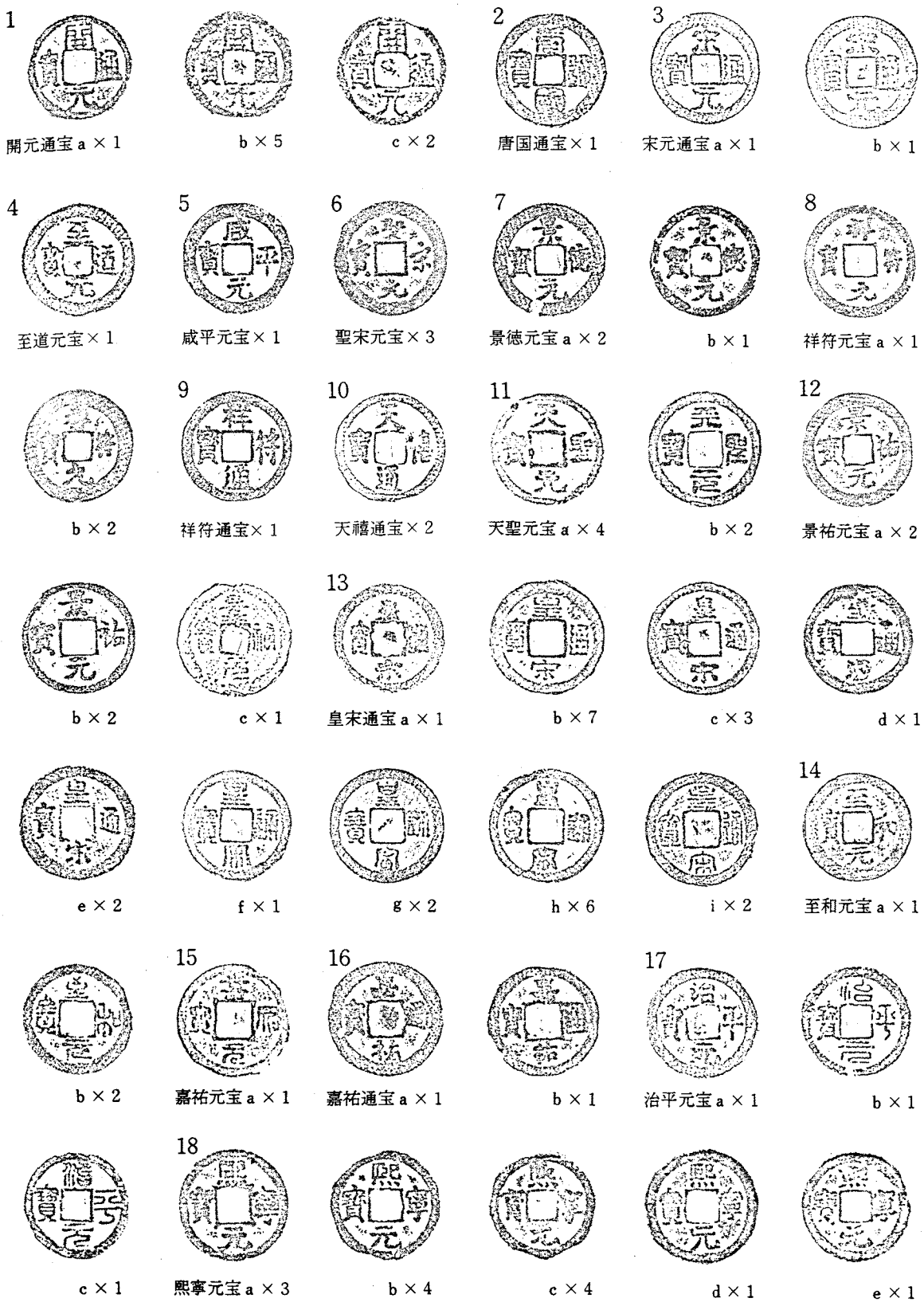


Fig. 53　4次調査（換気塔部）　16号土壙出土遺物（1）

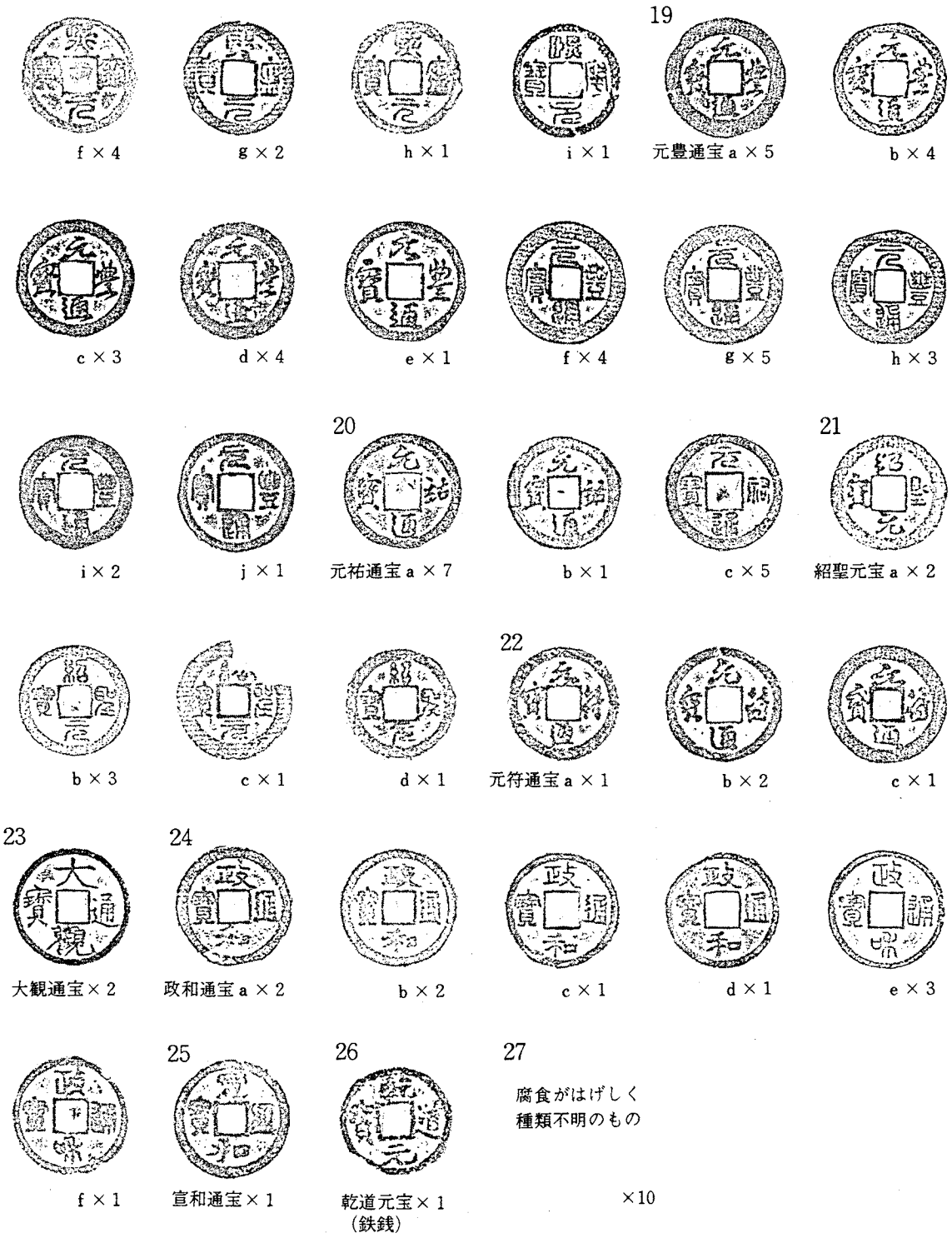


Fig. 54　4次調査（換気塔部）　16号土壙出土遺物（2）

4）　中国陶磁に見られる墨書について

墨書銘のある中国陶磁がはじめて注目されたのは、福岡市中央区簀子町の博多湾浚渫時に発見された「張綱」銘の天目茶碗であり、墨書銘は中国人張某という日宋貿易に係った綱首（船主）を意味し、中国商人の博多在居を思わせる好資料として著名である。それ以後、太宰府町四王寺山で発見された「荘綱」銘陶製経筒や、太宰府出土の「張綱「周綱」などの資料、判読こそ出来ないが福岡市城南区京ノ隈経塚出土の黄釉鉄絵盤などが知られるようになった。

博多の近年の調査では、これら墨書銘のある中国陶磁が多く出土しており、第4次調査においても100点近くの資料が出土している（Fig. 55～63）。これらは一括墨書銘資料として重要と思われ、若干の説明を附しておきたい。

墨書の位置は施釉されない外底面であり、例外的に無釉の体部外面下半に書かれるものである（B－47）。またB－84だけが朱書きである。書体も楷書から草書、達筆から雑なものまであり、バリエイションに富む。

墨書の内容から分類するとおよそ6つに分けられよう。1）「丁」「王」「太」「恵(？)」「木」「徳」「康」「朱」「錢」「陳」等の中国人姓氏と思われるもの　2）「綱」「綱司」「僧」等役職名と思われるもの　3）「五」「十」「二十」「四十」等数字と、個々の単位と思われる「口」、更に「内」の文字を付すもの　4）花押様のもの　5）仮名書きのもの　6）その他　これらはそれぞれ組み合わされて「丁綱　四十口内」「僧圀定」の如く表現される。

墨書例は白磁の碗・皿が圧倒的に多く、青磁の碗・皿、黒釉磁（天目）碗、黄釉鉄絵盤、褐釉壺、白磁四耳壺にも見られるが、青白磁には少ない。これはそれぞれの絶対量の比に影響されるとも思われる。

墨書陶磁の所属年代については、出土遺物総体の年代的偏りと同様、11世紀末～12世紀が非常に多いが、蓮弁文青磁碗や印花文青磁碗の例もあって、墨書の盛行する時期について現在のところ一概には述べられない。ただし、綱首丁某の意である「丁綱」銘四十余点に関しては、ほぼ11世紀末～12世紀に収まると思われ、当地が中国商人丁某の居留地であったと推測されるとともに、宋人百堂との関連が考えられる。

これら墨書銘中国陶磁の多さは、中世貿易都市博多の一つの特徴であるとも言える。交易品である陶磁に直接書かれたものであり、中国人名、仮名文字、数字などがあって、中国・日本両国人に書かれたものであると思われ、貿易品としての陶磁の流通機構を解明する有力な手懸りであると言えよう。また、戦国時代の戦禍に巻き込まれ、中世文献の大半を失った博多にとっても具体的様相を復元する上で重要な資料となろう。

※墨書陶磁については「博多遺跡群出土墨書資料集成」博多研究会 1996年が刊行されており、参考にしていただきたい。

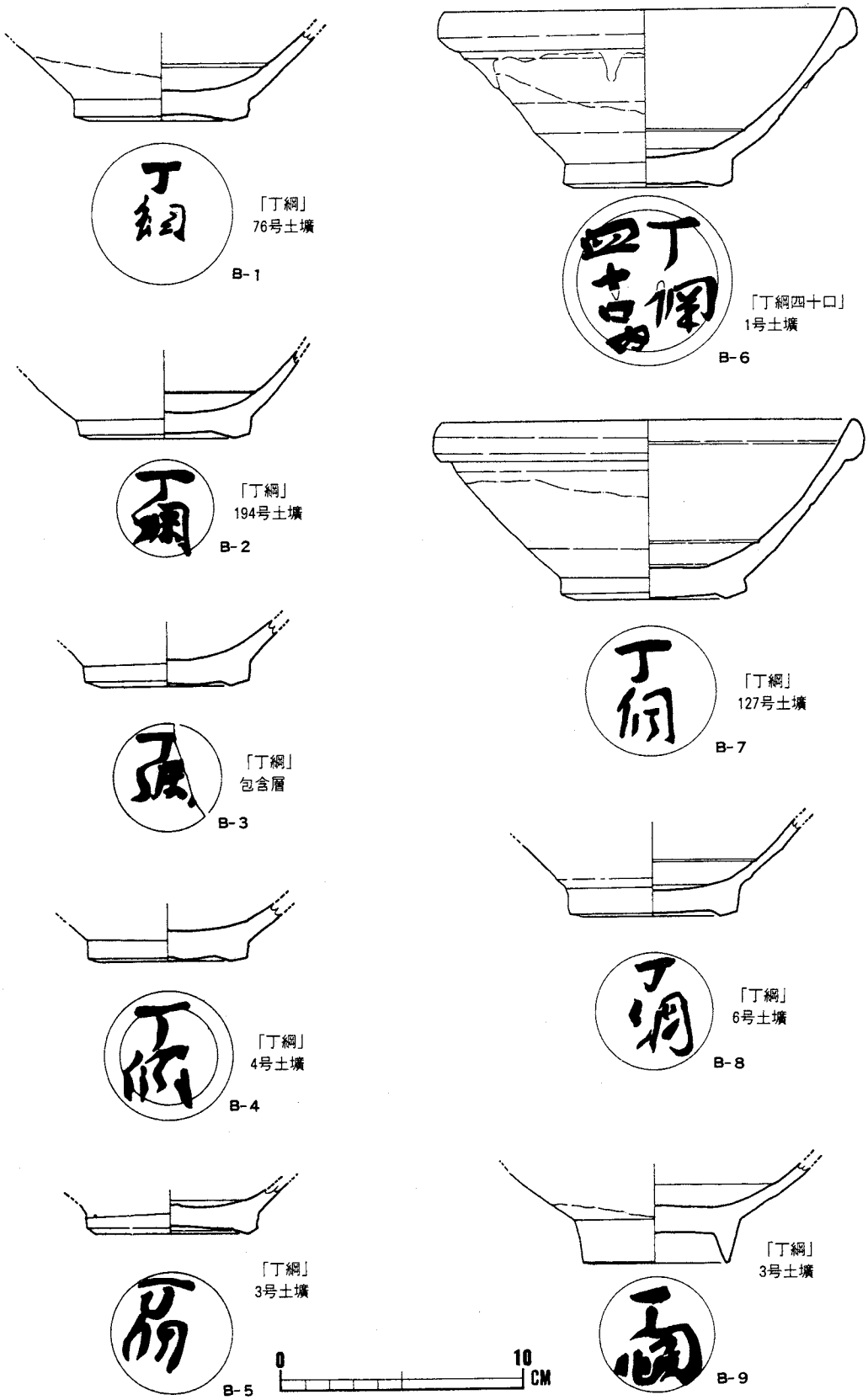


Fig. 55　4次調査　墨書陶磁器（1）

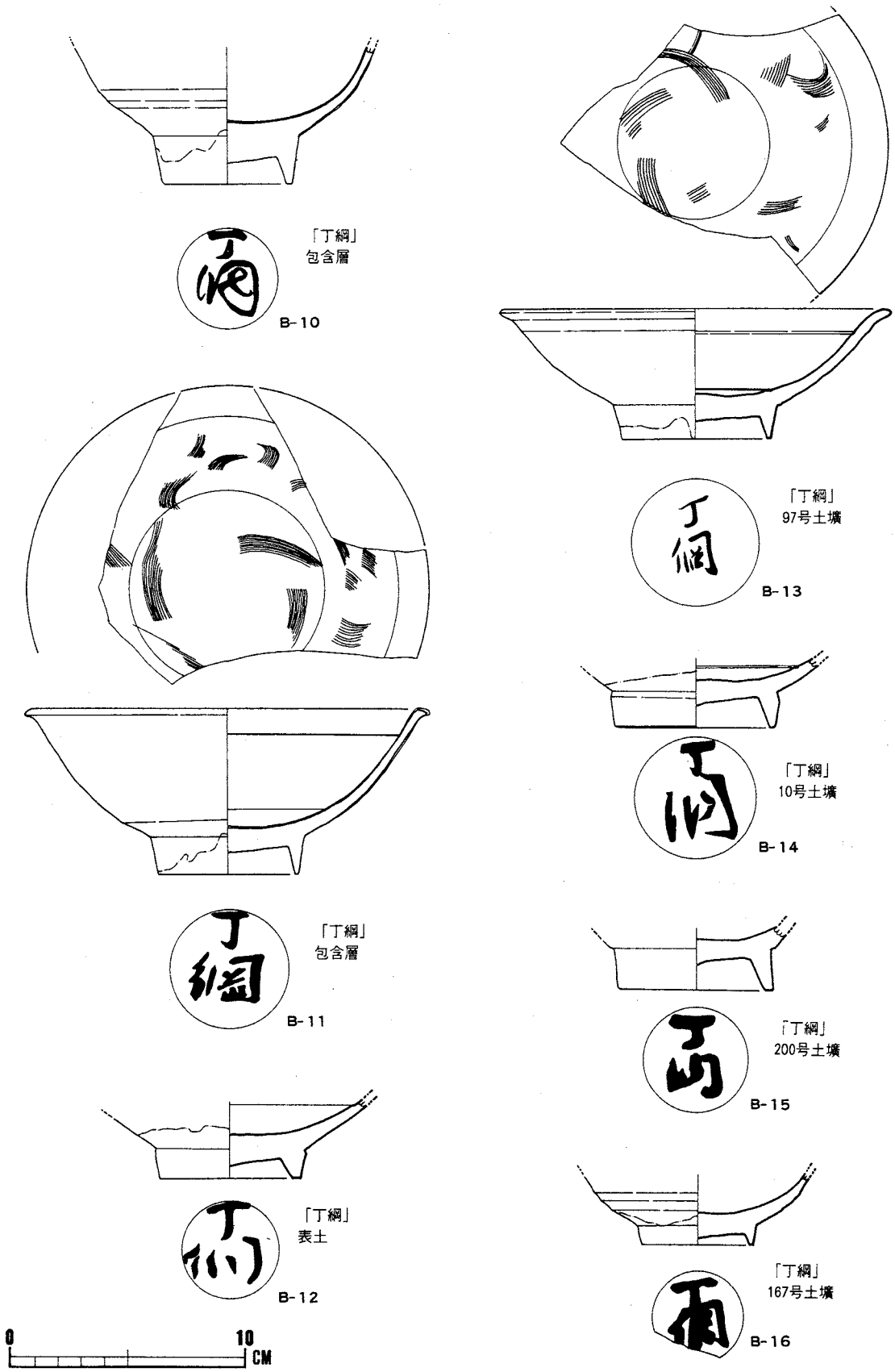


Fig. 56　4次調査　墨書陶磁器（2）

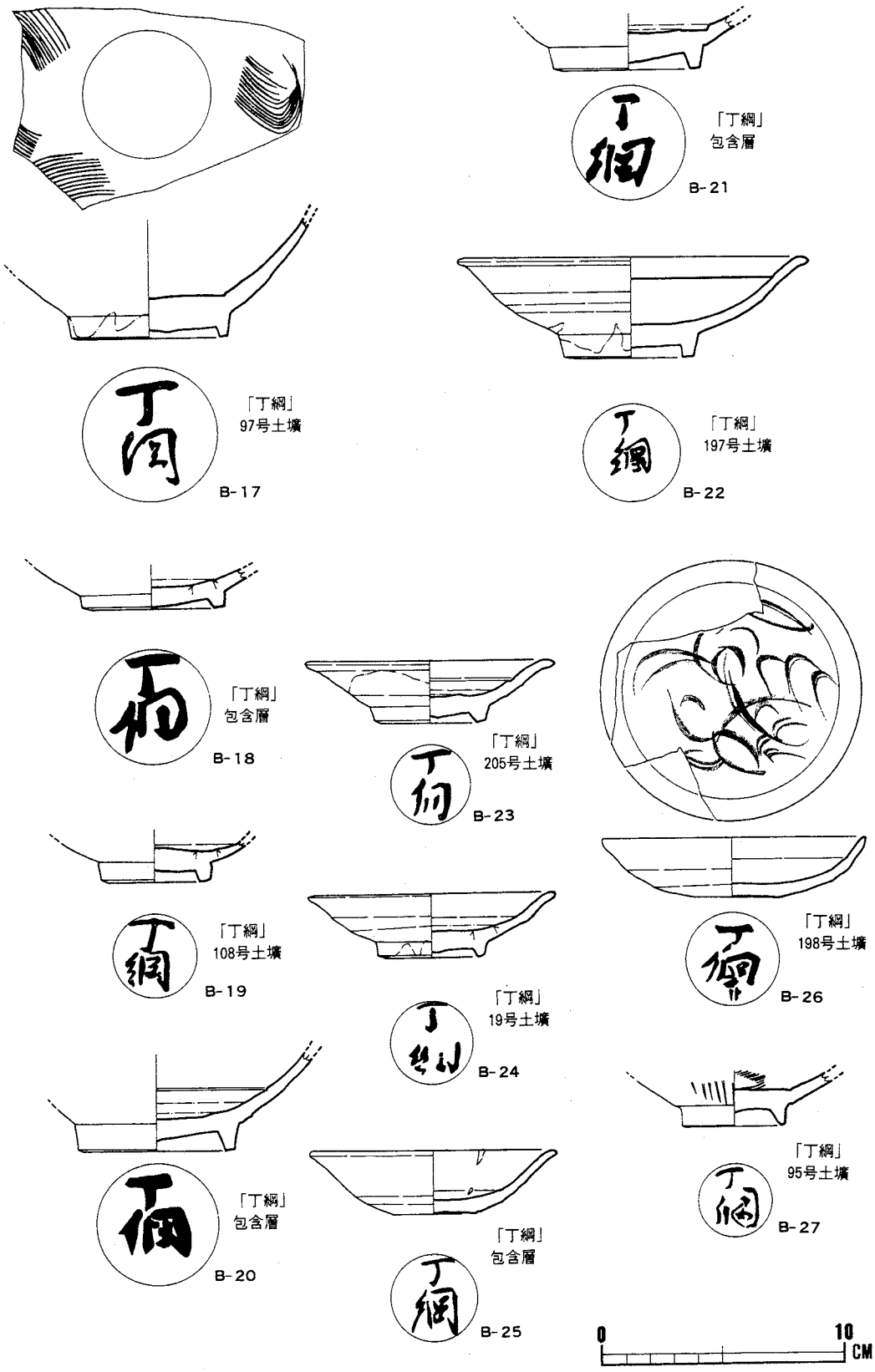


Fig. 57　4次調査　墨書陶磁器（3）

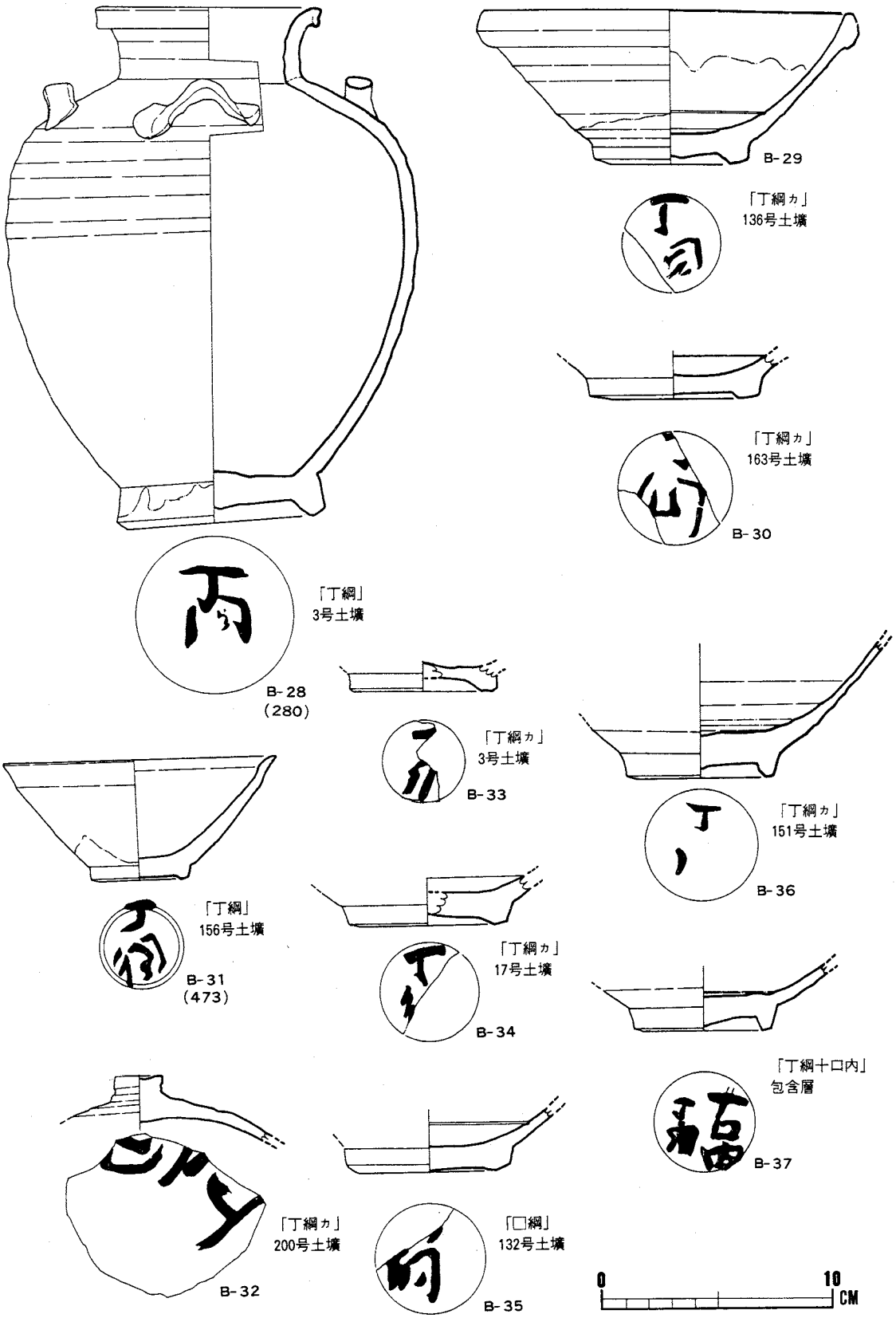


Fig. 58　4次調査　墨書陶磁器（4）

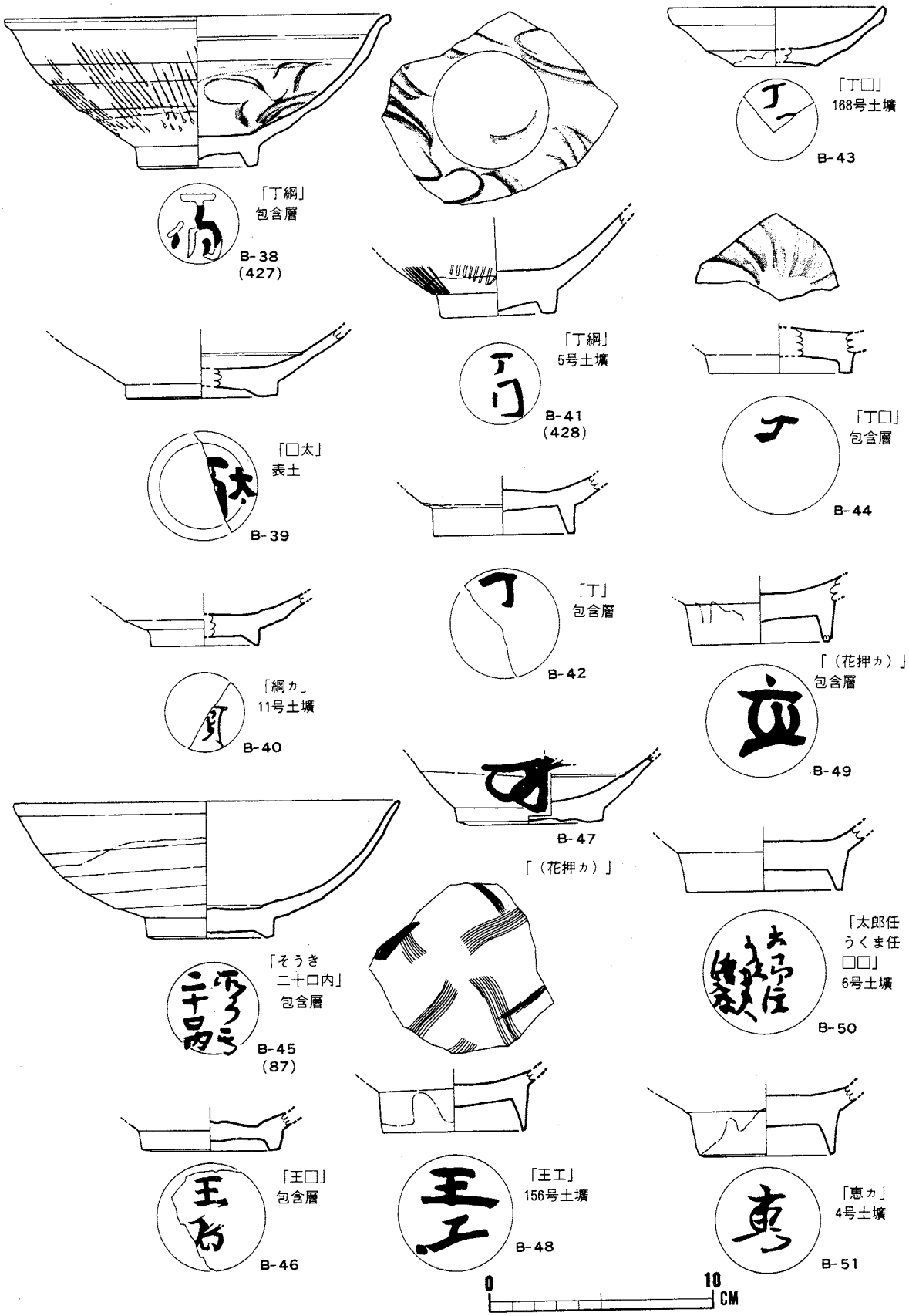


Fig. 59　4次調査　墨書陶磁器（5）

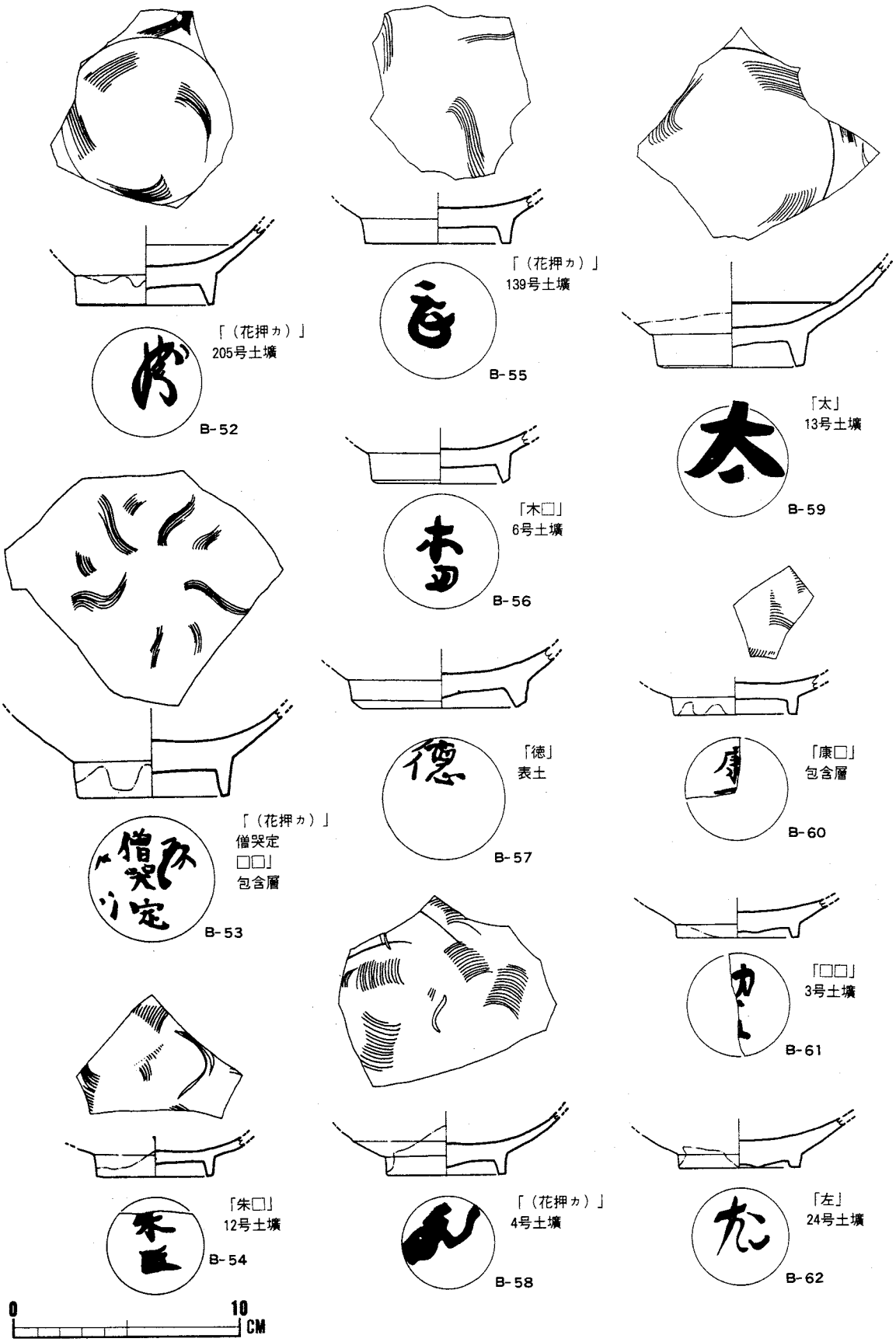


Fig. 60　4次調査　墨書陶磁器（6）

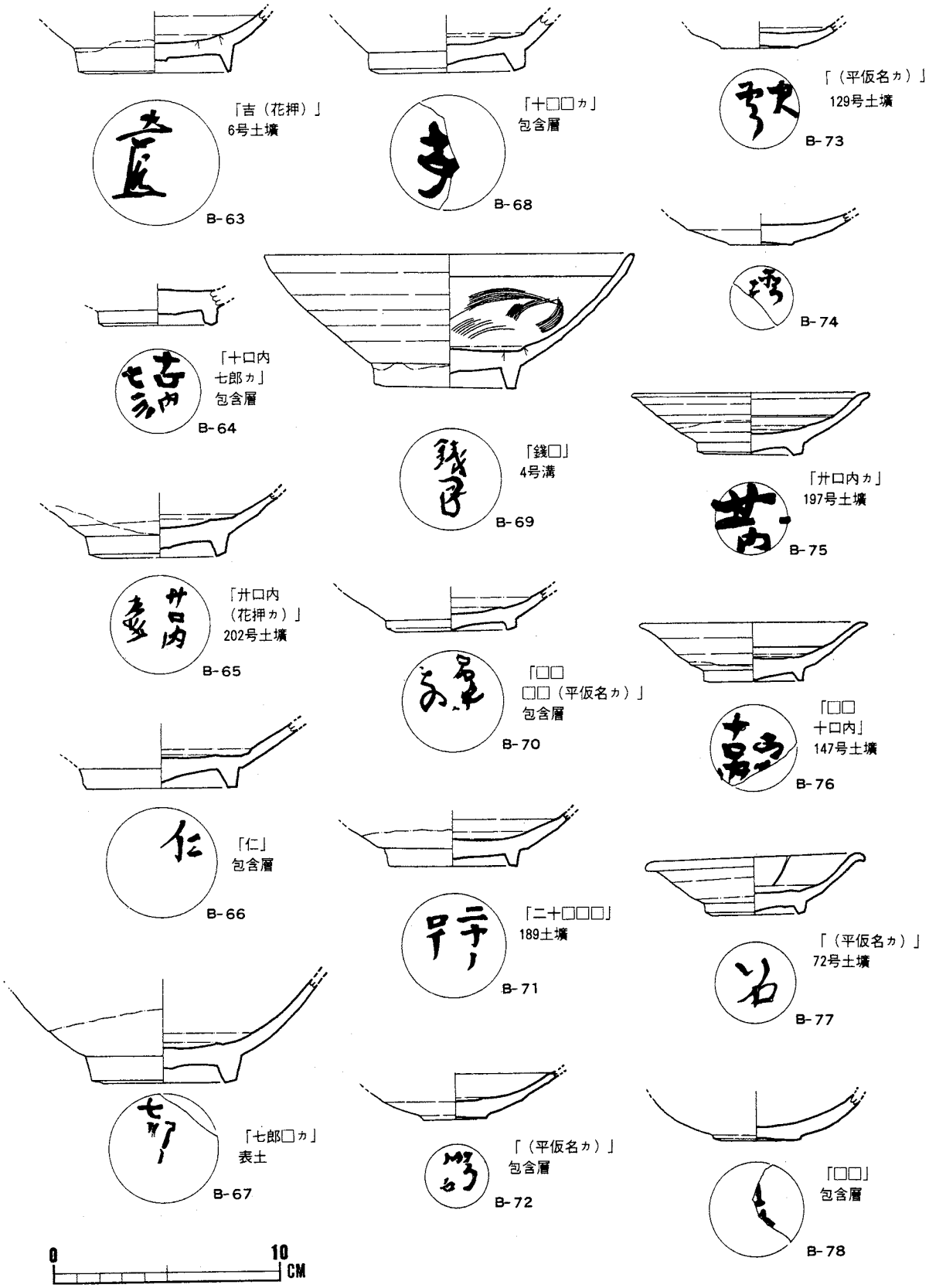


Fig. 61　4次調査　墨書陶磁器（7）

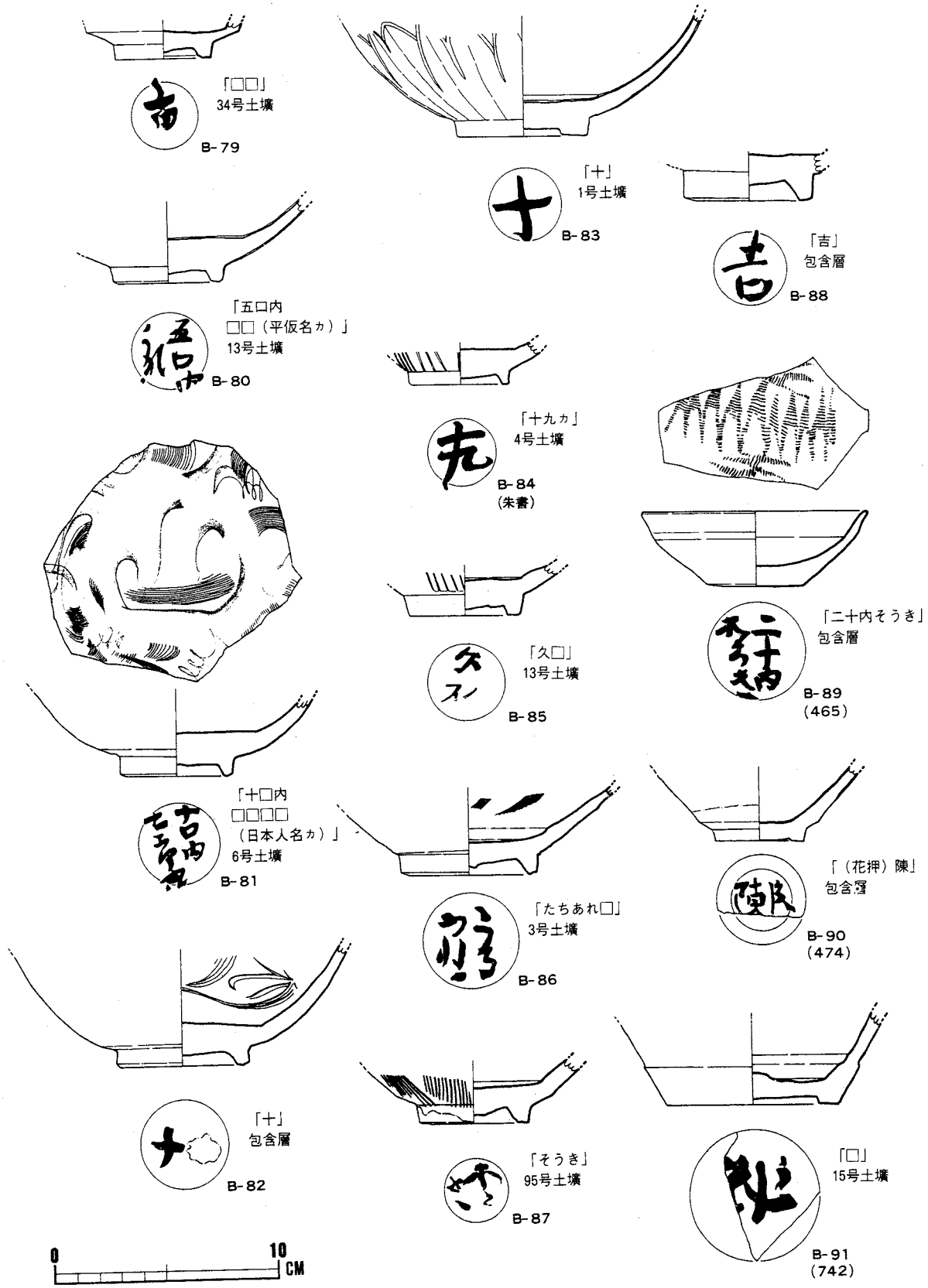


Fig. 62　4次調査　墨書陶磁器（8）

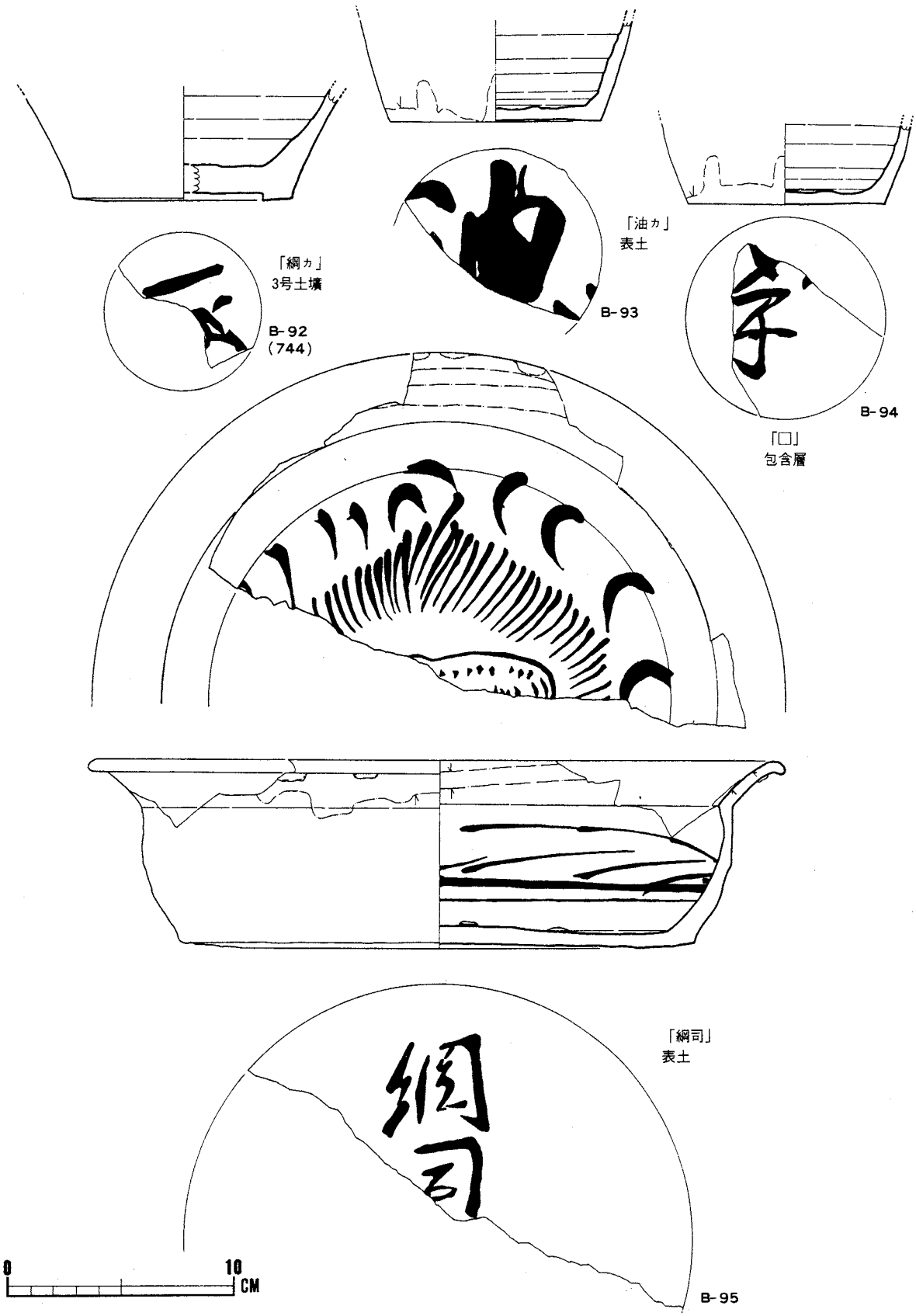


Fig. 63　4次調査　墨書陶磁器（9）

5）　出土遺物の分類

当遺跡で出土した遺物は、総計14万5000件を超える膨大なものである。内訳は下表で一部示したとおりであるが、中国製の陶磁器の占める割合が非常に大きいことがわかる。それは各地の遺跡と比べてみると桁違いで、それ自体が当遺跡の特徴ということができよう。このような現象は、これまでに行われた中世の「博多」地区の調査を通じて常に見られ、又今後の調査に於ても確実に予想されるものである。それ故、遺跡から考古学的に「博多」像を復原しようとするならば、まずこの中国陶磁を正しく把握しておかなければならない。発見される中国陶磁は勿論輸入品であるが、殆どは輸出用の大量生産品であり、多かれ少なかれ規格品である。したがってこの規格を見出し、整理することがまず基本の作業である。当報告書では、他の事は犠牲にして、あえてこの基本作業に専念している。これを基にして、はじめて今後中国陶磁の生産地域、生産年代又、共伴する国産遺物との関わりを究明することが可能となり、更にそれらの数量化によって立体的な、具体的な「博多」像が描き出されてくるのではないかと期待するからである。とはいえ、該当の年代幅も大きく中国に於ける陶磁器生産窯は無数であり、細かく見れば種類はキリがないほどある。当然今後ともこの分類には追加補強されなければならないが、11～13世紀については一応9割方は網羅されていると考えられている。この報告書で他の一切の分析を捨て、又国産の遺物を切り捨てたことに心は残るが、これを捨石として今後の研究に有効に活用していきたい。

分類は種別に表示したが、表の右欄の番号は図版編の遺物番号に対応するものである。

Tab. 1　遺構出土遺物数量表　（森本作成）

種別		遺構	B1・C号Ⅲ土区壙	C2号Ⅲ土区壙	E206・号Ⅳ土区壙	E207・号Ⅳ土区壙	1号溝	2号溝	4号溝	E10・号Ⅱ土区壙
青磁	碗	Ⅱ-2					1		5	
		Ⅳ		1					1	
		不明				1		1	1	1
	皿	Ⅰ-3							1	
		Ⅱ		1			3			
		Ⅲ					2			
		Ⅳ-6					1		1	
	合子		蓋1						1	
	小壺		1							
	壺						1		1	
	その他						3		3	
白磁	碗	Ⅱ-1		1				4	7	2
		Ⅱ-2	1			1	2		3	
		Ⅲ								1
		Ⅳ	14	11	3	2	25	14	65	44
		Ⅵ	4	5			3	3	11	4
		Ⅶ	9	6	2	14	20	11	41	48
		Ⅷ	11				3		2	
		Ⅸ		8		1	19	4	26	18
		Ⅻ	2					1	1	
		不明の小片	20	9	3		46	8	77	32
	皿	Ⅰ	1				2	1	4	
		Ⅱ				1	12	4	7	1
		Ⅲ							2	2
		Ⅳ	1		1	1	9		14	3
		Ⅴ				1			3	
		Ⅵ	2			1	2		3	8
		Ⅶ							1	
		Ⅸ		1						
		Ⅹ				1			3	
		Ⅺ		3			2		5	
		Ⅻ						1	2	
		不明の小片	1	2				1	1	
	壺		11	7			12	5	15	19
	その他			香炉				ミニチュア杯1		
青磁（龍泉窯系）	碗	Ⅰ-1						1	2	
		Ⅰ-2-a							9	3
		Ⅰ-3-a						2	1	
		Ⅰ-4-a		1	1					
		Ⅰ-4-c	11	5			8	6	22	4
		Ⅰ-4-d	2	3			6	4	14	3
		Ⅰ-5-a	1				1		1	
		Ⅰ-5-b	2				1		2	
		Ⅰ-6-a	3	2			6	1	5	
		Ⅰ-6-b	1							1
		不明の小片	10	8			7	7	9	3
	小壺	Ⅰ-1-b	1							
	Ⅲ	Ⅰ-3	1	1			2	1	3	
	その他		双層碗							
		Ⅲ-4	2				1	1		
		Ⅲ-5-b							1	
	その他						1		2	
青磁	碗	Ⅰ				1				
		Ⅱ-1	7	1			14	5	31	7
		Ⅱ-2	4						7	2
		Ⅱ-3								5
		Ⅳ							1	

種別		遺構	B1・C号Ⅲ土区壙	C2号Ⅲ土区壙	E206・号Ⅳ土区壙	E207・号Ⅳ土区壙	1号溝	2号溝	4号溝	E10・号Ⅱ土区壙
（同安窯）		Ⅴ	5			2			3	
		Ⅵ		1			14		2	
		不明の小片	4	1						
	皿	Ⅱ-1					1		15	1
		Ⅱ-2	5	4			9	3	3	1
天目碗		Ⅰ-1	1					1		
		Ⅰ-2							3	
		不明の小片	2							
明代磁器				3						
陶器碗										1
陶器皿			2				4		2	3
陶器	2	盤	7	5	2	4	17	11	30	17
		甕	1	1	1	5	7	2	8	2
	3	盤	1				1		5	
		甕							8	
	5						2		2	
	5～6					2	1			
	6		1				1			
	8				1					
	9		3						1	
	10		14	16		11	23	14	51	30
	11						2		3	7
	12								2	2
	13								1	
	15					1	6		11	2
	16		1						2	6
	20			2					7	
	21						9			
	23		1							
	24		1	1						
	25							1		
	26		1							
	27			10					2	
	28					1	1		2	2
	29					2		4	12	3
	30		10		3	13	13	7	6	35
	33						1			
	35		1				1	1		
	37		2				2	1		
	38		1				4	2	2	
	40		1						1	1
	42		1	1			4	3	3	7
	43			2		1			2	2
	44		2						11	12
	45		3							
	不明の陶片		13	5	1		4	6	12	
土師器			4	5	1		80	47	8	8
須恵器			7	5	1	2	49	13	24	7
土師皿			23		7	47	15	15	4	2
瓦器碗			2	1	1	2	7	11	9	2
瓦質土器			6	7	2	2	8	7	14	4
土師質土器			11	9	1	27	26	3	16	5
常滑									4	
国産近世陶磁器			10	2					7	

中国の陶磁器

〔唐草文梅瓶〕1、2　肩の張った丈の高い一対の梅瓶が復原された。胎土は灰褐色精良で焼成良好である。工程は複雑で全体に黒褐色の釉泥をかけ、その上に白色の土を塗る。次に唐草文を線刻し、地の部分の白色土を掻落して、かなりの温度で焼成し後に全体に緑釉をかけ再び軽く焼く。白色の土は熔けて曇りガラス様になり、下の泥漿を映して灰色を呈している。地の部分には掻落しの跡が認められない点、疑問があるが、文様部分の白土の下には黒が塗られていることは確かと見え地を後で塗ったとは考えられない。釉は外底と内面を除く全面にかけられているが、低火度の鉛釉で殆ど剥落し、或は銀化して青緑色を呈する。ただ内底に流れこんだところで透明な緑色を残している。この瓶の生産地については中国の専門家により山西省北部・北宋末、江南沿海地方・13世紀などの異なる意見が出されている。

Fig. 64　4次調査　緑釉 唐草文梅瓶

〔青白磁〕宋・元代の白磁の中に、景徳鎮を中心に焼かれた、淡青色透明釉を特徴とするものがある。これを特に青白磁と称するが、福建省でもこの系統の焼物を生産した窯が多く盛んに海外に輸出したといわれる。しかし当遺跡出土の青白磁は中国の研究者から主として景徳鎮産との御教示を受けており確実に福建産といえるものはない。青白磁は日本では12世紀を中心とする経塚から発見される合子や皿、壺が主な遺物であるが、当遺跡のⅢⅠ－1、2、合子37－64はその類品といえる。又他で報告例が多いとはいえない碗形もⅡ・Ⅲ類では数量的にかなり多い。16・17は印花碗の小片。18は元磁に典型的なラマ式蓮弁の口造りの小碗で型造りである。19－20は印花文で口ハゲの碗。21－23は口ハゲの碗であるが灰白色の粗胎に灰色がかかった釉がかかり、福建省製品かと思われる。11・12にも多少その傾向が見られるが、18－20、30－36（34を除く）、64などでは釉はかすかに茶緑色もしくはクリーム色を見せる透明釉である。このような青くない青白磁は総じて口ハゲ、印花のものに多いといえる。又合子の中では三例を見た49の類品がどれも粗胎で、オリーブがかった、よく熔けない釉を見せ、景徳鎮とは異なる窯のものかと思わせる。68は双層碗、70－73は内面露胎の炉、77は梅瓶の蓋、80は蛙形の水滴、82は小さな水注である。

Tab. 2　青白磁碗

Ⅰ	小底斜腹。殆ど平らな外底は微かに削りこみ露胎で焦色の焼跡と黒い点が付着している。白胎に帯青色の透明釉。内底には小さな茶溜がある。非常に薄手で上品である。	1	器壁は口縁で外反しつつ更に尖るように薄くなって終わる。	a	片切へら彫と櫛による刺突文	3，4
				b	片切へら彫	5
		2	斜行する器壁はそのまま先細りに終わる。口縁に刻みを入れ、体壁を白堆線で区分した輪花碗。			6
Ⅱ	外底露胎で削り込みはやや深めで輪高台に近い。器壁は丸みをもち、見込みも広くなっている。Ⅱに比して粗製の感がある。	1	小底。外底には淡くこげあとがある。	a	印花文	11，12
				b	無文	10，13
		2	底径約6cm、内底は径2．5～5cmの平らな見込みを作る。施文は片切彫と櫛描平行線文。外底は無釉、黒ごまとこげあとあり。			M1－1 M4－2
Ⅲ	器全体に施釉し、後に外底の中心を削り露胎とする。露胎には褐色のこげ跡と黒いごま状の物質が付着。器形は全体に大ぶりで底径は6cm前後。器壁は丸みがあり、見込みもゆるやかな球面を見せて凹む。施文は片切彫の劃花文。まれに櫛を併用するものもある。上品である。					9
Ⅳ	底は全体に施釉し、口唇で釉を削り落としている。焼成は覆焼で行なったものである。器体外壁には重複蓮弁を刻み出している。					14，15

Tab. 3　青白磁皿

Ⅰ	口縁を外に水平に折り曲げたもの。外底部露胎。	1	僅かに高台を削り出す。平底。口縁に三角の刻みを入れ器壁は白堆線で六区分。			24
		2	浅い碁笥底のもの。器壁は白堆線で六区分			図例なし
		3	底部は不明だがやや大ぶりで深めである。無文で釉色は緑がかかる。			8
Ⅱ	口縁は内弯ぎみの体部から続いてそのまま終わる。底部近くに沈圏線を削りこみ、高台の痕跡のような様相を呈す。	1	外底部のみ露胎	a	無文	図例なし
				b	細い線と櫛を用いた平行線文	26
		2	外底及びその少し上まで釉を削りとる。			図例なし
Ⅲ	平底。全く高台の影はない。外底及びその少し上まで釉を削りとる。	1	Ⅱ－1－bと同じタイプの文様のものが多い。			図例なし
		2	型造りの菊皿である			25
Ⅳ	底部全面施釉。口ハゲで覆焼をしている。型造りの皿である。			a	細い劃花文のもの	図例なし
				b	印花文。殆どが魚藻文である	28－35

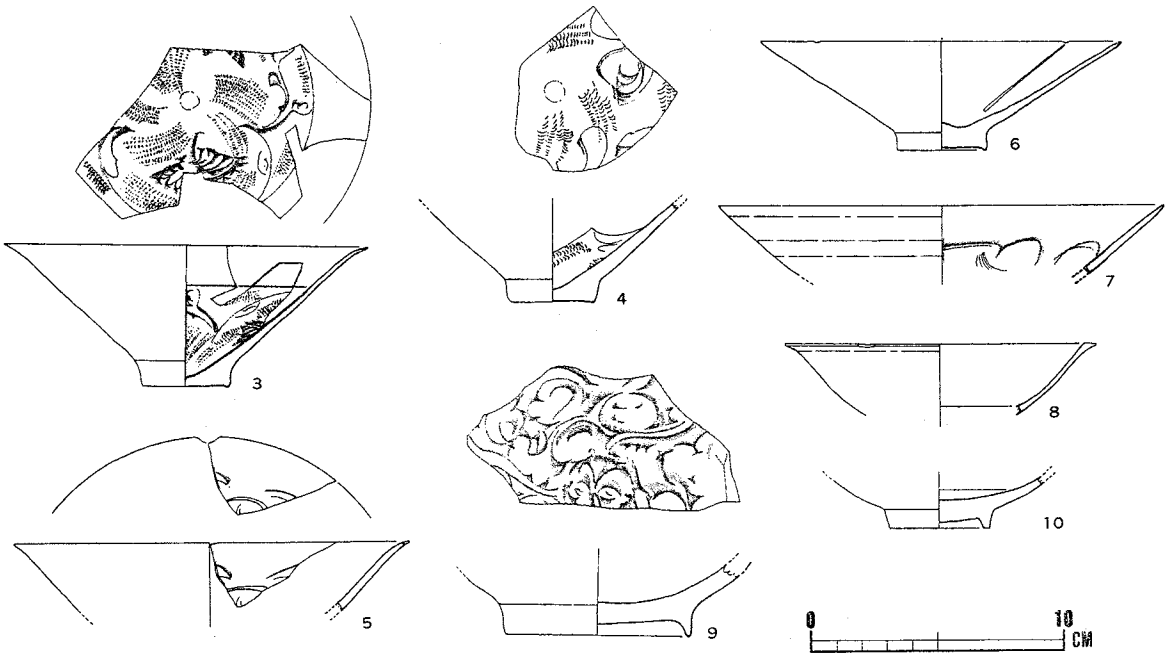


Fig. 65　4次調査　青白磁（1）

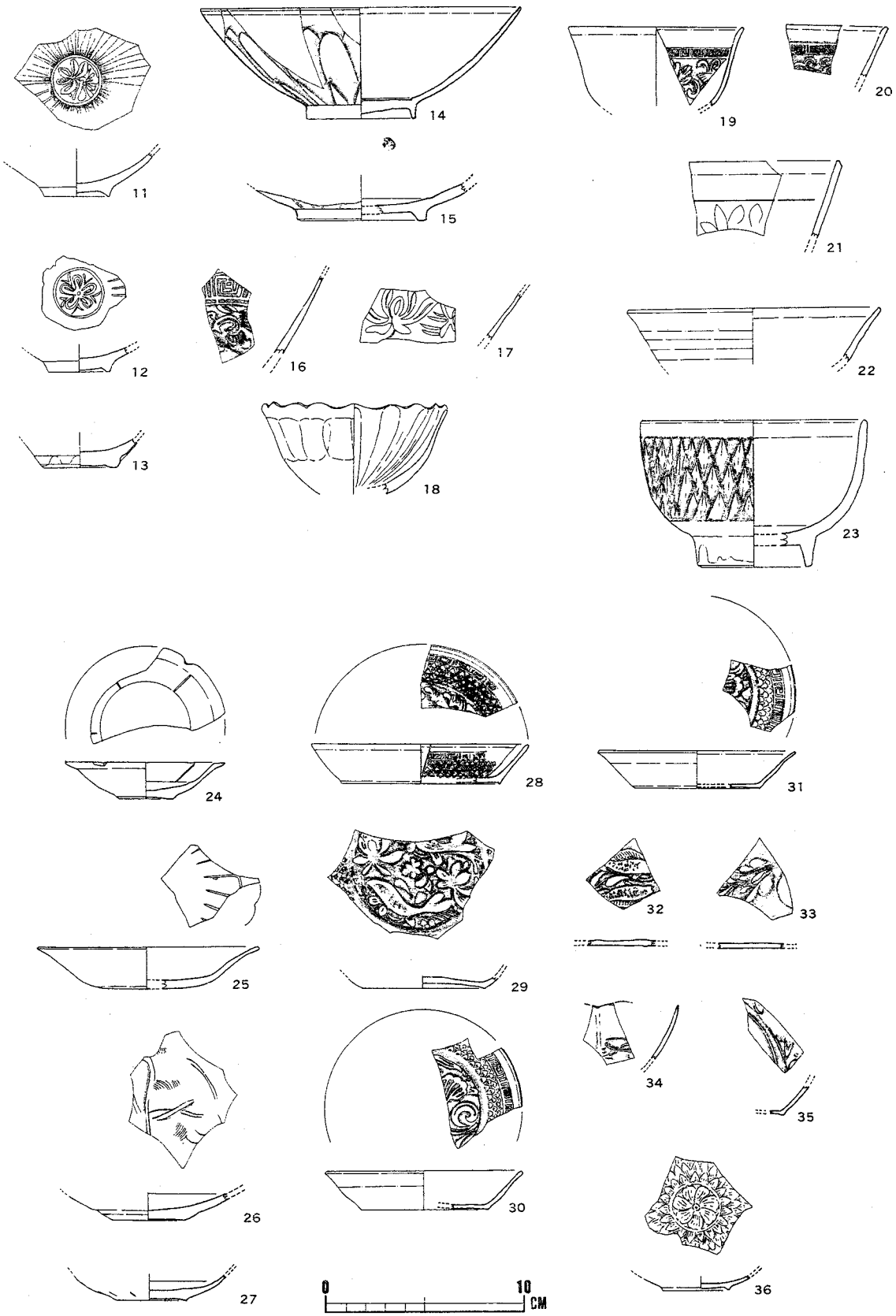


Fig. 66　4次調査　青白磁（2）

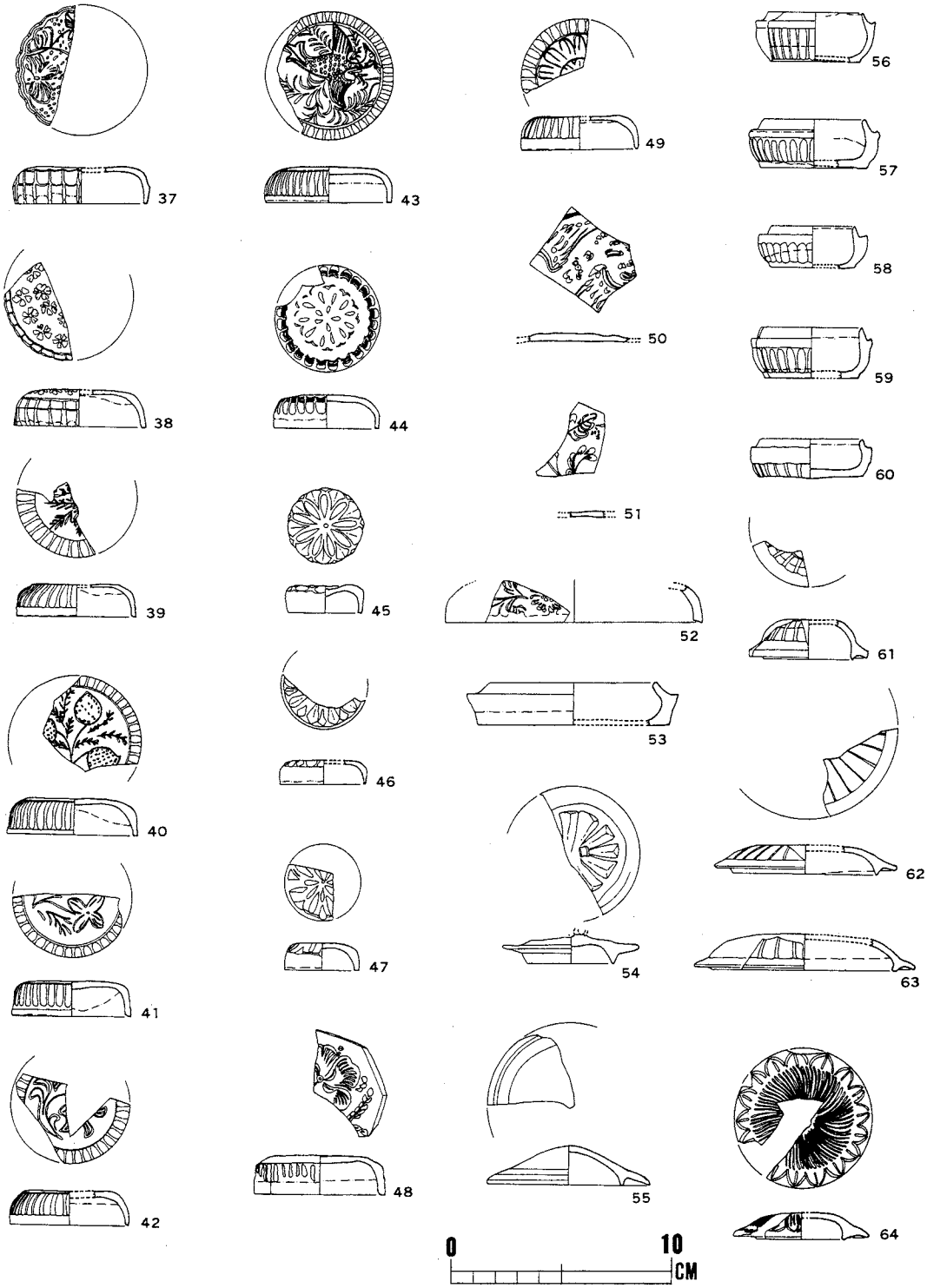


Fig. 67　4次調査　青白磁（3）

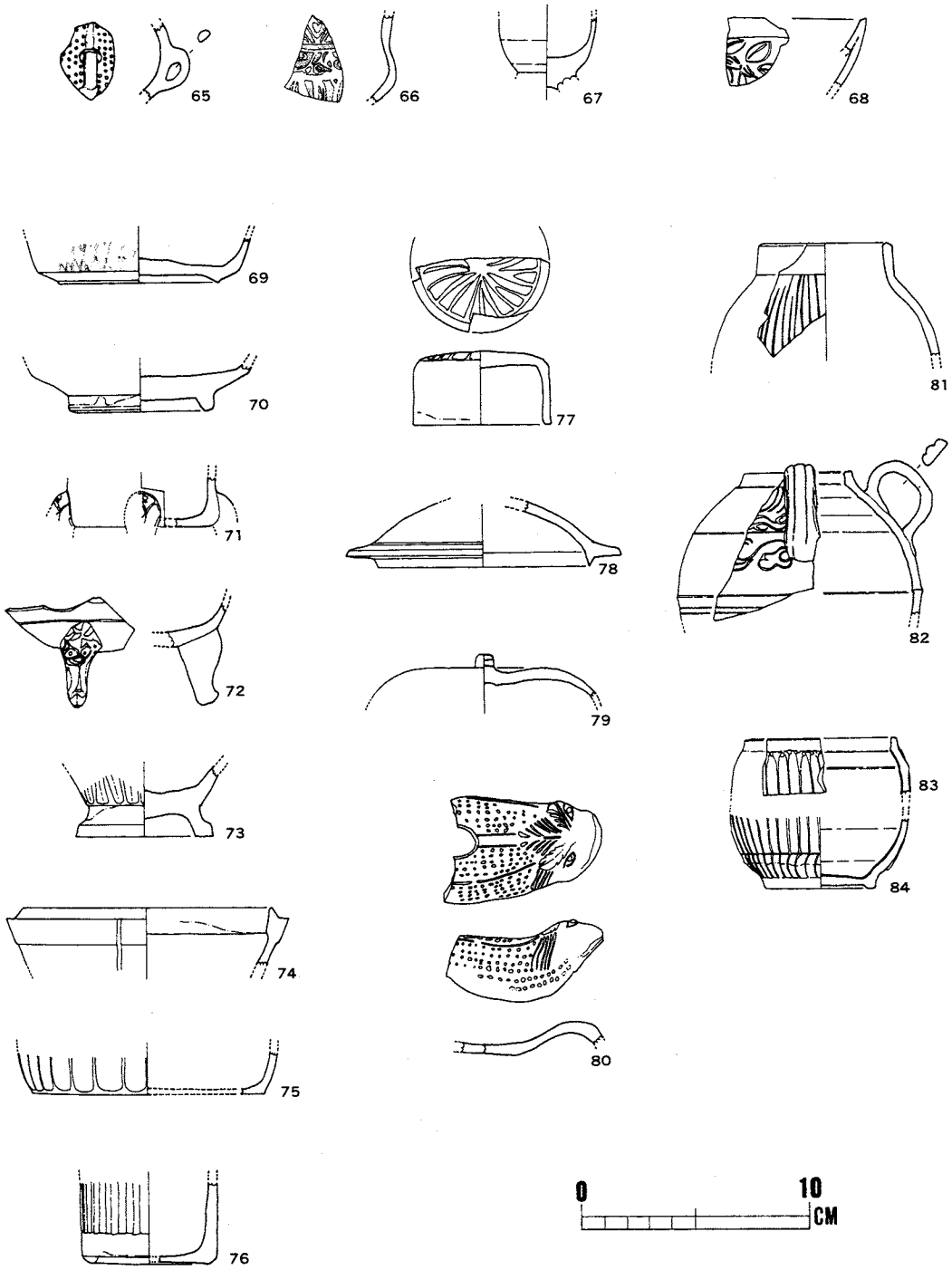


Fig. 68　4次調査　青白磁（4）

Tab. 4－1　白磁碗

Ⅰ	胎土は純白緻密で精良。釉は薄く均等にかかり乳白色を帯びている。小さな玉縁状の口縁部1片が検出された。いわゆる邢窯の白磁碗である。					図例なし
Ⅱ	外面を直に、内面を斜めに削り出す高台が特長。胎土はやや粗く砂め。胎釉とも黄白～灰色を帯びるが、酸化焼成で黄白色となるものの方が比率がかなり多い。体外判釉	1	口縁が細い玉縁をなす			85，86
		2	口縁は先細りになりながら外反。見込は段をつけて一段深く平になす。	a	無文のもの	87，88
				b	器内を白堆線で六区分	89
		3	広く薄い玉縁口縁。見込の段は浅い。			90
Ⅲ	高台はやや内すぼまりでⅡに比してかなり高め。胎釉はⅡによく似るが乳灰色に焼けた比率が多い。体外半釉	1	玉縁口縁。Ⅱ－1に比しやや巾広である。器壁の側を削り沈圏線を造る結果、見込が高くなる。			91
		2	口縁内弯、やや大ぶり、1例のみを検出			92
Ⅳ	口縁は折返し断面三角形の玉縁をつくる。半釉。稀に純白の上質の白磁もあるが灰白色のものが多く、品質にはばらつきが多い。	1	外底のくりはごく浅く器底は肉厚。高台の巾は広いが斜めに切られている。	a	見込に沈圏線をめぐらす	93，95－98
				b	見込に圏線のないもの	94
		2	外底のくりは1に比してかなり深い。	a	見込に目あと4こあり	100－102
				b	見込で輪形に釉を削る	99
Ⅴ	口縁で一度垂直に立て次に外反させながら先細りにつくる。体外には片切彫で菊弁状の文様を施す。胎は黄味を帯びた白、釉は透明で柔い感じ。大小があり、又底部のわからないものが多いが、107のように高台脇を削って体部に稜を作るものがある。広東省の白磁との教示を受けている。					103－107
Ⅵ	高台は高く、外面を直に内面を斜めに深く削り、断面鋭三角形となす。胎は灰白色で粗く、釉は大むね貫入なし。品質多様、口縁外反。	1	腰深く比高の高いもの。体外高台まで施釉。内面口縁下に沈圏線。			112
		2	比高高く、体外半釉。	a	無文	114
				b	体壁外面に稀描縦線文	113
		3	比高の低い浅形で、施釉は高台まで。	a	無文	118
				b	器壁内面に櫛描文	111
				c	器外面に縦線文	108－110

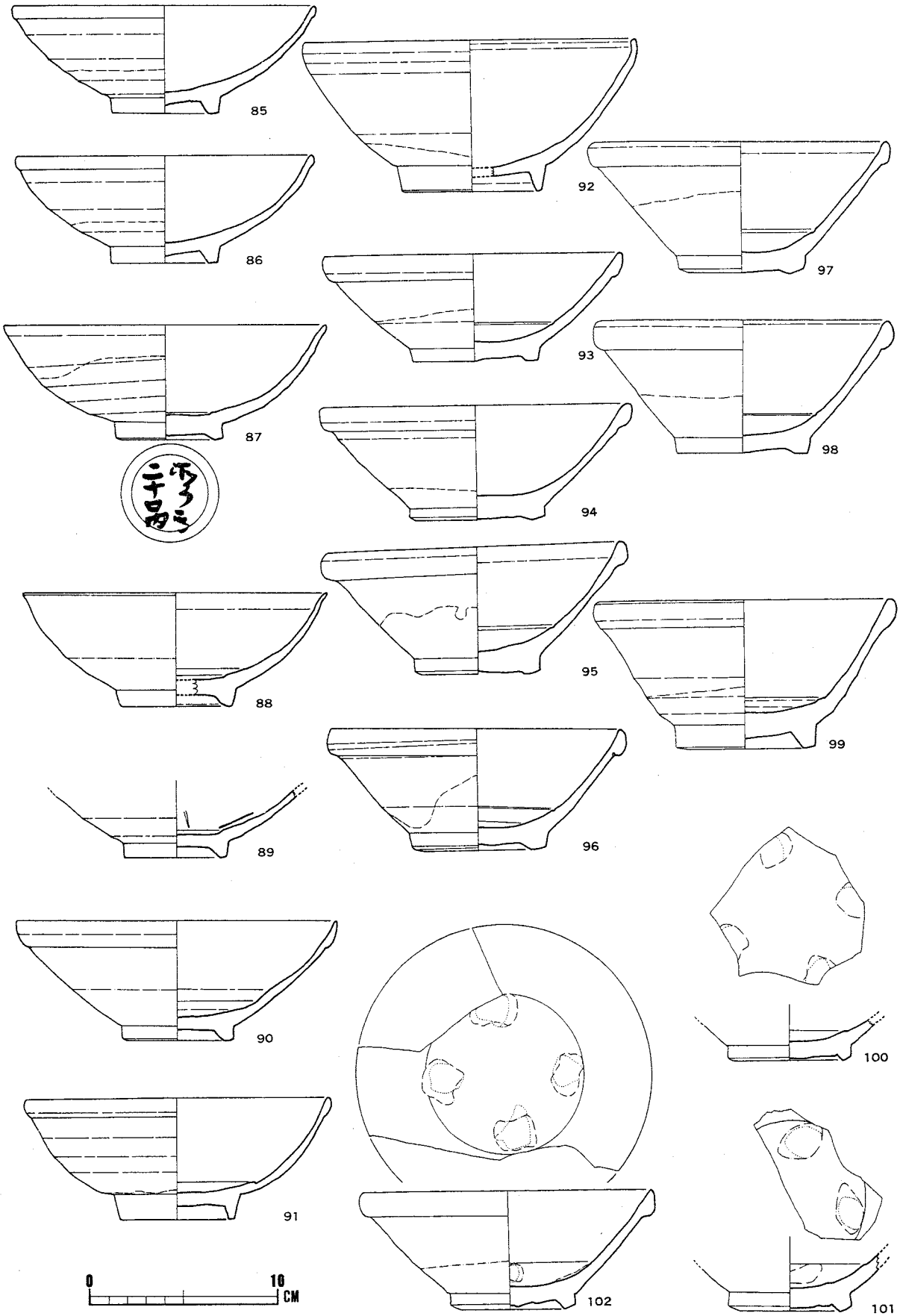


Fig. 69　4次調査　白磁 碗（1）

Tab. 4－2　白磁碗

Ⅵ		3		d	器壁内面に櫛描文、外面には片切彫平行斜線文	115
Ⅶ	口縁は外反し上面を鋭く水平に切る。品質は多様だが、大部分灰白色で精品は見ない。	1	高台はⅥと同じ、施釉はおおむね高台近くまでなされる。	a	無文	119，120
				b	外に縦線文、内に櫛描文	116
				c	外は無文、内に櫛描文	117
		2	高台がやや低めで、見込で釉を輪状に削りとって重ね焼をする。無文。体外半釉である。大小あり			121－124
		3	2と同じ特長の器形だがかなり大形。体内に釉下鉄彩が施される。			147
Ⅷ	口縁は外反。比高は高くなく、高台も高くない。釉はほぼ高台までかかる。黄味を帯びた不透明の釉が多い。	1	口縁に刻みを入れ輪花とするもの多し。器内にはへらで花文に似た文様を描く。			125－128
		2	口縁に刻みあり。刻みに続けて白堆線を入れ輪花とする。見込で輪状に釉を削りとる。			134
Ⅸ	見込は広く平ら。器壁は直線的に斜行して開き、口縁で外側から微かに面取する結果いくぶん先ぼそりに終わる。見込では輪状に釉を削りとり重ね焼をする。体外下半は施釉していない。胎・釉は灰白色でいくぶん濃いめのものが多く、釉は貫入なし。					129－133
Ⅹ	見込に小さな茶溜りを作る。青白磁碗Ⅱと同じ系統の器形と思われる。器内には弧を組み合わせた波状文と櫛描文を組み合わせるが、これも青白磁に見られるもの。140は見込は広く平らであるが、やはり同じ系統のものであろう。釉はほぼ高台上まで。					138－140
Ⅺ	見込に小さな茶溜りを作る小碗。体内には弧もしくはらせん様の線文があり、体外に細い縦線を施す。胎は白っぽく小孔多し。釉は微かに青みある透明釉。					146
Ⅻ	外反する口縁は釉を削り口ハゲとする。比高は高め。高台はやや小さく外底のくりは浅い。	1	見込に小さな茶溜りがある。無文			137
		2	見込はやや広く平ら。体内を白堆線で区分			135
ⅩⅢ	高めの高台をもち、丸腰で体壁は垂直に上がる。施釉は高台までで畳付及び外底は露胎であるが、口唇の釉を削り口ハゲとしている。焼成は畳付に白いアルミナが付着しており正焼きであろう。胎は粗く灰色で釉は透明。体外に有鎬の菱形格子文を刻む。					23 M4－16

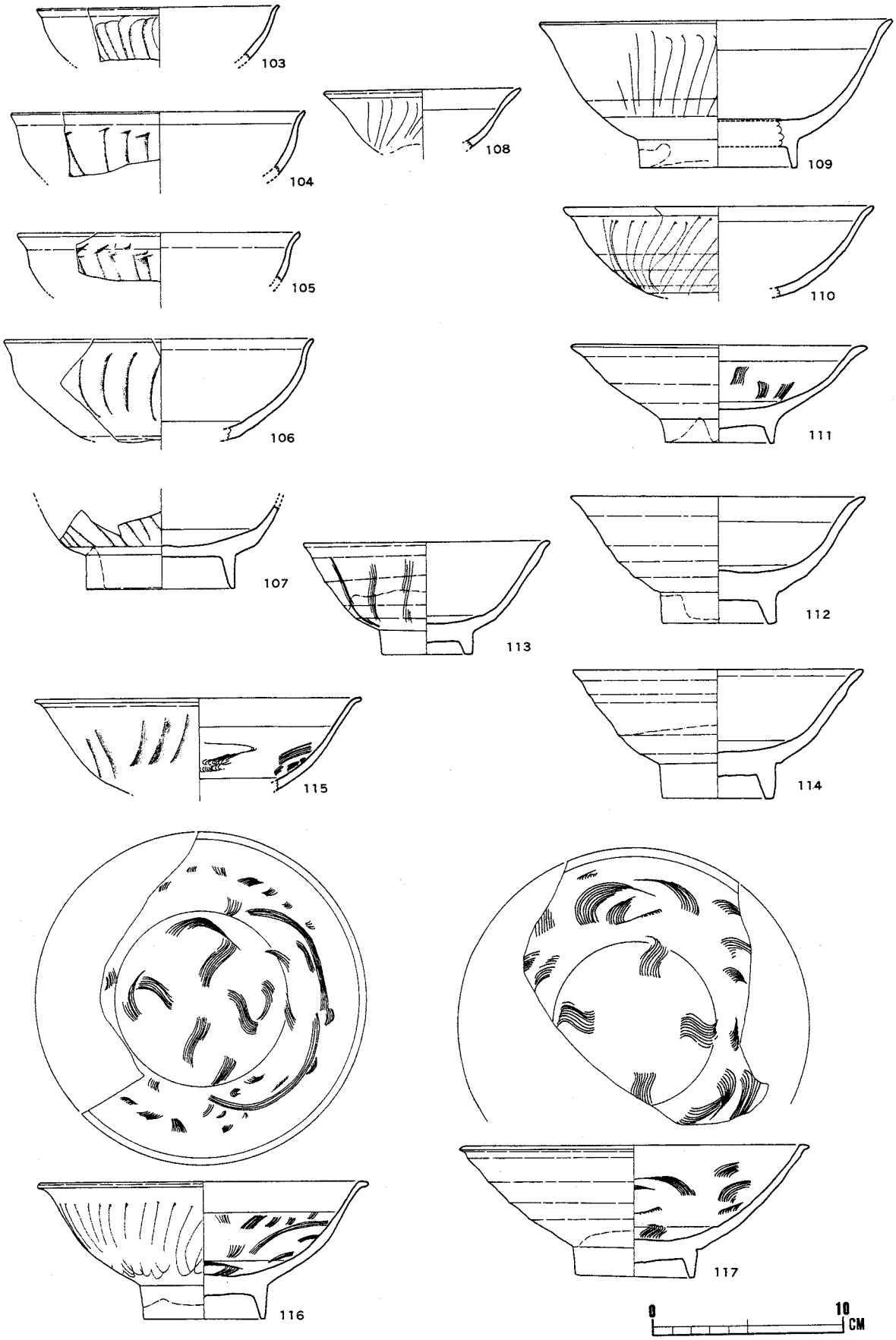


Fig. 70　4次調査　白磁 碗（2）

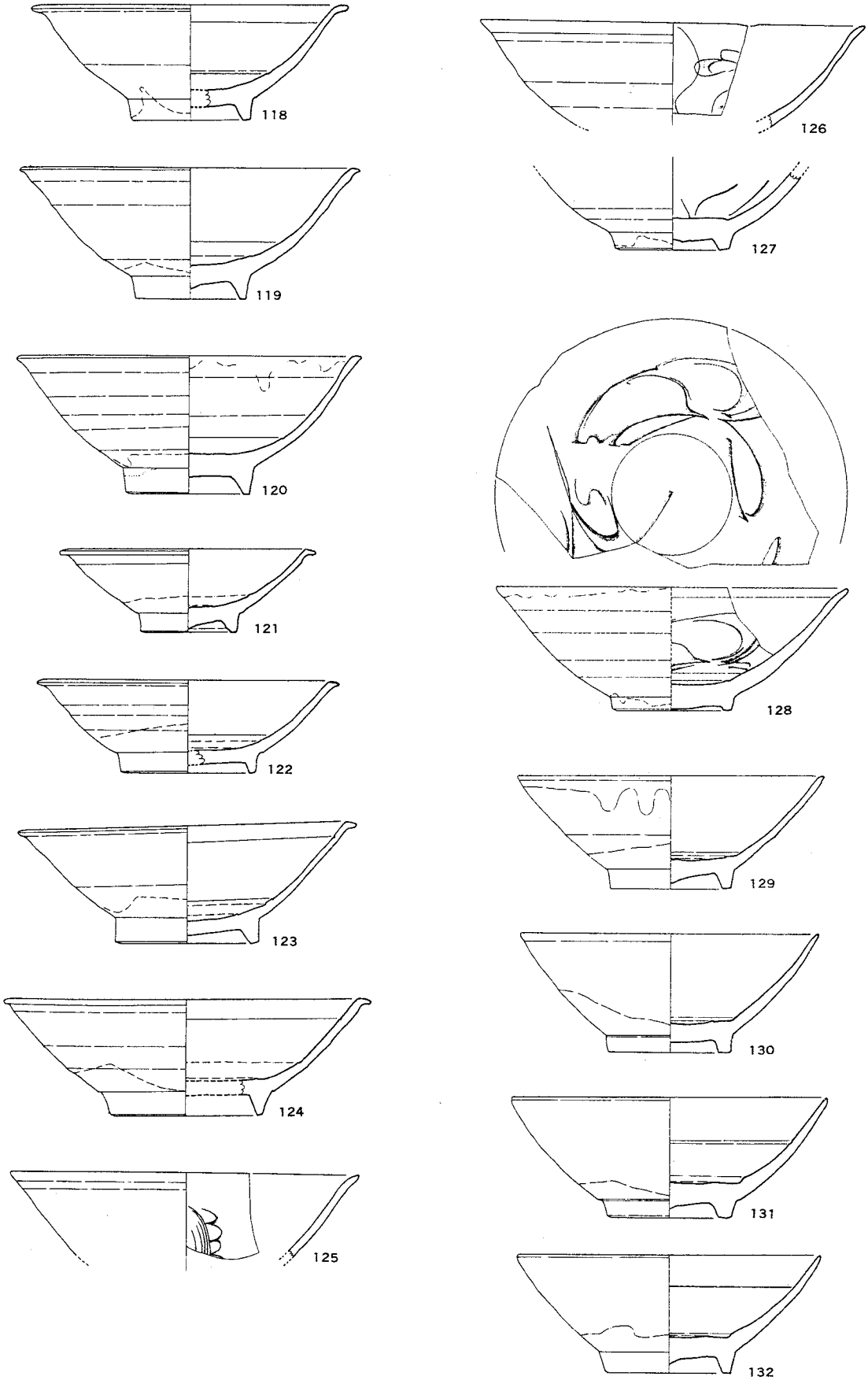


Fig. 71　4次調査　白磁 碗（3）

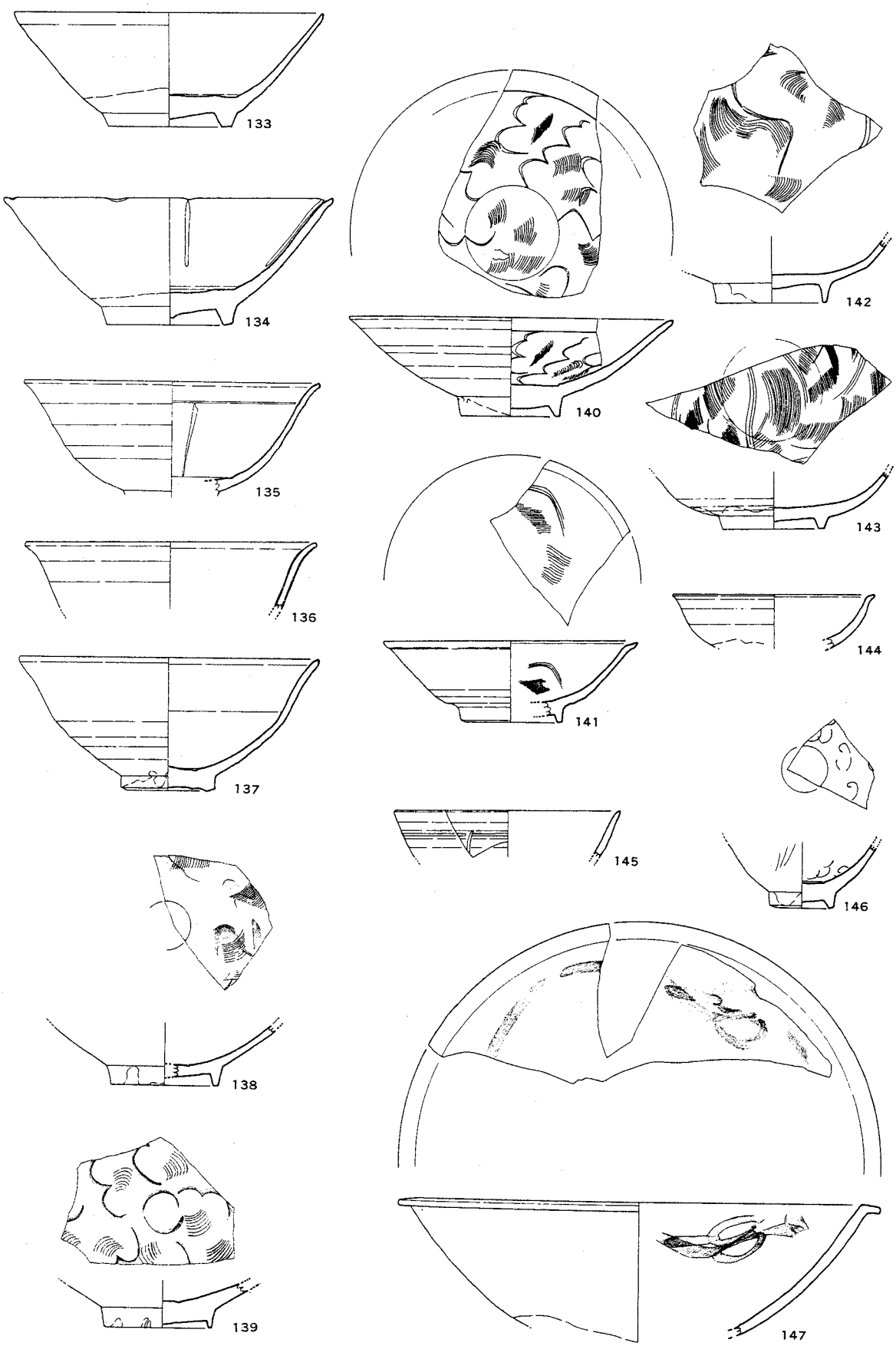


Fig. 72　4次調査　白磁 碗（4）

Tab. 5－1　白磁皿

Ⅰ	見込から内弯ぎみに開く体部は巾広で、見込径と同じくらい。平底、口縁は先細りに細くなるが、152のように外反する例もある。胎土は粗く灰白色。釉はベージュ～灰黄色で細かい氷裂がある。体外半釉。			a	無文	148，149
				b	体部白堆線で六区分	150
				c	細い櫛で劃花文	151
Ⅱ	Ⅰとよく似た釉胎だが色はやや濃いめで、青みを帯びた澱灰色から黄味の強いオリーブ色まで巾広い変化がある。丸くくぼんだ見込は広く、薄い体部が沈圏線を境いに角度を変えて立上がる。平底はⅠより小さく、体外半釉。時になまこ風の曇あり、細かい氷裂。					153－164
Ⅲ	高台は低く、外底の削りも浅く、白磁碗Ⅳに似る。釉・胎は灰白色やや粗い。	1	口縁を丸くおさめる。			165－170
		2	折返し、断面三角の玉縁口縁。			171，172
Ⅳ	口縁肥厚ぎみで外反するやや平たい皿。見込で輪状に釉を削り重ね焼をなす。輪高台がつき体外半釉である。釉・胎は灰白色だがかなり白いものがある。173－176は見込全面施釉のまま。焼成時天井に積まれたものであろう。					173－182
Ⅴ	平底から直線的に斜行する体部の皿、器全体に施釉後外底を削る。灰白色の釉胎だが、かなり白く、光沢あるものが多い。見込は体部側で削った沈圏線でかこむ。	1	肥厚した口縁は外反する 体部を白堆線で区分（183の図は堆線欠落）			183－186
		2	口縁は外反させ、斜めに削り整える。	a	無文	187－189
				b	体部を白堆線で区分	190－192
Ⅵ	器形は基本的にはⅡに似るが、外底が広く削られるためかなり平たい皿となる。胎土は粗く灰白色。灰～空色を帯びた白濁色の釉はかなり厚め。	1	全体に施釉した後、底を削り露胎とする。	a	無文	193，194
				b	櫛描文	206－208
				c	劃花文と櫛描文	209－214
				d	劃花文	195－205 215，216
		2	釉は底まで到らず下半露胎	a	無文	220，221
				b	劃花文	222，223
Ⅶ	やや大形で平らな見込から、体部が折れて立上がる。釉はよく熔けて光沢があり、氷裂はない。灰白色。焼きは安定している。			a	印花文	217－219
				b	劃花文＋櫛描文	224

Tab. 5－2　白磁皿

Ⅷ	これもⅡに似た形だが極めて低い高台が作り出されている。胎土はベージュもしくは灰色を帯びた細い土、釉は淡いベージュ～乳灰色で半濁、細かい氷裂がある。施釉はおおむね高台脇までで、高台及び外底は露胎。	a	櫛描文	229，230
		b	線描の花文	232，233
		c	線描の弧線文	235－237
Ⅸ	Ⅰに似た形だが平底の少し上で軽く削りを入れる結果、痕跡のような高台が見られる。外底部のみ露呈で、見込にはいずれも櫛描の文様が見られる。胎は灰白色で淡いオリーブもしくは青灰色を帯びた釉がかかるが十分に熔けず濁っている。氷裂はない。青白磁皿Ⅱ－1との関連を思わせる。			238－240
Ⅹ	平底から直線的に斜行する体部をもつ。見込と体部の境はなく口縁は肥厚する。体下半露胎。灰白～灰胎で灰緑～灰青色を帯びる釉がかかる。色は白磁としたものの中では最も濃い。氷裂はない。	1	口縁は折返し、肥厚している。折返し分が境をなし、玉縁を作っているものもある。248は1か所でつまみ出し注口としている。	241－248
		2	口唇で釉を削り口ハゲとするものがある。	249
Ⅺ	殆ど同じ厚さの平らな底部から折上げた体部をもつ。	1	口ハゲでないもの。	251，252
		2	口ハゲ。底部の釉を拭きとった跡が平行に残る。大小があり、口縁にも変化がある。	253－261
		3	口ハゲ。底部及び底の少し上まで釉を削りとっている。大きさは画一的。底に他器の焼きついた跡あり。	262－265
Ⅻ	高台つきで口ハゲの皿。無文で外底は露胎である。			266
XⅢ	高台つきの中皿で、口縁外反。見込に櫛描文を施し、体部にもぐるりと短い櫛描の縦線文をめぐらすもの。灰白色の釉胎で焼きはよい。			268
XⅣ	クリームがかかった乳白色の胎に細かい氷裂のある透明釉がかかる。畳付のみ露胎で見込と畳付に灰色の大豆大の目跡が5こついている。	1	見込は広く平らに削り、体部は直線的にゆるく斜行する。口縁は軽く内弯する。	273
		2	広い器面は見込と体部の境なく平ら。口縁下で急に内弯させ口唇は微かに外反する。	274

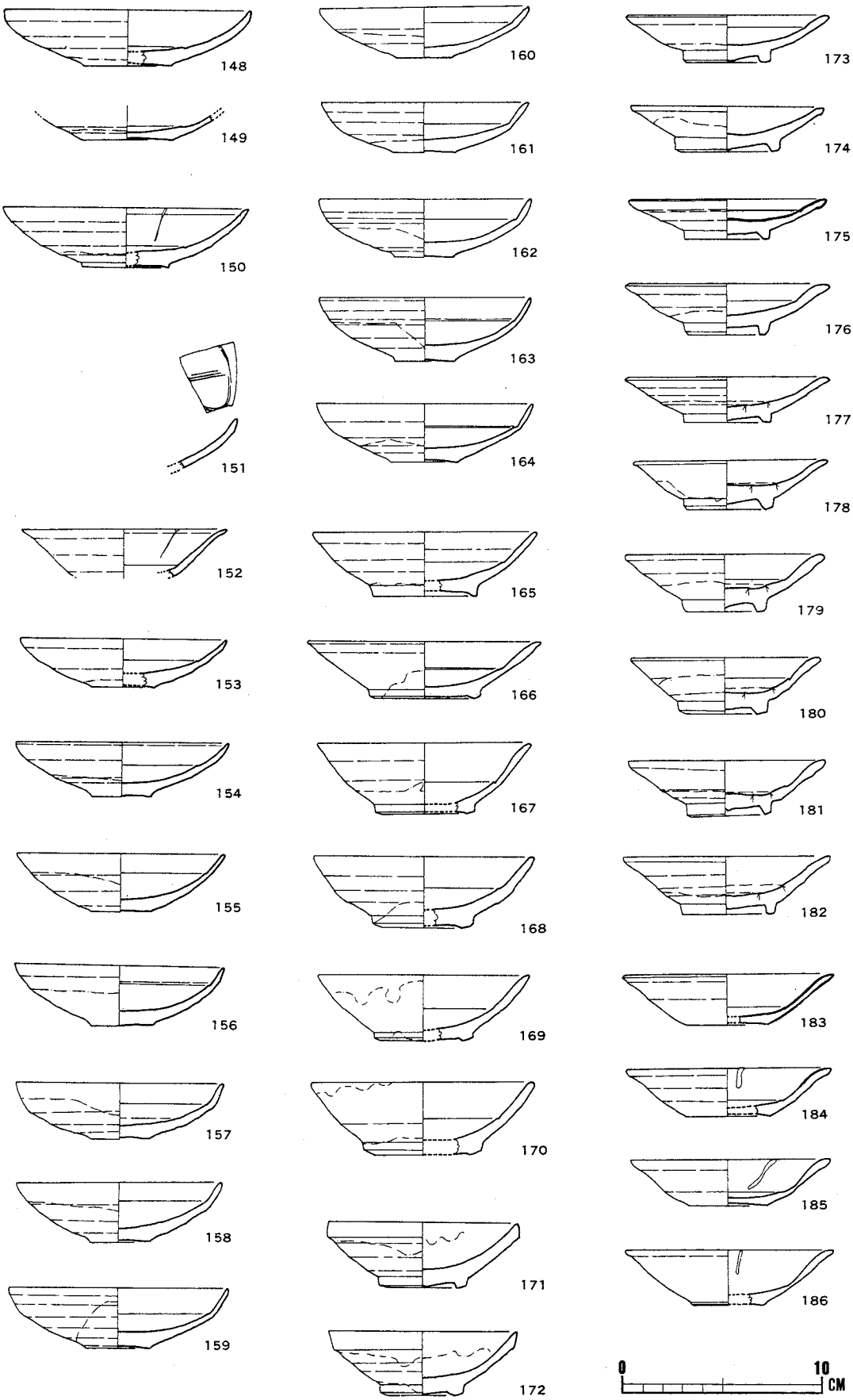


Fig. 73　4次調査　白磁 皿（1）

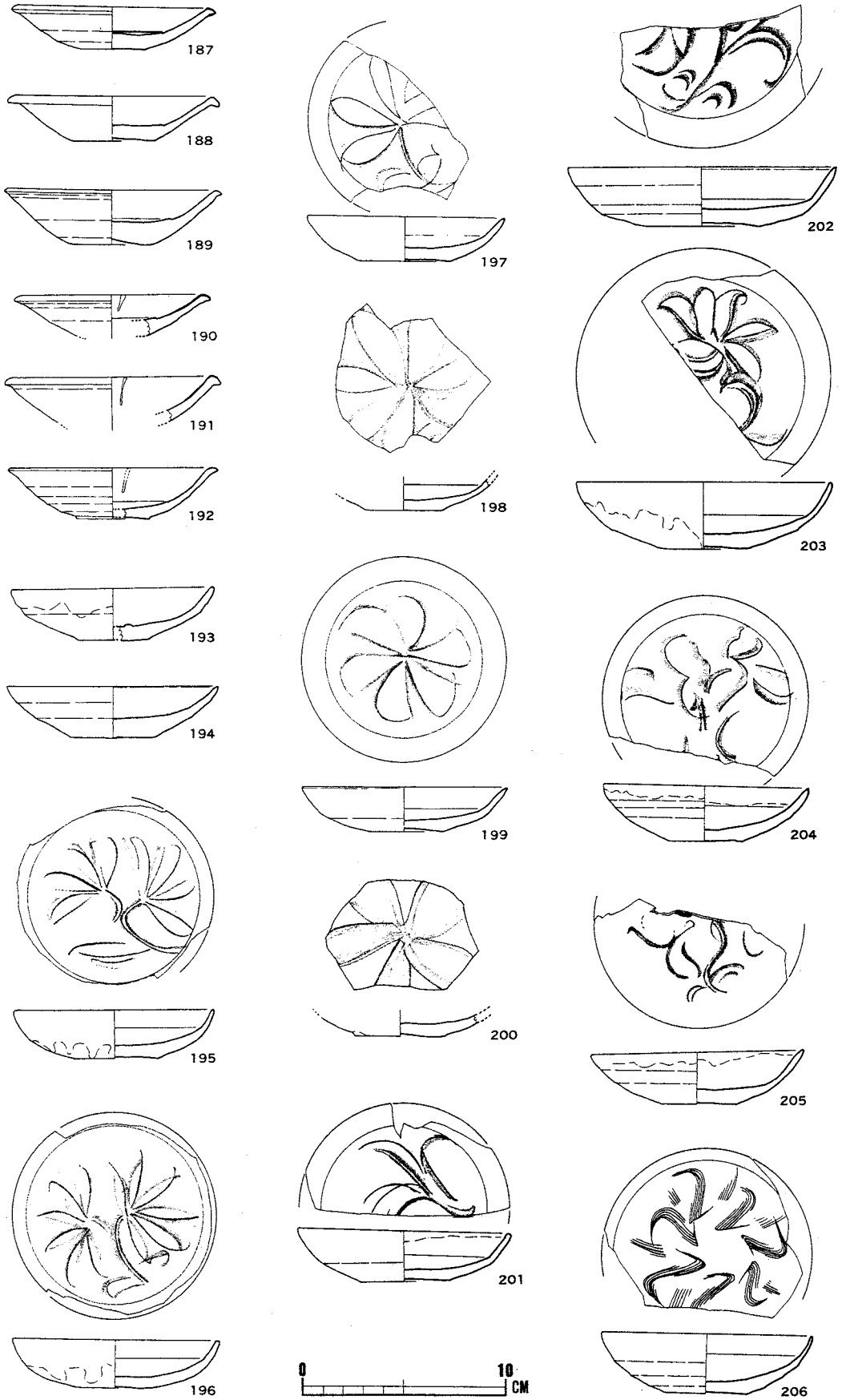


Fig. 74　4次調査　白磁 皿（2）

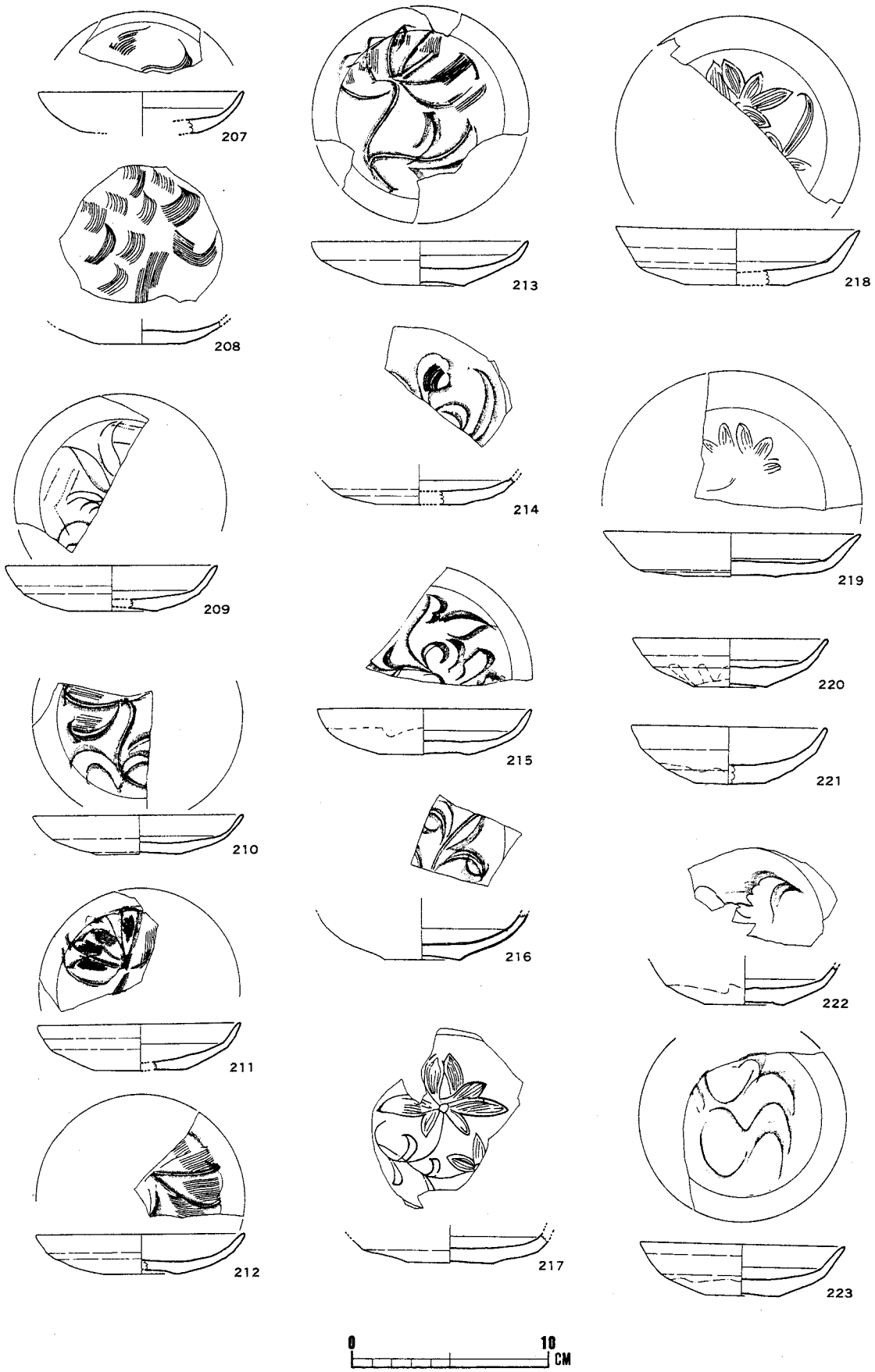


Fig. 75　4次調査　白磁 皿（3）

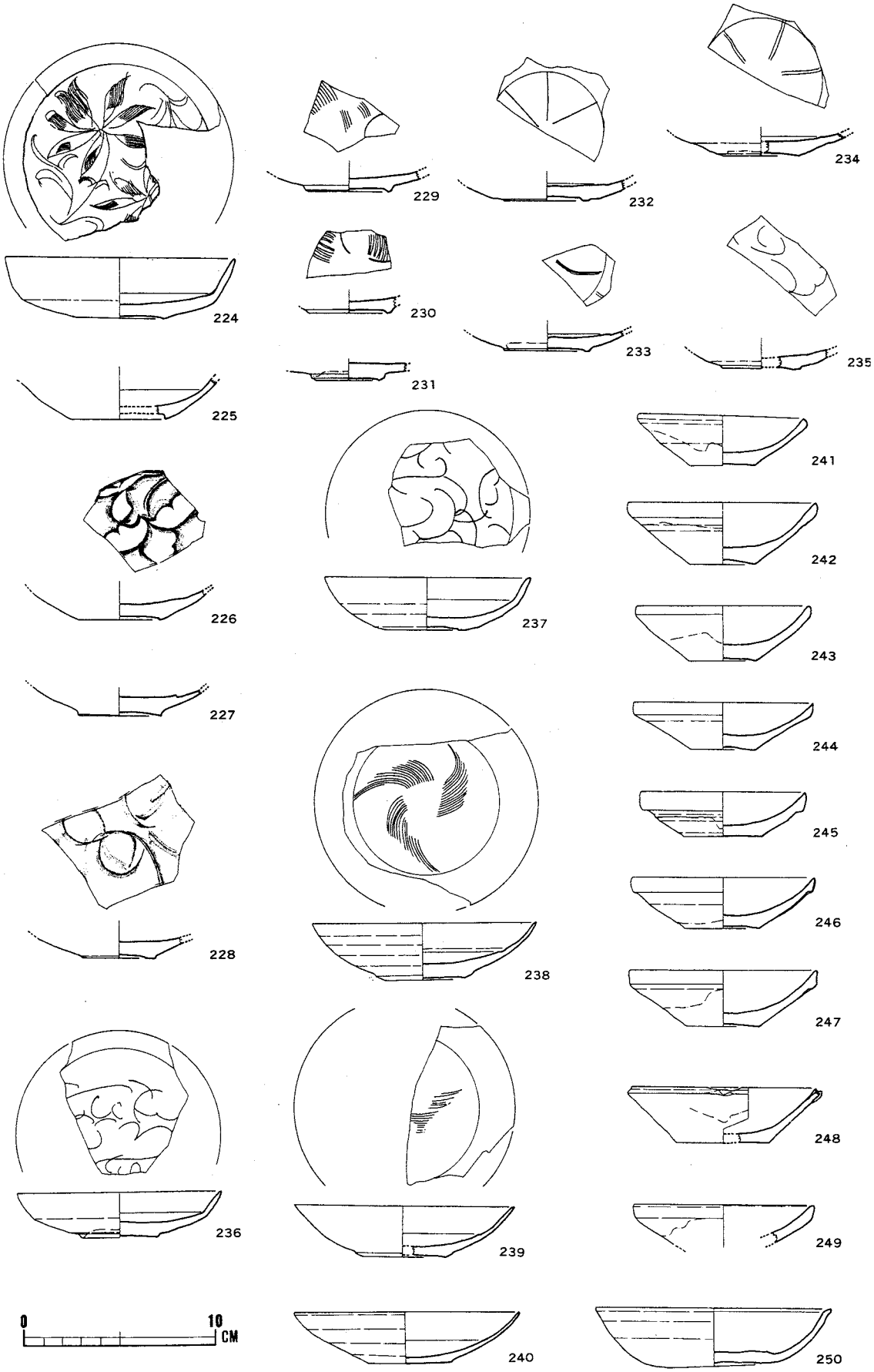


Fig. 76　4次調査　白磁 皿（4）

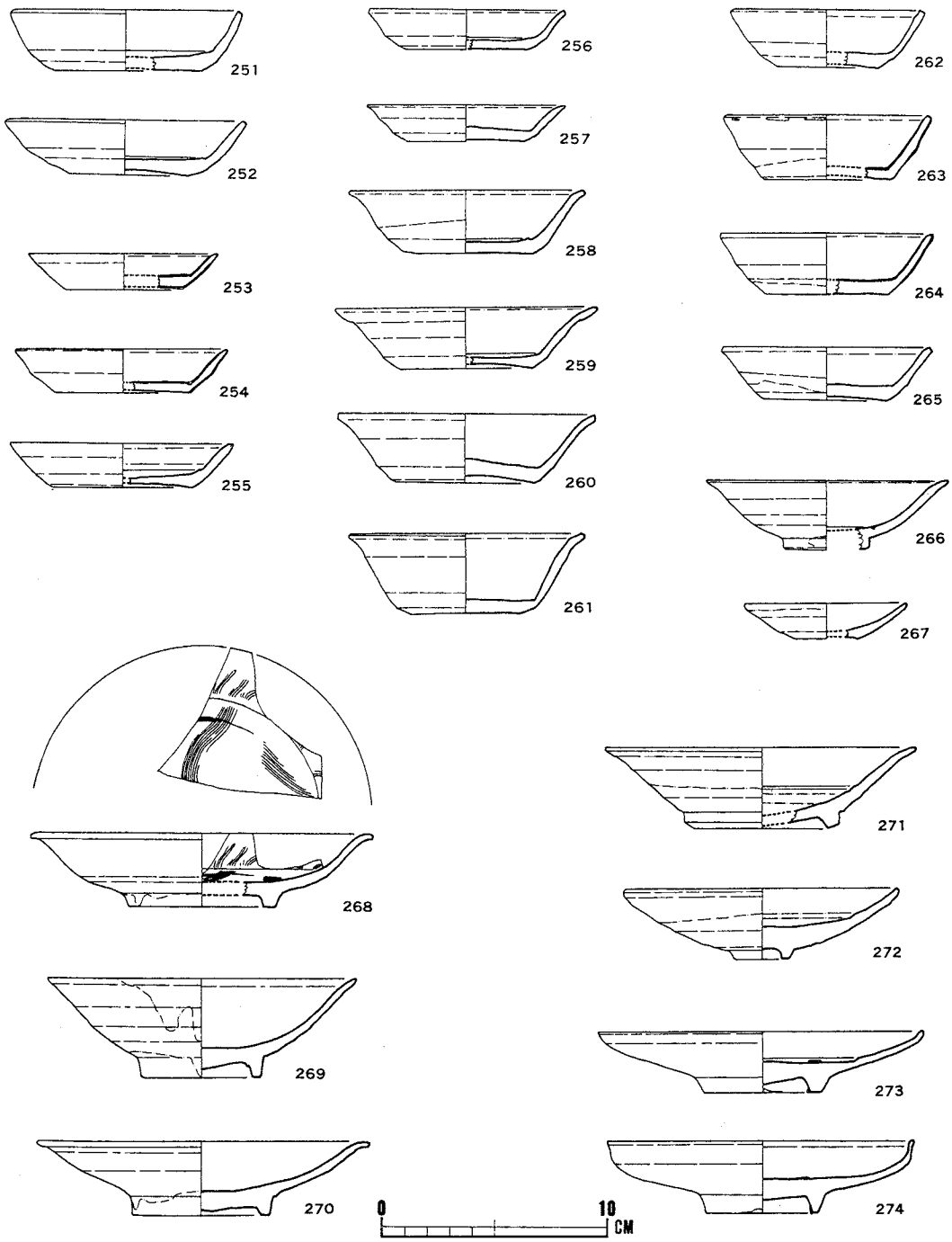


Fig. 77　4次調査　白磁 皿（5）

〔白磁壺・水注など〕　四耳壺や水注の破片もかなり多いが全形を知り得るものは少ない。しかし底部の造りを見ると、高台を造り出していないもの（283）や、あっても控えめなもの（279、284）が多く、12世紀を降るものはないと思われる。水注は一般に12～13世紀に比定されてきたタイプのものが殆どが占めている。中で292、293は同一個体の壺と思われるが灰白色の胎に白化粧を施し微かにオリーブがかった透明釉をかけていて、他のものとははっきり異なっている。298、299は口ハゲの小壺、300－305は内面露胎の炉、306－310は景徳鎮の合子と共に経塚から発見される壺形合子とその蓋。その他ミニチュアの杯や合子などがある。301－304は淡色系の珠光青磁に似た釉色で、福建省の北部山寄のものとの教示を受けている（なお312－314は国産有田の杯である）。

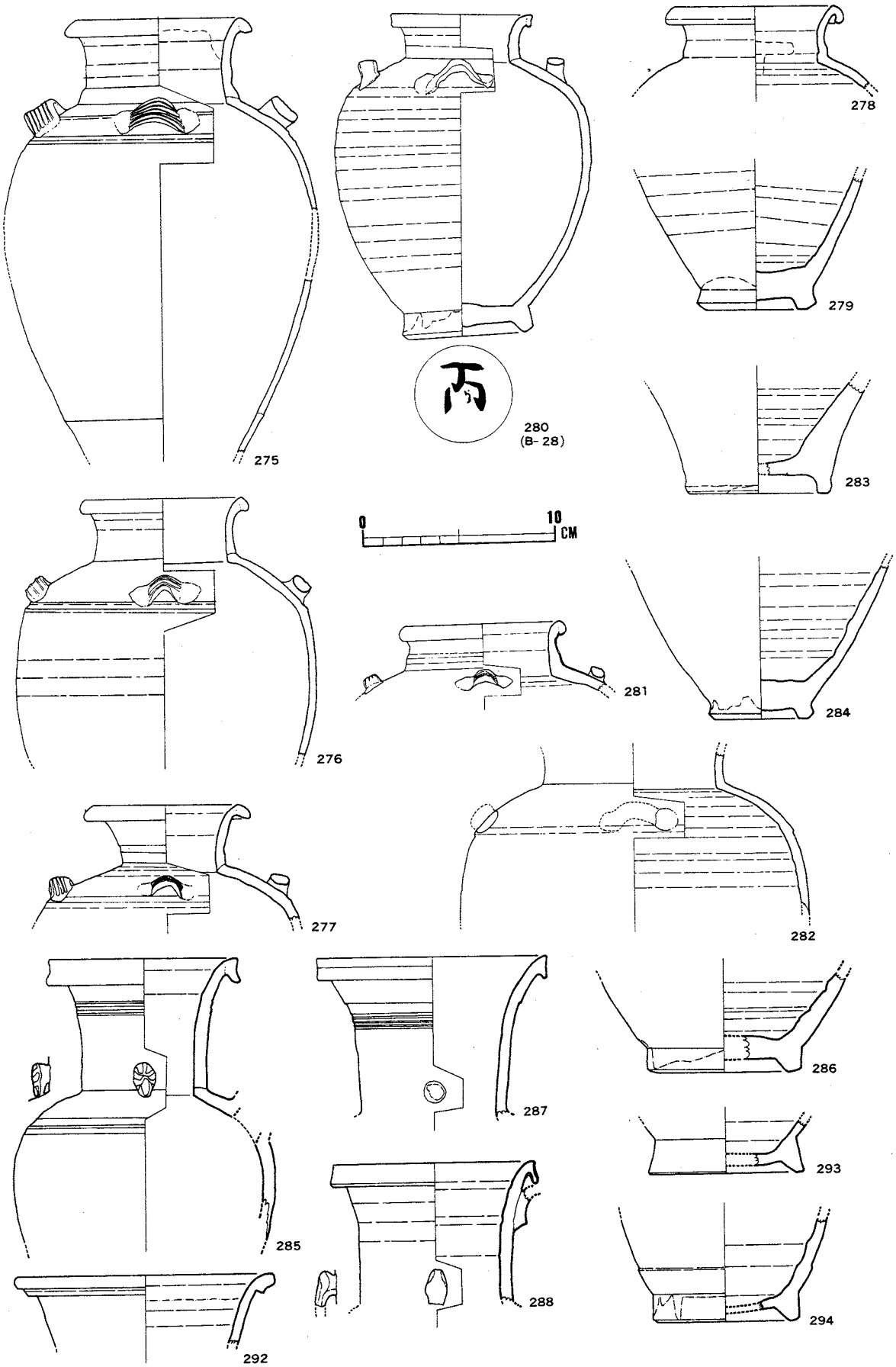


Fig. 78　4次調査　白磁 水注、四耳壺

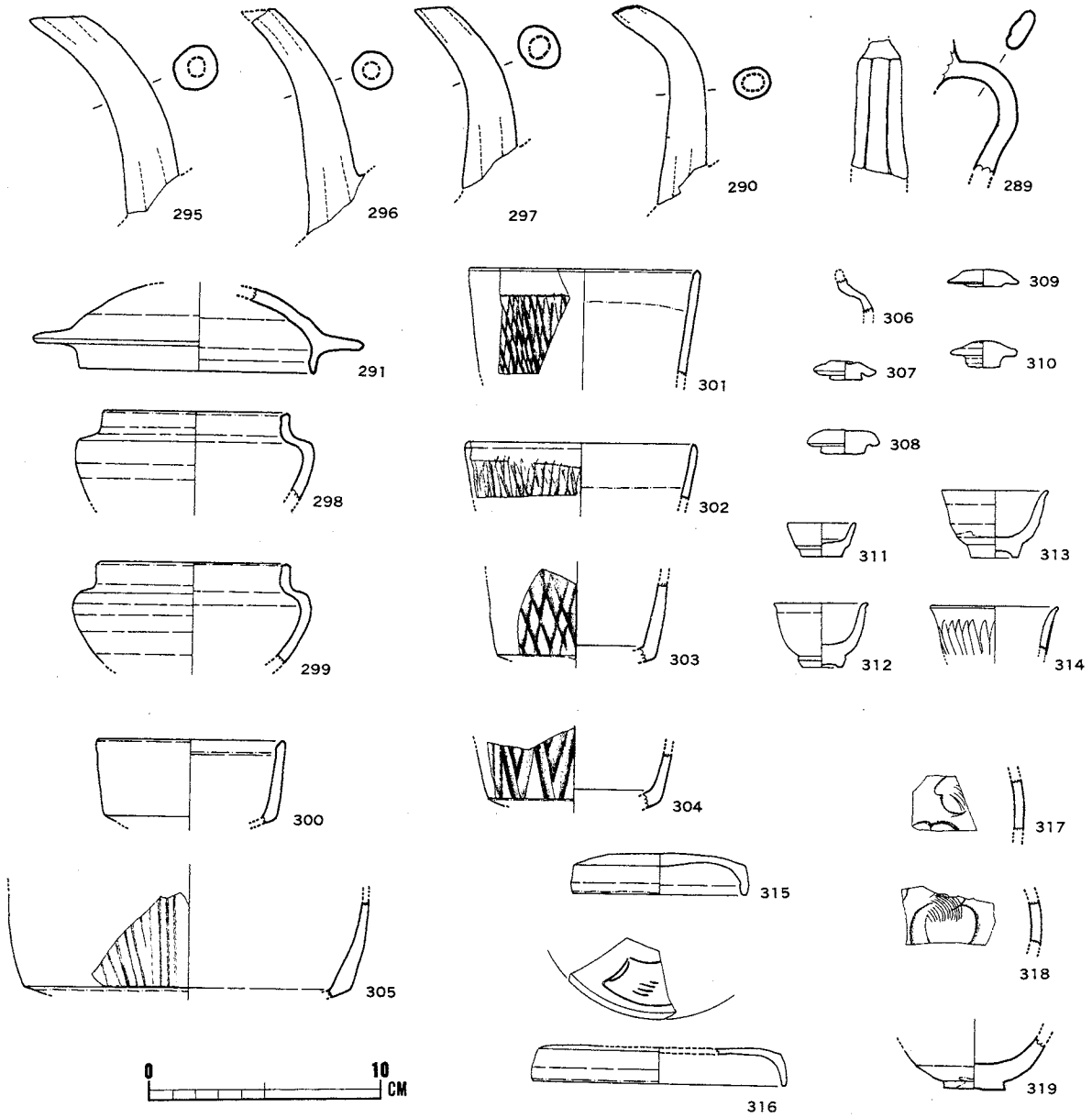


Fig. 79　4次調査　白磁 水注、その他

〔青磁（耀州窯系と越州窯系）〕　本遺跡の青磁は殆どが龍泉窯系、同安窯系の青磁であるが320－322の三片の陝西省銅川耀州窯の窯系に属する青磁印花碗が検出された。320は蓮の枝に唐子の図柄で、完形の類品がいくつか知られている。(1)

323は灰色のかなり精良な胎に灰緑色の鈍い艶の釉がかかる受け口の瓶。324はこれに比して釉胎ともやや茶色味のある蓋で光沢がある。325は更に茶色に傾く。326は暗灰色粗胎にオリーブ色の釉が薄くかかる平底の碗。底は揚げ底である。329, 330は同一個体と思われるもので、やや明るい灰色の精良な胎に、明るいオリーブ系の釉がかかる。釉層は薄い。肩には片切彫による菊弁文をめぐらし、体には片切彫と櫛描き平行線で花文を描く。331はよく似た特長のやや暗色の破片。332は見込に白い目土を残す鉢で体外下半は露胎である。323（327、328は除く）以下は浙江省を中心に焼かれた10－11世紀の、いわゆる越州窯系青磁である。中でも婺州窯との指摘のあるものもあり、今後は越州窯系の細分が要求されるようになろう。

(1) The museum of Far Eastern Antiquities, Stockholm, Sweden や The Musée Royal de Mariemont, Belgiumなどに所属されている。

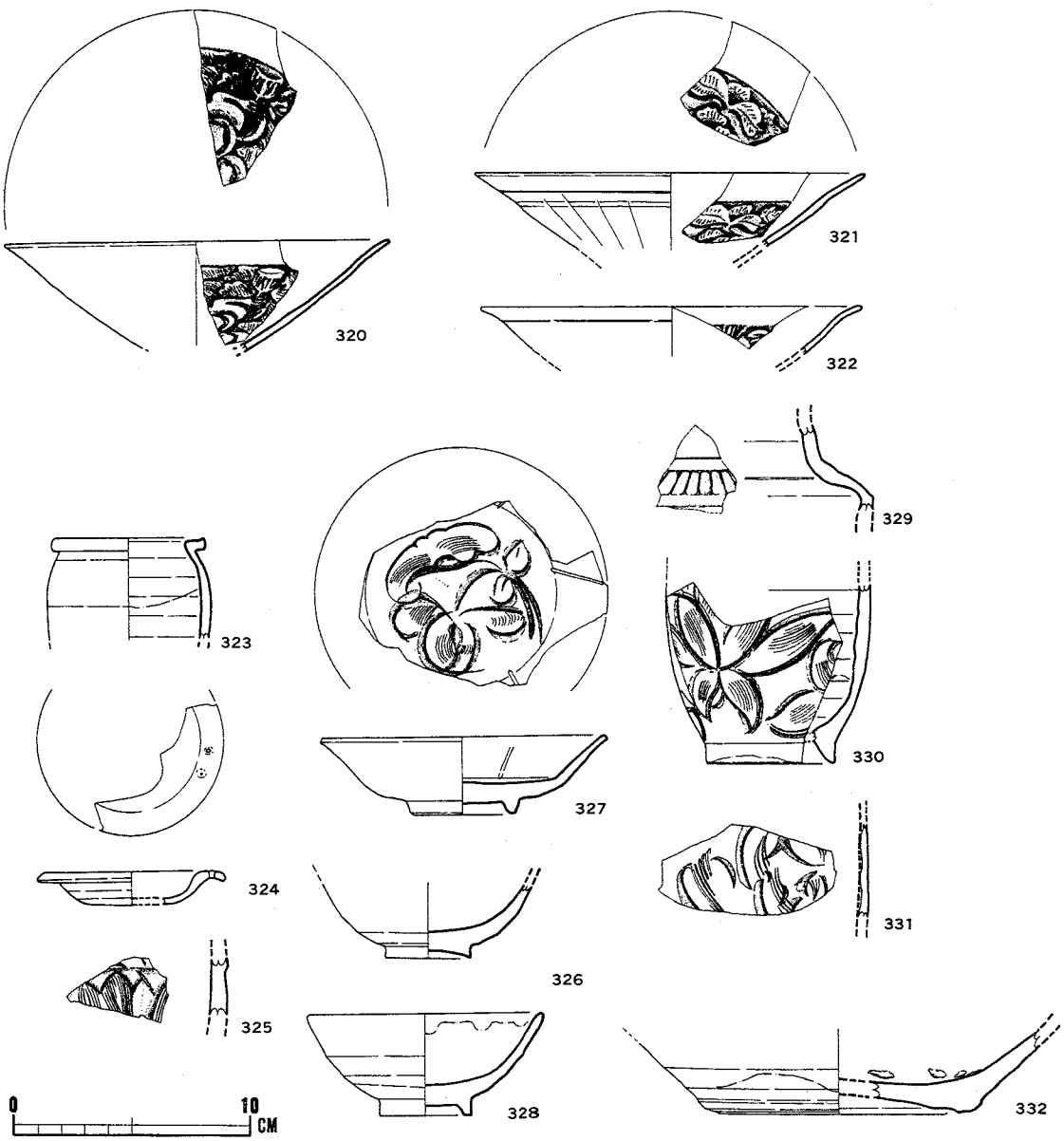


Fig. 80　4次調査　青磁　越州窯系、耀州窯系

〔青磁　（龍泉窯系）〕　浙江省龍泉を中心に焼かれた宋元代の代表的な青磁である。Ⅰ・Ⅲ類は太宰府の分類を踏襲した。これまで中国ではⅠ類は北宋、Ⅲ類は南宋と大まかに考えられてきた。しかし最近発表された龍泉山頭窯と大白岸窯の発掘報告(2)では、我国での出土状況とよく合致した結果が見られ興味深い。即ち、当遺跡では山頭窯のⅠ～Ⅳ類に属する青磁碗の小片が数例あり、Ⅴ類は例を増すが最も多いのはⅥもしくはⅦ類で、Ⅷ類は決して多いとは言えない。これらはおおむね南宋に属する。ここでⅠ’類としたものは体外下半露胎のもので、福建省蒲田窯でこのような青磁の報告があり、龍泉窯影響圏の縁辺地帯のものと思われる。Ⅲ類は器面全体に施釉後畳付のみ釉を削り落としたもので南宋晩期から元早期に比定されるものである。ここでⅢ－2、3はその他の典型的な龍泉窯Ⅲ類と異なった趣きを備えている。Ⅲ類の碗形が少ないことに注目しておきたい。

(2)　山頭窯与大白岸－龍泉東区窯址発掘報告之――浙江省文物考古所学刊　1981

Tab. 6　〔青磁（龍泉窯系）〕Ⅰ類碗

1	体外壁に放射状に直線文を彫る。内壁には櫛具とへらを用いた施文が見られる。当遺跡では極小数の小片がみられるのみで、全形は知り得ない。					図例なし
2	無文碗　体壁の内外とも無文のもの。	a	全体無文のもの。	ア	無文碗	334，335
				イ	見込に目跡がある。	333
		b	見込に印文がある。			
		c	見込に刻文がある。			
3	輪花碗　体壁を5か6に区分する。	a	口縁に刻みを入れ、体内壁は白堆線で区分。見込に印文を有するものもある。			336－338
		b	体内壁を刻線で区分。見込に目跡あり。			335，356
4	劃花碗　体内壁にへらもしくは櫛具で施文。あるいはこの二つを組み合わせた文様をもつもの。	a	蓮花水波文　蓮花をへらで描き、間隔を櫛文で埋めるもの。蓮花が消え、蓮葉のみ残るものが多い。			345，346
		b	蓮花折枝文　蓮花の折枝が二本もしくは三本描かれているもの。花や葉に櫛文でアクセントがつけられている。			340，343，344
		c	蓮花折枝文　蓮花の折枝三本、あるいは蓮花二本に蓮葉一本が描かれる。			339，341
		d	雲文　体内壁を二～三本の平行線で五つに花弁様に区分し、各区にｅの字を綴り合わせたような雲文を刻む、雲文のないもの、六区に分けるものなどがある。			347－349
5	脈入陽刻蓮弁碗　体外壁に蓮弁を刻み、その上に細い櫛描線文を施す。（型押しか）	a	口縁をかなり強く外反させる小ぶりの碗。この形のものは内壁に蕉葉文を施すのが多い。体外の蓮弁は無鎬。			D1－11
		b	内壁に蓮花折枝文の碗。体外の蓮弁は有鎬。			354
6	蓮弁碗　体外に蓮弁を飾るもの。内壁は無文	a	陽刻の有鎬蓮弁は通常複弁である。			350，351
		b	蓮弁をへらで描く。			M1－3

〔青磁（龍泉窯系）〕Ⅰ’類碗

Ⅰ類碗の4－ｂの型の一例（353）と5－ｂの型の一例（352）のみを検出。

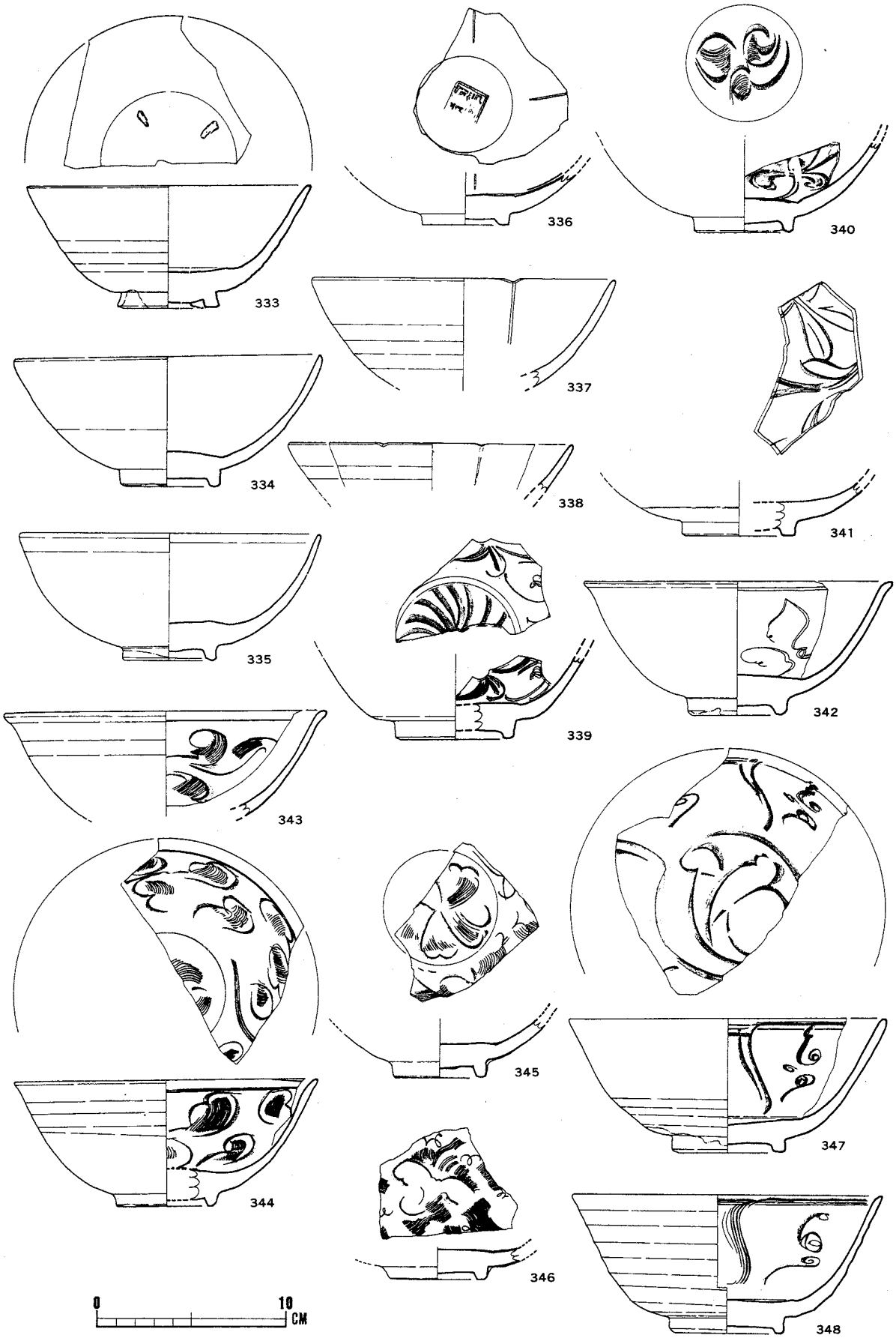


Fig. 81　4次調査　青磁 碗　龍泉窯系（1）

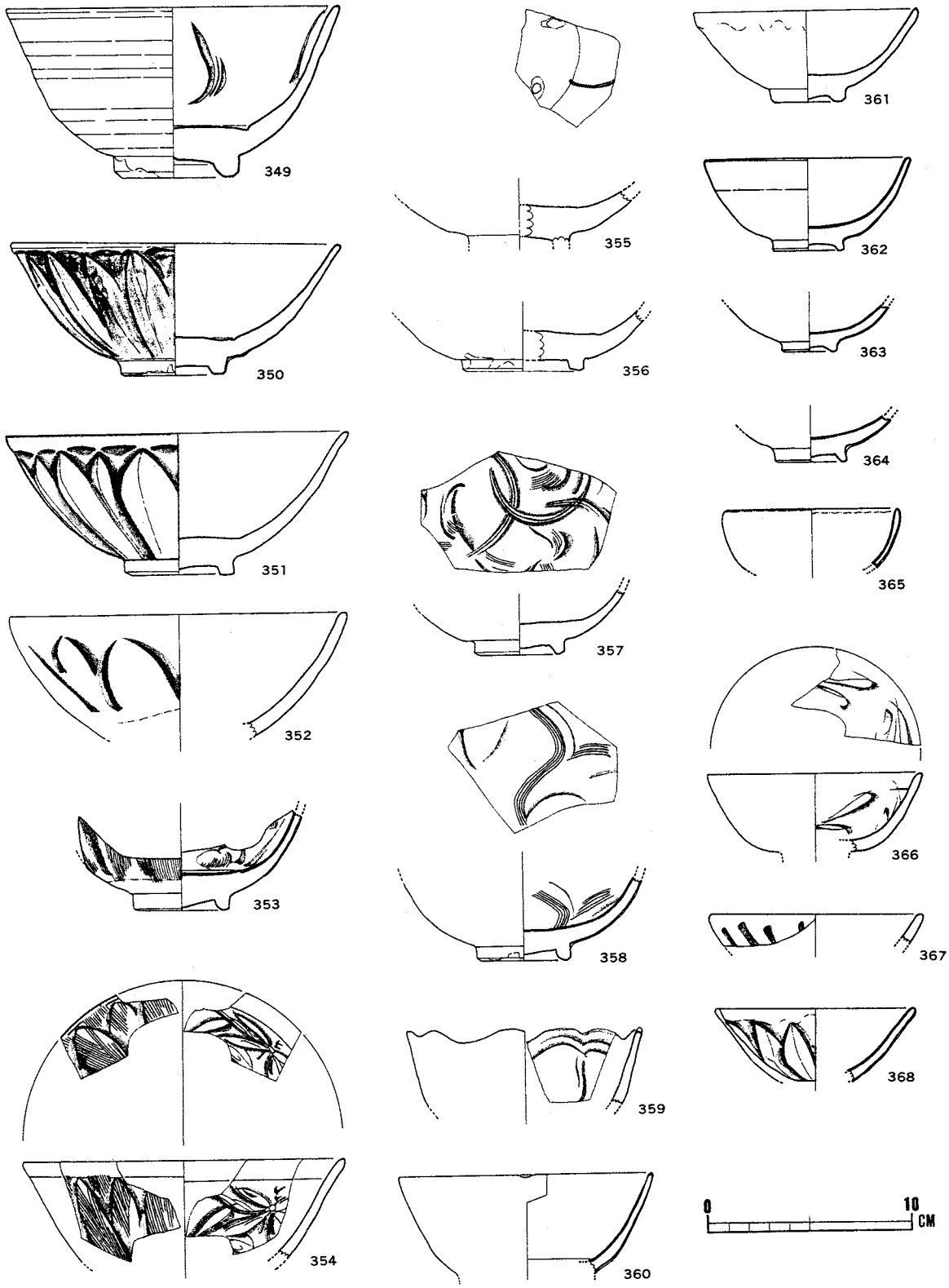


Fig. 82　4次調査　青磁 碗　龍泉窯系（2）

Tab. 7　〔青磁（龍泉窯系）〕Ⅰ類小碗

1	無文	a	内外無文である。	328 361－364
		b	口唇の釉を削りとる	365 D1－14
2	輪花碗	a	口縁に刻み。	360
		b	口縁全体を花形に作り体内を刻線で区分。	359
3	劃花文碗	a	碗Ⅰ－4－ｃに対応	366
		b	刻線を入れ器外菊花とする。	367
4	蓮花碗　碗Ⅰ－6－ａに対応。			368

Tab. 8　〔青磁（龍泉窯系）〕Ⅰ類皿

1	高台付皿　口縁外反。			327，371
2	高台付皿　口縁がまっすぐ終わるもの。			369，370 372
3	平底皿 （折腰） 外底露胎	a	無文	385－389
		b	劃花文	373－377
		c	劃花文＋櫛描文	378－384
4	平底皿　体部は見込から自然に斜行。口縁に刻みを入れ白堆線で体部を区分。外底露胎。			390
5	碁笥底皿　劃花文。非常に細かい櫛描の劃花である。釉は青灰色厚し。			391

Ⅲ類は白～灰白色胎に厚い釉がかかり、底部畳付を除いて全面施釉されているものである。

Tab. 9　〔青磁（龍泉窯系）〕Ⅲ類

1	輪花小鉢　浅青色の不透明釉			392
2	深碗　腰を張り体半ばでやや内弯させ口縁は外反。釉は生焼か青緑を帯びる乳濁色。			393，394
3	蓮弁碗　巾の狭い有鎬蓮弁で底は小さく、口縁外反。396の類は氷裂があり、蜜色に発色するものもある。			395，396
4	無文平小鉢　広い底部、体部は直線的に斜行、口唇は小さく外反する。大小がある。			397－399
5	平鉢　体部は丸くつば口縁端で僅かに立上がる。	a	無文　大小あり。	402，411
		b	体内削り落としの菊弁文	400，401
		c	見込に貼花で双魚文。	403
		d	体外は細い鎬文、体内は刻花文。大形	412
6	蓮弁鉢 体外は陽刻蓮弁、口縁は外反し上面を水平に切る。	a	無文（破片のためか、貼花文未確認）	405，409，410
		b	見込に貼花双魚文	406
7	蓮弁鉢　広い見込。体部は曲線を描いて上がり、そのまま先細りに終わる。			404

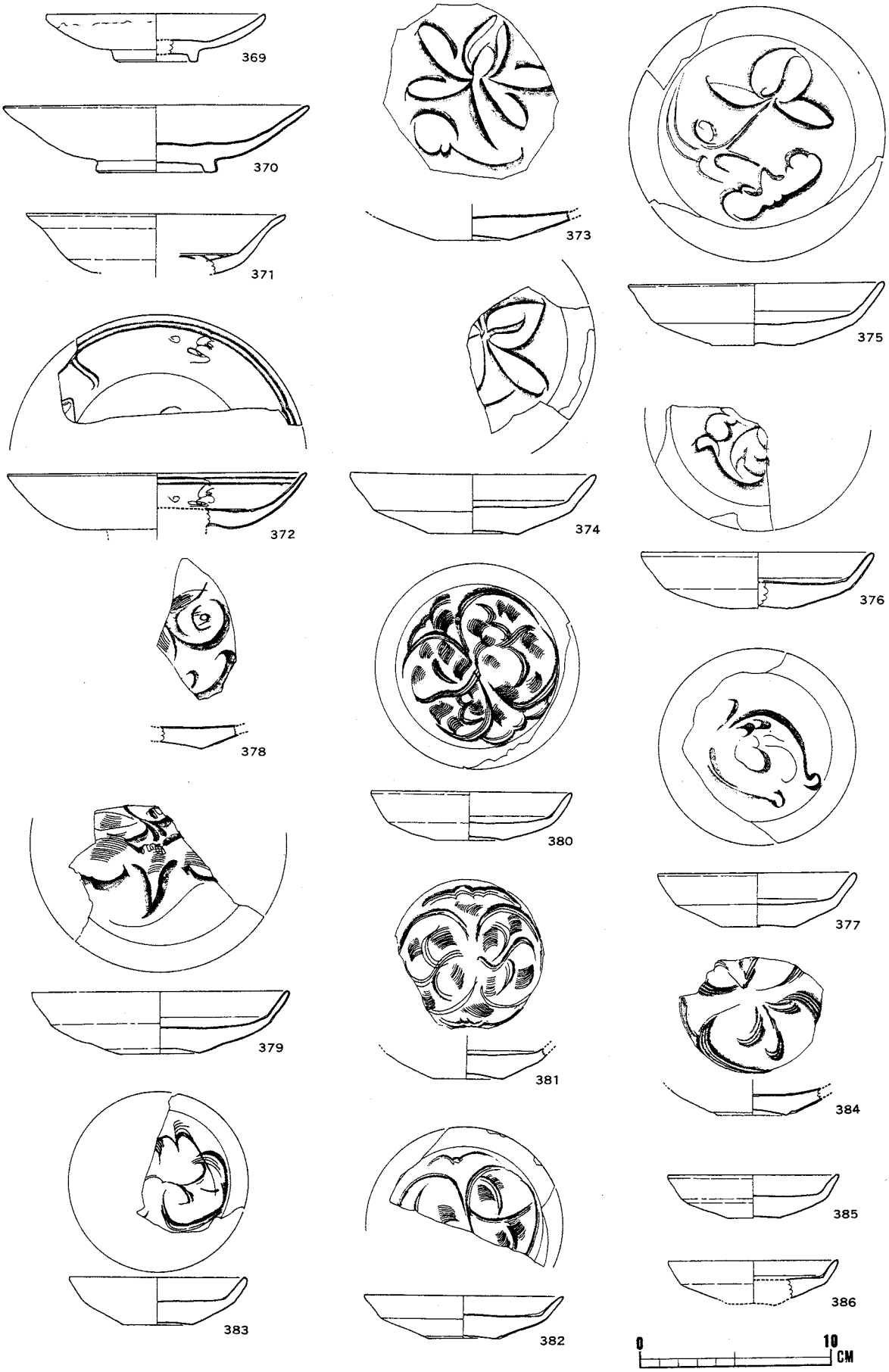


Fig. 83　4次調査　青磁 皿　龍泉窯系

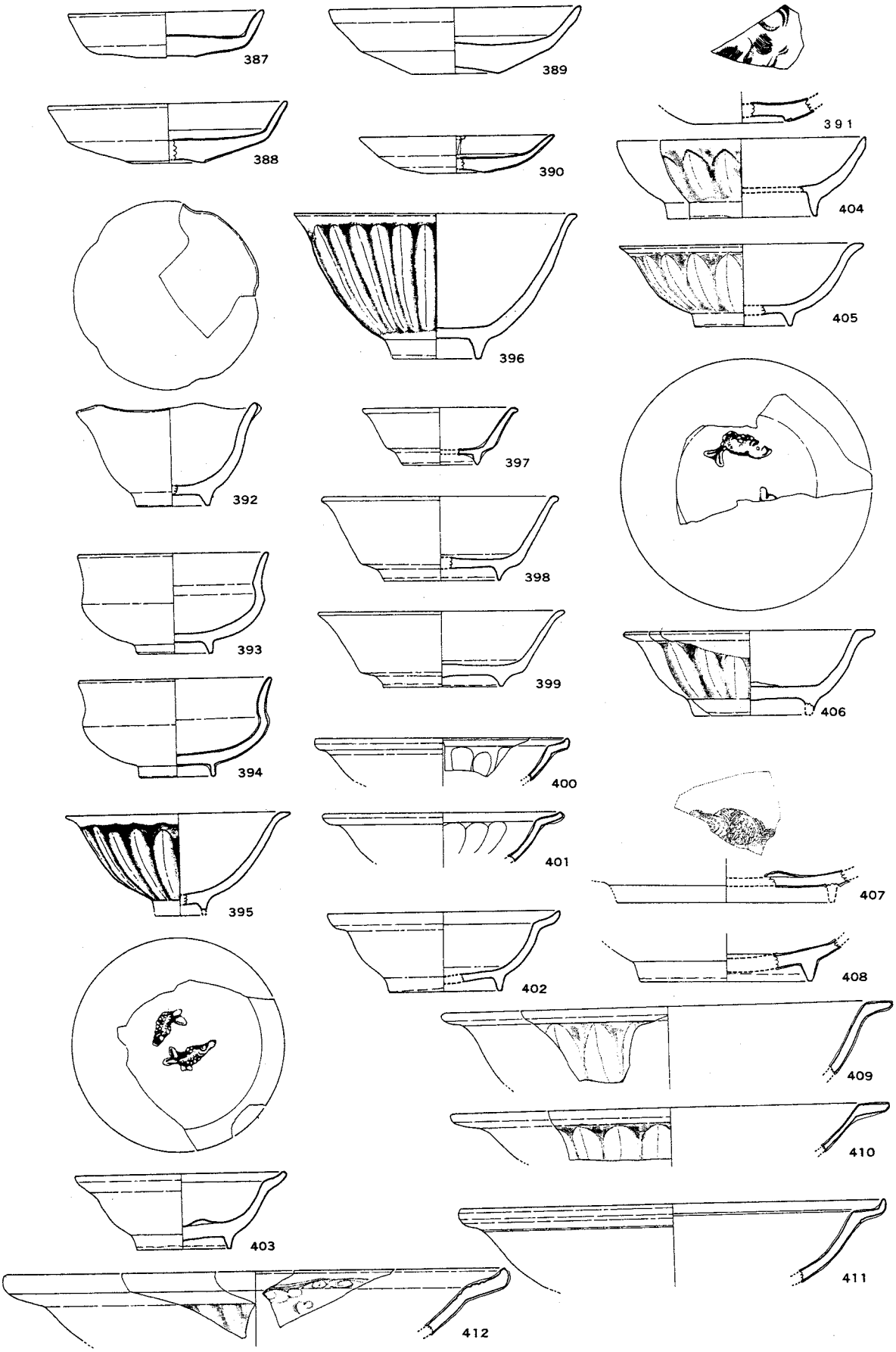


Fig. 84　4次調査　青磁 皿、碗　龍泉窯系

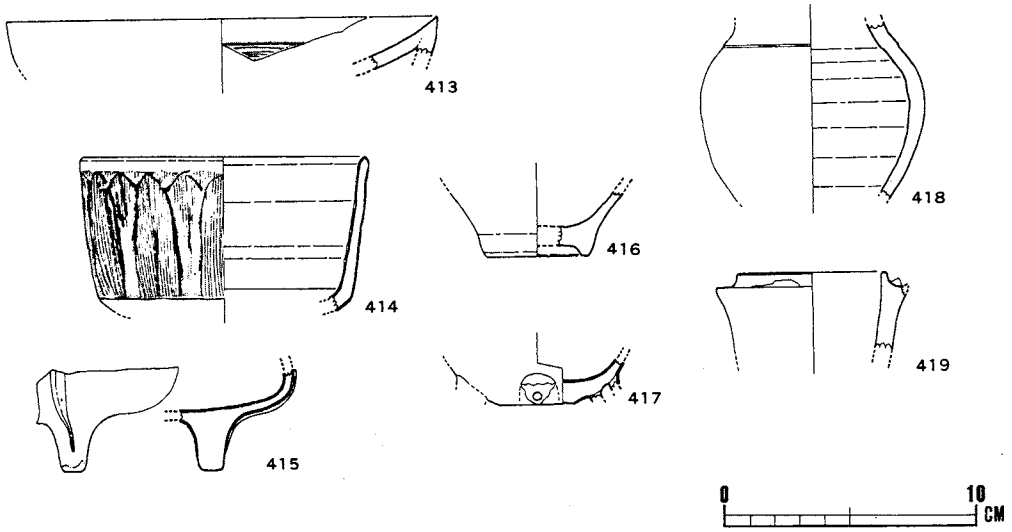


Fig. 85　4次調査　青磁 その他の器種　龍泉窯系

碗・皿以外の青磁の器物としては、龍泉窯系のものが数点みられるが、413、D1－12は双層碗、414、415、417の香炉、416、418の袋物、419の蓋物などがある。415がⅢ類に属する以外はみなⅠ類で、南宋代のものと見られる。

〔青磁（同安窯系）〕　南宋代に国外の需要に刺激されて興ったといわれる福建省沿岸地方の窯の青磁である。櫛様の施文具を用いた文様、透明感の強いガラス的な釉、粗い造りが特徴的であるが、当遺跡では、少々趣きの異なる精品がかなり検出された。これらをⅠ類としたが、それは前述の龍泉山頭窯、大白岸窯のⅠ～Ⅲ類と極めて似ており、現段階では両者を区分できる自信がない。将来この同安窯系Ⅰ類から龍泉窯系に移されるものがあるかも知れない。これらを龍泉窯系でなく同安窯系としたのは、中国の専門家の方々からそのような御教示が多かったからである。今の分類が正しいと仮定するならば、同安窯は、山頭窯Ⅰ～Ⅲ類の時期に龍泉の影響を受けたか、あるいは龍泉窯が受けたと同じような影響を越州窯系の窯から受けて似たようなものを作りだし、しかし龍泉窯に先んじて、それらを日本に輸出したということになる。Ⅱ類は需要の増大による大量生産で、粗製化したものであり、一般的な珠光青磁である。又、Ⅳ・Ⅴ類などは浙江省の福建省寄りの地域のものではないかと考えている。

Tab. 10 〔青磁（同安窯系）〕碗

Ⅰ	釉は高台もしくは高台脇までかかり、畳付及び外底無釉。外底は平らに削られている。胎は灰色で粗く、釉はオリーブ色もしくは青緑がかったオリーブ色で釉層は厚くない。ガラス質は強くなく、おおむね氷裂は見られない。	1	体外壁に片切彫で放射状に縦線を刻む。	a	体内劃花文＋櫛描線文	423，437
				b	劃花文＋櫛刺突文	422
		2	太く粗い櫛で体外壁に放射状線文	a	劃花文＋櫛描線文	434，439
				b	劃花文＋櫛描線文＋櫛刺	420，421
				c	櫛刺突文	438
				d	劃花文	428
		3	体外壁無文	a	劃花文＋櫛描線文	435，436
				b	劃花文	429
Ⅱ	施釉は体外半釉。釉は透明ガラス質を思わせ、淡オリーブ～淡灰黄色。外底の作りは無造作な削りっぱなしである。	1	体外壁に細かい櫛で斜に猫掻き。	a	劃花文と櫛刺突雷光文 口縁内弯ぎみ	424，425 440－442
				b	櫛描文	426，449
		2	体外壁はやや粗めの櫛で猫掻き。	a	劃花文	427
				b	櫛による刺突雷光文	430，431
				c	体内無文	M4－38
		3	体外壁無文、体内体内壁に劃花文。			448
Ⅲ	口縁を大きく外反し、最後に軽く起こす。灰胎で釉は黄がかったオリーブ色で細かい氷裂がある。ガラス的。体外は粗い櫛で斜めに平行線を入れるが、体内は無文、下手の青磁である。					432
Ⅳ	器壁はかなり直線的に斜行する碗である。見込で輪形に釉を削りとり重ね焼きをする。器内壁に櫛で大きく弧線を描く施文がみられる。体外に櫛で猫掻きを施すものもある。釉は黄みがかったものや、よく熔けず灰黄色のものが多い。一般に焼成はよくない。					443，444，445
Ⅴ	器壁も底造りも非常に粗厚で、口縁は軽く外反する。体内で口縁下に一本沈線をめぐらす。体内無文のものと、Ⅳと同じような櫛描きの弧線文のものが見られる。見込で輪形に釉に削り取るものが多い。体外壁は粗く太い猫掻きが施される。又へらで大きく片切彫を入れるものもある。釉はオリーブ色で氷裂なく、釉層は薄い。半釉。					446，447 M4－37
Ⅵ	Ⅴより一層粗厚な一群である。どれも焼きは悪く、胎土は黄白色のまま、釉は灰白～灰色で熔けていない。見込で輪形に釉を削り、体外は無文のものと、放射状の線文を粗くへらで削り出すものがある。					M1－8 D2－8

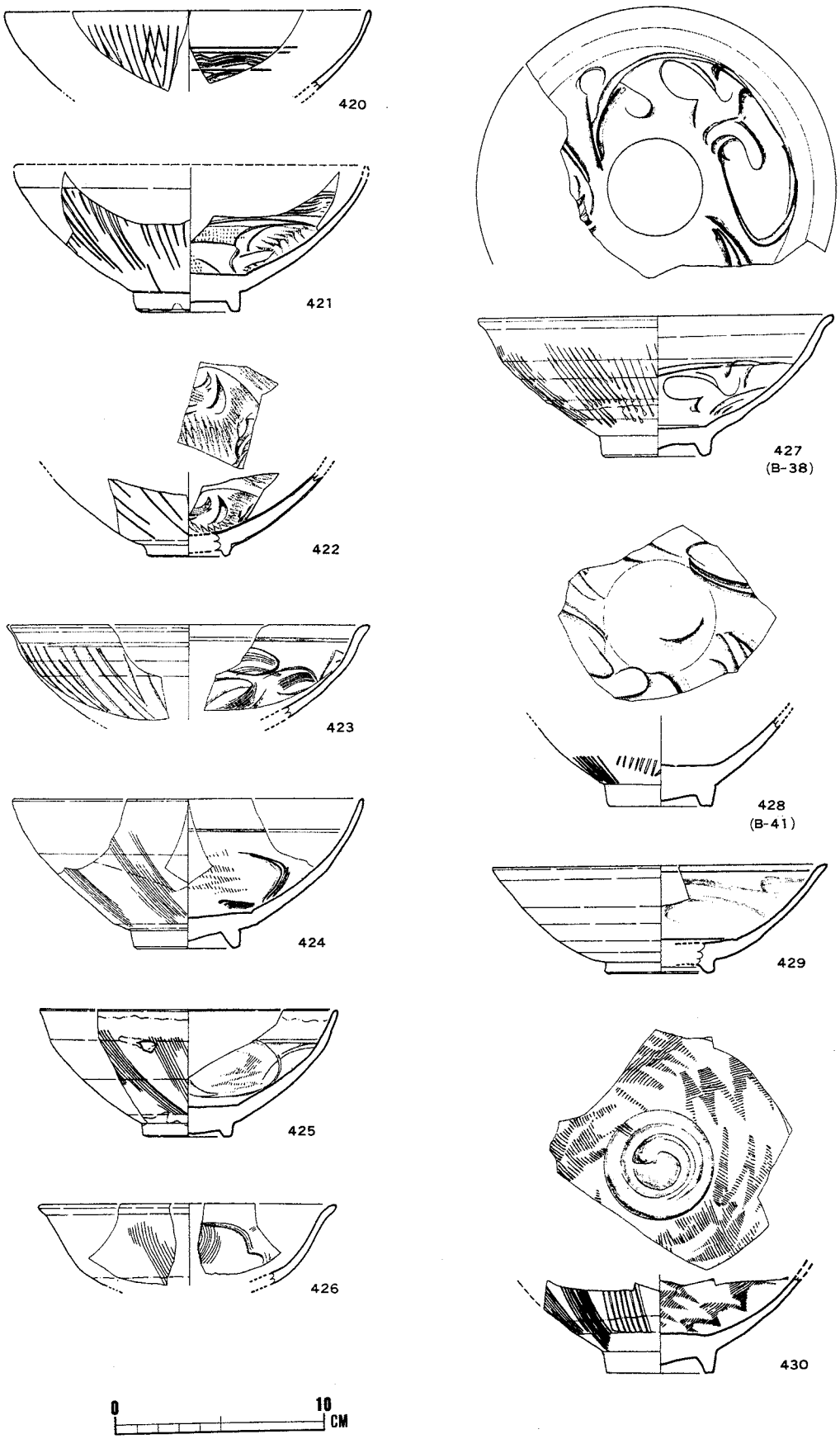


Fig. 86　4次調査　青磁 碗　同安窯系（1）

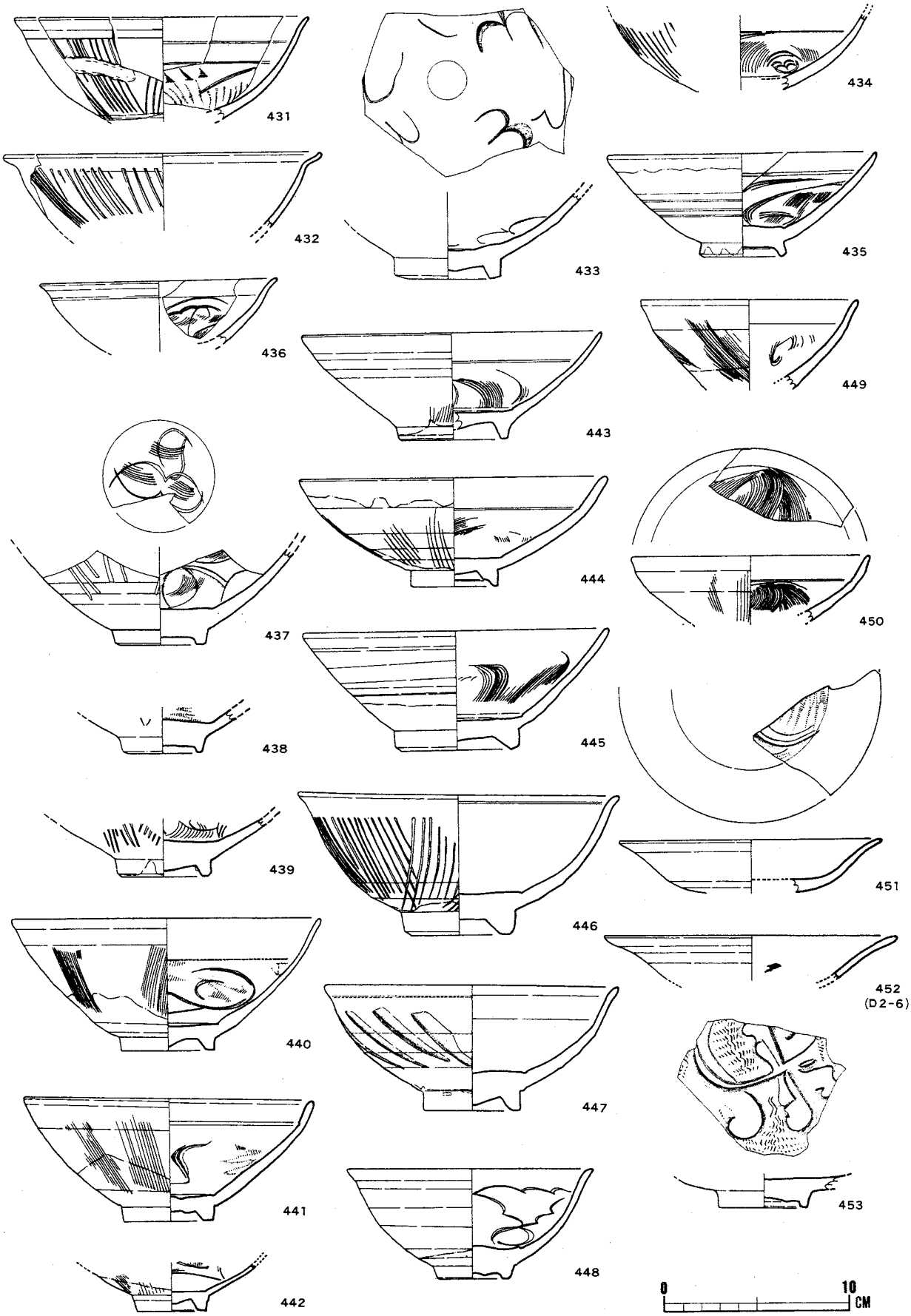


Fig. 87　4次調査　青磁 碗　同安窯系（2）

Tab. 11 〔青磁（同安窯系）〕皿

Ⅰ	高台つきの皿　平らな広い見込から稜をなして立上り斜行する体部をもつ。口縁外反。	1	高台まで施釉。劃花文と櫛刺突文			451
		2	体外半釉	a	無文	457
				b	劃花文と櫛刺突文	454，455
Ⅱ	平底皿　平らな広い見込から外反ぎみの短い体部が立上がり斜行する。底部は龍泉窯系平皿に比し薄く、外底は広い。	1	全面施釉ののち外底を削るもの。	a	無文	460
				b	劃花文と櫛刺突文	458，459，461
				c	櫛刺突文	462
		2	体外半釉	a	無文	466－468
				b	劃花文と櫛刺突文	463
				c	櫛刺突文	464，465

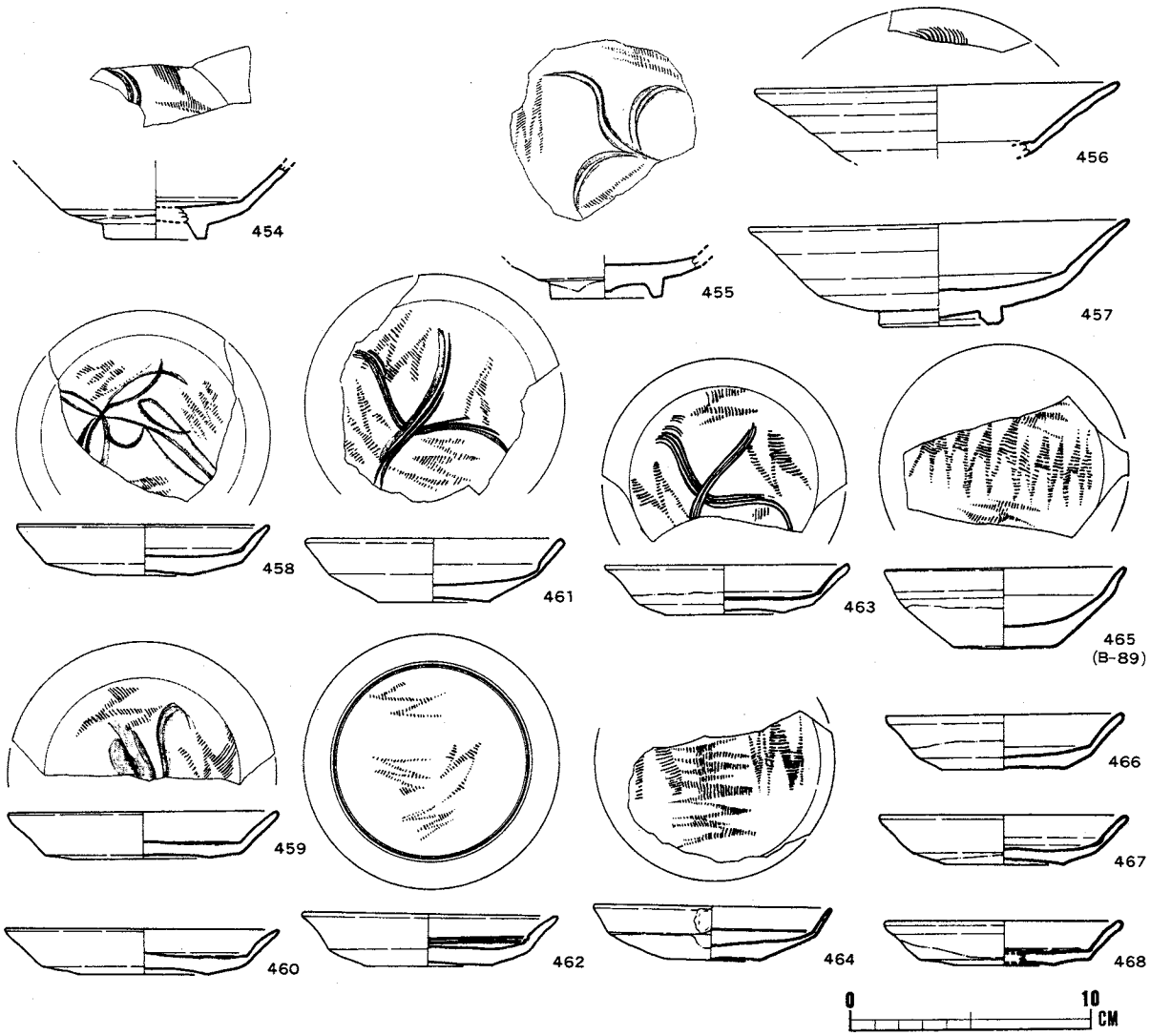


Fig. 88　4次調査　青磁 皿　同安窯系

〔黒釉磁〕　殆どが口縁を捻り返しに作った天目茶碗である。当遺跡では美濃天目かと思われる一個体を除き、すべて中国製品と思われるが、確実に建盞と思われるものはない。土は破面で見ると粗く黒灰色のもの、細かく灰色のものが見られるが、露胎は茶色っぽいものが多い。釉尻に釉が厚く溜ることはなく、兎毫も今一歩の感じである。これらは福建省の建窯周辺の製品であろう。口縁の捻り具合や、ことに釉と下釉の関係などに変化が見られるが、国産の天目碗との関係が注目されよう。486、487は粉っぽい感じのベージュ色の精良な土に、黒い釉がかかる底部で、小碗であろうか。見込の釉層は厚くなく、破片外面に釉は見られない。

〔褐釉磁〕　488は造りが雑な、しかし薄胎の小皿様の器。生焼けか肌色を呈する。器内にのみ荒くオリーブがかった褐釉を薄くかけている。膏薬入れであろうか。489は茶緑色の釉のかかる合子の身である。胎土は黄味のある灰白色でやや粗い。露胎は淡いオレンジ色。菊座は細かく、ふくらみのない凸線を並べているだけ。型造りである。490は小壺の蓋と思われるが、かなり精良堅緻な灰色の胎に褐色の釉がかかる。蓋の頂部には細い印陽文が見え、周りは菊弁がめぐらされる。文様の凸部は薄い茶緑色に浮き出して見える。

Tab. 12　黒釉磁（天目）碗

<table>
<tr><td rowspan="3">Ⅰ</td><td rowspan="3">体外半釉で、釉尻から下は露胎。</td><td>1</td><td colspan="3">やや大ぶりの器形。釉は厚めで光沢のある黒色だが柑皮状にピンボールの跡が見られる。口縁では釉は殆ど止まらずに薄くなり銹茶を呈し、覆輪の跡のある例が多い。胎土は暗灰色で粗い。</td><td>469－471</td></tr>
<tr><td rowspan="2">2</td><td rowspan="2">1より幾分小ぶりである。釉は口縁でも釉尻でも厚さは同じ。下腹は殆ど直線的に斜行。</td><td>a</td><td>胎は暗灰色、釉は黒褐色</td><td>473，474</td></tr>
<tr><td>b</td><td>胎は灰色で、釉面は銹茶色。鈍光を持つものが多い。</td><td>475－479</td></tr>
<tr><td rowspan="2">Ⅱ</td><td colspan="3" rowspan="2">釉尻の下に一部はみ出る鉄漿の跡があり、下釉をかけたものと思われる。全体に器壁が厚く、丸くくぼんだ内底から続く体部はその中ばで角度をやや大きめにして斜行、口縁部で直立ぎみに作る。口縁部の釉は流れて薄く、釉尻にやや厚くたまる。黒色光沢あり。口縁は茶色が流れる。</td><td>a</td><td>胎は暗灰色、比高がやや高めである。</td><td>481，482</td></tr>
<tr><td>b</td><td>胎は灰色、器壁は分厚い</td><td>480，483
484</td></tr>
<tr><td>Ⅲ</td><td colspan="5">釉は体外半釉、釉尻から下は外底まで一面鉄漿をぬる。器形はⅡと似ており、胎は灰色。</td><td>485</td></tr>
</table>

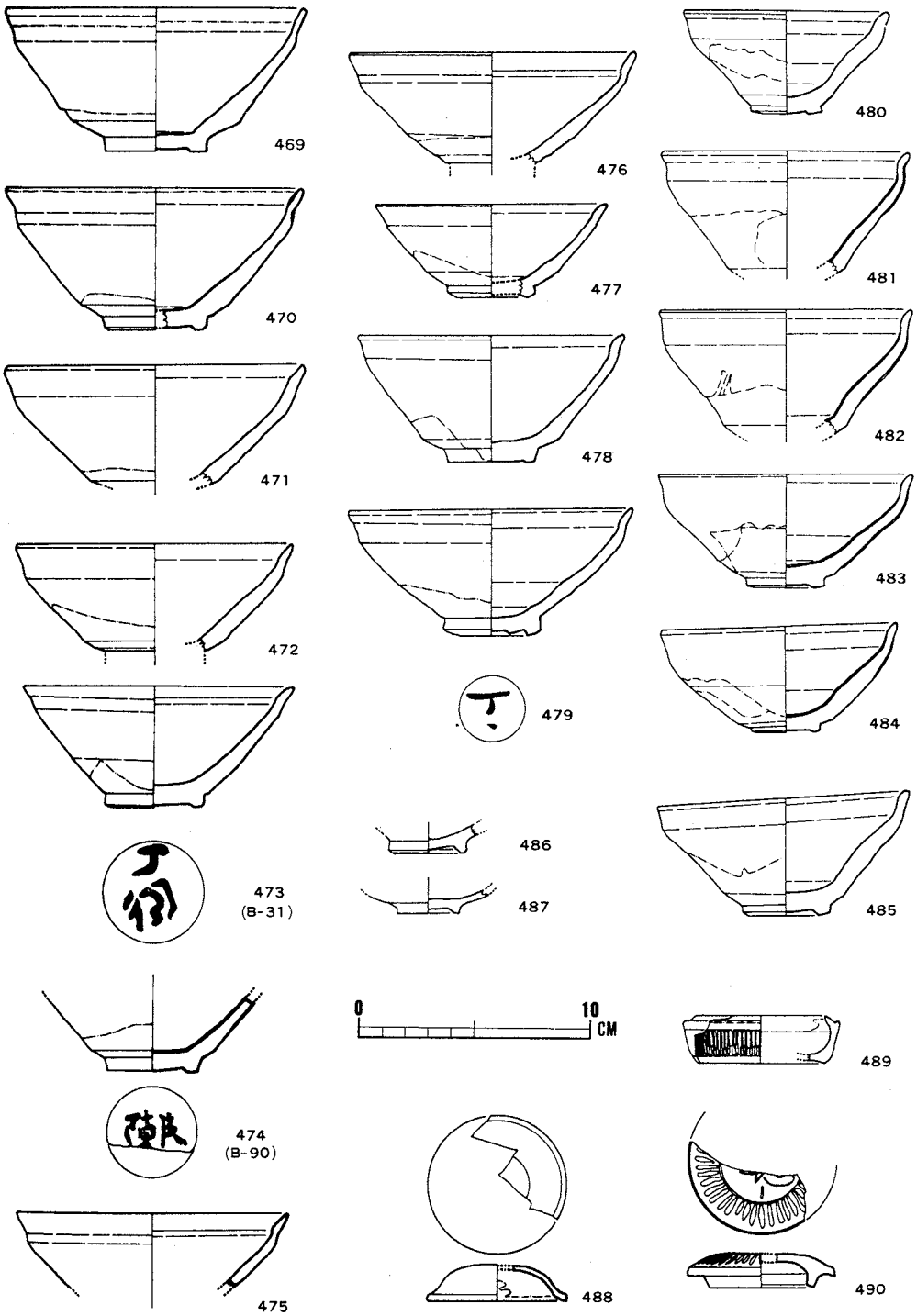


Fig. 89　4次調査　黒釉磁（天目）、褐釉磁

〔陶器碗・皿その他〕　粗悪な土に青磁系の釉がかかった焼成不良の碗である。土はおおむね生焼けで赤い煉瓦のようで、釉は熔けず灰黄色を見せる。重ね焼きの伝統から越州窯系の末裔かと思われる。しかし直接これにつながるような越州窯碗はここにはない。又李朝朝鮮のものとも似ており、現状では判断ができない。皿は全く無造作なもので、釉色もさまざまであり、碗よりははるかに焼造範囲が広がったと思われる。

以上の他に521－526の青磁、528－536の染付、537－540の白磁、541の緑釉など、14世紀半ば以降に属するものが少数あった。527は本遺跡唯一の枢府系（広義の）の青磁で、折腰皿と思われる。

Tab. 13 〔陶器碗〕

1	底部全面施釉で畳付に部分的に目土をつけ、下の器に重ねて焼く。胎は細かい灰色の土に小石や砂が少し混じっている。火廻りが足りず、底部は茶色。釉はよく熔けない灰濁色でオリーブ色がかっている。目土は灰黄色の粉状。			491－493
2	底部全面施釉後、畳付全体に目土をつけて下の器に重ねて焼く。見込には輪形に目跡がつく。暗灰色の細かい土に砂が少し見える。底部は火廻りが十分でないが、体上部は灰緑色の釉が熔けてごく薄くかかっている。	a	（残片上）無文	494－496
		b	体内を二本線で数区に分ける。口縁下に沈圏線。	497，498
3	体外下半露胎　畳付全体に目土をつけ、下の器と重ね焼。灰色の細かい土に砂が少し見える。露胎は茶色。釉はオリーブ色で比較的よく熔けたものが多くややガラス的。	a	（残片上）無文	500－503
		b	体内を二本線で数区に分割。	499

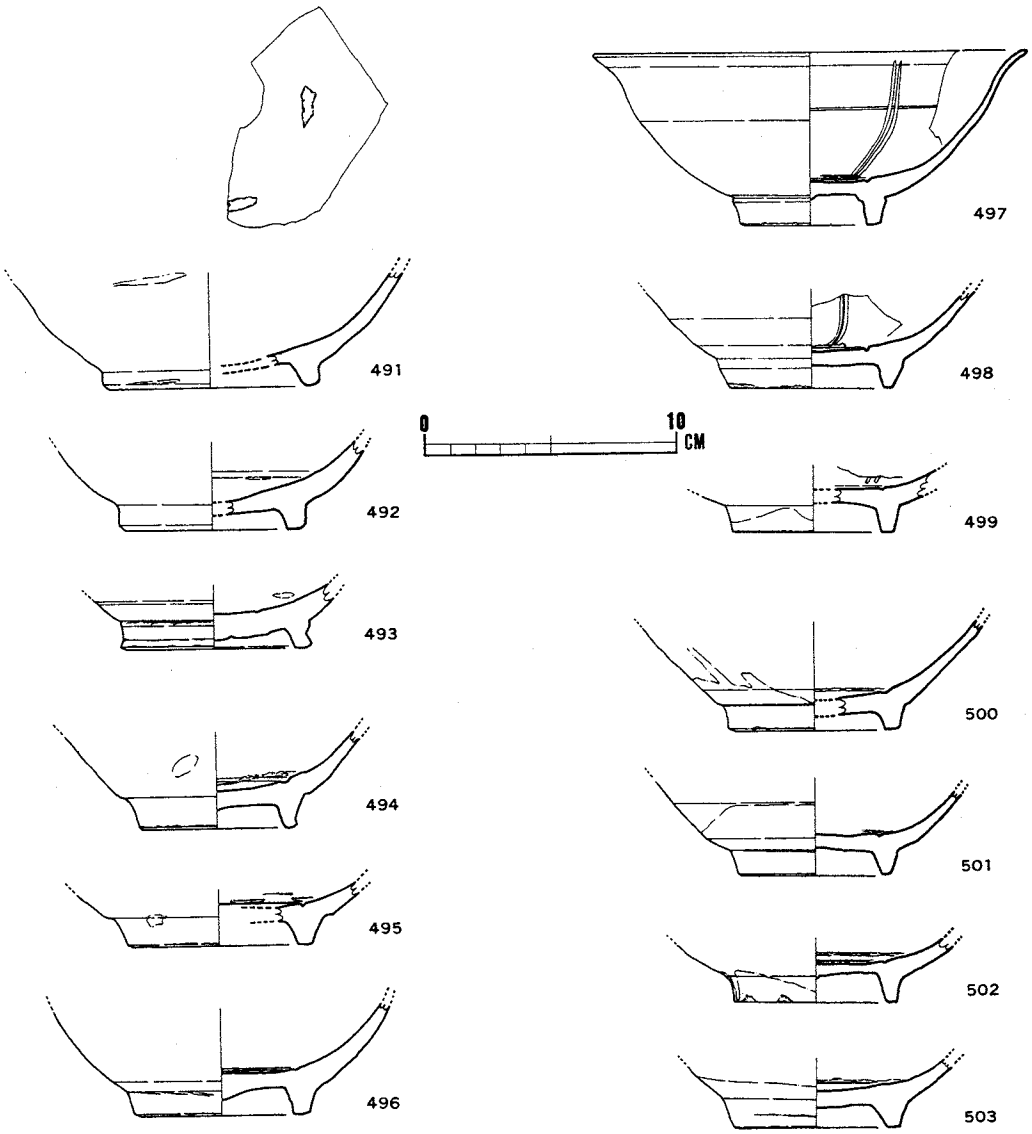


Fig. 90　4次調査　陶器 碗

Tab. 14 〔陶器皿〕

土は細かくミルクコーヒー色～灰色でやや砂が見える。総体的には赤土色で、焼成は甘い感じ。釉は全体的には灰オリーブが多いが灰黄色～茶緑色～褐色とさまざまである。	1	外底を平らに調整、施釉も全体にしてある。	504, 505
	2	底はほとんど平らに作られているが、体外下半は露胎である。	506, 507
	3	底はろくろを回転したまま荒くへらで削る。跡が「の」の字に残り、へそのある揚底になっている。全体に施釉。	508－511
	4	底の造りは3に似るが、体外下半は露胎のままである。	512－517

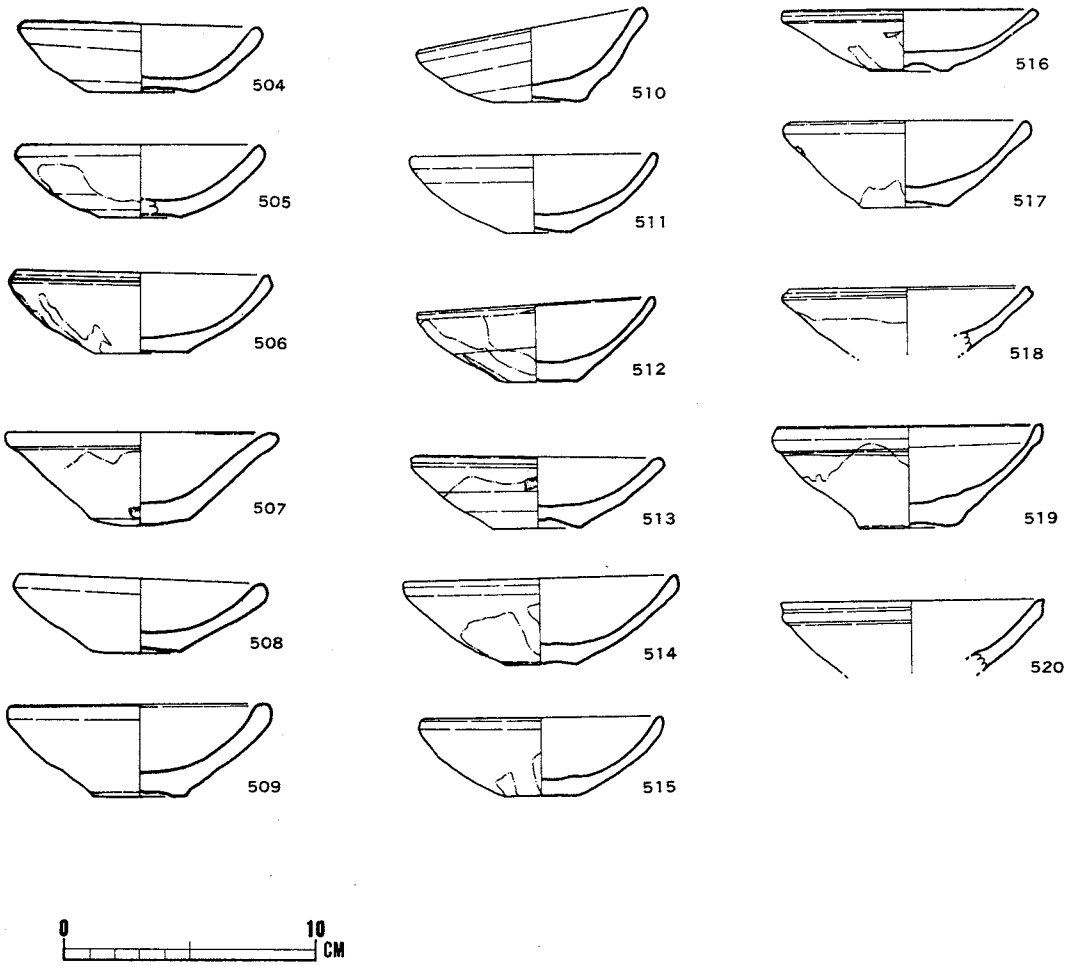


Fig. 91 4次調査 陶器 皿

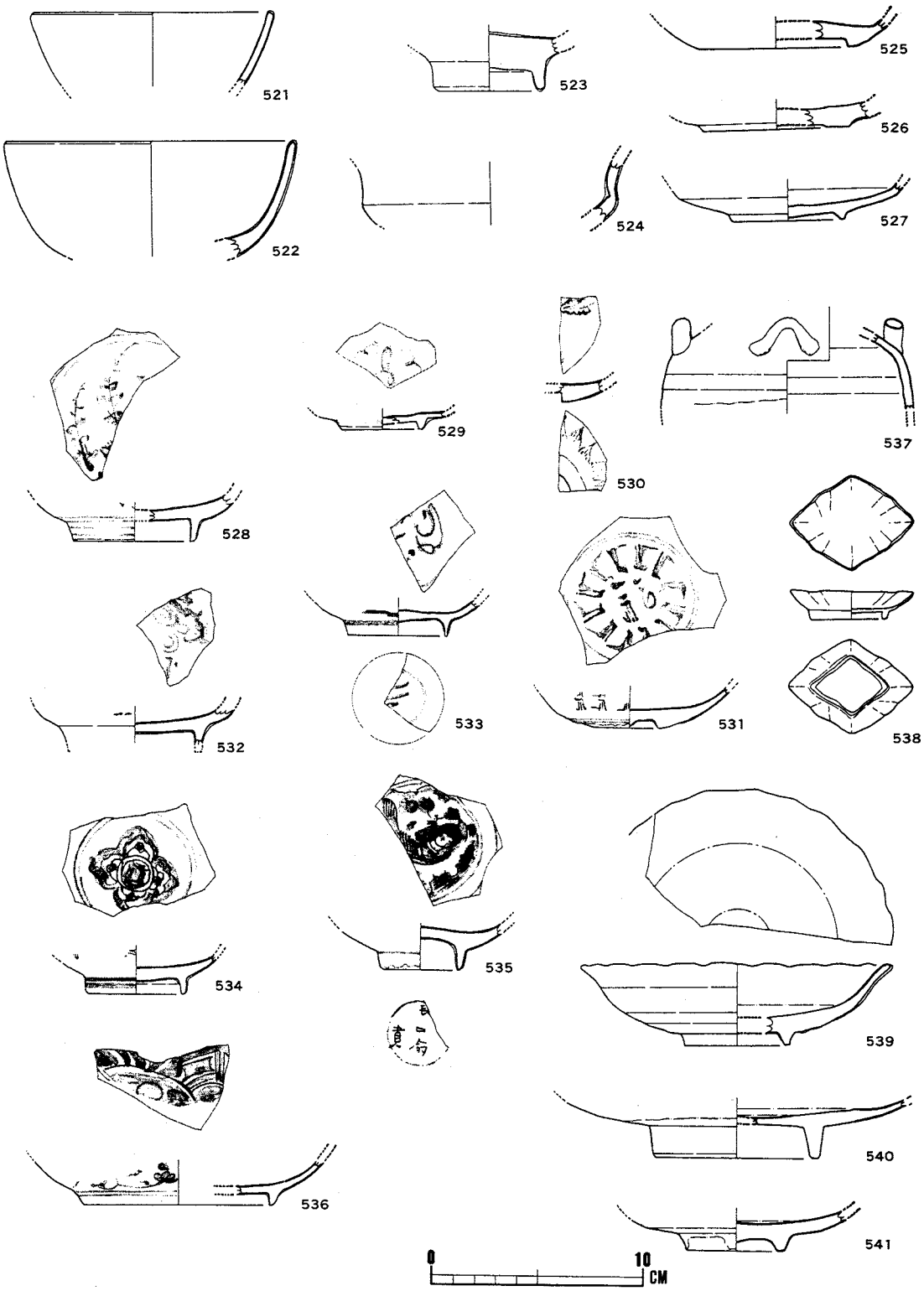


Fig. 92　4次調査　その他　14世紀半ば以降に属する磁器

Tab. 15－1　陶　器（ナンバーを付した文献は表の末尾参照）

1	黄釉陶器1　ベージュの精良緻密な胎土。次の2類の土を淘汰して砂を除いたような土である。釉は薄く透明で、土の色を見せ黄土色を呈す。鉢、蓋、盤がある。重ね焼きの跡がある。	542－544
2	黄釉陶器2　灰～暗灰色の砂っぽい土に、ベージュの細かい土がつなぎのように入っており、のびはよく薄胎になる。釉下鉄彩の見られる例が多い。器形は広い鍔口縁や、細い折返しの玉縁口縁の大小の盤、蓋、四耳壺がある。盤では施釉は通常体内と体外上半にみられ、口縁で拭きとって重ね焼きをしている。中に化粧土の見られる例もある。	545－558，561－568，571 (1)　中国古代外銷瓷的問題 (2)　晋江県磁灶陶瓷史的調査記 (3)　日本出土の中国陶磁　№55，56 559，560
3	黄釉陶器3　乳褐～暗灰色のかなりねっとりとした土に白や褐色の砂粒が混じる。釉は灰オリーブ色不透明。口縁細縁の盤と壺がある。盤では釉は口縁までで、それ以下は鉄漿を塗ったように赤褐色を呈している。壺は肩に褐釉がかかるが２のような流しがけではなく、筆描きである。いずれも口縁で釉をふき、重ね焼きの砂跡を残す。	569，570，572
4	緑釉陶器　２類と同じような胎に緑を主とし、部分的に橙～褐色を見せる光沢のある釉のかかった盤がある。口縁は細縁である。その他、肌色の精良な胎土の574、575、灰色のやや粗い土に銀化が見られる緑釉のかかる577がある。類例をまちたい。	573，576 文献(1) 574，575 577
5	褐釉小口瓶1　細長い徳利型の瓶で、平底の底径は7cm、ほとんど広げずに体を挽きあげ、肩を丸く作って短い頸を立て、口は断面四角の折り返し口縁とする。器高は約17cm、肩から上に褐～黒褐色の釉がかかり、肩には通常4箇所白い砂目が付いている。胎土は灰ベージュ色で細かい黒色がまじり、露胎は茶がかかる。器壁は薄く、器内壁には粗いろくろ目が段をなして残っている。	584－587 鄭成功の火薬瓶として類似のものが厦門鼓浪嶼島の鄭成功記念館に展示されている。
6	褐釉小口瓶2　5類より大形で頸はなく、微かな折り返し口縁がつく。器壁は幾分厚めである他は、5と釉胎、造作とも大変よく似ている。相似の瓶は福建省泉州湾で発掘された宋代末の海船から得られており、磁灶窯曽竹山窯の焼成になる酒瓶であろうことが報告れている。南方では出土例が多い。	588－592 (4)泉州湾宋代海船復原初探 　泉州湾宋代海船発掘報告編写組 文献(2)
7	黒褐釉水注　釉・胎とも、上の小口瓶によく似た特長を有する。磁灶窯で報告されている「軍持」である。	596

Tab. 15−2　陶　器

8	黒褐釉行平　口縁に受け口がつき、器の内部にのみ黒褐釉を施す薄手の器である。両側に面取をした取ってのつくもの、注口のつくものもある。胎は赤茶っぽく、焼き締まっている。	597，598 602−604
9	褐釉波状文耳付蓋　灰色のがさついた土にベージュや黒の小さな砂粒がまじる。短く立った頸に強く折り返した口縁、横耳のついた肩部、頸と肩の境の突帯、そして体部の破片には波状文が見られる。釉は茶オリーブ色。体全面に波状文を繰り返す四耳壺と思われる。	583
※ ※	2の盤は福建省泉州近郊磁灶窯童子山一号窯のもの、6は同じく曽竹山窯のものとされる。これらに非常によく似た胎土と釉のものが、ここにあげた1〜9類で、一応磁灶窯あるいはその近くのものと考えて、磁灶窯系としてみた。593−595はこの類の蓋であるが、どれとセットになるか不明。593は無釉で天頂は回転糸切のまま。中心に一孔あり。594〜595は黒褐色の釉が薄くかかっている。 606−608は磁灶窯の黒褐釉に似た薄胎であるが、灰色を帯びた半磁質で銹色の釉がかかる、あるいは後代の流れこみか。	593−595 606−608
10	褐釉四耳大壺　灰〜灰ベージュ〜橙黄色を呈する土に白や黒の砂粒が混ざった粗い胎である。紐造りろくろ成形か。胴部数か所でつぎ、高さ70cm前後になる長形の壺である。外に茶色の釉が薄くかかる剥落も多く、剥落の跡は灰色を呈している。口の折り返しに変化があるが、細分するだけの資料はまだない。平底である。大形のせいか破片数は非常に多く目立つものである。全形のわかるものが京都や鎌倉で出土している。	609−612 鎌倉考古学研究所「掘り出された鎌倉」1981 平安博物館発掘　旧平安京 左京八条三坊二町より出土（下条信行氏御教示による）
11	無釉四耳壺　灰ベージュ〜暗灰色の土に白い砂が混じる。露胎は茶色を帯び、白ごま、黒ごまが浮く。器形は10類に似るが小形、施釉の跡は見られない。これも口づくりにはかなりの変化が認められる。新安の海底遺跡、佐賀の霊仙寺遺跡から似たものが得られている。	613−619 (5)「霊仙寺跡」018，019 (6)「新安海底文物」261，262
12	褐釉短頸瓶　平底からあまり広がらずに焼き上げた細長い体部は肩で段をつけて頸に移る。頸は短く垂直に立ち、口縁を折り返して肥厚させた広口の瓶である。茶緑〜黒褐色の釉が器内から頸、肩の辺までかかる。口唇部に重ね焼きの跡あり。土はミルクチョコレート色で緻密、褐色の点が混じる。器の外壁はなでてある。破片の例は少なくないが、門田二号墳では完形品が出土している。北宋末・南宋初とされる浙江省呉	620−625 福岡県教育委員会　門田遺跡　山陽新幹線関係埋蔵文化調査報告書第1集1975 呉興県文化宣伝站　浙江呉興皇坟山宋墓清理簡報　文物資料竺刊2，1978

Tab. 15－3　陶　器

12 ※	興宋墓出土の瓶もこの類のものである。 胎土が12類によく似た鉢626と、瓶の体部644がある。644では底近くに重ね焼きの跡がある。	
13	捏鉢1　灰黒～暗褐色の粗い土に白黒の砂粒がたくさん混じる。口縁と体外上半部に土灰～灰オリーブ色の釉がかかる。多くはよく熔けず不透明。露胎は鉄銹色で、口には蓋受け状の段がある。平底。	627－631 (7)五十川高木遺跡　T14
14 ※	捏鉢2　褐～暗灰色の粗い土に白黒の砂粒が多く混入。無釉で露胎は茶褐色。外面に斜めの叩き目があり、口には細かい段がある。 632は13類もしくは14類と同じような土である。施釉はない。	633，634 (8)太宰府史跡，1977　第39－3次調査50図の15
15	捏鉢3　赤褐～黒褐色の土に石灰様の柔らかい感じの白い大粒の砂が混じる。露胎は鉄銹色である。口縁を内に折り返し、口縁と口縁下で二本の隆帯を造り出している。底は雑な平底。器の内面は擂り粉木を用いたように表面磨滅し、胎内面の黒ずんだ色が出ている。径20～40cmと大小あり、破片数もかなり多い。	635－638 文献(7)　T18 (9)　御笠川南条坊遺跡(1)　256
16 ※	無釉盤口水注　暗褐色の土に白い砂が多く混じっている。露胎は鉄銹色。640～642は一個体で、坩堝に用いたか内面に銀化した空色のガラスが付着し器体は焼けて紫灰色となりガサガサしている。盤口の一か所をつまんで注口をつくり、それと反対側に取ってをつける。底は円盤状である。 645は無釉の盤と思われるが、土は13－16類と異なり細かく、中に黒い砂粒と少量の長石粒を含む。口縁の上下に重ね焼きの砂跡があり、外底から体外下半部はごく薄く釉のようなものを塗ったか、茶色を呈している。同時に焼いた器物から付いたか、鉄釉とオリーブ釉が各一滴ずつ見える。	639－643
17	黒褐釉四耳壺　茶褐～黒褐色の均質な土に粉のような白点が少し入り混じる。褐色の釉はなまこ風になりやすい。長胴で頸ははっきりせず、折り返し口縁に特長が見られる。口の立ち方に変化があり、あるいは時代差を示すものか。当遺跡では小片のみで明らかにできないが、一般に四耳がつき、施釉は器の内外にわたる。口唇に直接重ねて焼いたために傷痕の残るものが多い。我国では経筒として用いられた例もあり、又伊万里湾周辺で大量に発見されることが知られている。新安の海底遺物にも類似品があり、江蘇省の南宋墓からも似た壺が出土している。宜興附近では近代まで骨壺として使用されていたともいい、この辺りの製品かと推察される。	646－650 文献(5)　002，003，29，30 (10)　九州伊万里湾発見の褐釉壺について 文献(6)　253，256 鎮江市博物館等，金坛南宋周瑀墓考古学報1977－1 文献(3)　39，40 江蘇省文物管理委員会・南京博物院 江蘇省揚州県五代山唐，五代，宋墓考古1964－10 陳福坤　南京大平門外新庄村宋墓　考古通訊1958－12

Tab. 15－4　陶　器

18	褐釉壺　大きな破片はないが、中凹みながら水平に張る口縁とそこから直接張り出す肩の線は上の伊万里湾周辺で発見される瓜形壺と同じもので、新安の遺物にも見られる。鉄分の多い土に茶緑色の釉がかかり、口縁には白い目砂が付着していて、これも口の上に直接重ねて焼いたものである。	651，652 文献(10) 文献(6)257，259
19	褐釉壺　頸の部分だけが残る。口縁は細い玉縁で頸の付け根に耳もしくは取っての跡がある。赤褐～茶褐色の釉が薄くかかる。釉のかかった口の上にそのままのせて重ね焼きをしている。	654，655
20	褐釉耳付き壺，もしくは水注　口縁を外に折り三角縁とする頸の長い壺である。赤茶～黒褐色の土に褐～黒褐色の釉がかかる。取っ手や耳の跡が見られ、水注と思われる。これも施釉された口の上に直接重ねて焼いた傷痕があり、露胎のままの平底にも重ねた器物の釉や胎の一部が付着している。	656－659　676，677 文献(9)1978　1802，1803，2458
21	茶釉耳付き甕　口縁が「く」の字形に外反する広口の甕。肩に横耳が付き、口縁内側に重ね焼きの砂目がある。土は灰色で粗いが均質。釉は艶消し不透明な茶色。	661 文献(9)1978　2447 文献(8)1977　第39－3次調査ＳＫ927－35
22	褐釉甕　丸く外に折り返した口からそのまま肩が小さく張る広口の甕である。土は赤褐色でやや粗くザラッとしている。茶褐色～暗褐色の釉がかかり、肩に目跡がある。	662，663 文献(9)1975　262
23	褐釉玉縁口縁甕　折り返しの玉縁口縁をもった甕。口で重ね焼きをするが、玉縁全面に施釉されるもの、口唇の釉を削りとするもの、更に口縁の下でも釉を削るものなどに細分される。土は赤褐～黒褐色を呈し挟雑物は少ない。茶緑～紫褐色など濃い色の褐釉がかかる。	666－674 文献(9)1977　1570 文献(9)1978　2462
※	さまざまな形の褐釉の蓋がある。これらはいずれも他の器とセットになるべきものだが相手は不明。679が灰色で粗い砂混じりの他はみな茶色がかった混じりの少ない土である。いずれも内側の調整が外側に比べて雑である。	678－682
24	黒褐釉壺　器高の中位で最大胴径を計るこの壺の口径と底径はほぼ同じで、底から3／4の高さで一本の沈線により形ばかりの頸部を作り出す。鍔状の口縁の上部は釉を削り取り、重ね焼きをしている。胎土は灰褐色でやや粗く、黒色不透明の厚い釉が全体にかかり、鈍い光沢のある表面には鉄銹が浮いている。	683 文献(3)　235－237 文献(6)　260

Tab. 15－5　陶　器

24	口には硅砂が、外底のまわりには赤茶色の大粒の砂がたくさん付着している。この種の壺は鎌倉で例が多く、又新安海底遺物にもみられる。 同じように口縁で釉をけずり、黒釉のかかる684、685がある。	
25	黒褐釉水注など胎土が灰色あるいは灰白色で半磁質の一群がある。釉は茶緑～黒褐色で薄くかかる。水注の注口、取っ手があり、蓋、底部なども同一の質感がある。よく似た文様の取手が河南省の窯跡の報告にあり、一応注目しておきたい。	629－698，700 湖南省博物館考古隊　湖南耒陽・永興寺古窯址　考古1960－10 文献(5)　051
26	灰緑釉平鉢　口で内弯し、口縁を外に折り下げて鍔を造る平小鉢である。土は暗灰色で黒い細かい点がみられる。灰オリーブ色の釉がかかる。	702－704
27	灰緑釉鉢　26類に似るが、折り返した口縁は体壁に付き、肥大口縁になっている。土は明茶～淡褐色で、細かい褐点が混じる。淡茶～灰オリーブ色の釉が薄くかかる。碁笥底である。	705－709，716 文献(9)1975　263 文献(7)　T5
28	茶緑釉甕　27類より濃い色の土で褐色の点が見られる。茶色の釉が薄くかかる。又土が暗灰色、黒点混じりに焼けているものもあり、この時釉はオリーブ色の発色している。大小があり口縁の形に多少の差があるが、底は碁笥底、口縁部と胴半ばに重ね焼きの目跡がある。	710－715，717－723 文献(9)1977　1574
29	灰緑釉瓶　灰オリーブ色の釉がかかる瓶である。器の内外から外底まで施釉するものと、底にまでかからないものとある。土は灰白色で磁質を思わせるものから、上の28類に似たものまでさまざまである。佐賀県霊仙寺では経筒や蔵骨器として用いられたものが多数発見されているが、当遺跡でも破片数は少なくない。	675，726－730 文献(5)　004，029－049 文献(3)　239
30 ※	茶緑もしくは褐釉壺　暗灰色に黒色に入る土に灰オリーブ～茶オリーブ～褐色を呈する釉がかかる。総体によく熔けず濁った感じの色である。広口，広底の壺で器高の中位に最大径があり、よく分化しない頸が形ばかりマークされている。肩には沈線で波形を描くものが多く、横耳、縦耳のもの、又注口のつくものなど、変化がある。底も外底部を刳るが畳付の幅に大小があり、将来細分できるかも知れない。731は形に褐釉が流しがけてある。737、738はこの種のものの蓋であろうか。 26－30類は基本的には青磁の系統に属するものと思われる。我国での出土例は非常に多いものである。	731－746 文献(3)　No.36－38，No.62 文献(4)

Tab. 15−6 陶　器

31	茶緑釉擂鉢　赤茶～黒灰色で白い砂が少し混じるかなり精良な土で、内面に茶オリーブ色の釉がかかる。露胎は茶褐色。内面には細めの筋目が無雑作に立てられている。口と器外下半に重ね焼きの白い砂が付着している。	747−749
32	褐釉擂鉢　灰褐～紫褐色の土に白い砂粒がたくさん入る。15類に似た土である。口縁は外に幅広く折り返し、ここにだけ褐釉をかける。口には白い目跡があり器内には細めの筋目が全体につく。	750，751
33	褐釉擂鉢　赤茶～暗灰色の粗めだが均質な土。折り返し口縁には褐釉が施され、目跡がつく。32類より小形で平底。施釉部以外は鉄漿を塗ったように茶褐色を呈している。筋目はいく種類が見られるが、櫛目の単位ごとに多少間隔の見られるものが多い。ほぼ完形品が御笠川南条坊で、十二世紀末から十三世紀初めの土師器と共に出土したことがある。	753−760 文献(9)1977　1573 文献(8)1978　第45次調査44図の99 文献(8)1979　第56次調査31図の14
34 ※	褐釉摺鉢　灰褐色の砂っぽい土で表面は茶～茶褐色、堅く焼き締まっている。口縁の形態にはかなり変化が多いが、いずれも口縁にのみ褐釉が施されている。筋目は櫛目の単位ごとに間隔があるようだが、細片ばかりなので確かではない。 この類とよく似た擂鉢が唐津系のものか問題がある。 又以上の他にも752のように全面に茶色の釉のかかるもの、又外面いっぱいにオリーブ色の釉のかかるものなど、小片がある。	761−767 文献(9)1975　258 文献(9)1978　1801
	坩堝　非常に粗い土に長石の小石が多量にはいっている。768は内面にガラスが、769には銅が焼き付いている。火にかけたせいか灰色でボロボロになっている。国産か中国産かは不明。	768，769
35	T字口縁茶緑釉大口甕　胎土は中心に灰褐色を残し外側は赤褐色に焼けている。中に石灰様の砂が混じるが、灰色に焼けた部分では黒ごまが入る。暗オリーブ色の釉がかかるがよく熔けていない。口縁で釉を削り取り重ね焼き。内面には青海波の叩きが見られる。	770−772
36	折り返し口縁短頸甕　775，776は同一個体。灰褐～黒褐色の粗い土に大小の白い砂がびっしり含まれている。釉は774では茶オリーブ色を呈するが、775、776では黒褐色で少し灰色に曇っている。叩きの有無は分からない。	774−776

Tab. 15－7　陶　器

37	甕　非常に粒子の細かい黒灰色の泥のような土に、細かい白砂が混じっている。器壁は非常に厚く、器外には大きな叩き目が装飾のように残されている。釉は茶緑色で熔けず不透明。	773，778－782
38	Y字口縁甕　受け口を造るように口縁が二つに分かれる。土は粗く灰～茶色で大小の白砂がたくさん含まれ、所々に焼滓のようなガサガサした黒い塊がみられる。釉は灰オリーブ。よく熔けず粉を混ぜたように見える。	777，783 文献(9)1975　265 文献(9)1978　2544
39	矮頸甕　ごく低い頸と折り返し口縁のこの甕は、器壁が薄くよく焼き締まっている。土は暗灰色精良、内外から強く叩き締めている。濃オリーブ色の釉もよく熔けつやがある。釉は口縁で削りとり、耐火土を目土としている。	784
40	茶緑釉甕　断面頭の丸い釘のように頭でっかちの口縁は頸部で軽くしぼって段をつけ、広く深い胴部に続く広口の甕である。内外ともに施釉するが口縁は無釉。赤茶～暗褐色の緻密な土に白い石灰様の砂粒が少し入る。内外とも叩き目がある。釉は785ではよく熔け茶オリーブ色を呈するが、786、787では生焼けで不透明黄白色である。この二つは同一個体であろう。	785－787
41 ※	黒褐釉甕　全体として40類に似た形の甕だが口縁はやや平たい。788は精良緻密な灰茶色の土、789は黄白色緻密な土に長石の砂粒が少し混じる。口を除き黒褐釉がかかる。 790は788によく似た赤褐色の土に褐釉のかかる非常に分厚い口縁部の破片。40、41類は国産の可能性あり。	788，789
42	頸無し四耳壺　下半を知る資料はないが、上半は半球形をなす壺である。口縁に段をつけ、直下に耳をつける。縦耳の例、横耳の例がある。胎土は一般に赤茶～褐色で石英、長石の砂混じりであるが、582のように黄白色のものも時に見られる。釉は茶緑～褐色でなまこがかるものが多い。体外口縁下から施釉。	791，792，582 文献(7)　T14
43	頸無し大甕　口縁部を内へ屈折したこの様な甕は、かつて太宰府で全形を知りうる例を出している。794は非常に粗胎で灰色のガサっとした土に白い砂が混じり、所々に大きな黒い鉄滓のような塊が見られるなど、777とよく似ている。釉は暗オリーブ色。793は赤褐色の土に石灰様の白砂混じり、オリーブがかった灰色のよく熔けていない釉が見られる。内壁に叩き目がある。江蘇省の宋墓（1045年）、安徽省の明墓（1395年）出土の甕によく似たものがあるので、注目しておきたい。	793，794 文献(8)1975　266 王徳慶　江蘇江寧東馮村宋徐公準的墓 考古1959－6 蚌埠市博物展覧館　明湯和墓清理簡報 文物1977－2

Tab. 15−8 陶　器

44	褐釉甕　43類の口縁下を僅かにくぼめて小さな頸を造ったような甕である。赤褐色のガサっとした土に白や茶の砂が混じっている。器内に同心円の叩き目があり、褐色の釉がかかる。この釉は口縁ではオリーブがかった灰黄色の混じった色を呈し、43類などと同じような茶緑釉であることがわかる。	795
45	茶入れ　非常に緻密でねっとりした褐色の胎に、褐釉のかかる薄手の破片が三個体分ある。小壺で、いわゆる茶入れであろう。	図例なし
46	須恵質黒色壺　黒灰色の精良な胎で、内面に細かい叩き目のある薄手の無釉壺。肩には澱青色の自然釉が見られ、盤口になる小ぶりの口部の破片もある。	文献(9)1978　2448，2451か？

陶　器　文　献

(1) 馮先銘　中国古代外鎖瓷的問題　海交史研究2　1980
(2) 福建省泉州海外交通史博物館調査組　晋江県磁灶陶瓷史的調査記　海交史研究2　1980
(3) 東京国立博物館「日本出土の中国陶磁」　1978
(4) 泉州湾宋代海船発掘報告編写組　泉州湾宋代海船復原初探　文物　1975−10
(5) 佐賀県東背振村教育委員会「霊仙寺跡」1980
(6) 韓国国立中央博物館「新安海底文物」　1977
(7) 福岡市教育委員会　五十川高木遺跡　山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告　1975
(8) 九州歴史資料館　太宰府史跡　昭和51年度発掘調査概報　1977
(9) 福岡県教育委員会　筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡　福岡南バイパス関係埋蔵文化財報告第2集−1975、第6集−1977、第8集−1978
(10) 松岡史他　九州伊万里湾発見の褐釉壺について　ミューゼアム　327号　1978−6

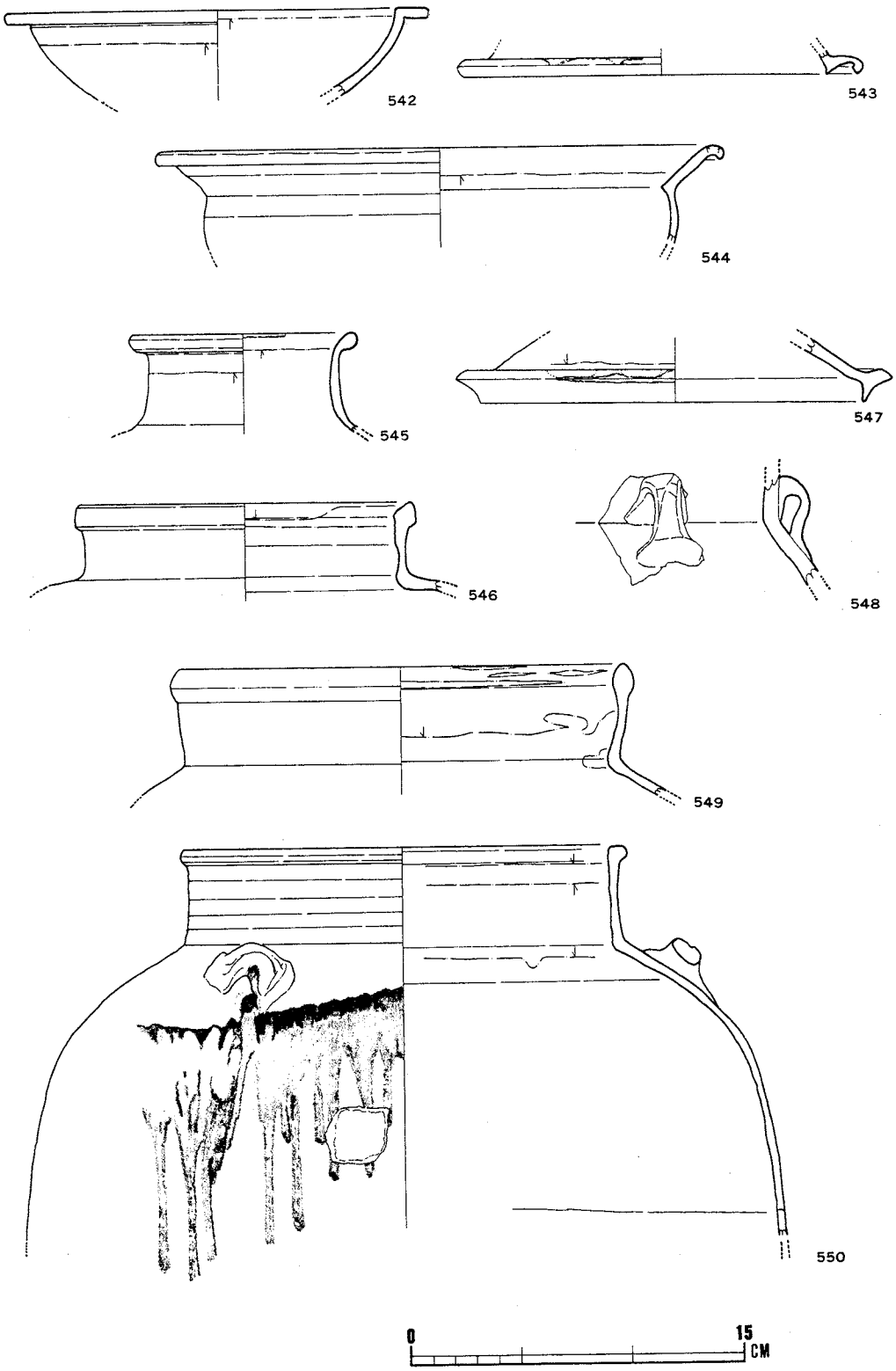


Fig. 93　4次調査　陶器（磁灶窯系）（1）

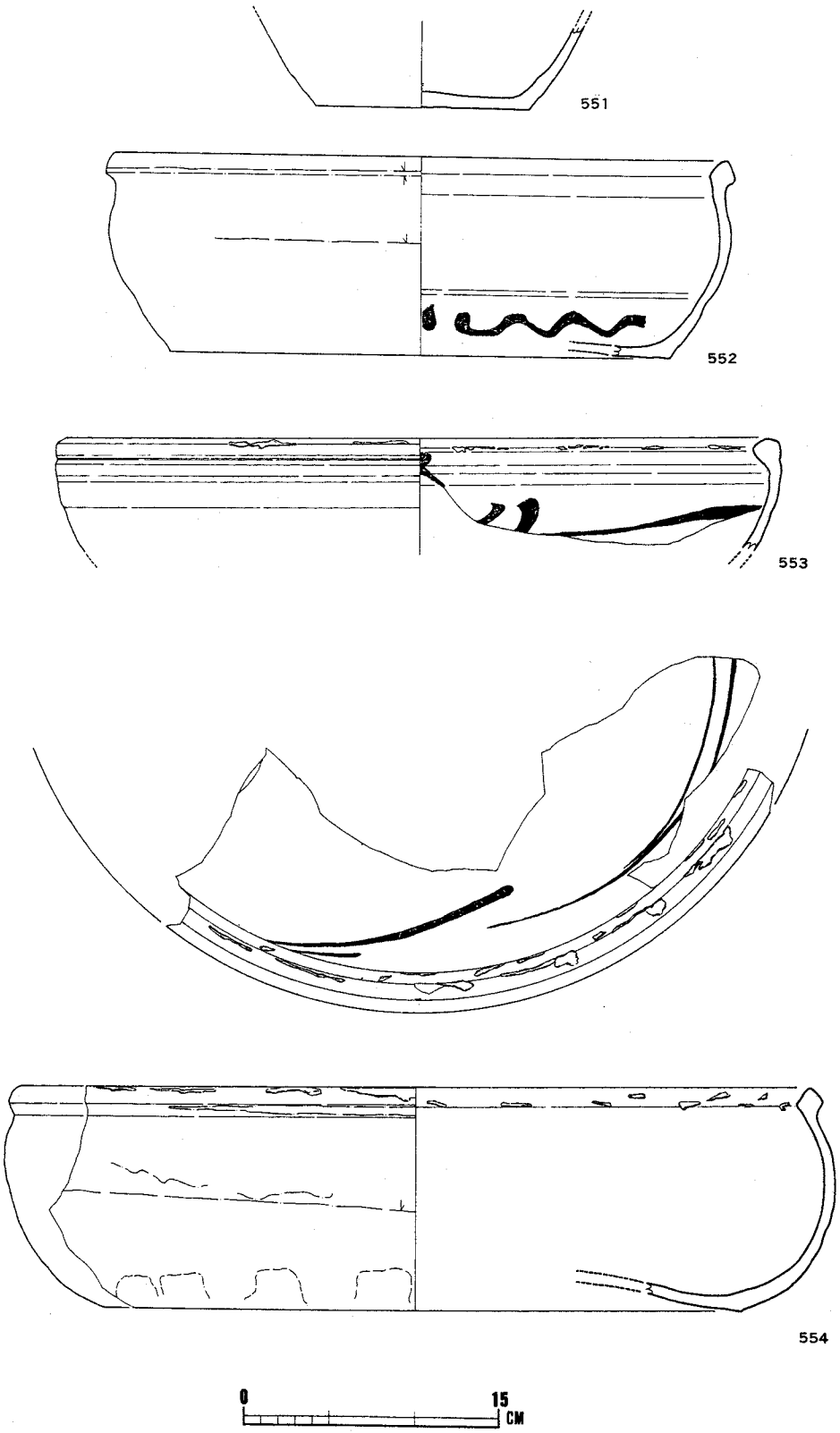


Fig. 94　4次調査　陶器（磁灶窯系）（2）

Fig. 95　4次調査　陶器（磁灶窯系）（3）

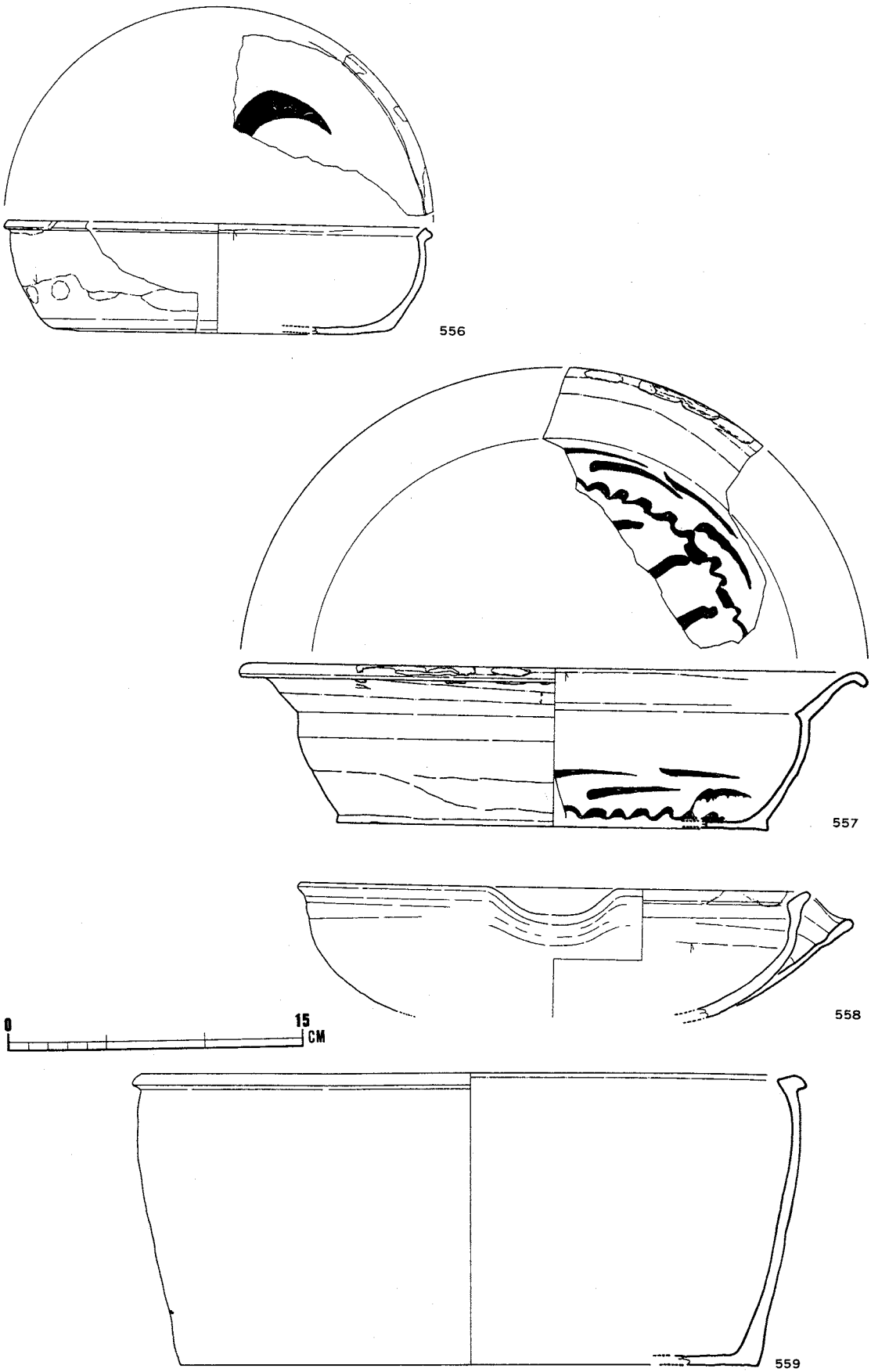


Fig. 96　4次調査　陶器（磁灶窯系）（4）

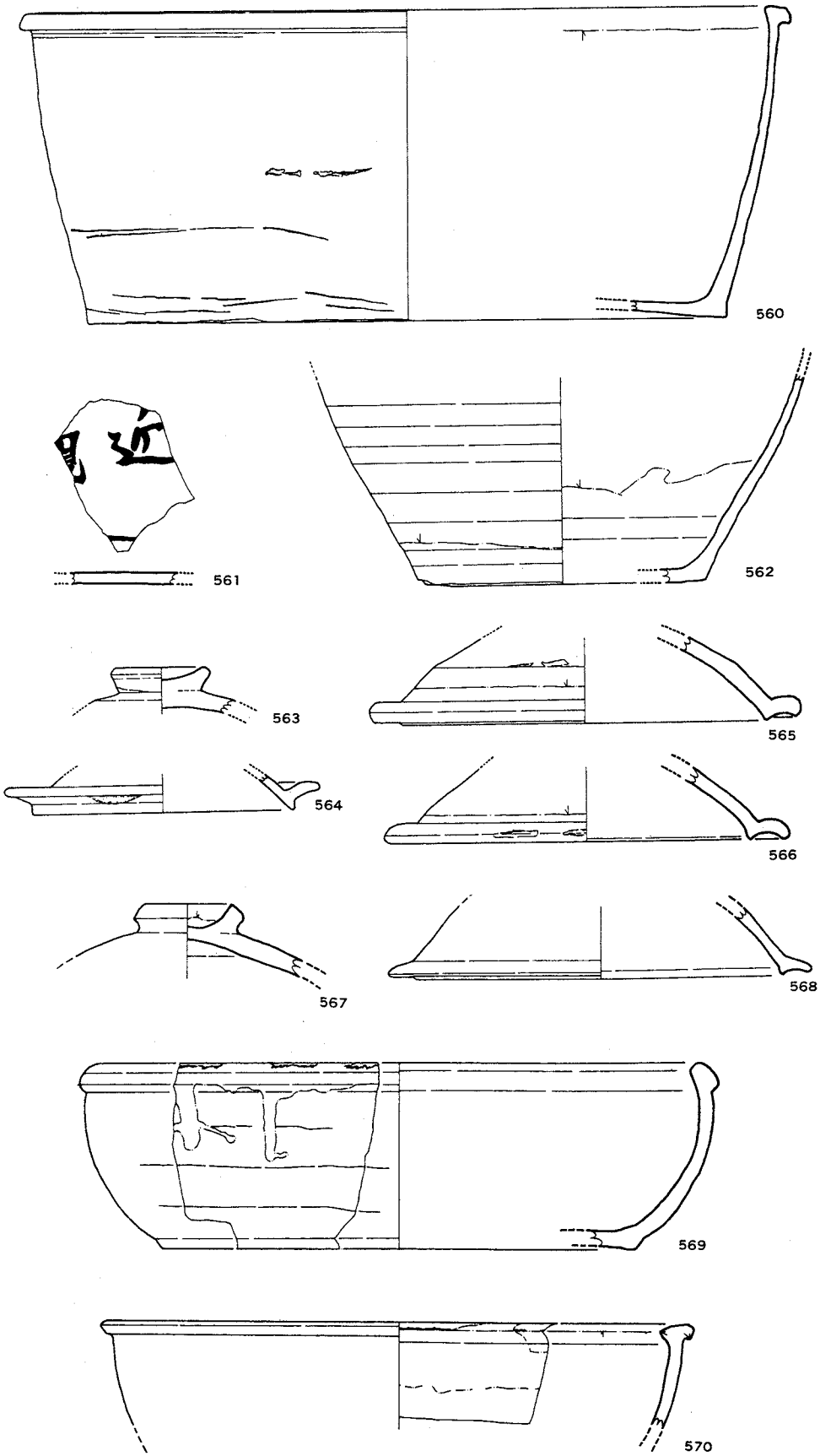


Fig. 97　4次調査　陶器（磁灶窯系）（5）

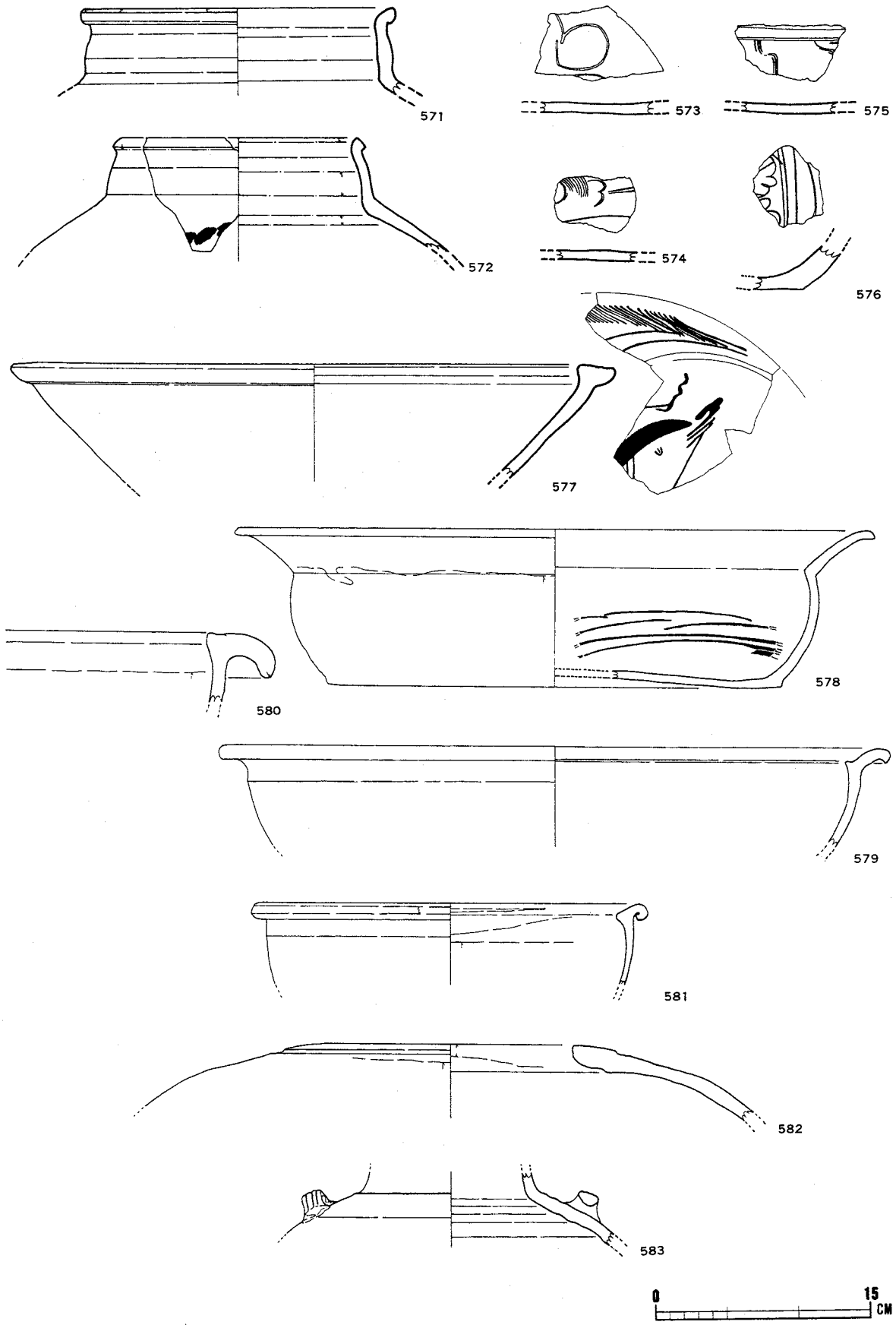


Fig. 98　4次調査　陶器（磁灶窯系）（6）

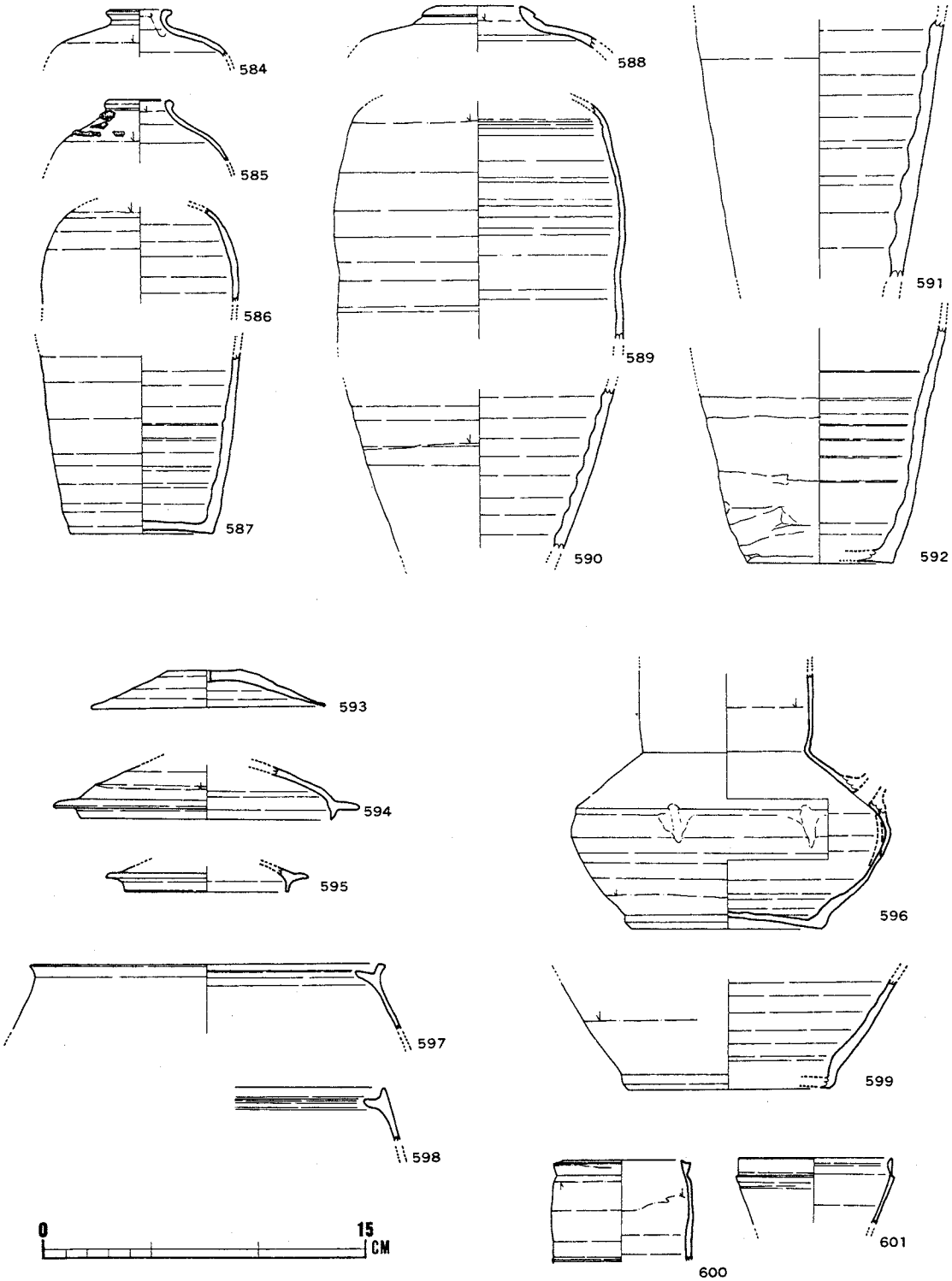


Fig. 99　4次調査　陶器（磁灯窯系）（7）

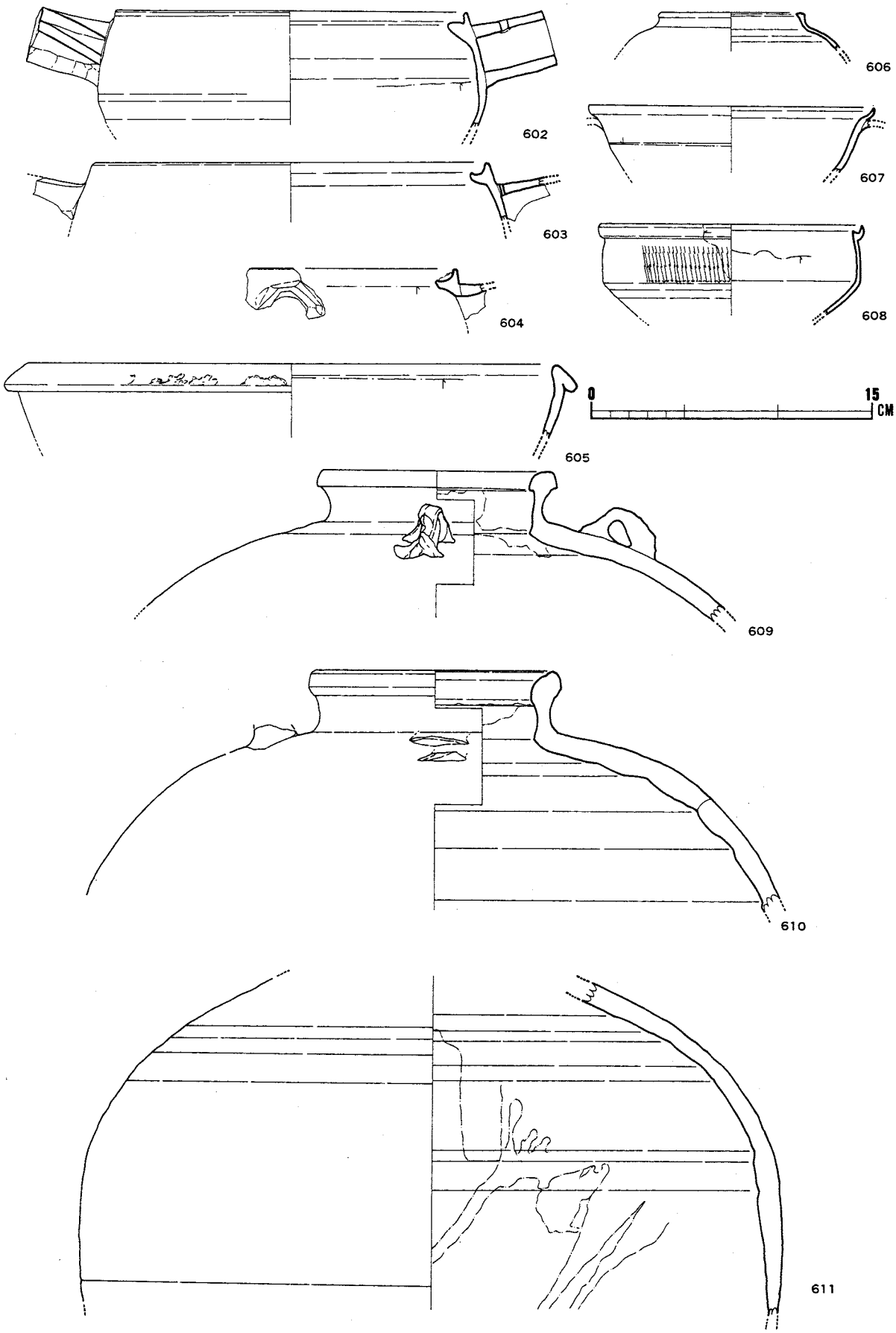


Fig. 100 4次調査　陶器（磁灯窯系）（8）　その他の陶器（1）

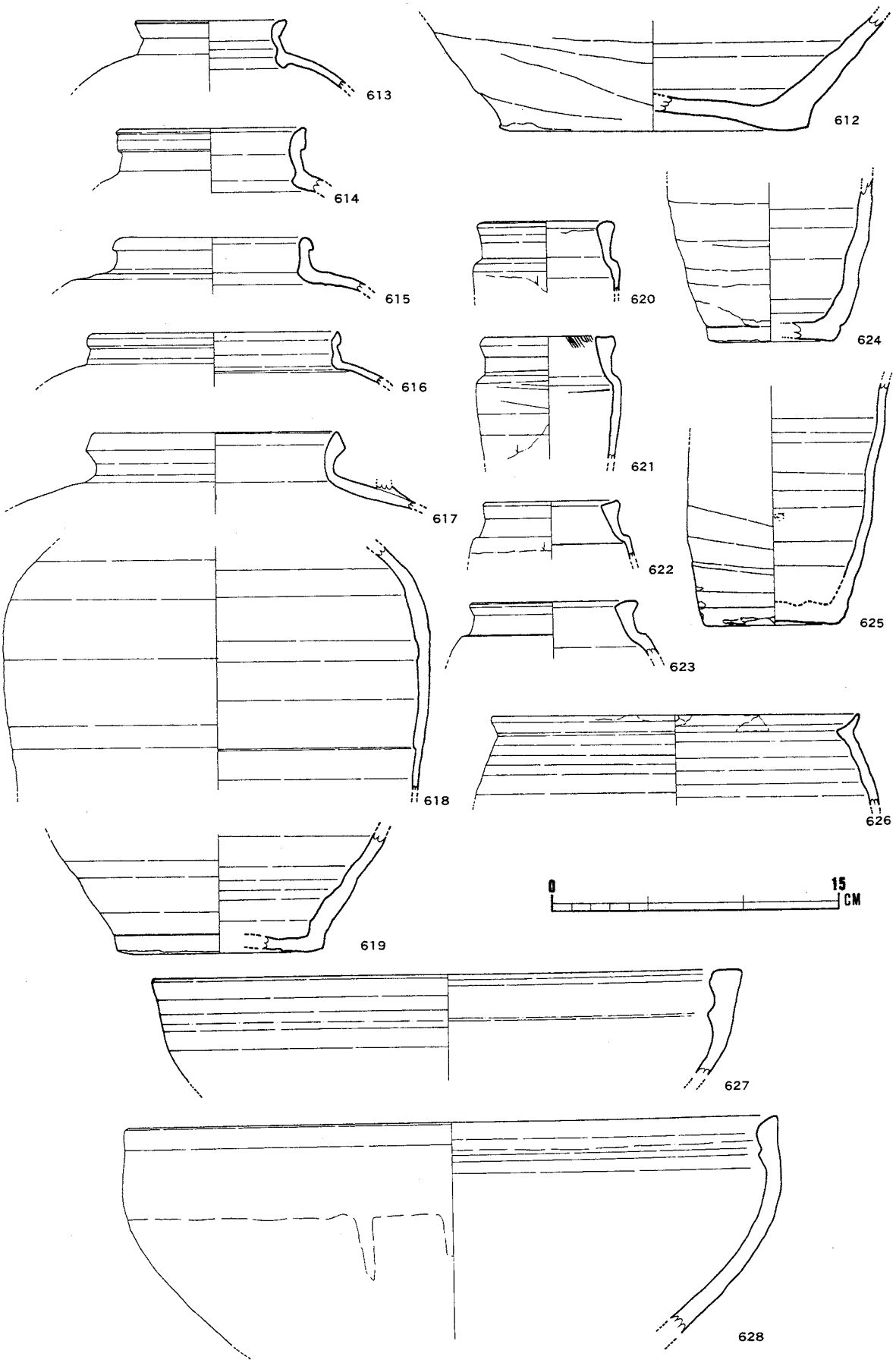


Fig. 101 4次調査　その他の陶器（2）

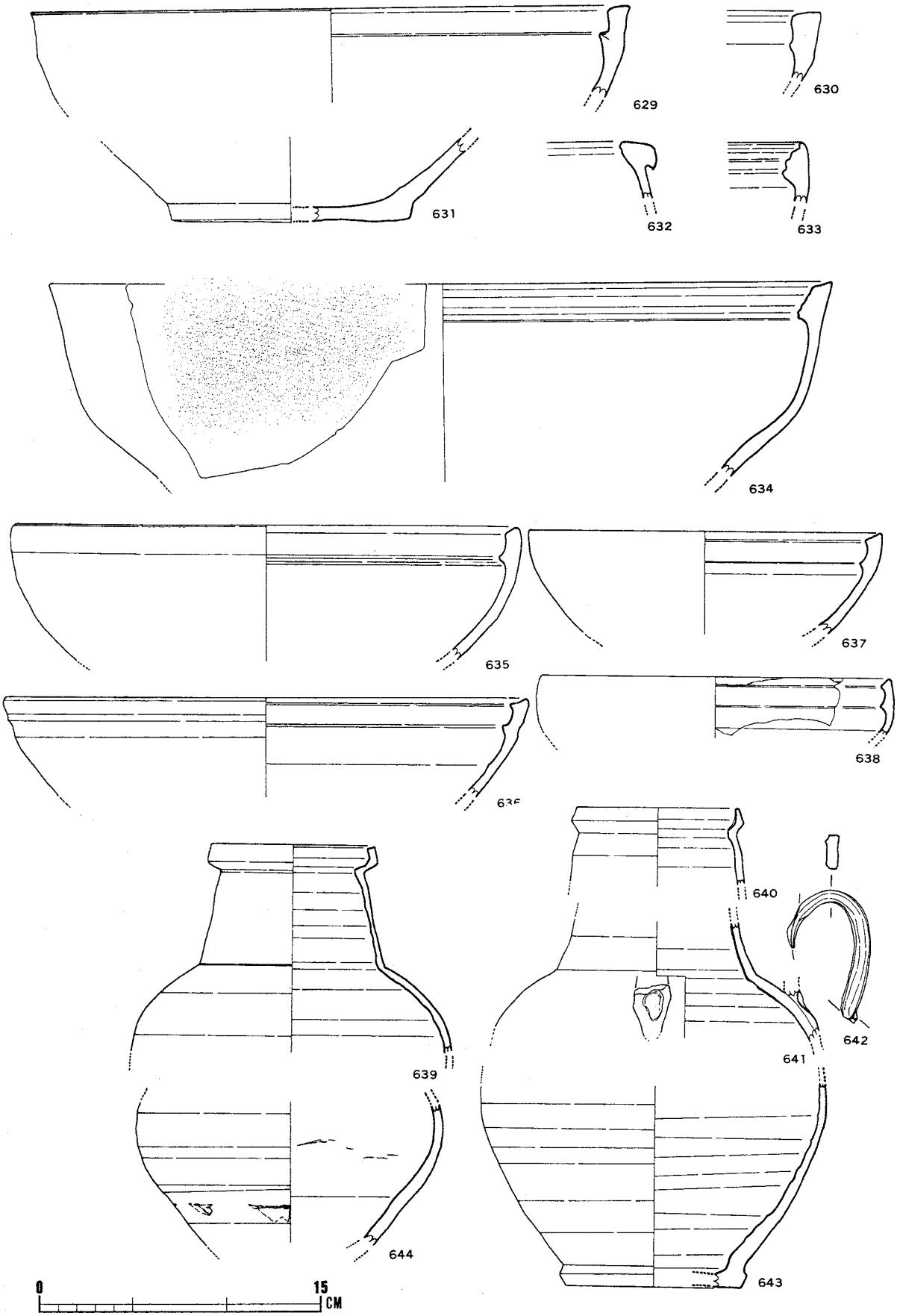


Fig. 102 4次調査　その他の陶器（3）

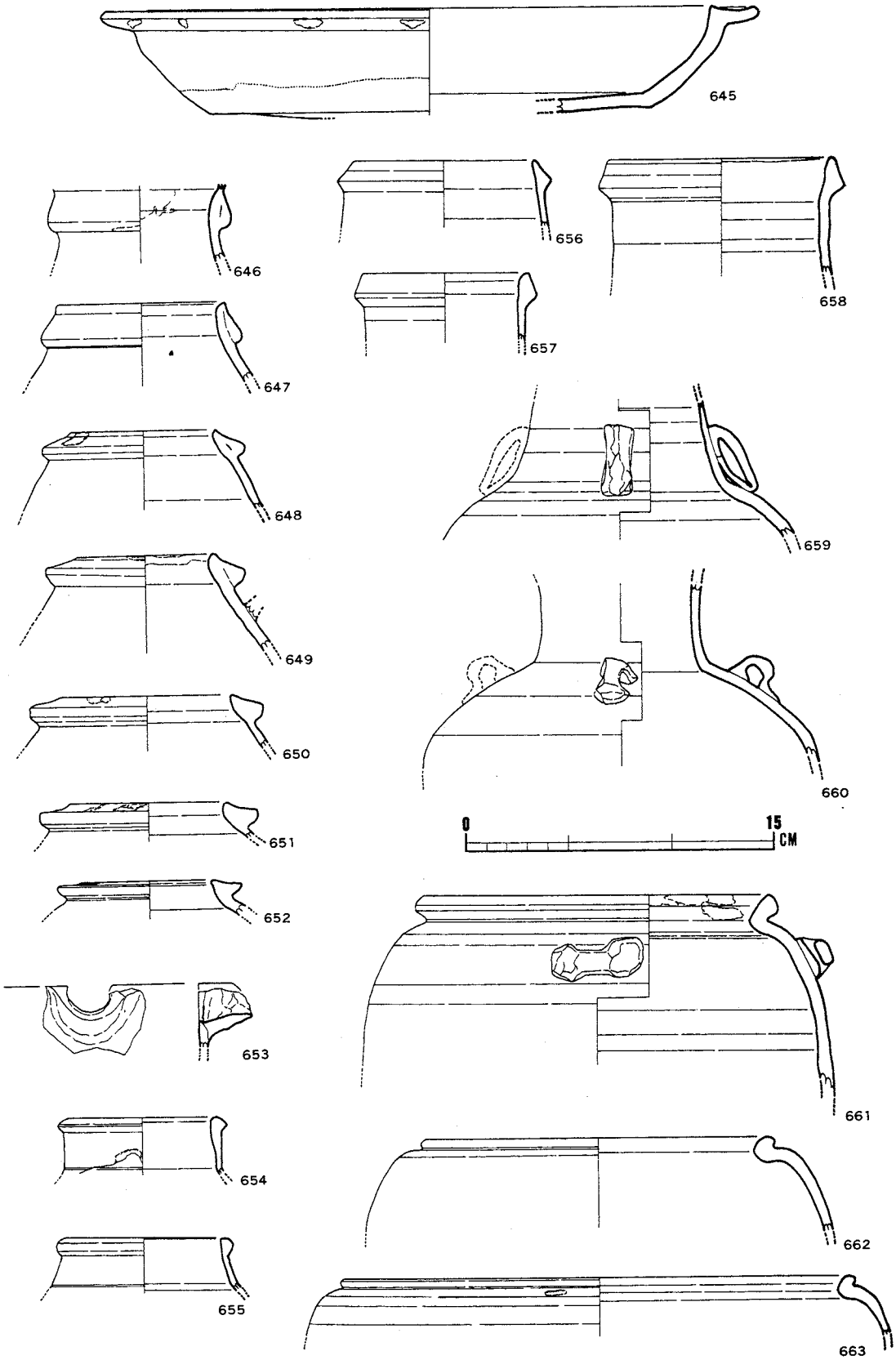


Fig. 103 4次調査　その他の陶器（4）

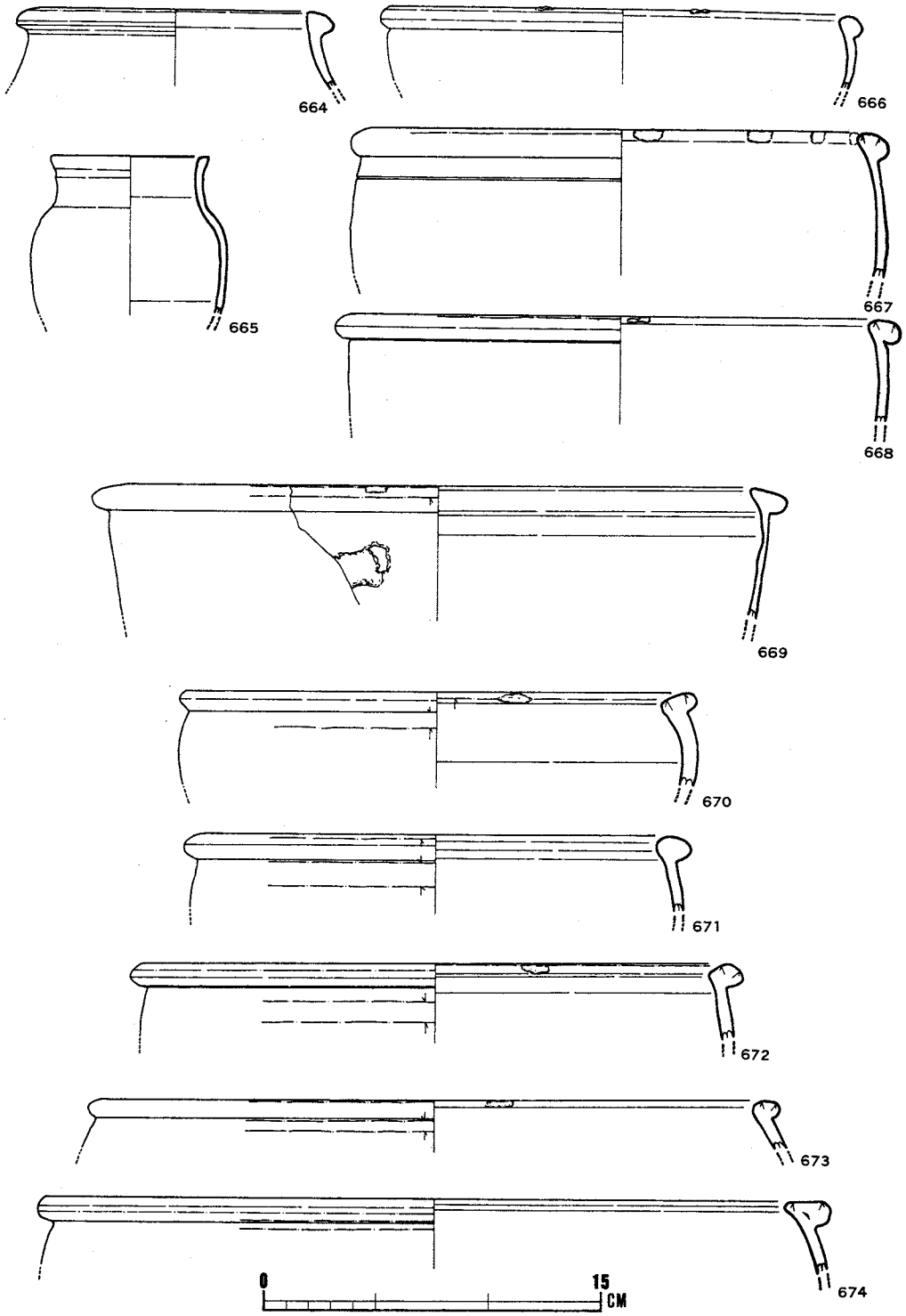


Fig. 104 4次調査　その他の陶器（5）

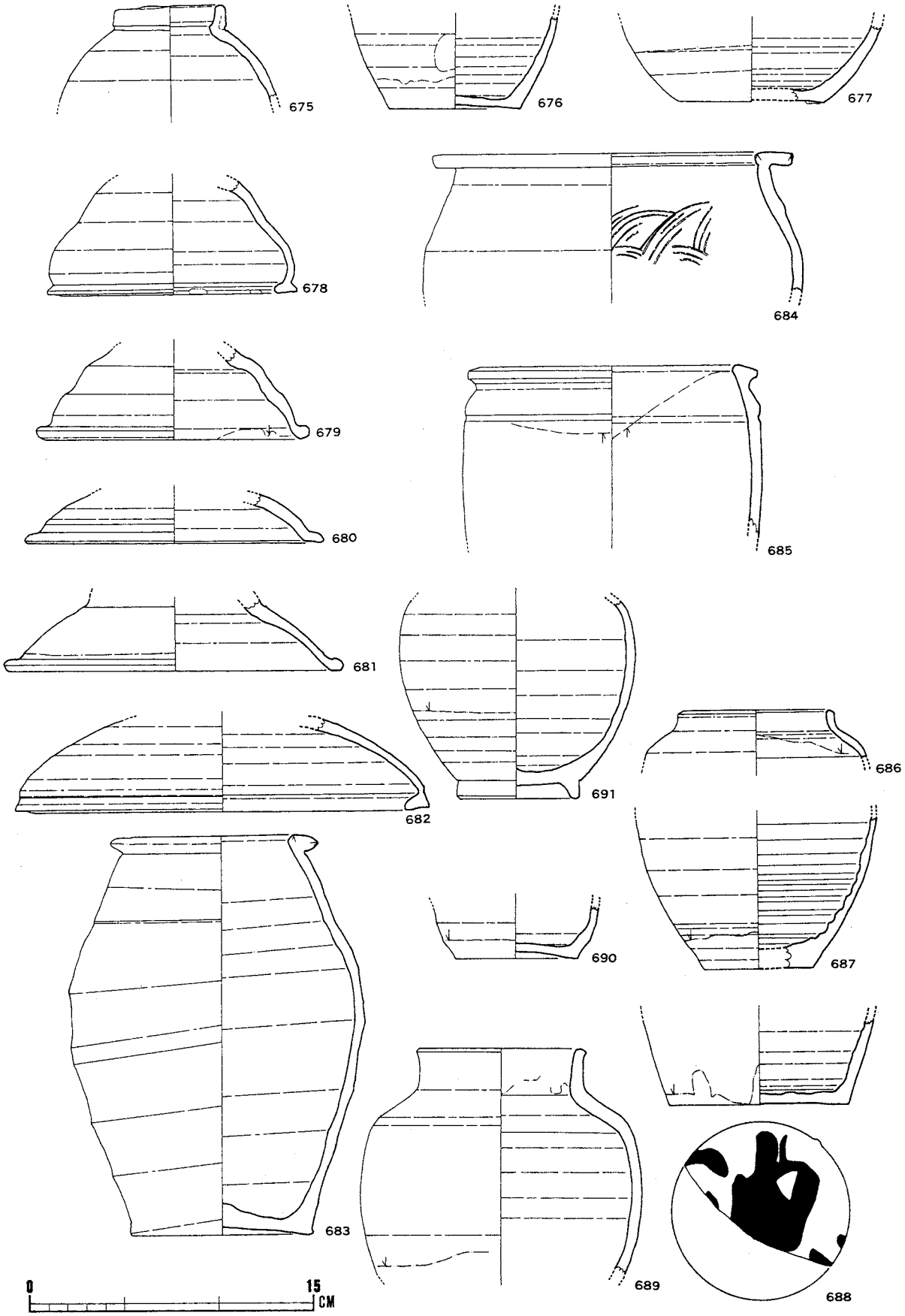


Fig. 105 4次調査　その他の陶器（6）

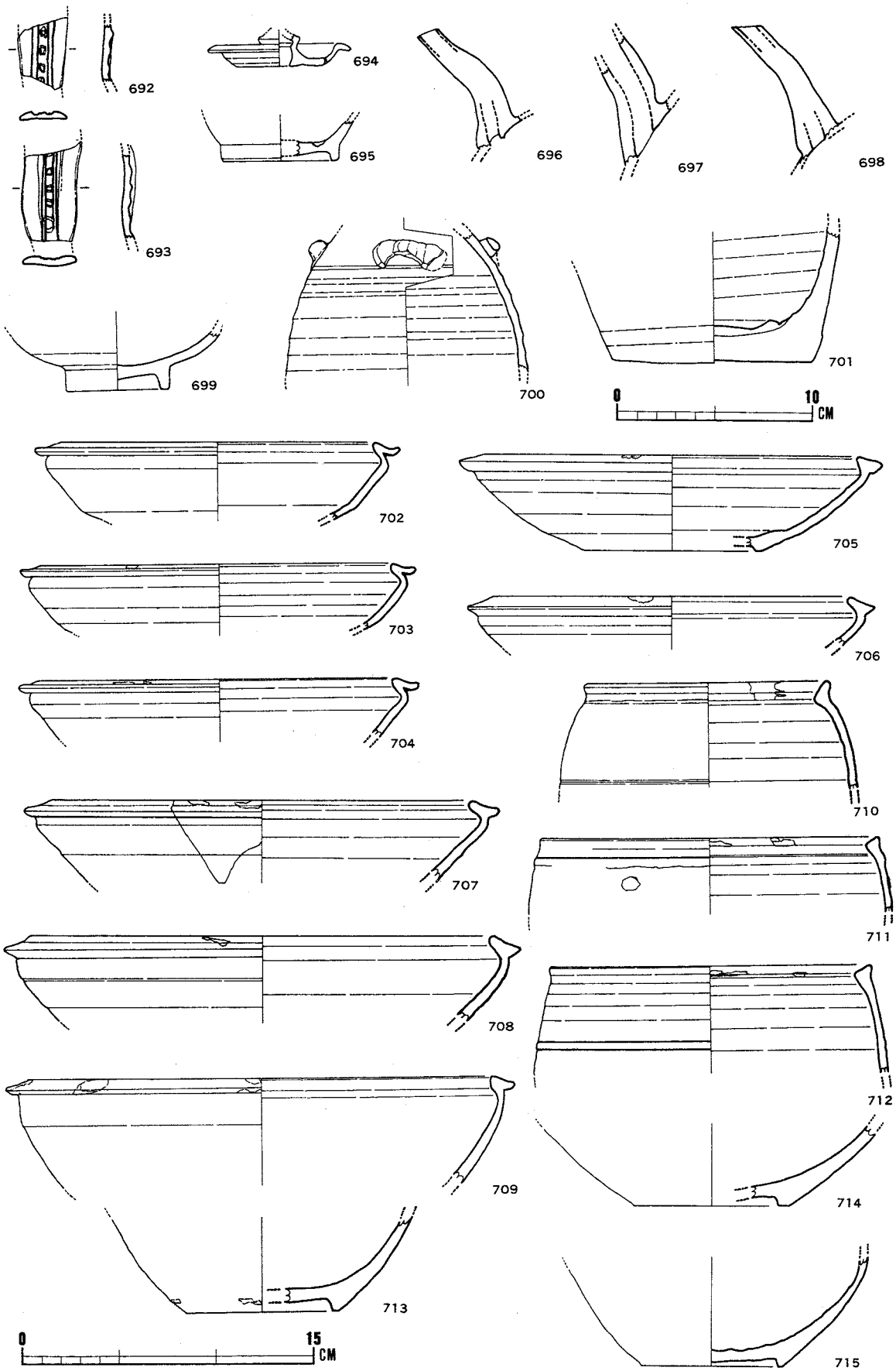


Fig. 106 4次調査　その他の陶器（7）

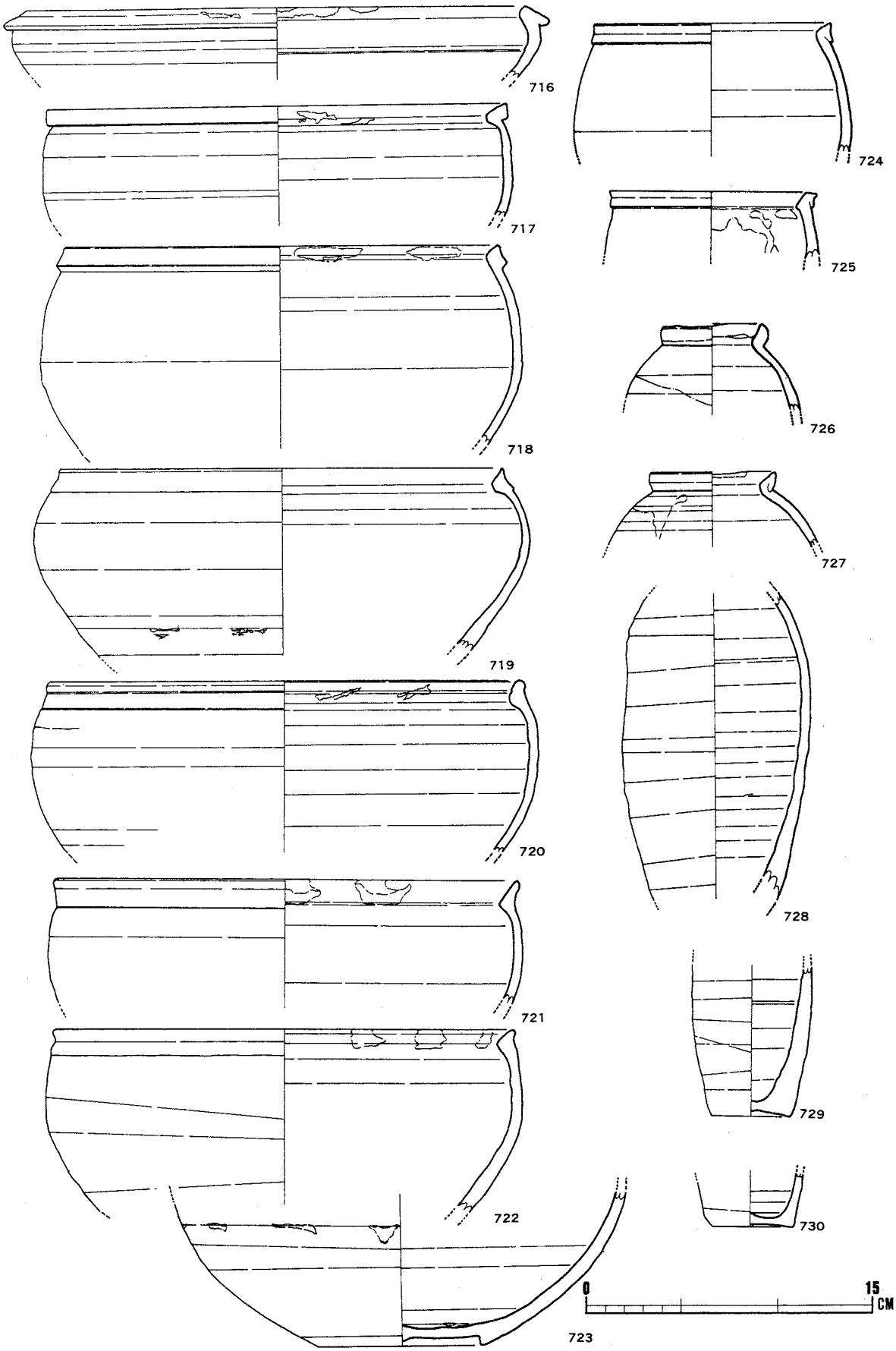


Fig. 107 4次調査　その他の陶器（8）

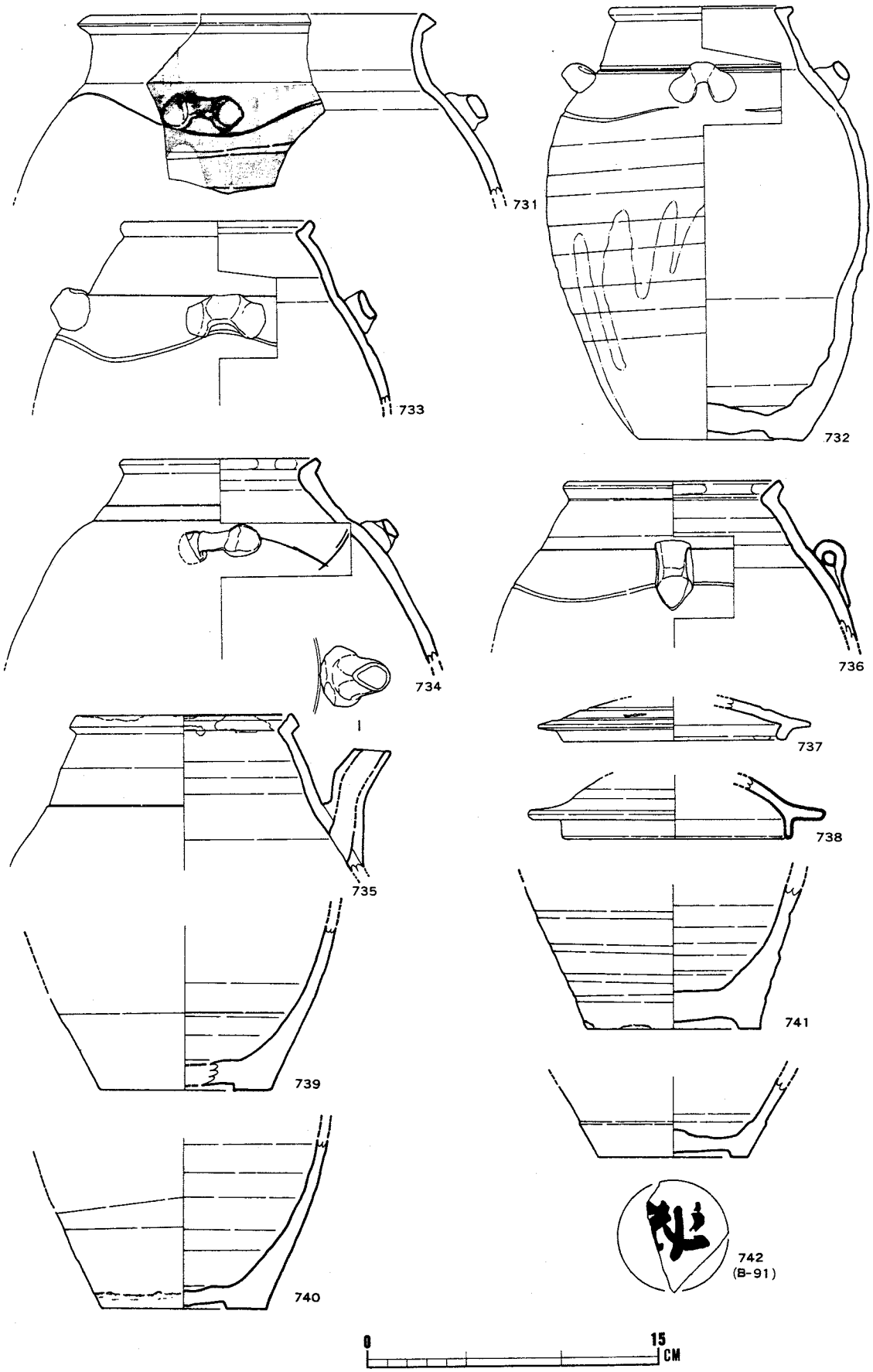


Fig. 108 4次調査　その他の陶器（9）

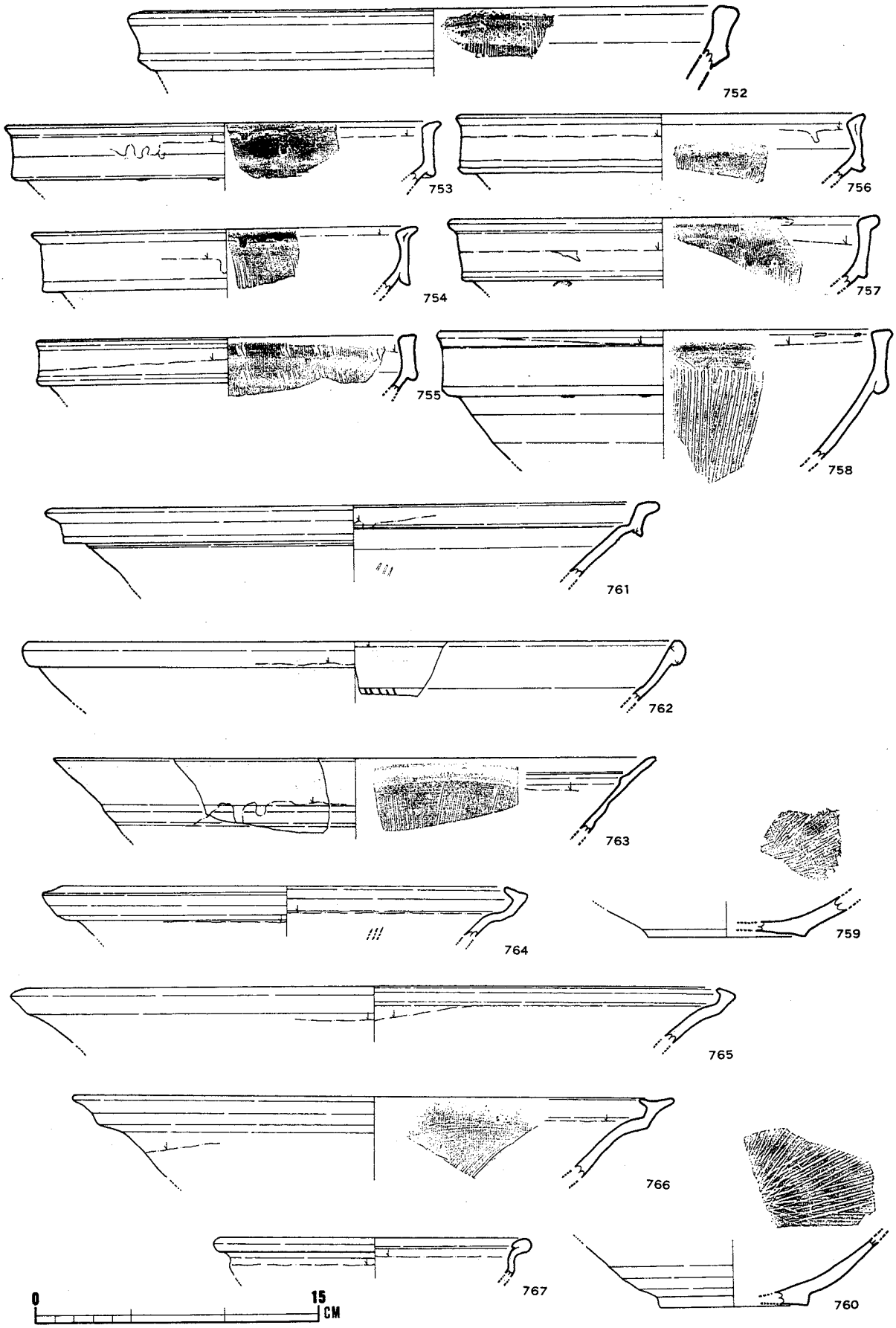


Fig. 109 4次調査　その他の陶器（10）

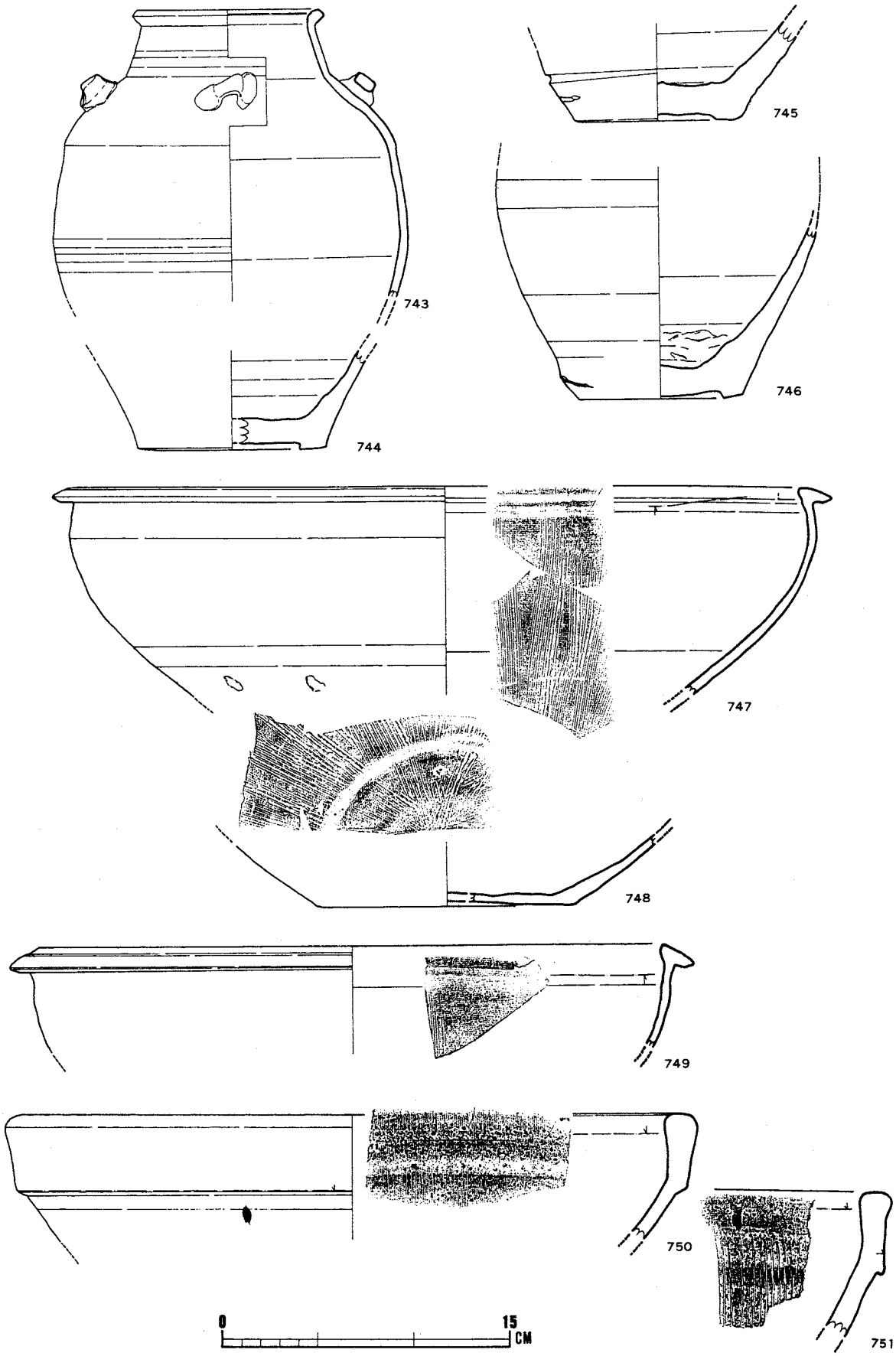


Fig. 110 4次調査　その他の陶器（11）

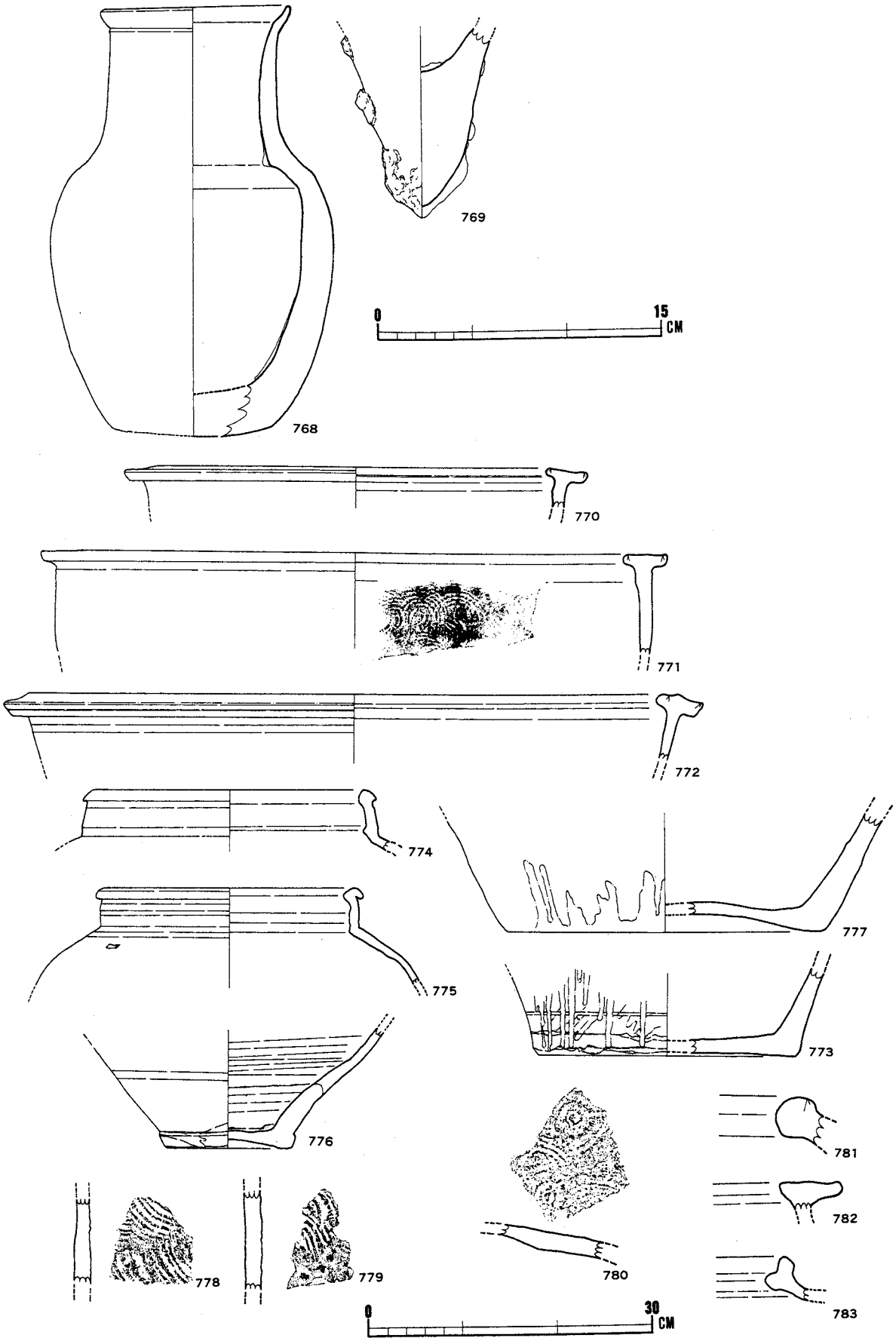


Fig. 111 4次調査　その他の陶器（12）

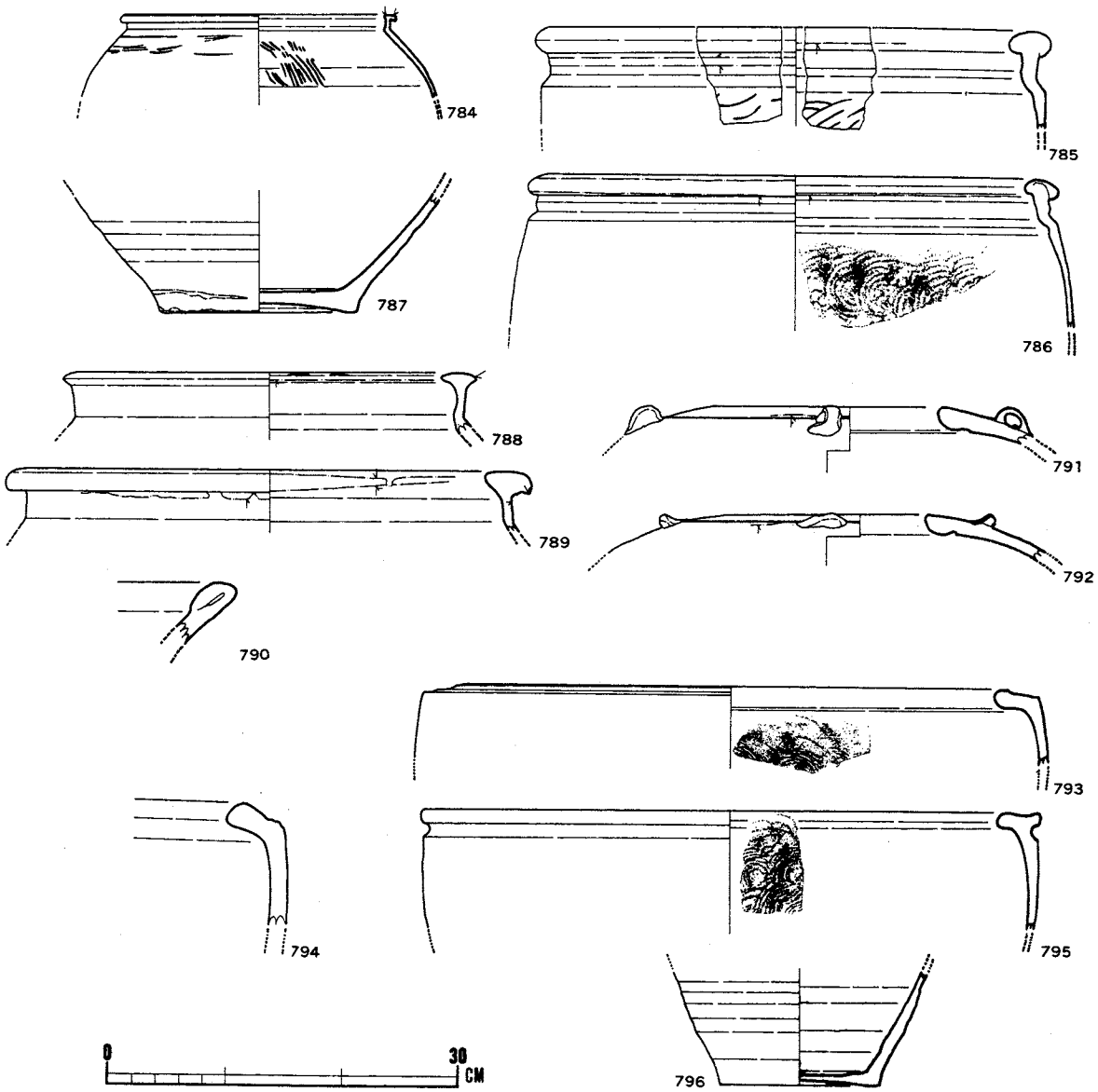


Fig. 112 4次調査　その他の陶器（13）

〔朝鮮陶磁〕　中国ではなく朝鮮半島で生産されたと思われるものが若干ながらあった。いずれも朝鮮産とする断定の材料を備えているわけではないが、一応可能性として考えておきたい。将来、何らかの自然科学的分析によって確かめられることを期待している。ともあれ、ここに挙げた個体は目についたもののすべてであって、中国産の遺物に比してその数はまことに微々たるものといわなければならない。

797、798は同一個体で徳利形の瓶であろう。灰ベージュの土に白黒の砂がまじった胎で、頚で急に絞ったせいか内面にしわがよっている。釉は黒褐色で一面に茶色が浮いている。799、800は蛇の目高台の青磁碗。灰色の胎に透明な青緑色の釉が内外にかかっている。外底4か所に白い粒まじりの硅砂の目跡あり。801、明灰色の土に明るいオリーブの釉がかかる。光沢があり、氷裂も見られる。畳付に4個砂目跡あり。802～808はいずれも粗雑な青磁碗・皿である。胎は灰色で粗く、オリーブ色の釉がかかっているが、よく熔けず灰黄色ぎみのものも多い。見込と畳付に4個砂目跡があり、かなり磁化していることを除けは陶器碗1と区別することは難しい。あるいは中国産か。809　青磁碗、胎は黄

灰色やや粗く砂っぽい。暗緑色の釉がかかり、底部に4個砂目あごがある。810、811は青磁皿。灰色の胎に暗青緑色の釉がかかる。底には白い釉がかかる。ピンホールが多く、釉のかかった畳付には、砂目跡がある。813も白磁だが生焼けか黄白色の胎に透明釉がかかる。見込と畳付に5個の砂目跡、814、砂めの灰色の胎に灰色に白が浮く釉がかかる。5個の砂目が見込と畳付につく。815は精良緻密な灰胎、灰白色の釉は高台脇まで。胎土と同じ土による目跡が見込に見られる。816は三島手の壺の底部。砂っぽい土は茶色をおびたベージュ色である。まだらに白化粧してあるが、文様は不明である。灰緑色を帯びた気泡の多い半透明釉が外面全体にかかる。畳付と外底中心部に白い砂がたくさん付着している。

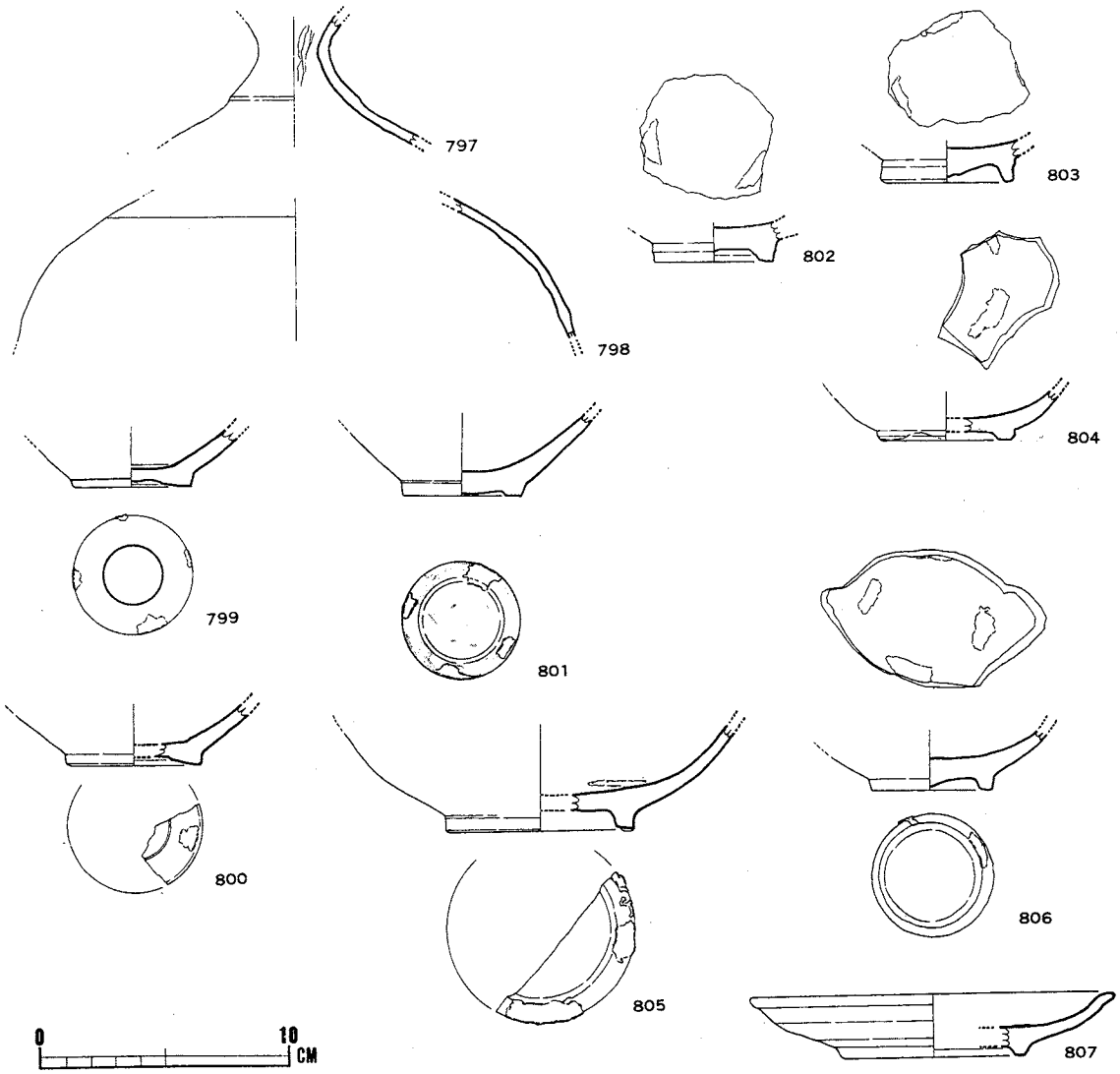


Fig. 113 4次調査　朝鮮陶磁（1）

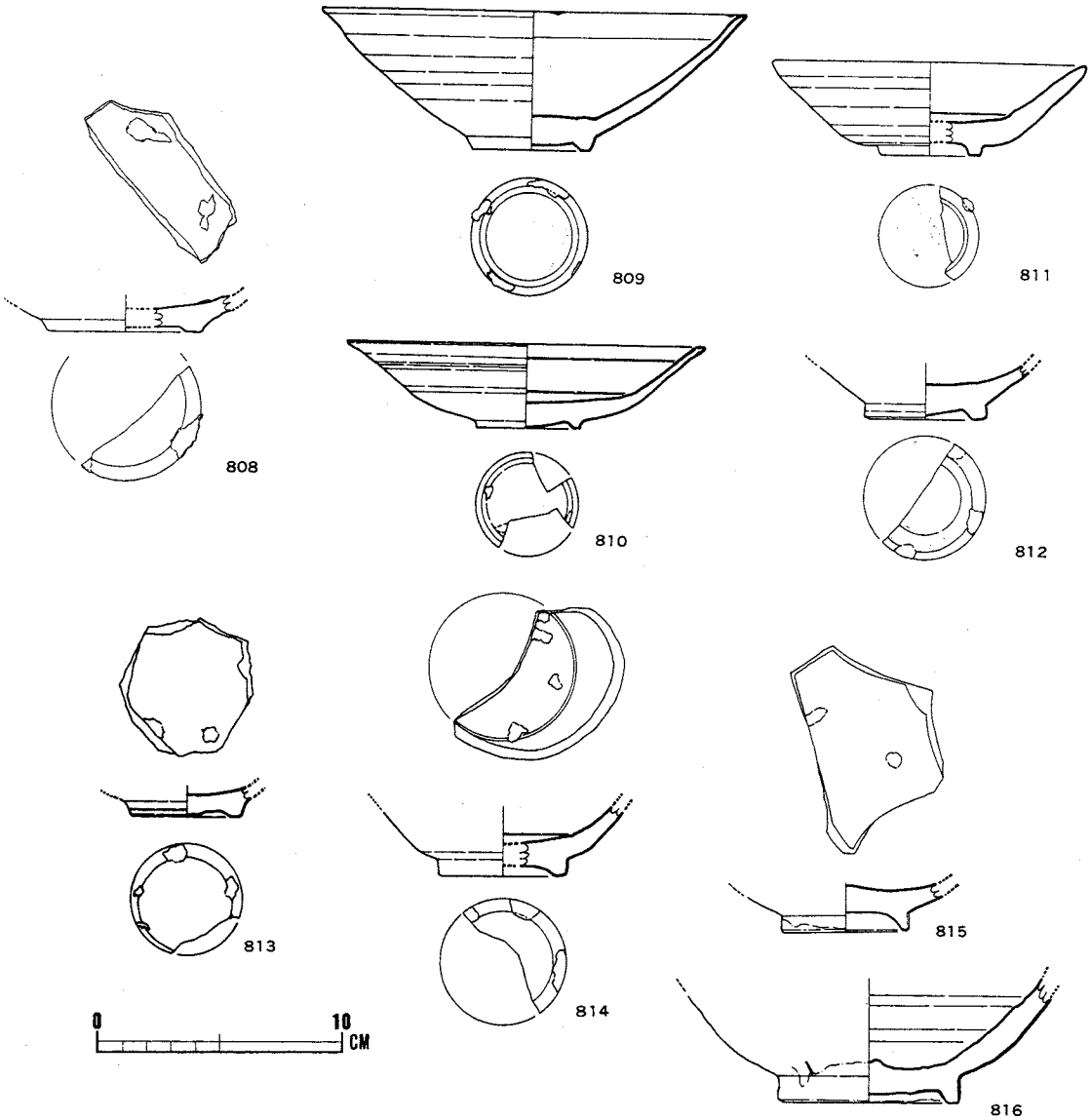


Fig. 114 4次調査　朝鮮陶磁（2）

Tab. 16　掲載遺物の出土地点一覧　　（Dは土壙、Mは溝の略号である）

遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点
1	D-Ⅳ D164(4), D163 D165(各1)	16	A-Ⅲ	31	E-Ⅰ D196	46	B-Ⅰ	61	E-Ⅰ D189
2	E-Ⅳ 包(9) D-Ⅳ D163(2), 包(1)	17	C-Ⅲ D4	32	E-Ⅳ D195	47	E-Ⅳ	62	A-Ⅰ D38
3	C-Ⅲ D14	18	C-Ⅱ D130	33	E-Ⅳ D204	48	C-Ⅱ	63	C-Ⅲ D15
4	C-Ⅲ	19	E-Ⅱ D10	34	A-Ⅲ M2	49	E-Ⅳ	64	B-Ⅰ
5		20	E-Ⅰ D193	35	B-Ⅱ	50	B-Ⅱ	65	C-Ⅲ D15
6	D-Ⅳ	21	B-Ⅱ	36	D-Ⅰ	51	E-Ⅳ 下	66	D-Ⅰ
7	E-Ⅱ	22		37	C-Ⅲ D3	52	B-Ⅱ	67	E-Ⅳ
8	D-Ⅳ D164下	23	D-Ⅳ D164下	38	A-Ⅰ D30	53	E-Ⅳ	68	E-Ⅳ
9	E-Ⅱ D6	24		39	D-Ⅳ D163	54	E-Ⅳ D204	69	E-Ⅳ
10	E-Ⅱ D1	25	B-Ⅲ D24	40	E-Ⅳ	55	B-Ⅱ	70	B-Ⅲ D129
11	E-Ⅱ D10上	26	B-Ⅱ	41	D-Ⅳ D164下	56	A-Ⅱ M1	71	E-Ⅰ D200
12	不明	27	A-Ⅰ D30	42	C-Ⅲ D3	57	C-Ⅰ D99	72	E-Ⅱ D6
13		28	B-Ⅲ D123	43	D-Ⅳ D203-D164	58	D-Ⅳ	73	C-Ⅰ
14	E-Ⅱ D6	29	D-Ⅳ	44	C-Ⅲ	59	B-Ⅱ	74	A-Ⅱ B-Ⅱ D127
15	B-Ⅱ	30	E-Ⅳ	45	E-Ⅱ D6	60	E-Ⅳ	75	B-Ⅳ D150

遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点
76	E-Ⅰ	129	A-Ⅱ B-Ⅱ D127	182	C-Ⅲ D21	235	B-Ⅳ D178	288	C-Ⅲ D 3
77	A-Ⅲ	130	A-Ⅱ B-Ⅱ D127	183	A-Ⅰ D31	236	B-Ⅱ	289	B-Ⅱ D124
78	E-Ⅳ D204	131	A-Ⅰ D30	184	C-Ⅳ 上 D155	237	B-Ⅰ D61	290	D-Ⅳ 表
79	A-Ⅱ	132	B-Ⅳ M 4	185	不明	238	D-Ⅰ D72	291	D-Ⅱ D202
80	A-Ⅲ	133	C-Ⅲ D15	186	C-Ⅰ D77	239	A-Ⅰ	292	E-Ⅱ D 5
81	E-Ⅱ D 6	134	B-Ⅰ	187	C-Ⅰ D72	240	B-Ⅱ D135	293	E-Ⅳ D204
82	C-Ⅲ D22	135	A-Ⅲ	188	D-Ⅳ D165	241	E-Ⅳ	294	E-Ⅰ D198
83	E-Ⅰ D189	136	D-Ⅰ	189	C-Ⅰ D17	242	E-Ⅳ D188	295	E-Ⅰ D194
84	E-Ⅳ D175	137	A-Ⅲ	190	B-Ⅳ 表土	243	D-Ⅳ D164下	296	A-Ⅱ D146
85	D-Ⅳ	138	D-Ⅳ D163	191	E-Ⅱ D 1	244	B-Ⅰ	297	E-Ⅰ
86	C-Ⅰ	139	E-Ⅱ D 6	192	E-Ⅱ D 6	245	C-Ⅰ	298	C-Ⅲ D14
87	B-Ⅲ	140	E-Ⅱ D10	193	C-Ⅲ D 3	246	B-Ⅱ D124	299	C-Ⅲ D16
88	A-Ⅰ D30	141	不明	194	D-Ⅰ	247	D-Ⅳ 表土	300	
89	C-Ⅲ	142	C-Ⅰ D95	195	B-Ⅳ D150	248	D-Ⅳ 表土	301	C-Ⅰ D100
90	B-Ⅰ D36	143	E-Ⅰ D198	196	C-Ⅲ D 1	249	A-Ⅱ D146	302	E-Ⅳ D188
91	B-Ⅰ D36	144	C-Ⅰ D95	197	E-Ⅱ D10	250	B-Ⅳ D150	303	B-Ⅰ D66
92	B-Ⅰ D36	145	A-Ⅱ B-Ⅱ D127	198	C-1 D95	251	C-Ⅱ D121	304	D-Ⅳ D167
93	B-Ⅰ D205	146	D-Ⅱ D202	199	E-Ⅳ D207 D-Ⅰ D188	252	D-Ⅳ	305	E-Ⅰ D189
94	B-Ⅰ D60	147	D-Ⅰ	200	D-Ⅳ D163	253	B-Ⅱ	306	C-Ⅳ D158
95	A-Ⅰ D47	148	B-Ⅳ D52	201	E-Ⅱ D10	254	C-Ⅳ 表土	307	B-Ⅰ D41
96	E-Ⅱ D 9	149	E-Ⅰ D193	202	不明	255		308	L-D-Ⅰ
97	A-Ⅰ D37	150	B-Ⅳ 表土	203		256	不明	309	B-Ⅲ D24
98	B-Ⅰ	151	E-Ⅰ D194	204	B-Ⅰ D39	257		310	
99	C-Ⅰ D72	152	E-Ⅰ D194	205	E-Ⅳ	258	C-Ⅰ 表土	311	B-Ⅰ D66
100	B-Ⅳ Pit154	153	B-Ⅰ D66	206	E-Ⅳ	259		312	C-Ⅲ
101	B-Ⅰ D61	154	A-Ⅰ D51 B-Ⅰ D41	207	E-Ⅰ D194	260	C-Ⅱ D18	313	A-Ⅱ D147
102	D-Ⅰ	155	B-Ⅳ Pit154	208	A-Ⅰ D30	261	C-Ⅲ D15	314	不明
103	A-Ⅱ B-Ⅱ D127	156	B-Ⅳ D150	209	B-Ⅳ 表土	262	E-Ⅱ D 6	315	B-Ⅰ
104	B-Ⅰ D63	157	E-Ⅰ D194	210	D-Ⅰ	263	C-Ⅰ D99	316	C-Ⅲ
105	B-Ⅰ D59	158	E-Ⅰ D193	211	E-Ⅳ	264	D-Ⅰ	317	A-Ⅲ
106	D-Ⅰ	159	D-Ⅰ	212	E-Ⅰ D194	265		318	C-Ⅱ
107	C-Ⅱ D121	160	C-Ⅲ D 3	213	E-Ⅰ D194	266	B-Ⅱ	319	B-Ⅱ
108	C-Ⅲ D17	161	C-Ⅲ	214	C-Ⅳ D183	267	E-Ⅳ	320	C-Ⅰ
109	B-Ⅲ D148	162	D-Ⅰ	215	E-Ⅳ	268	D-Ⅳ D158	321	C-Ⅳ D154
110	E-Ⅰ D196	163	B-Ⅲ D24	216	C-Ⅲ D14	269	B-Ⅳ Pit154	322	D-Ⅰ
111	A-Ⅰ D51	164	D-Ⅰ D202	217	E-Ⅰ D192	270	B-Ⅳ D199	323	E-Ⅰ D196
112	A-Ⅲ	165	C-Ⅳ 表土	218	E-Ⅳ	271	E-Ⅰ D92	324	不明
113	C-Ⅱ	166	B-Ⅰ D36	219	E-Ⅳ	272		325	B-Ⅱ
114	E-Ⅰ	167	B-Ⅳ D150	220	D-Ⅰ	273	B-Ⅳ 表土	326	B-Ⅱ
115	E-Ⅰ D193	168	B-Ⅰ D60	221	E-Ⅰ D194	274	C-Ⅱ D121	327	E-Ⅱ D 6
116	C-Ⅳ D187	169		222	C-Ⅲ 表採	275	D-Ⅰ D202	328	B-Ⅱ D174
117	E-Ⅰ D194	170	B-Ⅰ Pit41	223	B-Ⅲ D10	276	D-Ⅳ D164	329	E-Ⅰ
118	A-Ⅰ D30	171	D-Ⅰ	224	E-Ⅳ D204	277	不明	330	D-Ⅰ
119	B-Ⅲ D24	172	E-Ⅰ D194	225	E-Ⅳ D200	278	C-Ⅲ D16	331	B-Ⅱ
120	D-Ⅳ D164	173	B-Ⅳ D152	226	不明	279	D-Ⅰ D202	332	E-Ⅱ D 6
121	C-Ⅲ D17	174	D-Ⅰ	227	D-Ⅰ	280	C-Ⅲ D 3	333	B-Ⅰ D34
122	E-Ⅳ	175	B-Ⅳ D150	228	C-Ⅲ D 2	281	C-Ⅱ D121	334	B-Ⅰ
123	E-Ⅰ D194	176	A-Ⅱ D146	229	D-Ⅰ	282	D-Ⅳ D164下	335	D-Ⅱ D202
124	E-Ⅳ D204	177	B-Ⅰ D34	230	D-Ⅳ D164下	283	E-Ⅰ D193	336	E-Ⅳ
125	E-Ⅳ D204	178	D-Ⅰ	231	B-Ⅰ D26	284	C-Ⅲ	337	E-Ⅳ
126	B-Ⅱ D124	179		232	A-Ⅱ D147	285	不明	338	B-Ⅲ D24
127	D-Ⅳ 表土	180	E-Ⅳ 下	233	C-Ⅳ Ⅳ186	286	D-Ⅳ D164下	339	B-Ⅲ
128	D-Ⅰ D204	181	A-Ⅰ	234	E-Ⅳ	287	E-Ⅰ D194	340	D-Ⅰ D202

遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点
341	C-Ⅲ D 4	394		447	E-Ⅱ D 9	500	C-Ⅲ	553	B-Ⅲ C-Ⅲ D 1
342	D-Ⅰ D194	395		448	E-Ⅳ D 6	501	E-Ⅱ	554	E-Ⅳ D204
343	C-Ⅲ D16	396		449	E-Ⅳ D204	502	E-Ⅱ D 8	555	E-Ⅱ
344	D-Ⅱ D202	397	B-Ⅰ	450	D-Ⅳ D164下	503	C-Ⅲ D14	556	E-Ⅳ D206
345	D-Ⅰ D81	398	A-Ⅲ M 1	451	B-Ⅱ	504	B-Ⅰ D205	557	C-Ⅲ D20
346	E-Ⅱ D10上	399		452	C-Ⅲ D 2	505	B-Ⅱ D123	558	D-Ⅰ Pit102
347	E-Ⅰ D189	400	E-Ⅰ D201	453	B-Ⅳ 表土	506	C-Ⅱ	559	C-Ⅰ
348	D-Ⅰ D176	401	B-Ⅱ	454	E-Ⅰ D201	507	B-Ⅱ D132	560	A-Ⅰ D31
349		402	B-Ⅱ D137	455	C-Ⅲ D 4	508	B-Ⅲ D123	561	A-Ⅲ
350	D-Ⅰ	403	C-Ⅱ	456		509	E-Ⅳ D204	562	C-Ⅰ
351	B-Ⅰ	404	C-Ⅱ D121	457	E-Ⅳ D204	510	不明	563	D-Ⅰ
352	A-Ⅱ D139 B-Ⅱ D123	405	B-Ⅲ D123	458	C-Ⅳ D156	511	E-Ⅰ D174	564	E-Ⅰ D194
353	C-Ⅰ 表土	406		459	B-Ⅳ	512	E-Ⅳ D188	565	D-Ⅰ E-Ⅳ
354	E-Ⅱ	407	C-Ⅲ D21上	460	E-Ⅳ	513	E-Ⅰ D194	566	E-Ⅱ D 6
355	A-Ⅰ	408	B-Ⅱ D124	461	E-Ⅰ D192	514	E-Ⅱ D15	567	A-Ⅰ
356	D-Ⅰ D172	409	D-Ⅰ	462	D-Ⅳ D164	515	E-Ⅳ D188	568	D-Ⅰ E-Ⅳ D204
357	E-Ⅳ	410	E-Ⅳ D204	463	D-Ⅳ 表土	516	C-Ⅰ Pit76	569	C-Ⅰ D17
358		411	C-Ⅲ 表採	464	E-Ⅱ D 1	517	E-Ⅰ D194	570	B-Ⅰ
359	E-Ⅳ	412	A-Ⅰ B-Ⅰ	465		518	D-Ⅰ D202	571	C-Ⅲ D 4
360	C-Ⅰ D99	413	C-Ⅲ D 4	466	B-Ⅰ	519	A-Ⅰ D37	572	C-Ⅱ
361	B-Ⅳ D152	414	E-Ⅰ D194	467	E-Ⅱ D 6	520	A-Ⅰ D38	573	B-Ⅱ
362	E-Ⅳ D204	415	E-Ⅳ	468	C-Ⅲ D21上	521	C-Ⅲ	574	C-Ⅲ D 2
363	A-Ⅱ D147	416	E-Ⅳ D190	469	C-Ⅲ D27	522	C-Ⅲ	575	C-Ⅳ M 4
364	E-Ⅱ D10上	417	E-Ⅳ D204	470	E-Ⅳ D64	523	B-Ⅱ	576	C-Ⅲ D11
365	不明	418	B-Ⅲ 表土	471	E-Ⅳ D204	524	A-Ⅱ D146	577	E-Ⅳ
366	E-Ⅳ D204	419	B-Ⅰ	472	E-Ⅱ	525	E-Ⅰ D230	578	不明
367	A-Ⅰ	420	B-Ⅰ	473	C-Ⅳ D156	526	C-Ⅱ D119	579	D-Ⅳ
368	B-Ⅱ 上	421	E-Ⅰ	474	B-Ⅱ	527	C-Ⅰ D76	580	E-Ⅰ D195
369	E-Ⅰ D189	422	E-Ⅳ D188	475	E-Ⅳ D204	528	D-Ⅳ 表土	581	E-Ⅳ
370	C-Ⅲ D 4	423	D-Ⅳ 表土	476	D-Ⅳ D163	529	D-Ⅰ	582	B-Ⅲ D125
371	D-Ⅰ	424		477	E-Ⅰ D195	530	B-Ⅲ D24	583	C-Ⅲ D 6
372	E-Ⅳ	425	D-Ⅰ	478	B-Ⅰ D34	531	B-Ⅱ	584	E-Ⅱ
373	C-Ⅰ D95	426	B-Ⅲ	479	D-Ⅳ D165	532		585	D-Ⅳ D164下
374	D-Ⅰ	427	A-Ⅱ B-Ⅱ D127	480	B-Ⅰ	533	B-Ⅱ	586	E-Ⅳ
375	B-Ⅲ D24	428	C-Ⅲ D16	481	B-Ⅰ D67	534	C-Ⅱ D112	587	A-Ⅰ
376	D-Ⅳ 表土	429	B-Ⅳ 表土	482	L-D-Ⅰ	535	B-Ⅲ D10	588	E-Ⅰ D200
377	B-Ⅱ	430	C-Ⅱ D15	483		536	B-Ⅱ	589	D-Ⅰ D202
378	B-Ⅱ D123	431	C-Ⅲ D 3	484	B-Ⅱ	537	B-Ⅱ	590	D-Ⅰ
379		432	B-Ⅲ D10	485	D-Ⅰ	538	C-Ⅳ 表土	591	E-Ⅳ D204
380	B-Ⅰ	433	B-Ⅰ D36	486	D-Ⅰ D172	539	E-Ⅰ	592	B-Ⅰ
381	B-Ⅱ D132	434	C-Ⅱ D108	487	E-Ⅱ D10上	540	C-Ⅳ D-Ⅳ 北壁	593	B-Ⅳ D152
382	E-Ⅱ	435	D-Ⅰ D202	488	A-Ⅲ	541	B-Ⅲ D17	594	E-Ⅳ
383	B-Ⅰ	436	C-Ⅲ	489	D-Ⅰ	542	B-Ⅱ	595	B-Ⅱ
384	E-Ⅰ D200	437	B-Ⅰ D39	490	E-Ⅳ	543	E-Ⅳ	596	E-Ⅳ D207
385	D-Ⅰ	438	C-Ⅲ D 3	491	D-Ⅳ D164	544	不明	597	B-Ⅲ D123
386	B-Ⅲ D10	439	C-Ⅲ D15	492	B-Ⅲ D24	545	B-Ⅳ D199	598	D-Ⅰ E-Ⅳ D188
387	D-Ⅰ	440	B-Ⅲ D123	493	E-Ⅱ D 1	546	E-Ⅰ D176	599	D-Ⅳ D170
388	E-Ⅰ D194	441	B-Ⅲ D123	494	E-Ⅰ D194	547	B-Ⅰ D67	600	D-Ⅳ D164下
389	D-Ⅰ	442	D-Ⅰ	495	E-Ⅰ D194	548	E-Ⅳ	601	B-Ⅳ D152
390	E-Ⅱ	443	B-Ⅳ D151	496	B-Ⅲ D24	549	D-Ⅰ D202	602	C-Ⅱ D107
391	C-Ⅲ	444	C-Ⅲ D27	497	D-Ⅰ D176	550	E-Ⅰ D194	603	C-Ⅰ D95
392		445	E-Ⅰ	498	B-Ⅳ D150	551	D-Ⅰ	604	不明
393	C-Ⅱ	446	D-Ⅰ D175	499	E-Ⅳ	552	B-Ⅰ	605	E-Ⅳ

遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点
606	E-Ⅳ	649	E-Ⅰ D200	692	E-Ⅳ	735	D-Ⅰ	778	
607	E-Ⅳ	650	E-Ⅳ	693	不明	736	E-Ⅱ D6	779	
608	E-Ⅳ	651	B-Ⅱ	694	E-Ⅱ D9	737	E-Ⅳ	780	
609	D-Ⅳ	652	D-Ⅰ	695	E-Ⅳ	738	B-Ⅲ D24	781	C-Ⅱ
610		653	E-Ⅳ	696	C-Ⅳ D-Ⅳ D155	739	C-Ⅲ D21上	782	
611	E-Ⅱ D8	654	E-Ⅳ	697	B-Ⅱ D125	740	E-Ⅱ D6	783	A-Ⅲ
612	C-Ⅳ D158	655	E-Ⅳ	698	D-Ⅳ 表土	741	A-Ⅰ	784	B-Ⅱ
613	E-Ⅳ	656	D-Ⅳ E-Ⅳ D164	699	C-Ⅱ D111	742	E-Ⅰ D15	785	B-Ⅱ
614	B-Ⅱ D123	657	C-Ⅲ D2	700	E-Ⅳ D167	743	E-Ⅱ D6	786	C-Ⅲ
615	E-Ⅱ	658	E-Ⅱ	701	D-Ⅰ	744	C-Ⅲ D3	787	D-Ⅰ
616	E-Ⅳ 下	659	E-Ⅳ 下	702	B-Ⅱ	745	D-Ⅰ	788	不明
617	D-Ⅳ	660	D-Ⅰ	703	E-Ⅰ D201	746	C-Ⅰ	789	E-Ⅰ
618	B-Ⅰ	661	D-Ⅳ D164下	704	D-Ⅰ 表土	747	E-Ⅰ D10	790	E-Ⅳ
619	E-Ⅱ	662	D-Ⅳ D164下	705	D-Ⅳ	748	E-Ⅰ D10	791	E-Ⅰ D15
620	A-Ⅱ	663	E-Ⅳ	706	E-Ⅱ	749	E-Ⅰ D13	792	D-Ⅳ D165
621	E-Ⅱ	664	E-Ⅳ	707	E-Ⅳ	750	C-Ⅳ D152	793	B-Ⅰ D39
622	E-Ⅱ D7	665	E-Ⅰ D200	708	C-Ⅲ D3	751	E-Ⅳ	794	
623	A-Ⅱ	666	E-Ⅰ D200	709	E-Ⅱ D6	752	A-Ⅱ D139	795	E-Ⅳ
624	不明	667	D-Ⅰ E-Ⅳ D188	710	B-Ⅳ	753	B-Ⅲ	796	E-Ⅰ D176
625	E-Ⅱ D9	668	D-Ⅰ E-Ⅳ D188	711	E-Ⅱ	754	E-Ⅳ	797	
626	E-Ⅳ	669	C-Ⅲ	712	E-Ⅱ	755	E-Ⅰ D9	798	C-Ⅲ D2
627	B-Ⅳ	670	B-Ⅱ	713	E-Ⅱ D13	756	B-Ⅱ	799	C-Ⅰ
628	B-Ⅰ	671	E-Ⅱ	714	C-Ⅲ D3ベルト	757	E-Ⅱ	800	B-Ⅳ M4
629	D-Ⅰ	672	B-Ⅰ	715	B-Ⅳ D150	758	D-Ⅳ	801	A-Ⅱ D143
630	C-Ⅱ	673	E-Ⅰ	716	D-Ⅳ D164	759	C-Ⅰ D83	802	C-Ⅳ 表土
631	C-Ⅳ 表土	674	E-Ⅳ	717	E-Ⅱ D13	760	A-Ⅲ	803	D-Ⅰ
632	A-Ⅲ	675	B-Ⅰ	718	E-Ⅱ D13	761	A-Ⅱ	804	B-Ⅰ D59
633	B-Ⅳ	676	E-Ⅳ 下	719	D-Ⅳ D184	762	E-Ⅳ	805	E-Ⅱ D6
634	C-Ⅲ D15	677	E-Ⅳ 下	720	E-Ⅰ D198	763	B-Ⅳ	806	C-Ⅲ D3
635	C-Ⅱ D108	678	B-Ⅳ Pit154	721	E-Ⅱ D198	764	C-Ⅰ	807	C-Ⅳ D154
636	D-Ⅰ D172	679	B-Ⅰ	722	C-Ⅲ D3	765	D-Ⅰ	808	E-Ⅰ
637	D-Ⅳ D164下	680	B-Ⅱ	723	C-Ⅳ D182	766	B-Ⅲ	809	E-Ⅰ
638	D-Ⅰ	681	E-Ⅳ	724	E-Ⅳ	767	C-Ⅲ	810	B-Ⅰ
639	C-Ⅰ	682	E-Ⅲ	725	C-Ⅲ D2	768	D-Ⅰ	811	C-Ⅱ
640	不明	683	E-Ⅳ	726	E-Ⅱ D9	769	E-Ⅰ D10	812	C-Ⅰ
641	C-Ⅲ D14	684	E-Ⅳ D188	727	D-Ⅳ	770	B-Ⅱ 上	813	B-Ⅲ D10
642	C-Ⅲ D15	685	C-Ⅲ 表土	728	E-Ⅳ	771	B-Ⅳ D152	814	A-Ⅰ D38
643	D-Ⅳ 表土	686	C-Ⅰ D-Ⅳ D121	729	C-Ⅲ D14	772	B-Ⅱ	815	B-Ⅲ
644	E-Ⅳ D193	687	D-Ⅳ D171	730		773	B-Ⅰ D66	816	
645	E-Ⅳ	688	不明	731	E-Ⅱ	774	E-Ⅳ D172		
646	E-Ⅳ	689	D-Ⅳ D171	732	不明	775	E-Ⅱ		
647	D-Ⅰ	690	D-Ⅰ 表土	733	C-Ⅲ D14	776	E-Ⅱ		
648	C-Ⅲ	691	E-Ⅰ D13	734	C-Ⅱ D-Ⅳ 北壁	777	B-Ⅳ D178		

Ⅲ　まとめにかえて

博多遺跡群第１次調査は、民間関係調査の嚆矢となったもので、以後の博多遺跡群の調査を考えると、記念碑的な調査と言えるかもしれない。考古学データの少ない中での試行錯誤の調査であった。本文で述べたように、ここでは多くの廃棄物処理土壙、馬骨が堆積した溝、溝に挟まれた「通り庭」的な舗道状遺構、木棺墓、井戸、ピットが検出できた。遺構は切り合いが多く、また、遺物も混在するため、前後関係の把握は困難で、ある一定時期の遺構の平面分布は明確にしえない。遺構の時期は平安時代後半から戦国時代末までが中心となる。遺物で最も古いものには弥生時代中期の甕の破片があり、祇園町交差点周辺に広がる甕棺墓に近接するものと思われる。遺物のほとんどは中世のもの土師器皿が大半を占めるが、他の地点と同様、中国製陶磁器の占める割合も高く、器種も多い、墨書陶磁のなかには「謝」銘のものがあり、承天寺を開いた博多綱首「謝国明」などとの関連が興味のもたれるところである。有機物堆積層では、多量の箸状木製品、下駄等の木製品があり、その他製鉄に関わる遺構も検出され、中世博多の人々の暮らしぶりがうかがえた。

博多遺跡群第８次調査は、第１次調査地点の隣接地で、検出した遺構や遺物は基本的に同様であるが、弥生中期の小児甕棺が原位置を保った状態で検出されており、甕棺墓域の東端部に位置するものと思われる。ここでも多くのピットが検出され、大半は柱穴と思われるが組織的には把握できないが町屋の並びは、溝の方向と同様であろう。焼け割れた瓦と粘土を敷き詰めた、土間状の遺構が検出されているが、炉壇かと思われる焼け壁が炉中に残り茶室の可能性が強い。この建物も溝と平行する。

第４次調査は、博多遺跡群の民間開発ではきわめて広い面積であった。多くの遺構が検出され、何よりも148,113点にもおよぶ膨大な量の遺物を抱え込むことになった。その内中世陶磁器類142,425点でこの他瓦3,351点、石製品1,013点、更に古墳時代前期の土師器、弥生時代甕棺片、近現代陶磁器などがある。中世陶磁器の内、国産陶磁器は108,152点（土師器皿等 103,264点、瓦質土器類 2,504点、須恵器類 1,578点、瓦器椀類 806点）で76％、輸入陶磁器が34,273点（白磁 16,907点、陶器10,933点、青磁 6,049点、青白磁 284点、天目 84点、緑釉 16点）で24％となる。輸入陶磁器の割合はほぼ1／4で、全国各地の遺跡とは桁違いの量と割合で、特筆すべきことであった。以後の博多の調査でも、ここと同様あるいはそれ以上の割合で輸入陶磁器が出土し、中世貿易都市博多の役割を代弁するものとして注目された。将来も博多を発掘するかぎり、この大量の陶磁器をどのように整理するかは、避けられない問題であり、整理にあたっては細かな分類作業が必要であると考えられた。規格性のある陶磁器を数量化することによって、整理作業を容易にし、また中国陶磁器全体の様相を把握し得ると考えられたからである。本報告書で、とくに出土遺物の分類に力点を置いたのは、このような理由からであり、この分類を基礎に、「博多出土貿易陶磁分類表」（福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 博多(1) 福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集 1984　別冊）がまとめられ、以後の博多の整理に大いに役立っている。「博多出土貿易陶磁分類表」が使い易さを旨として編集されたものであり、内容を簡略にした面があったので、今回あえてより詳細な分類内容をもつ基礎資料として掲載する。両者併せて参考にしていただければ幸いである。また、第４次調査では、100点近い墨書陶磁器が出土しているが、なかでも「丁綱」銘のものが40点以上もまとまって出土しており、同一名称の墨書が集中することをどのように理解すればいいのか、興味深い問題である。

1977年に地下鉄関係の発掘調査が始まって20年、再開発にともなう博多遺跡群の調査次数は、1997年３月現在で101次を数える。この間、地下鉄建設、博多駅築港線（大博通り）の拡幅など大規模な

公共事業にともなう発掘調査も行われ、大きな成果をえた。当然次は民間の開発にどのように対応していくか、ということになる。博多の中心部を貫く大規模調査が当初行われたため人々への周知度は高かったが、開発のチェック方法、調査体制の整備、濃密な遺構と大量の出土遺物による調査費用・期間・整理費用・期間の確保など、開発者側に理解を求めるには多くの難問を抱えたうえでのスタートであった。本書で報告した3地点の調査は、幸いなことに開発側の理解と協力をいただいておこなうことができた、博多遺跡群の最初の段階の調査である。既に相当の年月が流れ、当時としては目新しかった遺跡の内容も今となってはやや陳腐なものとなってしまった。博多遺跡群の調査を一定の軌道に乗せることが、当時の大きな目標であったが、このような状況にいたったのは報告書作成を遅らせてしまった調査者我々の責任である。末文ながら発掘調査、資料整理にご協力いただいいた多くの方々にお詫びを申し上げたい。

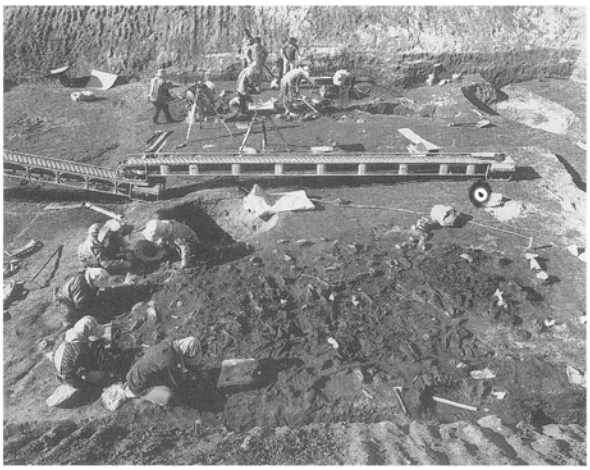
なお、博多遺跡群第4次調査では、日本弘進産業株式会社の御厚意により、マンションの道路脇植栽中に、黒御影石の遺跡発掘の碑が設置され、広く市民の方々の博多遺跡群理解の一助となっている。改めて謝意を表したい。

写　真　図　版

（1）1次調査　調査風景（東から）

（2）1次調査　調査風景（北から）

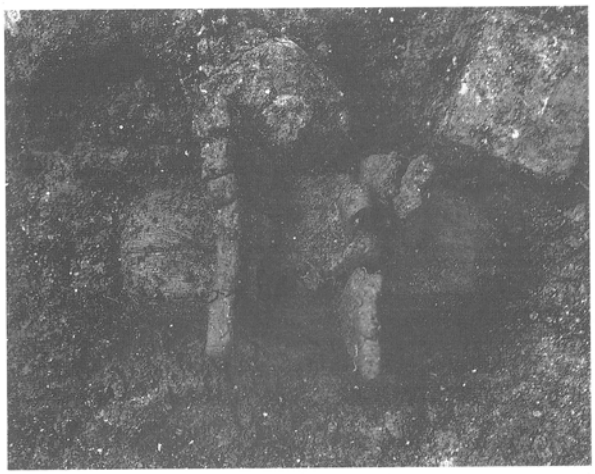
（3）有機物堆積調査風景（南西から）



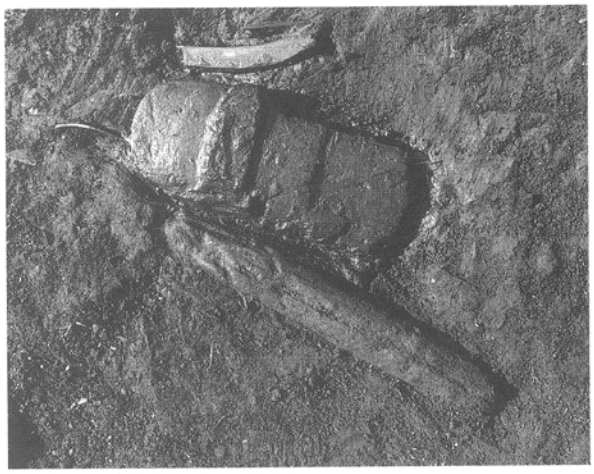
（4）有機物堆積調査風景（南東から）

（5）有機物堆積遺物出土状況

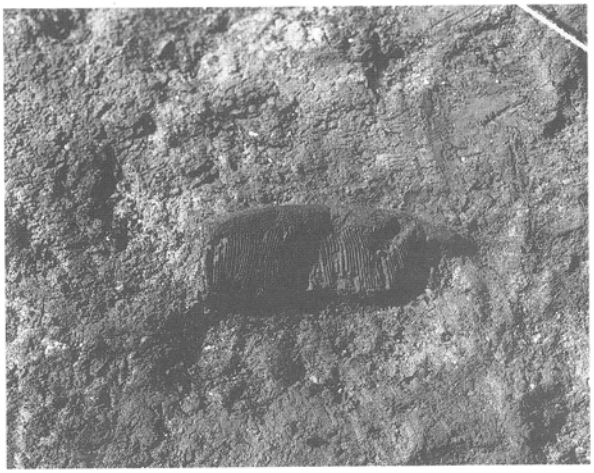
（6）有機物堆積下駄出土状況



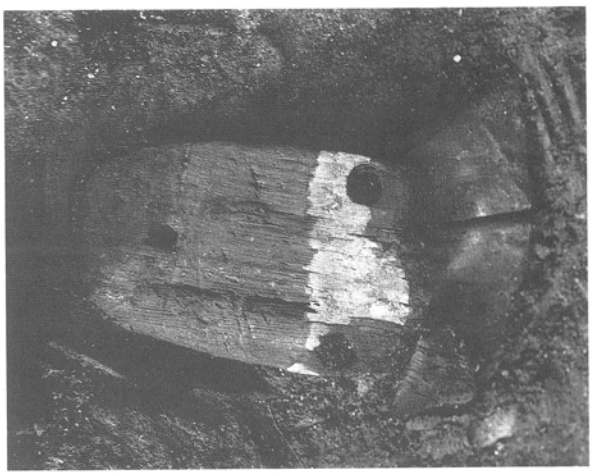
（1）有機物堆積下駄出土状況



（2）有機物堆積下駄出土状況

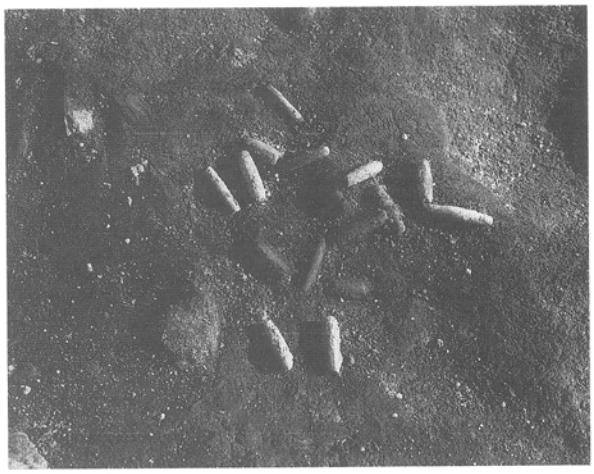


（3）有機物堆積櫛出土状況

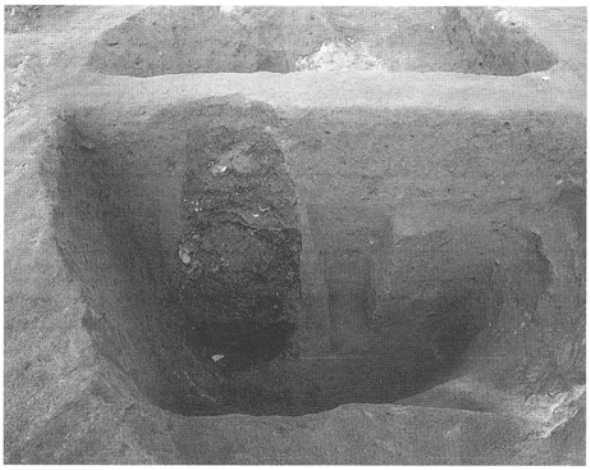


（4）有機物堆積下駄出土状況

（5）有機物堆積下面土師器皿出土状況（西から）



（6）有機物堆積下面土垂出土状況



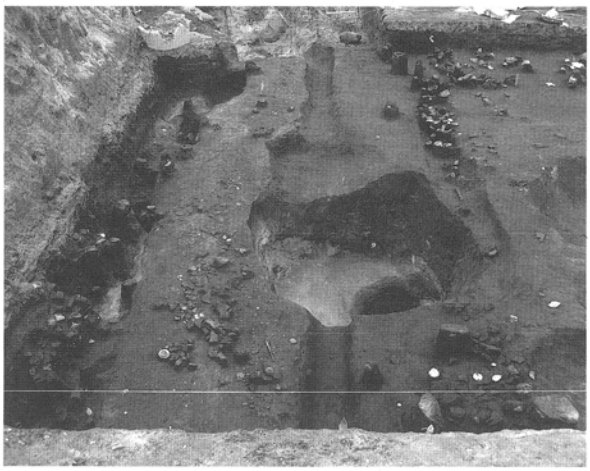
（1）3号土壙（井戸）　鉄滓堆積状況（南東から）

（2）3号土壙（井戸）　鉄滓除去後状況（南東から）

（3）3号土壙（井戸）　掘り方検出状況（南東から）

（4）3号土壙（井戸）と舗道状遺構（北東から）

（5）3号土壙（井戸）と舗道状遺構(南東から）

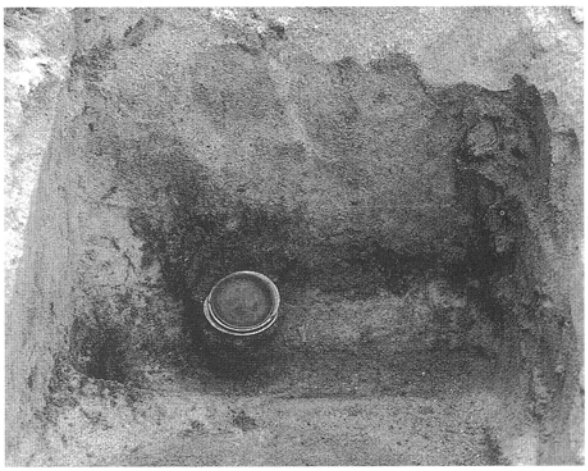


（6）3号土壙（井戸）と舗道状遺構（北西から）

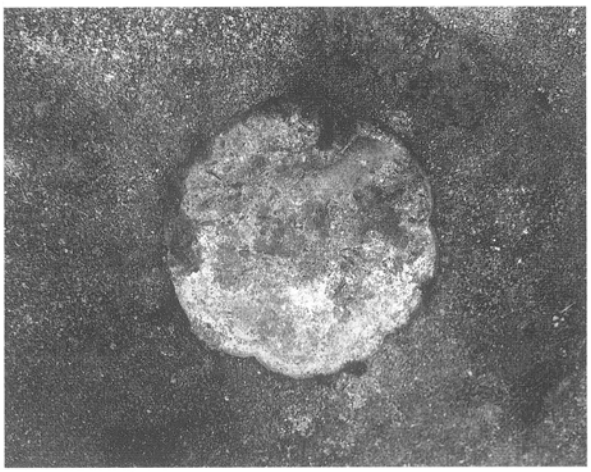
（1）19号土壙(木棺墓) 人骨出土状況(北東から)

（2）19号土壙(木棺墓)人骨出土状況　頭部付近近景(北東から)

（3）19号土壙(木棺墓)副葬品出土状況(北東から)

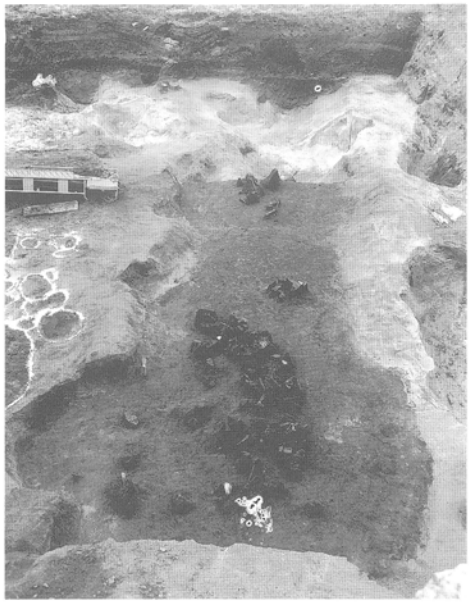


（4）19号土壙（木棺墓）副葬品出土状況　近景（北東から）



（5）10号土壙　銅鏡出土状況（北西から）

（6）10号土壙　銅鏡出土状況　近景

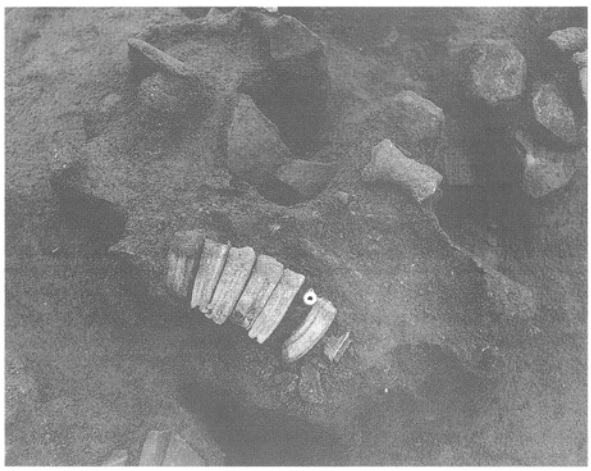


（1）6号溝　馬骨出土状況（南東から）

（2）6号溝　馬骨出土状況（北西から）

（3）6号溝下層　馬骨出土状況（南東から）

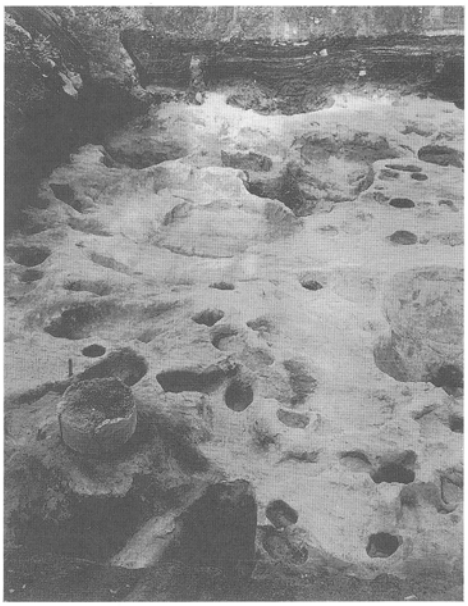
（4）6号溝下層　馬骨出土状況　近景



（5）6号溝下層　馬骨出土状況　近景

（6）6号溝下層　馬骨出土状況　近景

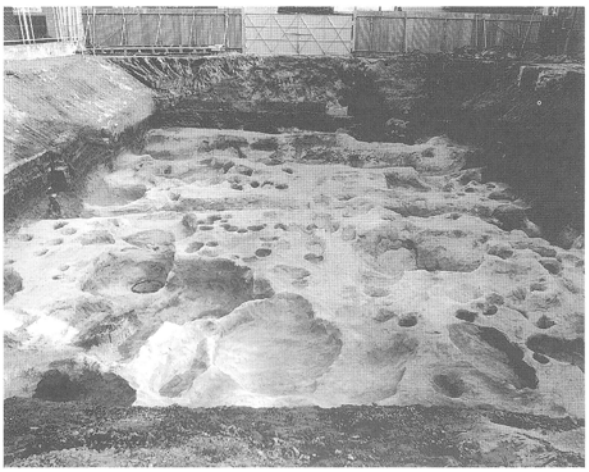
（1）最下面遺構検出状況　部分（北西から）



（2）最下面遺構検出状況　部分（北東から）

（3）最下面遺構検出状況　全景（東から）

（4）最下面遺構検出状況　全景（北から）

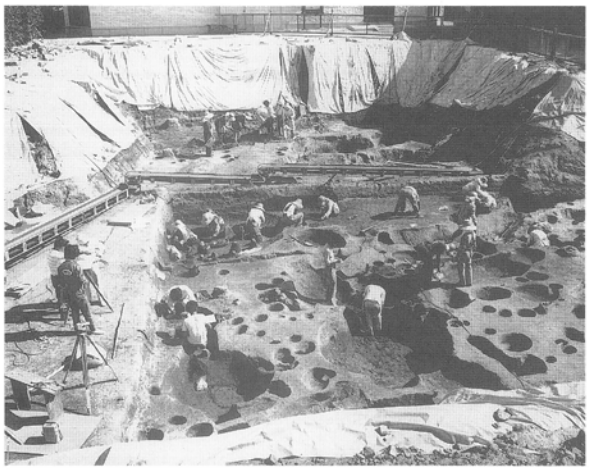


（5）最下面遺構検出状況　全景（南西から）

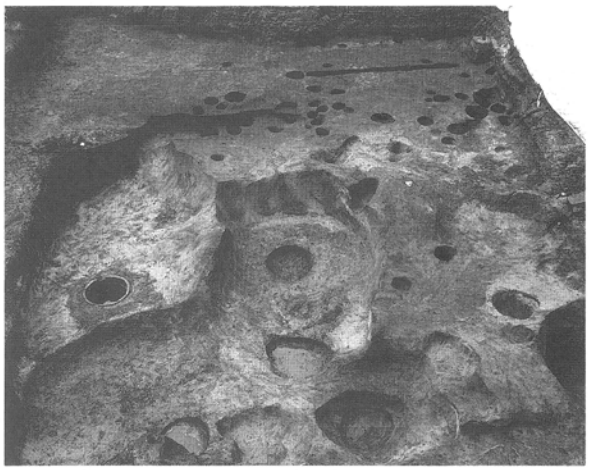
（6）最下面遺構検出状況　全景（北東から）

（1）8次調査　調査区全景（南西から）

（2）8次調査　調査区全景（西から）



（3）8次調査　調査風景（南西から）

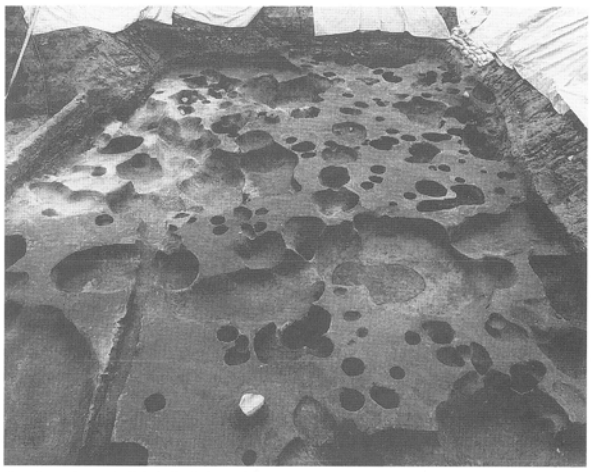


（4）Ⅰ区遺構検出状況（南東から）

（5）Ⅰ区遺構検出状況（南西から）

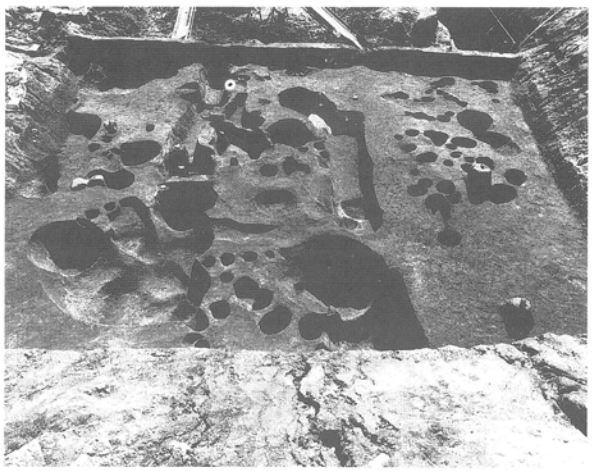
（6）Ⅱ区中央部遺構検出状況（南西から）

（1）Ⅱ区遺構検出状況（南東から）



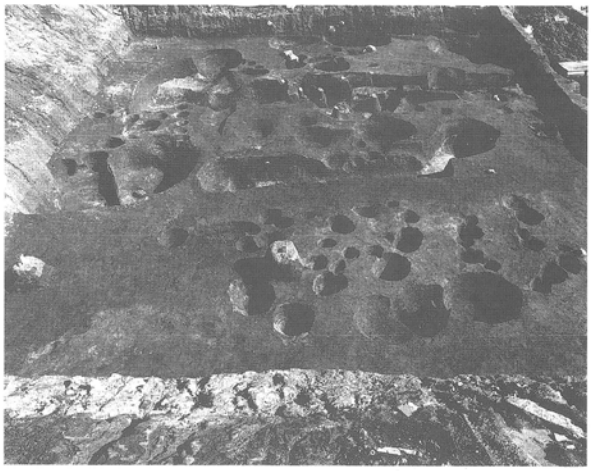
（2）Ⅱ区遺構検出状況（北西から）

（3）Ⅱ区最下面遺構検出状況（南東から）



（4）Ⅱ区北西側遺構検出状況（北西から）

（5）1号溝（北西から）



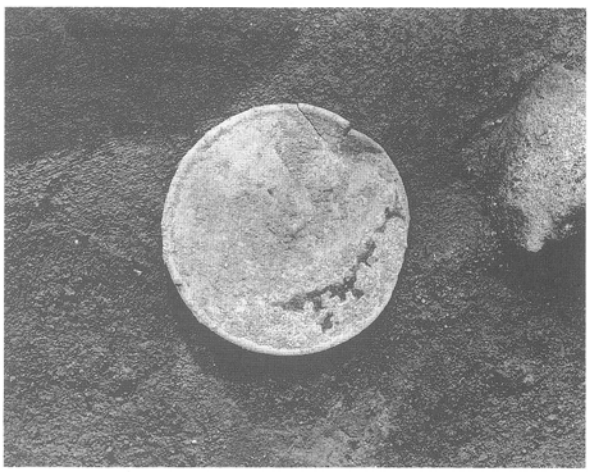
（6）Ⅰ区北西側遺構検出状況（北西から）

（1） 1号土壙（南東から）

（2） 2号土壙（北から）

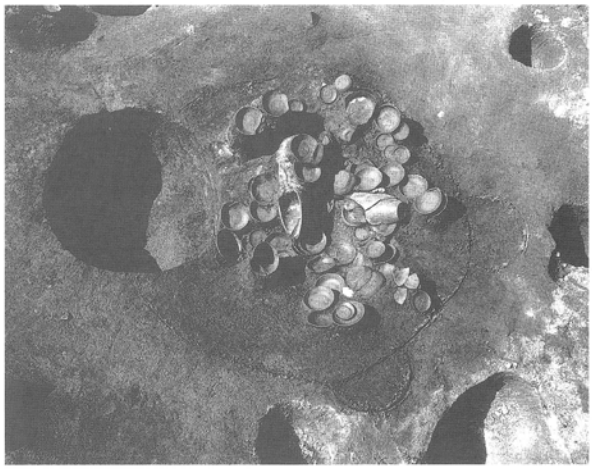
（3） 2号土壙　人骨出土状況　近景（北から）

（4） 3号土壙（東から）



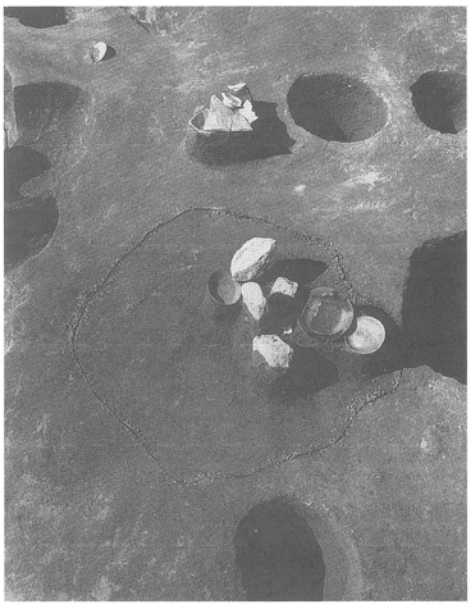
（5） 3号土壙　銅鏡出土状況（東から）

（1）18号土壙（南東から）



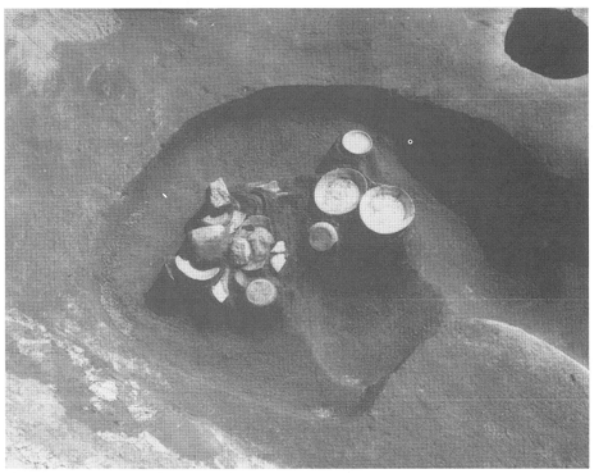
（2）24号土壙（北西から）

（3）29号土壙（北から）



（4）40号土壙（南西から）

（5）50号、50′号土壙（北西から）

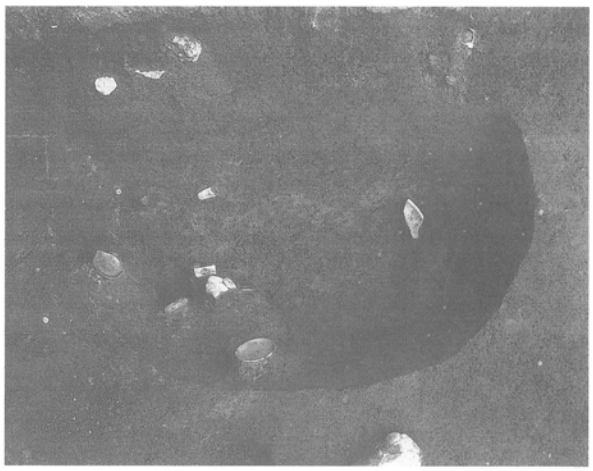


（6）49号土壙（西から）

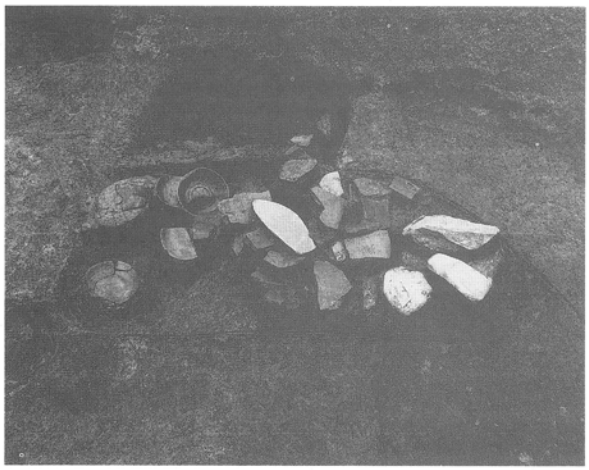
（1）68号土壙（南から）

（2）80号土壙（西から）

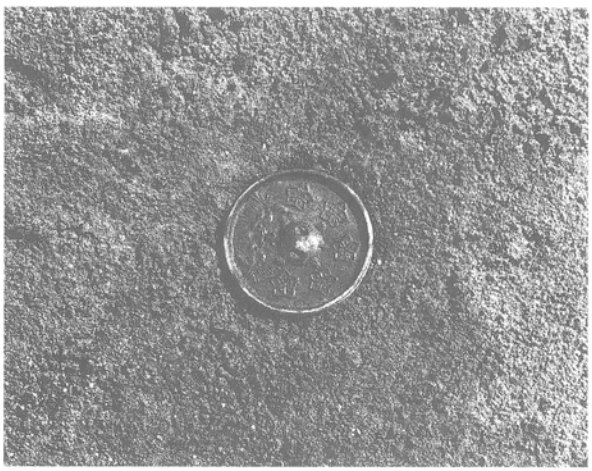
（3）96号土壙（東から）



（4）113号土壙（南西から）

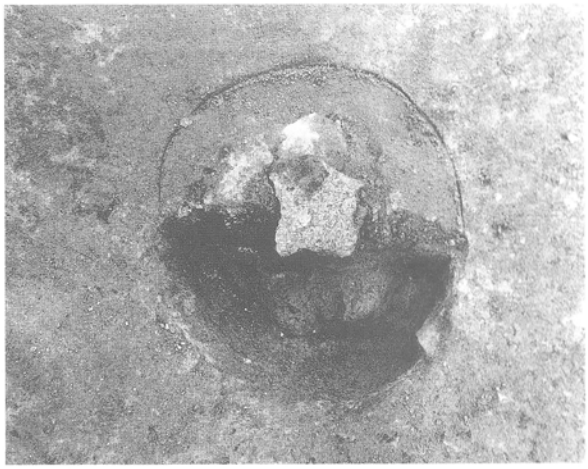


（5）125号土壙（南東から）

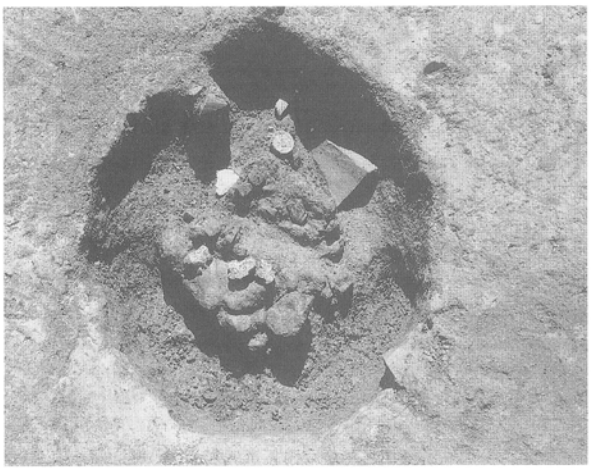


（6）銅鏡出土状況

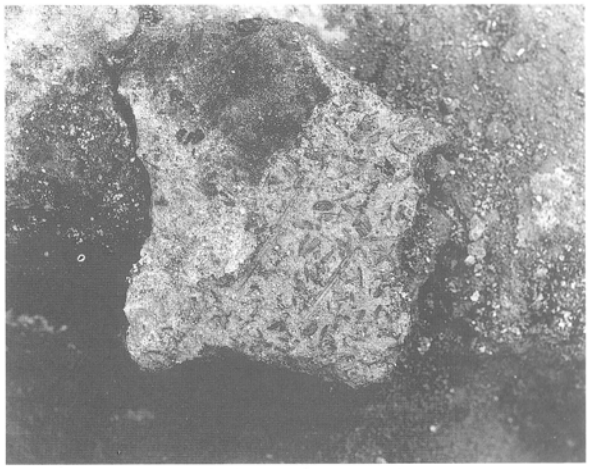
（1）土間状遺構全景（北東から）



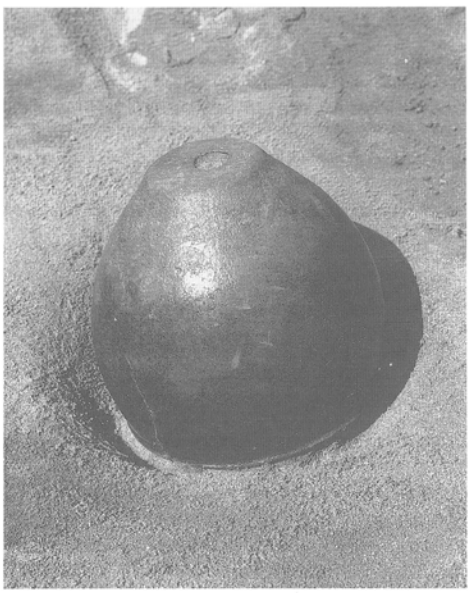
（2）土間状遺構内炉全景（北西から）



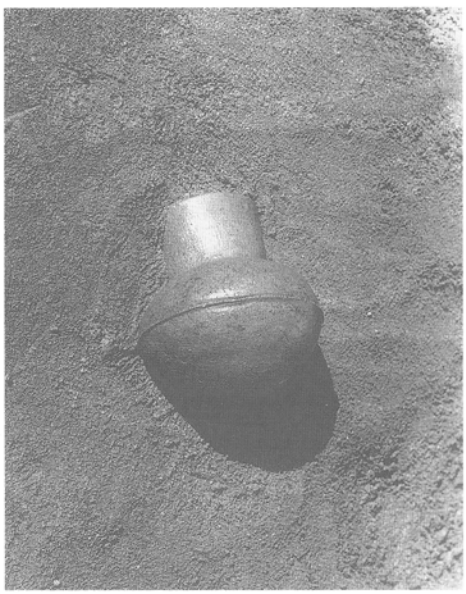
（3）土間状遺構内炉下面全景（北西から）



（4）土間状遺構内炉壁　近景（北西から）



（5）弥生時代小児甕棺出土状況



（6）弥生時代壷型土器出土状況

博　多　60

福岡市埋蔵文化財調査報告書第543集

1997年３月31日発行

発　行　東長密寺建設地内遺跡調査会
冷泉町遺跡調査会
福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８－１

印　刷　栄光印刷株式会社
福岡市東区松田１丁目９－30